

庭園における「蓬萊」の展開と変遷に関する日中比較研究

—中国皇家園林と日本の古代庭園を中心に—

A comparative study between Japanese and Chinese gardens

about the evolvement and change of "Houlai"

—focus on Chinese royal Gardens and Japanese ancient

gardens—

指導教員

仲 隆裕 教授

京都造形芸術大学大学院

芸術研究科芸術専攻

宋 佳音

目次

第1章 序論.....	1
第1節 研究の背景と目的.....	1
第2節 研究の方法.....	2
2.1 研究の構成.....	2
2.2 定義について.....	3
第3節 先行研究と本研究の位置づけ.....	4
3.1 中国古典庭園に関する研究.....	4
3.2 中国の「蓬莱」に関する研究.....	6
3.3 日本伝統庭園に関する研究.....	10
3.4 日本における中国古典庭園に関する研究.....	11
3.5 日本における中国の「蓬莱」に関する研究.....	12
3.6 中国における日本庭園及び日本の「蓬莱」に関する研究.....	14
3.7 中国と日本の庭園及び「蓬莱」に関する比較研究.....	15
3.8 本研究の位置づけ.....	16
第2章 中国庭園における「蓬莱」の配置の発祥と展開.....	17
第1節 本章における研究の背景、目的及び方法.....	17
第2節 中国における「蓬莱」の用語の語義と用法.....	21
2.1 「蓬莱」の概念の第1段階.....	21
2.2 「蓬莱」の概念の第2段階.....	22
2.3 「蓬莱」の概念の第3段階.....	26
2.4 「蓬莱」の概念の第4段階.....	36
第3節 「蓬莱島」の発祥と展開.....	38
3.1 上古神話中の「神話蓬莱」と道教神山の「道教蓬莱」との比較.....	39
3.2 「蓬莱」仙島の表現に関する用語の考察.....	42

3. 3 「蓬萊」仙島に関連する用語に関する考察.....	44
第4節 中国皇家園林における「蓬萊」の配置の展開と変遷.....	44
4. 1 秦代.....	44
4. 2 漢代.....	46
4. 3 魏晉南北朝.....	51
4. 4 隋代.....	56
4. 5 唐代.....	58
4. 6 宋代.....	64
4. 7 元代.....	67
4. 8 明代.....	71
4. 9 清代.....	74
4. 10 本節の結論.....	78
第5節 本章の結論.....	80
第3章 日本庭園における「蓬萊」の配置の考察.....	83
第1節 本章における研究の背景、目的及び方法.....	83
第2節 飛鳥時代庭園の石造物と「蓬萊」との関係.....	84
2. 1 両槻宮に関する石造物.....	85
2. 2 須弥山石と蓬萊.....	91
第3節 東院庭園に関する「蓬萊」.....	100
3. 1 池にある中島と「蓬萊」の関係.....	102
3. 2 北岸に配置された築山石組と「蓬萊」の関係.....	102
第4節 平安初期庭園の中島と「蓬萊」.....	104
4. 1 平安時代初期における庭園の形式.....	104
4. 2 寝殿造形式と浄土宗曼陀羅.....	105
4. 3 平安初期庭園と唐の宮殿.....	106

4. 4 平安初期庭園に関する漢詩から見る神仙思想.....	108
第5節 本章の結論.....	143
第4章 終章.....	145
参考文献.....	162

第1章 序論

第1節 研究の背景と目的

中国の神仙思想は、戦国秦漢時代に発生した「肉身不死」信仰であると一般的に指摘されている¹が、堯舜時代（紀元前 2300-紀元前 2150 年頃）にすでにその萌芽が見られるという。その後、戦国末期（紀元前 300-紀元前 200 年頃）から成立し、秦漢時代（紀元前 221 年—紀元 8 年）に盛んとなった。神仙思想は原始宗教中の鬼神崇拜、山岳崇拜と老子、荘子の道家学説が混合された産物である。原始神話において神靈は高い山に住んでいるという幻想があり、いくつかの仙境が見出されている。秦漢時代にはすでに具体的な物語が成立しており、秦漢時代の書物においても様々な仙境と仙人の物語が記載されている。

神仙思想は古代中国伝統文化における重要な部分の一つであり、中国の庭園文化に大きな影響を与え、秦代の蘭池宮から清代の皇家と私家園林までに、神仙に関する要素が用いられている。神仙に関する要素の中、1つの要素は「蓬莱」である。秦代の蘭池宮から、8の皇家園林(秦の蘭池宮、西漢の長安上林苑建章宮、北魏の洛陽華林園、南朝の建康華林園、隋朝の洛陽西苑、唐朝の長安大明宮、北宋の東京艮岳、清朝的清漪園)において、池「蓬莱島」を象徴する島が配置された。また、「蓬莱」を名前とする庭園建築も数多い。例えば唐代の「大明宮」には「蓬莱宮」の別称もあった²。他に、庭園の扁額や對聯にも「蓬莱」という単語が使われている。

中国庭園における神仙思想に関する研究は多くあるが、その中の重要な要素である「蓬莱」に関する研究は十分とはいえない。「蓬莱」の語源と歴史的な変遷についての研究はこれまで行われてないので、庭園における「蓬莱」に関する研究においても「蓬莱」の配置の時代的な変遷についての研究は十分とはいえない。

また、中国の神仙思想は日本の、特に古代において大きな影響を及ぼしている。その影響の中でも、「蓬莱」の影響もあると考えられている。飛鳥時代、奈良時代と平安時代には、皇室の庭園において、「蓬莱」との関係が想定される要素は幾つかあるが、これらの「蓬莱」は中国の神仙思想と仏教、神道などの要素と混在して表されていることから、そ

の解釈にも諸説がある。よって、中国における「蓬莱」と日本における「蓬莱」はその概念においても、庭園における表現においても、差異があると考えられる。

そこで、本研究では「蓬莱」の概念と応用の観点から、中国と日本の伝統庭園における「蓬莱」配置を具体的に検討し、「蓬莱」に関する幾つかの問題を明らかにする。具体的には以下の二つの目的がある。一つは、中国皇家園林における「蓬莱」という用語及び「蓬莱島」がどのように発祥し、発展してきたのかを文献によって明らかとする。さらに庭園への応用や、時代と共に変化する「蓬莱」の配置について明らかにすることである。もう一つは、日本の飛鳥時代、奈良時代と平安時代に、宮廷庭園における「蓬莱」と関係が想定される要素について検討し、「蓬莱」との関係性について、検討・考察することである。

第2節 研究の方法

2. 1 研究の構成

本研究の構成は「蓬莱」という要素に関して、中国庭園における「蓬莱」配置の発祥と発展、また、日本の飛鳥時代、奈良時代と平安時代宮廷庭園における「蓬莱」配置に関する考察の2つの部分からなる。そのため、本論文は本章の序論を含めて4つの章から構成される。具体的には、研究の背景及び方法、中国庭園における「蓬莱」配置の発生と発展、日本庭園における「蓬莱」配置の考察、結論の4つである。

4つの章の構成は以下の通りである。

第1章は序論とし、研究の背景と目的、研究の方法、先行研究と本研究の位置づけ及び論文全体の構成について述べる。

第2章は中国庭園における「蓬莱」配置の発祥と発展を究明することを目的とする。本章は本章における研究の背景と目的及び方法、中国における「蓬莱」の語源の考察、「蓬莱島」の発祥と展開、中国皇家園林における「蓬莱」配置の展開と変遷、本章の結論の5つの部分からなる。関連史料を収集、分析し、中国皇家園林における「蓬莱」の配置につ

いて総体的、具体的に検討する。

第3章は日本庭園における「蓬莱」の配置に関して検討、考察する。具体的に本章は、本章における研究の背景、目的及び方法、飛鳥時代庭園の石造物と「蓬莱」との関係、東院庭園に関する「蓬莱」、平安初期庭園の中島と「蓬莱」との関係、本章の結論の5つの部分になる。飛鳥時代庭園の石造物、東院庭園と「蓬莱」との関係の部分については主に文献の分析から考察し、平安初期庭園の中島と「蓬莱」との関係については主に嵯峨朝の漢詩から検討する。

終章はまとめとして、中国における「蓬莱」の配置を分析、比較の上で、日本における「蓬莱」配置に関する問題を解明する。

2. 2 定義について

中国上古神話に関する仙境には2つのシステムがある。一つは崑崙山システムであり、もう一つは東海仙境システムである。「蓬莱」は東海仙境システムの重要な島の一つといい、「古代中国で東の渤海の中にある仙人が住むといわれている山」³と一般的に定義されている。本研究の研究対象とする「蓬莱」は歴史と文化に関する「蓬莱」であり、苗字や店舗の名前として用いられる「蓬莱」などは本研究の対象外とする。また、文献調査の範囲は古代の史料から近代の文献とする。実地調査の範囲は現存する庭園遺跡である。

「蓬莱」の概念について、時間と共に新しい変化もある。本研究において、「蓬莱」の概念を再検討した結果、「蓬莱」の最初は中国上古神話の中に出現した「蓬莱」であるが、道教の出現とともに、新しい概念が発生したことを指摘した。そのため、本研究では、中国上古神話の中において言及された「蓬莱」のことを「神話蓬莱」、中国の道教に関係がある「蓬莱」のことを「道教蓬莱」として区別し、表記することとする。

中国の庭園は、中国語では、「皇家園林」、「私家園林」、「寺廟園林」などに分類されている。皇家園林は歴代の皇帝の庭園であり、私家園林は皇帝以外の人、例えば貴族、官員、大臣、文人、商人などの人の庭園であり、寺廟園林は仏教、道教などの宗教に関する

る庭園である。

本研究では、中国庭園に関する部分において、庭園の用語は全て「皇家園林」、「私家園林」、「寺廟園林」という用語を使用すること。

「蓬萊」は、神仙思想の1つの重要な要素として、中国の皇家園林、私家園林と寺廟園林においてみられるのであるが、本研究においては、検討対象を中国の皇家園林に焦点を絞ることとし、私家園林と寺廟園林については後日を期することとある。

第3節 先行研究と本研究の位置づけ

3. 1 中国古典庭園に関する研究

中国における古典庭園研究は1930年代の陳植が掲載した「中国造園史略」という論文から開始された⁴。初期の造園研究において、陳植、童寯、劉敦楨、陳從周が著明な研究者であり、中国造園研究の基盤が確立された。陳植は1930年代の『造園学概論』において「造園」は一つの学門領域であることを強調した⁵。また、童寯は1937年の『江南園林志』において初めて現代測量と製図、撮影の技法を採用し、造園、假山、沿革、現状、雑識の5つの面から江南庭園を論じた。特に、假山の庭園における重要性を強調した⁶。劉致平は1950年代の研究の中で、庭園を住居建築の一種として扱い、上古から清代までの庭園の変遷を述べた⁷。1950年代、楊鴻勛も江南庭園について深く研究し、『江南園林論』、『江南古典園林芸術概論』、『中国古典園林芸術原理』を著した。また、周維權の『中国古典園林史』(1990)⁸、劉策の『中国古代苑園』(1979)、張家驥の『中国造園史』(1987)⁹、安怀起の『中国園林史』(1988)、王铎の『中国古代苑园与文化』(2003)、汪菊淵の『中国古代園林史』(2006)¹⁰なども中国造園通史を記したが、基本的に劉致平の記述内容を踏まえた傾向がみられる。

庭園の事例あるいは造園技法に関する考証研究は、闕鐸による1930年の「元大都宮苑圖考」以来、数多く取りくまれてきた¹¹。金承藻、梁永基、孟兆楨が1984年に編纂した『中国古代建築技術史』は中国当代最初の庭園技術専門書であり、今でも中国叠山技術史

研究にとって重要な参考文献である。曹汎が 1963 年に著した「略論中国古典園林叠山芸術の発展演芸術変」は今なお中国叠山理論研究に関する定説と見なされ、そのほかの論文「略论我国古代園林叠山芸術の発展演变」(1980)、「清代造園叠山芸術家芸術張然と北京の“山子張”」(1982)、「詩人園、画家園和建築家園」(1984)、「疊山名家戈裕良」(1986)¹²も中国古典庭園叠山研究にとって重要な研究である。孟兆楨も長い時間で中国古典園林叠山について研究し、『中国古代建築技術史』第十三章『掇山技術』、「避暑山莊園林芸術」、「假山淺識」、「北海假山淺析」、「伝統園林建築芸術講座（七）迭山之相石、結体と水景」などの論文を発表し、中国古典庭園の叠山研究を推進した。

1950 年代の古典庭園研究は主に庭園の実地調査研究である。劉敦楨の 1950 年代の蘇州庭園に関する調査が現在までにおける最高水準の研究と評価されている¹³。潘谷西は劉敦楨の研究を踏まえた上で、さらに詳細な調査を行い、「蘇州園林的觀賞點和觀賞路線」(1963)¹⁴、「蘇州園林的布局問題」(1963)¹⁵などの論文を発表し、庭園觀賞などの観点から江南庭園研究に新しい視点を与えた。そのほか、陳從周の揚州庭園と常熟庭園に関する調査も挙げられる¹⁶。また、1950 年代から、盧繩、馮建達、王其亨が北京北海、故宮内廷と承德避暑山莊など清代の皇家園林遺跡に対して詳細な調査を行い、清代御苑北海と乾隆花園などの内廷宮苑について、建築を主に詳しく実地測量と製図を作成し、『清代内廷宮苑』(1986)と『清代御苑擷英』(1990)などを発表した。続いて、1960-1970 年代、北京林学院によって北京可園、半畝園、恭王府などの私家庭園について調査と復元研究が行われた。1990 年代、天津大学が清代皇家園林の工官制度、建築技術、布局模式と空間意象などのことについて検討し、『清代皇家園林総合研究』、『清代皇家園林総合研究続』と『様式雷図档整理』を完成させ、清代の皇家園林の研究を大幅に推進した。

文献史料による研究においては、陳植が多大な貢献を果たした。1964 年『園冶注釈』を完成させ¹⁷、続いて 1983 年『中国歴代名園記選注』¹⁸、1984 年『長物志校注』を出版した¹⁹。また、それに続く陳從周の『園綜』²⁰と邵忠の『蘇州歴代名園記選註』²¹は園記の集成として挙げられる。

造園家の研究について、朱啟鈴は1938年に編纂した『哲匠録』において、商周時代（約紀元前1600年-紀元前256年）から中華民国（1912年-1949年）までを対象として、造園家を数名含む約200名の建築家の生涯を記録した²²。曹汎は1979年に「張南垣生平考」を著し、1988年にこれに関する論文を発表した²³。

庭園文化論に関しては、陳從周の1970年代の『説園』が代表的研究であり、造園に関する文学、芸術、哲学などの多くの領域を含んでいる²⁴。この領域では、呉世昌の1934年の「魏晉風流与私家園林」が先駆的業績といえる²⁵。そのほか、初期の研究として、孫篠祥は山水畫論と庭園配置との関連を分析している²⁶。また、美学研究者である宗白華なども空間の美学という視点から、庭園の芸術性について論じた²⁷。

3. 2 中国の「蓬萊」に関する研究

「蓬萊」は中国の神仙思想の重要な要素の一つである。神仙思想の源は上古時代の神話と巫術であり、考古学と文献史学の成果によると旧石器時代末期である。その時、靈魂思想と長生信仰すでに芽生えていたとされる²⁸。その後、殷商周の時代を經過し、神仙に関する学説とシステムが、祭祀と礼法などを通じて完成し、春秋戦国時代にピークをむかえ、前代までの成果を整理して、神仙思想が出現した。

神仙思想が広まる手段は神話としてであり、その要点は不老不死の信仰である。不老不死の神仙が住む場所の一つに「蓬萊」仙島がある。神仙のシステムや、神仙崇拜、人間が神仙になる方法などについては、『山海経』²⁹、『史記』³⁰などの秦漢時代の古書のほか、『三輔黄図校注』³¹、『水経註』³²、『洛陽伽藍記』³³、『六朝事跡編類』³⁴、『元和郡県図志』³⁵、『青瑣高議』³⁶、『歴代宅京記』³⁷、『関中勝跡図志』³⁸などの後世の書物に記載されている。これらの記述中には、「蓬萊」仙境に関する記載も多い。

「蓬萊」に関する東海仙境ともう一つの「崑崙山」仙境は中国上古神話の2つのシステムである。李炳海は「以蓬萊之仙境 化崑崙之神郷——中国古代两大神話系統的早期融合」（2004）において漢の武帝の求仙活動を契機とする二つの神話システムの早期融合に

ついて検討し、蓬莱仙境は漢代において崑崙山仙境より影響が強まったことから、崑崙山仙境は蓬莱仙境と同化し、変化したことを明らかにした。杜爽は「想像与真実——崑崙与蓬莱神話中山岳意象的文化解读」（2015）³⁹において、崑崙と蓬莱に関する文献（主に秦漢時代の神話に関する文献）から、神話の山岳景観の構成要素と特徴を考察し、二つの神話システムの早期融合について検討して、山岳文化を解釈した。薛莹は「魏晋南北朝蓬莱仙話研究」（2007）⁴⁰において、まず上古先秦「蓬莱」仙話と皇帝の求仙活動を紹介し、次に魏晋南北朝の志怪小説に出現した「蓬莱」仙話を考察し、志怪小説における「蓬莱」は作者たちが作った産物であることを指摘した。陳剛は「唐前蓬莱神話流變考」（2011）⁴¹において、蓬莱神話の発生と発展の背景には中国の海洋文化があり、蓬莱神話は上古の海洋神話が残ったものであること、秦漢時代の「蓬莱」は皇帝の求仙活動と関係があり、魏晋南北朝時代の「蓬莱」は神話から仙話になることなどを指摘した。

「蓬莱」に関する文学作品においては、例えば、清代に出版された唐代小説集『唐人小説』も蓬莱仙境に言及した。刘晓清は「『唐人小説』中的蓬莱仙境研究」（2014）⁴²に唐代の小説集『唐人小説』を研究対象とし、小説に出現した「蓬莱」仙境について検討した。小説の中の「蓬莱」仙境に関する考察においては、仙人は主に道士であり、仙境も既に道教「蓬莱」仙島の特徴があり、物語のテーマは全て道教（求仙、修道、入境）と関係があることから、唐代の志怪小説は魏晋南北朝時代の志怪小説の続きである、と述べている。また、王敏は「宋詞中的蓬莱意象群研究——以蓬莱意象为中心」（2017）⁴³に宋詞における蓬莱要素について整理し、宋代以前の作品と宋代の文学作品に出現した「蓬莱」にはどのような役割があるのか、そして宋代の「蓬莱」がそれ以前の時代からどのような点を継承し、また変化したのかについて考察した。

戦国時代の中国はいくつかの小さい国が割拠し、各国がそれぞれの国の発展を考えため、数多くの哲学と軍事に関する学説が湧いていた。その中に、神仙思想の内容に及ぶ学説もある。そのうち最も関係の深い学説は老子と莊子の道家学説である。道家学説は「道」を中心として「大道無為」、「道法自然」を主張し、剛と柔のバランスをとった政治と軍事

策略を提案した。その後、東漢末期、道家学説に基づいて、神仙思想に関する内容の一部を含めて、仙人になり不老不死を目標とする宗教、すなわち道教を生み出した。

道教が出現した後、神仙思想は上古神話から道教に関する神仙として広まっていった。道教は秦漢神仙思想を参考にして神仙思想を新たに作りかえたといえる。例えば、道教で神仙とされた老子は、秦漢神仙思想においては神仙ではなかった。それと共に、仙人が住む場所とする「蓬萊」も秦漢神仙思想から道教に引用され、道教仙境「十洲三島」中の「三島」の一つとして「蓬萊島」が位置づけられた。また、「蓬萊」仙境に基づいて、「蓬萊派」という道教の流派も生まれた。

「蓬萊」は民間信仰として発生と発展したこと、また、「蓬萊」信仰と仏教、道教の関係について、張瑞娟は「多元文化影響与蓬萊仙境信仰的形成」(2012)⁴⁴において詳しく検討した。蓬萊仙境民間信仰から、蓬萊市、蓬萊山、蓬萊閣などの地名と建築も出現した。董韶軍の「道教文化与蓬萊閣古建筑」(2014)⁴⁵と楊猛の「蓬萊閣建築布局与芸術文化探析」(2016)⁴⁶も道教に関する古建筑蓬萊閣について考察した。

道教のこの部分は秦漢神仙思想の内容を補充し、今の神仙思想の一部になった。それと共に、「蓬萊」要素も道教のため発展、変化してきた。神仙思想の発展は図1のようになる。

神仙思想は中国庭園の一つの重要なテーマである。近代の庭園学者の観点から見ると、秦の始皇帝が「一池三山」の様式を庭園に配置したことを始めとして、「一池三山」は中国皇家園林の定型として、長い歴史の中で発展したとされる。「蓬萊」は「一池三山」の中の最も重要な島としても、庭園の歴史において重要な要素の一つであると解釈されてきた。

中国庭園において、「蓬萊」を含める「一池三山」様式に関する研究は数多い。

庭園を紹介する本のほぼ全てがこの内容に言及している。周維權の『中国古典園林史』(1990)⁴⁷、劉策の『中国古代苑園』(1979)、張家驥の『中国造園史』(1987)⁴⁸、安怀起の『中国園林史』(1988)、王铎の『中国古代苑园与文化』(2003)、汪菊淵の『中国古代園

林史』(2006)⁴⁹などの中国造園通史にも「一池三山」の内容がみられる。

また、「一池三山」に関する論文もいくつかがある。

苑坤は「試論神仙文化与中国古典園林芸術--以蘇州園林为例」(2009)⁵⁰において、神仙文化と庭園の関係および神仙文化が蘇州庭園に与えた影響について論じた。ここでは、「一池三山」様式についての内容にも言及されているが、いくつかの庭園の例のみについて挙げ、述べられている。陈文娟は「蓬莱神话对中国古代園林造景的影响」(2014)⁵¹において、「一池三山」様式を配置された中国庭園を挙げ、「一池三山」様式が与えた庭園要素の影響について検討した。呂正平、李宾は「探究中国古典園林芸術中“一池三山”的起源」(2013)⁵²において、「一池三山」様式が発生した原因は始皇帝の求仙活動であり、最初に「一池三山」様式が配置された庭園は秦代の蘭池宮であることを記述し、「一池三山」様式の成形は漢代であることを指摘し、「一池三山」様式の発生過程中、理性思想(儒道思想)が影響を与えたことを論じた。谢志は「論西漢建章宮太液池“一池三山”的園理」(2013)⁵³において、西漢建章宮太液池を例として「一池三山」様式の発生の規律を検討した。陈连波は「道家思想对園林的影响」(2011)において庭園に「道法自然」、「天人合一」、「神仙信仰」などの道家思想から影響を受けた点について検討し、「一池三山」様式の庭園も挙げ、神仙思想の例として述べた。谢志によると、「一池三山」様式の発生の規律は造園は求仙理想の現実化であること、造園は「写意」(中国画の手法の一つ、微細な描写をせず、情趣の表現に重きをおく)であること、造園の基本は山水であること(崑崙山は山だけであり、水がない)、庭園設計の空間感であること、庭園は考える場所であること、庭園は生活の場所である、という6つの規律がある。田建林は「浅谈“一池三山”」(2004)⁵⁴において「一池三山」様式は秦漢時代に形成され、東アジアに影響を与えたことを述べ、「一池三山」様式の形成は道教の影響からの結果であると指摘したが、この結論については疑義があると考ええる。

ほかに、韓鈺は「蓬莱仙話景觀模式對中國古典園林的影响」(2015)⁵⁵において蓬莱仙話を述べ、庭園における「蓬莱」配置について考察した。韓鈺は先秦時代から魏晉南北朝時

代に至るまでの蓬莱仙話を述べ、「蓬莱」配置の庭園への応用を考察したが、仙話の説明と庭園の配置に関する考察は簡略であり、仙話と庭園の配置について時代の変化と変化の原因については検討されていない。

以上の先行研究を見ると、全ての研究において「蓬莱」要素について言及しているが、庭園にとって非常に重要な「蓬莱」という要素に関して、総体的な、あるいは具体的な研究は行われていない。結局、「蓬莱」とは何だろうか、長い歴史の中においてどのように発展、変化してきたのか、どのように庭園で配置・表現されているか、などの諸点についての研究は不十分であると考えられる。

3. 3 日本伝統庭園に関する研究

日本において造園研究は大正初期に造園学および学術雑誌の誕生とともに発端した⁵⁶。これ以前では、江戸時代に、北村援琴の『築山庭造伝（前編）』（1735年）、秋里籬島の『都林泉名勝図会』（1799年）と『築山庭造伝（後編）』（1828年）などの庭園に関する著作はすでに存在していた。これらの著作の形式を踏襲し、近藤正一の『庭園図説』（1909）⁵⁷や杉本文太郎の『日本庭造法図解』（1910）⁵⁸などの庭園に関する著作はほぼ同じように図画を使いながら庭園の造園法を解釈した。その後、小澤圭次郎は『園苑源流考』、『明治庭園記』などの著作によって、造園史の輪郭を明らかにし、上原敬二や田村剛の一連の論文は基本的な概念を整理し、日本の造園研究の礎を築いた。田村剛の『庭園鑑賞法』（1919）⁵⁹、上原敬二の『庭園学概要』（1923）⁶⁰などの専門書も出版され、造園研究に関する基礎が完成された⁶¹。この時期の庭園研究は主に現存する庭園に関する観賞と評価である。造園通史に関しては、横井時冬は『園芸考』（1889）⁶²において日本庭園の歴史の概要を整理した。外山英策は室町時代における造園史を研究して『室町時代庭園史』（1934）⁶³を出版した。森蘊は『平安時代庭園の研究』⁶⁴、『中世庭園文化史：大乘院庭園の研究』⁶⁵、『寝殿造系庭園の立地的考察』⁶⁶などの著作において、平安時代と中世における庭園の歴史を考証し、庭園の様式を検討した。重森三玲は1930年代から日本各地の

庭園を実地調査をされ、全 26 冊の『日本庭園史図鑑』(1936-1939)を出版した。その後、新たな実測と研究を加えて全 35 巻の『日本庭園史大系』(1970)を出版した。

3. 4 日本における中国古典庭園に関する研究

日本における中国造園に関する研究は伊東忠太の「西苑」(1918)⁶⁷という論文がその濫觴である可能性が高い⁶⁸。その後、龍居松之助は「北京住宅の庭」(1923)⁶⁹、後藤朝太郎は『満支風景庭園鑑』(1934)⁷⁰などの論文を発表し、中国の庭園に関連する文化、歴史、風土などを記述した。岡大路は造園文献の翻訳を通じ、古典絵画理論と造園の関係を論じた⁷¹。続いて 1966 年、杉村勇造の『中国の庭』⁷²出版され、各時代における代表的な庭園の実例から、庭園文化を述べた。それに対して、佐藤昌は『中国造園史』(1991)⁷³を完成し、史料から中国庭園の歴史と文化について述べた。また、田中淡は「中国造園史研究の現状と諸問題」(1988)⁷⁴において、中国庭園についての研究の現状と問題を論じ、一次史料より二次資料によるところが圧倒的に多いという実態を対し、秦代から隋代までの中国古文献から造園に関する史料を抽出し、文献の内容と目録を編集して、『中国古代造園史料集成』⁷⁵を完成させた。また、田中淡は一連の中国庭園に関する論文を発表し、中国庭園について、詳しく考察した。ほかに、稲次敏郎が『庭園と住居の「ありやう」と「見えかた・見えかた」：日本・中国・韓国』(1990)⁷⁶に庭園と住居の空間に関する視覚構成を分析し、日本、中国と韓国における実例を比較し、検討した。外村中は「明末清初以前の中国庭園における太湖石について」(1995)⁷⁷に中国庭園を最も特色付けている太湖石について、今日の太湖石の庭園のみをもって中国の古庭園を検討した。仙田満ら(2001)は「中国園林における廊的空間に関する研究」⁷⁸に環境心理学の方法を通じ、中国庭園における廊の空間を分析した。

ほかに、在日の中国人庭園研究者と在日の庭園専門の中国留学生のいくつかの中国庭園に関する研究がある。例えば、沈悦は「中国清時代における揚州庭園の石組構成とその造景に関する研究」(2002)⁷⁹に中国清時代における揚州庭園の石組を対象とし、その壘石(石

組)技法による造景について考察し、揚州庭園の石組は「外実内虚」の構成と、「洞・室」景観の整備を重視した造景が特徴として挙げた。章俊華は「中国皇家庭園と私家庭園の「屋宇」による空間構成の特徴とその比較について」(2000)⁸⁰において、中国庭園における「屋宇」による皇家園林と私家園林の空間構成の特徴とその隣接状況の比較について検討し、皇家園林と私家園林の隣接状況と空間構成の特徴と区別を考察した。

造園に関する文献史料の研究については、小寺駿吉は「中国園林典籍」(1929)⁸¹に『三輔黄図』、『呉興園林記』、『婁東園林志』などの21点の文献の概要を紹介した。田治六郎は1949年に発表した「『洛陽名園記』と『金陵諸園記』から見た宋明兩代の庭園」⁸²と1953年発表した「李漁の庭園論」⁸³、「謝肇淛の庭園論」⁸⁴などの論文に中国庭園に関する史料を通じて中国庭園の造園理論について検討した。また、橋川時雄の「解説:園冶」(1970)⁸⁵、上原敬二の「解説園冶」(1972)⁸⁶、佐藤昌の「園冶研究」(1986)⁸⁷などの著作は、中国の庭園理論古文献『園冶』について解説と翻訳文を示した。

3. 5 日本における中国の「蓬萊」に関する研究

神仙思想について、大辞林によると「方丈・蓬萊・瀛州など超自然的な樂園と、そこに住む神通力をもった神仙の存在を信じる中国古代の民間思想。この信仰に基づいて不老不死の薬が探索され、養生法が説かれた。道教の中心的教説として取り入れられた」⁸⁸。この定義の中既に「蓬萊」という概念が出現している。日本における「蓬萊」に関する研究の視点は哲学と宗教からである。例えば、下出積与は中国の道教と日本の神道などを中心に研究し、「蓬萊」に関する内容も検討した。1968年に出版した『神仙思想』⁸⁹において、下出積与は神仙思想と道教について述べ、日本伝来についての問題点も検討した。また、異次元の世界を上げ、神仙思想の日本的展開について考察した。この中で、日本の異次元の世界について検討するとき、「蓬萊」仙境についても言及した。神仙思想の日本的展開についても「蓬萊」の影響を与えたと考えている。そして、異次元の世界は日本庭園山水様式に素材を提供したと考えている。ほかに、武内義雄の『神僊説』(1935)⁹⁰、津田左右

吉の『神僊思想の研究』(1964)⁹¹、青木正児の『支那小説の溯源と神仙説』(1970)⁹²、窪徳忠の『世界宗教史叢書 9 道教史』(1977)⁹³などの著作においても、「蓬莱」について言及されている。以上の研究と神仙思想に関する研究は大形徹が「神仙思想研究小史：神仙思想はどのように研究されてきた(1)」(2000)⁹⁴に詳しく列挙し、検討している。

日本における「蓬莱」に関する研究のもう一つの視点は庭園からである。日本庭園において「蓬莱」に最も関係のある要素は蓬莱山石組であると考ええる。また、「蓬莱」要素も日本庭園の一つの重要な部分であると考えられる。「蓬莱」に関する研究では、小林正明は「蓬莱の島と六条院の庭園」(1987)⁹⁵に六条院の庭園を例に蓬莱から受けた影響について検討した。田中淡が「都市の中の理想郷」(1990)⁹⁶に中国庭園における蓬莱仙境の応用について時代順に述べた。斉藤忠一は『図解日本の庭・石組に見る日本庭園史』(1999)に日本の神仙蓬莱庭園の発生と要素について考察した。また、事例も挙げ、具体的に説明している。金子裕之は『古代庭園の思想：神仙世界への憧憬』(2002)⁹⁷に飛鳥・藤原・平城京の宮都に数多く残される庭園と園池の遺構において、どのような思想によって築造されたか、また古代人の精神生活について検討し、「蓬莱」の影響についても言及した。相馬知奈は「州浜考：庭園文化の影響」(2007)⁹⁸に「にわ」と州浜台は共に海の景色を精巧に再現していることを検証し、平安時代に発達した庭園文化の影響の大きさを州浜の変遷から紐解いている。特に、州浜台は後世、嶋形、島台、蓬莱の島台などと名称が変化することと当時の造物文化と造園文化は蓬莱山によって通底しており、両者の造形の類似性が露わになっていることを解明した。堀澤眞澄は「日本庭園において古来から残存する神仙蓬莱石について」(2009)⁹⁹に日本庭園に残存する神仙蓬莱石について検討した。

また『懐風藻』(751年-752年)、『竹取物語』(平安時代初期)などの日本作品は中国の「蓬莱」仙境から影響を受けたと考えられ、それについての研究も多い。例えば、安藤重和の「竹取物語と神仙思想：「天の羽衣」の由来」(2012)¹⁰⁰、善養寺淳一の「『懐風藻』に於ける吉野仙境観の成立—神仙思想受容の一側面—」(2014)¹⁰¹などの論文がある。

3. 6 中国における日本庭園及び日本の「蓬莱」に関する研究

中国における日本の造園に関する研究について、始めて童寯が『江南園林志』（1984）¹⁰²において論述した。その後、田村剛、田村津吉、進士五十八、清家清などの日本の庭園研究者が書いた論文は数多く翻訳され、中国の造園雑誌に掲載され、日本庭園の歴史、意匠、設計方法などの面から紹介された。21世紀から、中国庭園研究に存在する問題は重視されると同時に、日本庭園の研究と保存に関する方法も盛んに参考とされたため、日本庭園に関する研究も多くなった。例えば、劉庭風は『日本園林教程』という大学の教科書を編集すると同時に、中国の『園林』、『中国園林』、『広東園林』などの造園雑誌で日本庭園の実例を紹介し、数多の論文を掲載した。張十慶は『作庭記』を中国語に翻訳し、解釈を加えて『作庭記譯註与研究』（2004）¹⁰³を完成させた。近年、日本庭園の鑑賞についての本もいくつか出版された。例えば白鴿の『日本園林鑑賞手冊』（2012）と『日本園林細節図鑑』（2014）などの本である。日本庭園に関する論文も多数掲載されている。しかし、これらの論文は主に、日本庭園の設計と意匠に関する研究であり、歴史と文化についての研究は少ない。また、日本の庭園に関する著作も多数中国語に翻訳され、出版された。例えば、池田二郎の『日本造園設計与鑑賞』（1992）¹⁰⁴、大橋治三の『日本庭園造型与源流』（2000）¹⁰⁵、柊野俊明の『日本造園心得』（2014）¹⁰⁶、秋元通明の『作庭記：自然式庭院設計法則』（2016）¹⁰⁷などの日本庭園著作が中国で翻訳され、出版された。

また、『日本書紀』（720年）、『万葉集』（7世紀後半-8世紀後半）、『丹波国風土記逸文』（8世紀）などの文献に記載された浦島子伝説や、『懐風藻』や『竹取物語』などの中国神仙思想と「蓬莱」に影響を受ける日本作品について、いくつかの論文も発表された。例えば、『竹取物語』と神仙思想に関するテーマについての研究は、孟宪仁の「春秋時代『竹取物語』原型伝入日本考」（1986）¹⁰⁸、李天送の「中国的神话故事对日本小説『竹取物語』的影響」（1988）¹⁰⁹、卢静达の「『竹取物語』中「不老不死」思想的研究」（2009）¹¹⁰、卢静达の「日本古代不死薬的考察--以『竹取物語』为中心」（2011）¹¹¹、王春苗の「『竹取物語』对中国嫦娥奔月的接受及化用」（2014）¹¹²、曹仪婕の「論『竹取物語』的奔月情

節」(2015)¹¹³と「論『竹取物語』的長生無憂追求」(2015)¹¹⁴などの論文がある。ほかに、趙蕤が「浅析中国道教対日本神話伝説的影響」(2013)¹¹⁵に『浦島太郎』、『竹取物語』などの日本神話を対象として、道教がどのように日本神話に影響を与えたかという点について考察している。張楊は「从“浦島伝説”的演变探求中国文化的影響」(2011)¹¹⁶に「浦島伝説」はどのように中国の霊亀崇拜と道教文化から影響を受けたかを検討し、その中で、蓬莱要素も「浦島伝説」に混入した点についても言及している。

3. 7 中国と日本の庭園及び「蓬莱」に関する比較研究

中国と日本の庭園に関する比較研究について、中国では20世紀において、日本庭園に関する研究が少ないため、比較研究も少ない。主には、童寓が『造園史綱』(1983)¹¹⁷に日本と欧米の造園史の概要を記し、中国庭園との比較を行った。張十慶が「作庭記与園冶——中日古代造園專書的比較」(1993)¹¹⁸の中で、『作庭記』と『園冶』の比較研究を行った。21世紀から、中国の庭園学者は日本庭園に関心を持つと同時に、中国と日本の庭園に関する比較研究も多くなった。例えば、劉庭風の『中日古典園林比較』(2003)¹¹⁹、曹林娣の『中日古典園林文化比較』(2004)¹²⁰などの著作があるが、検討した内容は未だ不十分であると思う。また、比較研究について論文も数多く掲載されている。そして、日本庭園の研究と共に、歴史と文化について比較研究より、主に庭園の設計と意匠に関する比較研究である。また、数多くの論文で日本庭園に関する内容は深みが足りず、強引な論述が多くみられる。

日本では、1939年に『林泉』の満支庭園特輯に掲載された重森三玲の「支那庭園と日本庭園」¹²¹で、中国庭園と日本庭園が初めて比較された。その後、稲次敏郎は中国庭園と日本庭園の空間と視覚構成における比較を行った。稲田尚之が「中国の庭園——特に江南の林園、及日本庭園との比較について」(1985)¹²²において、中国庭園と日本庭園が比較した。

ほかに、在日の中国人庭園研究者と在日の庭園専門の中国留学生によって、いくつかの

比較研究が発表された。例えば、張綺曼の「中国・日本住空間の比較研究：中国の庭園と日本の庭について」(1986)¹²³、周宏俊の「借景の展開と構成：日本・中国造園における比較研究」(2012)¹²⁴、楊馥妃の「中国と日本の庭園比較研究：『園冶』と『作庭記』との比較を介して」(2002)¹²⁵などの論文が学術雑誌に掲載された。

「蓬莱」についての研究に関しては両国において専門的な研究が少ないため、比較研究もほとんどされていない。論文に関しては唯一、曹林娣の「蓬莱神話與中日園林仙境布局」(2002)¹²⁶がある。曹林娣は中国の「蓬莱」神話を紹介し、日本庭園に影響を受けて、蓬莱仙島を配置された庭園をいくつかを挙げ、中国の「一池三山」様式は日本において「一池五島」或いは一池多島の様式に変化し、日本庭園に常に使用されている鶴と亀も蓬莱に関係があることを指摘した。

3. 8 本研究の位置づけ

先行研究からみると、中国における「蓬莱」についての研究は多いが、「蓬莱」の語源と歴史的な変遷についての研究はこれまで行われてない。また、庭園に関する「蓬莱」研究においても「蓬莱」配置の時代的な変遷についての研究は十分とはいえない。日本における「蓬莱」について、飛鳥時代、奈良時代と平安時代の庭園において、「蓬莱」かもしれない配置は幾つかあるが、これらについての検討はまだ十分に行われてない。

従って本研究では、中国と日本の「蓬莱」について、展開と変遷の観点から検討し、その上、庭園における「蓬莱」配置の比較研究も行うこととする。

第2章 中国庭園における「蓬莱」の配置の発祥と展開

第1節 本章における研究の背景、目的及び方法

「蓬莱」は中国上古神話中の重要な要素の一つであり、「古代中国で東の渤海の中にある仙人が住むといわれている山」¹²⁷と一般的に定義されている。「蓬莱島」は秦代既に中国の庭園に配置され、清代まで2000年の間、始終庭園に重要な要素の一つとして設計されていた。

中国において「蓬莱」に関する研究について、書籍においてほとんど神話中の神山としての紹介であり、論文については幾つのテーマについての研究があるが、十分とは言えない。

例えば、李炳海は「以蓬莱之仙境 化崑崙之神郷—中国古代两大神話系統的早期融合」(2004)において、漢の武帝の求仙活動を契機として二つの神話システムの早期融合について検討し、蓬莱仙境は漢代において崑崙山仙境より影響が強いため、崑崙山仙境は蓬莱仙境と同化し、変化したものと指摘している。杜爽の「想像与真実—崑崙与蓬莱神話中山岳意象的文化解读」(2015)によると、二つの神話システムの早期融合の原因は崑崙山神話の地理的な西から東の伝播或いは崑崙山と蓬莱神話両方は古代東夷文化の産物であり、地理文化区は同じであることを指摘する。しかし、本章の3.1節の検討から、この二つの神話システムの融合について、新しい解釈もできる。それは道教神仙システムの影響がその要因である可能性が高いということである。

「蓬莱」に関する文学作品についての研究は、陳剛は「唐前蓬莱神話流变考」(2011)において、魏晋南北朝時代の「蓬莱」は神話から仙話になることを指摘しているが、その理由は明らかに論じてはいない。本研究では、「蓬莱」神話の上古先秦時代から魏晋南北朝時代に至るまでの変化は、道教が「蓬莱」神話に与えた影響である、と考える。薛莹は「魏晋南北朝蓬莱仙話研究」(2007)において、上古先秦「蓬莱」仙話と魏晋南北朝の志怪小説に出現した「蓬莱」仙話を考察し、志怪小説における「蓬莱」は作者の創作によるものであると指摘した。この点について、筆者は志怪小説における「蓬莱」は作者の創

作であることより、志怪小説における「蓬莱」は作者が「道教蓬莱」仙島を引用したものであると考える。この論文によると、「蓬莱」の概念は曖昧な状態であったものと感じられる。従って、本章は中国庭園における「蓬莱」配置の展開と変遷を検討するに先立ち、まず「蓬莱」という用語の語源から考察し、「蓬莱」と「蓬莱島」の発祥と展開を検討する。

用語の検証については中国古典漢文（『中国哲学书电子化计划』¹²⁸に含まれている3万冊以上の中国古代文献とそれ以外の庭園に関する古典漢文）をデータベースとし、キーワードが含まれている文章を抽出し、キーワードの意味を分析し、分類する。史料の収集・分析の結果、「蓬莱」の発展は4段階に分けることを指摘し、本章でこれを考察する。

さらに、用語の検証の上で「蓬莱島」に関する文献を抽出し、文献によって「蓬莱島」の発祥と展開を検討する。また、「蓬莱島」と関係が深い用語についても文献から抽出し、分析する。

中国庭園において「蓬莱」に関する研究について、その特徴は主に「一池三山」にある、と紹介されてきた。庭園を紹介する本のほぼ全てがこの内容に言及している。周維權の『中国古典園林史』（1990）¹²⁹、劉策の『中国古代苑園』（1979）、張家驥の『中国造園史』（1987）¹³⁰、安懷起の『中国園林史』（1988）、王铎の『中国古代苑园与文化』（2003）、汪菊淵の『中国古代園林史』（2006）¹³¹などの中国造園通史にも「一池三山」の内容がみられる。

また、「一池三山」に関する論文もいくつかがある。陈文娟は「蓬莱神话对中国古代園林造景的影響」（2014）¹³²に「一池三山」様式を配置されて中国庭園を挙げ、「一池三山」様式が庭園要素に与えた影響を検討した。吕正平、李宾は「探究中国古典園林芸術中“一池三山”的起源」（2013）¹³³に「一池三山」様式が発生の原因は始皇帝の求仙活動であり、最初に「一池三山」様式を配置した庭園は秦代の蘭池宮であることを記述し、「一池三山」様式の成形は漢代であることを指摘し、「一池三山」様式の発生過程中、理性思想（儒道思想）が影響を与えることを論じられた。谢志は「論西漢建章宮太液池“一池三

山”的園理」(2013)¹³⁴に西漢建章宮太液池を例として、「一池三山」様式の発生の規律を検討した。陈连波は「道家思想对園林的影响」(2011)で庭園に「道法自然」、「天人合一」、「神仙信仰」などの道家思想から影響を受けた点について検討し、「一池三山」様式の庭園も挙げ、神仙思想の例として述べた。谢志によると、「一池三山」様式の発生規律は造園活動より求仙理想の現実化であること、造園は「写意」(中国画の手法の一つ、微細な描写をせず、情趣の表現に重きをおく)であること、造園の基本は山水であること(崑崙山は山だけであり、水がない)、庭園設計の空間感であること、庭園は考える場所であること、庭園は生活の場所である、という6つの規律がある。

しかし、これらの論文について、なお検討すべき課題がある。

例えば、田建林は「浅谈“一池三山”」(2004)¹³⁵において「一池三山」様式は秦漢時代に形成され、東アジアに影響を与えたことを述べ、「一池三山」様式の形成は道教の影響からの結果であると指摘したが、この結論については疑義を呈したい。「一池三山」様式は最初に秦代の蘭池宮に配置されており、〈史料 499〉によると、始皇 31 年(紀元前 216 年)以前に蘭池宮において既に建造されている。道教は東漢末期(126 年-144 年)に行った道教の源流である太平道(道教の宗派の 1 つ)と五斗米道(道教の宗派の 1 つ)が発端である。従って、「一池三山」様式の形成は道教の影響からではないと考えられる。

また、苑坤の「试論神仙文化与中国古典園林艺术--以蘇州園林为例」(2009)¹³⁶、陈文娟の「蓬莱神话对中国古代園林造景的影响」(2014)、吕正平、李宾の「探究中国古典園林艺术中“一池三山”的起源」(2013)¹³⁷、谢志の「論西漢建章宮太液池“一池三山”的園理」(2013)¹³⁸、陈连波の「道家思想对園林的影响」(2011)においては、庭園における「一池三山」様式について検討されているが、いずれの論文においても以下の内容が検討されていない。第 1 に、「一池三山」様式について時代順に具体的にどのような様子で庭園に配置されるか、どのような特徴があるか。第 2 に、「一池三山」様式について時代順に具体的にどのような変化がみられたのか。第 3 に、これらの変化の原因が何であるか。これらの点についての研究はほとんど行われていない。

先行研究においては「一池三山」様式は秦漢時代に形成され、長い歴史の間に歴代の皇家園林で用いられた、という点が指摘されているが、本研究においてはこれに疑問を呈し、中国皇家園林における蓬莱の配置を再検討する。

また、先行研究においては、「一池三山」様式ではなく「蓬莱」要素のみに注目した研究は少なく、管見によれば韓鈺の「蓬莱仙話景觀模式對中國古典園林的影響」(2015)¹³⁹のみであり、十分とは言えない。韓鈺は先秦時代から魏晉南北朝時代に至るまでの蓬莱仙話を述べているが、その特徴や変化などの内容を具体的に述べておらず、また、魏晉南北朝時代以後の蓬莱仙話には言及されていない。「蓬莱」島が配置されている庭園の事例を挙げているものの、その配置の特徴や変化などには言及されていない。次に、韓鈺は論文において、「一池三山」様式における「形態布局」、「文化内包」、「庭園応用」という3つの点について考察されたが、前文に提出した3つの問題はここでも考察されていない。最後に韓鈺は「蓬莱仙話」に言及されている建築、動物、植物の庭園への応用について考察されたが、この応用についても「神話蓬莱」と「道教蓬莱」とが混同して検討されている。

以上、庭園における「蓬莱」に関する研究を概観したとき、研究の問題点は「蓬莱」の概念の成立過程が明確にされていない点にあるといえよう。「蓬莱」の概念が曖昧であるため、庭園における「蓬莱」配置の成立過程も解明されていない。従って、本研究は、庭園における「蓬莱」配置の成立過程を明らかにし、その史的変容ならびに変容をもたらした要因について検討することを目的とする。

具体的に、本章においては中国の歴代皇家園林を対象とし、まず、秦代の蘭池宮から清代の頤和園に至るまで、8件の皇家園林で「蓬莱島」が配置されていることを確認し、古代文献と近代文献の両方を対象とし、可能な限り「蓬莱」配置に関連がある文献史料を収集し分析する。そして、現存する明清時代に造営された庭園について、現地調査の上、写真記録をおこない、関連する文献史料を収集し分析する。

次に、時代順に8件の皇家園林における「蓬莱島」配置の様子と特徴を具体的に述べ、

特徴の変化ならびにその変化の理由を検討・考察する。

第2節 中国における「蓬莱」の用語の語義と用法

本節において、中国における「蓬莱」用語の語義と用法について検討する。研究方法は中国古代文献から「蓬莱」をキーワードとして、検索、抽出し、文献の時代順によって、「蓬莱」の語義と変遷について考察する。本節は主に『中国哲学書電子化計画』に収集された中国古典漢文をデータベースとし、時代順に「蓬莱」が言及された文献について検討する。

古い文献には失われたものが多いのであるが、後時代の史料の中に、引用されて伝承されることもある。原文が失われているため、その引用文が改変されている可能性も否定できない。しかし、文献の前後の文脈から、引用の部分が参考になることもあろう。また、引用方法から、「蓬莱」の語義の変遷を窺うこともできよう。そのため、本節においては、引用文献も研究対象とする。

また、文学作品は歴史の記録ではなく、作家による創作であることから、庭園の意匠や構成を具体的に描写したものとしてとらえてよいかという問題がある。しかし、ある作品だけに登場した要素を問題にするのではなく、複数の作品群から固有の特徴が表れたならば、そこにある傾向をとらえることもできることから、本節で、文学作品も研究対象とする。

文献検索と抽出の結果、「蓬莱」は30点の史書において467件、528箇所が確認された。具体的な検索結果は表1に示している。これをふまえ、本研究では「蓬莱」の展開と変遷について、表2に示すような、4つの段階、6つの時期に分類・整理した。

2. 1 「蓬莱」の概念の第1段階

「蓬莱」の概念の第1段階(第1時期)を発生期とする。「蓬莱」の発生期は「蓬莱」神話が発生する時期、即ち中国の上古時代(約紀元前3000年-約紀元前2070年)から「蓬

菜」神話の最初の記録がある時期、即ち戦国時代の前期(紀元前 5 世紀)までである。この時期の間に「蓬莱」という概念が発生したと考えられる。

「蓬莱」について、最初の記録は戦国時代の『列子・湯問』(戦国前期・紀元前 5 世紀)である¹⁴⁰。『列子・湯問』には中国の上古時代(紀元前約 3000 年-紀元前約 2070 年)の神話が多数記載されており、「蓬莱」の記述もこうした上古神話の内容を伝える 1 つであると考えられる。

〈史料 1〉渤海之東不知幾億萬里，有大壑焉，實惟無底之谷，其下無底，名曰歸墟。八弦九野之水，天漢之流，莫不注之，而無增無減焉。其中有五山焉：一曰岱輿，二曰員嶠，三曰方壺，四曰瀛洲，五曰蓬萊。(『列子・湯問』)

渤海の東の何億万里のところに、巨大な谷「帰墟」があり、この中に 5 つの山「岱輿」、「員嶠」、「方壺」、「瀛洲」、「蓬萊」がある。この最初の記述において、「蓬萊」は既に固有名詞として使用されている。そして、紀元前 213 年と紀元前 212 年秦の始皇帝は多数の詩書を燃やした(『史記・卷 121・儒林列伝』によると、「及至秦之季世，焚詩書，坑術士，六芸从此缺焉」という記載がある)。このため秦代以前の史料は現存するものがきわめて少ないため断定はできないが、『列子・湯問』により以前の書籍に「蓬萊」に関する記事がすでに出現している可能性が高いであろう。

2. 2 「蓬萊」の概念の第 2 段階

「蓬萊」の概念の第 2 段階(第 2 時期)を盛期とする。「蓬萊」の盛期は「蓬萊」神話の最初の記録がある時期、即ち戦国時代の前期(紀元前 5 世紀)以後から、東漢末期(126 年-144 年)道教が発端される以前までである。この時期において、皇帝が神仙思想に強い関心を持ったため、求仙活動に関する「蓬萊」についての記述が以前より増加している。

戦国時代の前期(紀元前 5 世紀)以後から、東漢末期(126 年-144 年)道教が発端され

る以前までの史料について、記録のデータから見ると、「蓬莱」は 43 件の史料に 54 回言及されたことが確認できる。そのうち、皇帝の求仙活動に関する記録は 26 件、34 回であり、以前の史料からの引用は 11 件、14 回であり、東海「神話蓬莱」島に関する記録は 2 件、2 回であり、庭園の配置に関する記録は 3 件、3 回であり、地名とする記録は 1 件、1 回である。データの結果から見ると、秦代から漢代までにおいて、「蓬莱」に関する記述は主に皇帝の求仙活動に関するものである。「蓬莱」は主に東海仙島の名前として記録されている。

また、「蓬莱」島の特徴などについての具体的な記録は 2 点しかない。1 点は最初の記録『列子・湯問』に記述された「蓬莱」の特徴の一部分が一致である。もう 1 点は新しい創作かもしれないと考える。この時期、「蓬莱」の概念が盛んでいるか、記録によると、発生期から発展と変化はない。

以下、各史料について具体的に分析する。

『列子・湯問』以後、同じく戦国時代の古書『山海経』（戦国中後期-漢代前中期）に「蓬莱」が海の位置することが記述されている。

〈史料 2〉蓬莱山在海中。（『山海経・海内北経』）

戦国後期、秦の始皇帝は全国を統一し、巨大な権力を持ち、不死不老の望みを強くした。この望みに応え、神仙思想が上古神話から生み出され、発展した。その後、漢の武帝もまた、秦の始皇帝と同じく神仙思想を熱心に信じたことから、秦代からの求仙活動は漢代武帝時期まで盛んに続いてきた。この時期の史料においては、「蓬莱」に関する記述が以前より増加している。しかし、記述の量の増加の原因は皇帝の求仙活動からの影響であろうか、あるいは、秦代以前「蓬莱」の記述が既に多く数みられたものの、秦の始皇帝による「焚书坑儒」によって史料が失われたことによるものかについてはなお疑問が残るところである。

『史記』(紀元前 104 年-紀元前 118 年)においては「蓬萊」が 22 件、30 回言及されている。そのうち、28 は皇帝の求仙活動に関するものであり、2 件は漢代建章宮の庭園配置に関するものである。『史記・本記・孝武本紀』は主に『史記・書・封禪書』から引用するものということで、重複な記録もあるため、『史記』では実に「蓬萊」が 13 件、1 箇所と言及されていることである。そのうち、12 件、16 ヲ所は皇帝の求仙活動に関係があり、〈史料 12〉の記述は漢代建章宮の庭園配置に関係がある。

〈史料 12〉上還，以柏梁災故，朝受計甘泉。公孫卿曰：“黃帝就青靈臺，十二日燒，黃帝乃治明庭。明庭，甘泉也。”方士多言古帝王有都甘泉者。其後天子又朝諸侯甘泉，甘泉作諸侯邸。勇之乃曰：“越俗有火災，複起屋必以大，用勝服之。”於是作建章宮，度為千門萬戶。前殿度高未央，其東則鳳闕，高二十餘丈。其西則唐中，數十里虎圈。其北治大池，漸台高二十餘丈，名曰泰液池，中有蓬萊、方丈、瀛洲、壺梁，像海中神山龜魚之屬。其南有玉堂、璧門、大鳥之屬。乃立神明台、井幹樓，度五十餘丈，輦道相屬焉。(『史記・本記・孝武本紀』)

12 件の皇帝の求仙活動に関係がある史料の中で、10 件は東海仙島の名前として言及されており、2 件は「蓬萊」島の様子を描写している。〈史料 14〉に示すように、「蓬萊」は「勃海にあり、不老不死の薬があり、その上台と観などの建築は全て金玉で建てられ、動物は全て白色をしている」という特徴を纏めている。こうした特徴は『列子・湯問』に記述された「蓬萊」の特徴の一部分と一致する。

〈史料 14〉自威、宣、燕昭使人入海求蓬萊、方丈、瀛洲。此三神山者，其傳在勃海中，去人不遠；患且至，則船風引而去。蓋嘗有至者，諸仙人及不死之藥皆在焉。其物禽獸盡白，而黃金銀為宮闕。未至，望之如云；及到，三神山反居水下。臨之，風輒引去，終莫能至云。世主莫不甘心焉。及至秦始皇并天下，至海上，則

方士言之不可胜数。始皇自以为至海上而恐不及矣，使人乃赍童男女入海求之。船交海中，皆以风为解，曰未能至，望见之焉。其明年，始皇复游海上，至琅邪，过恒山，从上党归。后三年，游碣石，考入海方士，从上郡归。后五年，始皇南至湘山，遂登会稽，并海上，冀遇海中三神山之奇药。不得，还至沙丘崩。（『史記・書・封禪書』）

〈史料 24〉は『史記・列伝・淮南衡山列伝』に記載されたものである。徐福によると、「蓬莱」仙島においては、「銅の色、龍の形である使者がいる」。「蓬莱」のこの特徴は『列子・湯問』においては掲載されていないので、徐福自らの創作かもしれない。

〈史料 24〉又使徐福入海求神異物，還為偽辭曰：‘臣見海中大神，言曰：“汝西皇之使邪。”臣答曰：“然。”“汝何求。”曰：“願請延年益壽藥。”神曰：“汝秦王之禮薄，得觀而不得取。”即從臣東南至蓬莱山，見芝成宮闕，有使者銅色而龍形，光上照天。於是臣再拜問曰：“宜何資以獻。”海神曰：“以令名男子若振女與百工之事，即得之矣。”’秦皇帝大說，遣振男女三千人，資之五穀種百工而行。徐福得平原廣澤，止王不來。（『史記・列伝・淮南衡山列伝』）

また、『史記』の記録から、「蓬莱」に関する仙人「安期生」という人物の記述も〈史料 5〉と〈史料 6〉で 4 回言及されている。『楚辭』（紀元前 26 年-紀元前 6 年）の『九思・傷時』にも「跼飞杭兮越海，从安期兮蓬莱」（〈史料 26〉）との描写があり、「蓬莱」と「安期生」に言及している。

『漢書』（紀元 80 年）においては「蓬莱」が 14 件、17 回言及され、その中で、11 ヲ所は『史記』からの引用である。その他の 6 件について、4 件〈史料 27、28、37 と 38〉は皇帝の求仙活動に関係があり、〈史料 39〉は漢代建章宮の庭園配置に関係があり、〈史料 40〉は東海の仙島と関係がなく、地名の「蓬莱」である。

『前漢紀』（紀元 198 年-紀元 200 年）では「蓬萊」は 3 回言及されているものの、内容はすべて『漢書』からの引用である。

『盐鉄論・卷六・散不足』（漢代・紀元前 81 年-紀元前 51 年）に「於是數巡狩五嶽、濱海之館，以求神仙蓬萊之屬。」（〈史料 25〉）と記載されており、『風俗通義・王陽能鑄黄金』（後漢・約紀元 153-紀元 196 年）に「秦始皇欺於徐市之屬，求三山於海中，通同道，隱形體，弦詩想蓬萊，而不免沙丘之禍。」（〈史料 45〉）と記載されている。両者いずれも皇帝の求仙活動に関係がある。

2. 3 「蓬萊」の概念の第 3 段階

「蓬萊」の概念の第 3 段階(第 3、4、5 時期)を派生期とする。さらに、派生期をⅠ、Ⅱ、Ⅲ 3 つの時期に細分した。

「蓬萊」の派生期は東漢末期（126 年－144 年）道教が出現する時から宋代の終わり（紀元 1279 年）までであり、そのうち、派生Ⅰ期は東漢末期（126 年－144 年）道教が出現する時から、『十洲記』（六朝（222－589））が完成する前までである。この時期において、道教に関する文献に出現する「蓬萊」は、具体的な描写が少ないため、「神話蓬萊」であるのか、「道教蓬萊」であるのか、判断できない例も多い。派生Ⅱ期は『十洲記』（六朝（222－589））に完成する時から、隋代の始め(581)までである。この時期において、『十洲記』の完成によって、道教が出現から続いた、「神話蓬萊」仙島と「道教蓬萊」神山が混在するという曖昧な状況が終わり、「蓬萊」の道教仙境体系における位置づけが明らかになった。派生Ⅲ期は隋代の始め(581)から、宋代の終わり(紀元 1279 年)までである。この時期において、唐宋時代までの史書においては、「神話蓬萊」と「道教蓬萊」は分別して記録されているが、唐詩などの文学作品においては、「神話蓬萊」と「道教蓬萊」を混用し、両者が混在する状況があるということが指摘できる。また、道教仙人物語の影響を受け、「神話蓬萊」についても、新しい物語が出現されてきたということも明らかとなった。

「蓬莱」の派生期には、道教の出現と共に、「蓬莱」の概念にも変化が生じた。道教が出現したことから、道士の修行活動に応じ、洞天福地説が現れた。「道教蓬莱」山は洞天福地説の中の十洲三島に位置づけられる。『十洲記』によると、道教仙境の十洲三島は上古東海神話から影響を受けたとみられるが、変化もある。この時期の史料を分析すると、「蓬莱」は 359 件史料に 396 回言及されたことを確認できる。そのうち、派生Ⅰ期に 10 件、12 回であり、派生Ⅱ期に 6 件、6 回であり、派生Ⅲ期に 343 件、378 回である。具体的に、派生Ⅰ期において、皇帝の求仙活動に関する記録は 2 件、2 回であり、「神話蓬莱」であろうか、「道教蓬莱」であろうか、不明な記録は 7 件、9 回である。派生Ⅱ期において、皇帝の求仙活動に関する記録は 1 件、1 回であり、植物とする記録は 1 件、1 回であり、文学作品にの使用は 2 件、2 回であり、「道教蓬莱」とする記載は 2 件、2 回である。派生Ⅲ期において、「神話蓬莱」に関する記載は 11 件、11 回であり、「道教蓬莱」に関する記載は 36 件、44 回であり、道教の専用名詞とする記録は 11 件、11 回であり、皇帝の求仙活動に関する記録は 4 件、4 回であり、建築に関する記載は 62 件、64 回であり、庭園の配置に関する記録は 7 件、7 回であり、植物とする記録は 1 件、1 回であり、以前の史料からの引用は 43 件、45 回であり、地名とする記録は 4 件、4 回であり、文学作品にの使用は 164 件、187 回であることを確認できる。

以下、各史料について具体的に検討する。

東漢末期（126 年－144 年）に行われた道教の源流である太平道（道教の宗派の 1 つ）と五斗米道（道教の宗派の 1 つ）は道教の発端である。道教に関する古典文献において、「蓬莱」の記録も出現している。

成立年代不明の『列仙伝』（漢代末期・後漢・魏晉中期）は、中国における最初の神仙伝記専門書であり、道教の神仙体系に大きな影響を与えた。この『列仙伝』においては「蓬莱」は 4 件（〈史料 49、50、51 と 52〉）、5 回言及されており、全ては「神話蓬莱」を指すが、「蓬莱」に関する記述より、仙人の物語を記述の中心とし、「蓬莱」は地名として出現し、形態的特徴などの島に関する描写がみられない。

道教学者葛洪(紀元 284 年-紀元 364 年)による道教典籍『抱朴子』(成立年代不明)においては「蓬萊」が 2 回言及されている。1 つは『抱朴子・内篇・極言』における「安期生」に関するものであり、これは『列仙伝・安期先生』の内容と一致する。もう 1 つは『抱朴子・内篇・登涉』に「蓬萊札」として記述されている。

〈史料 54〉或問涉江渡海關蛇龍之道。抱朴子曰：“道士不得已而當遊涉大川者，皆先當於水次，破雞子一枚，以少許粉雜香末，合攪器水中，以自洗濯，則不畏風波蛟龍也。又佩東海小童符、及製水符、蓬萊札，皆卻水中之百害也。又有六甲三金符、五木禁。又法，臨川先祝曰：卷蓬卷蓬，河伯導前關蛟龍，萬災消滅天清明又金簡記雲，以五月丙午日日中，搗五石，下其銅五石者，雄黃，丹砂，雌黃，礬石，曾青也。皆粉之，以金華池浴之，內六一神爐中鼓下之，以桂木燒為之，銅成以剛炭煉之，令童男童女進火，取牡銅以為雄劍，取牝銅以為雌劍，各長五寸五分，取土之數，以厭水精也。帶之以水行，則蛟龍巨魚水神不敢近人也。欲知銅之牝牡，當令童男童女俱以水灌銅，灌銅當以在火中向赤時也，則銅自分為兩段，有凸起者牡銅也，有凹陷者牝銅，各刻名識之。欲入水，以雄者帶左，以雌者帶右。但乘船不身涉水者，其陽日帶雄，陰日帶雌。又天文大字，有北帝書，寫帛而帶之，亦關風波蛟龍水蟲也“或問曰：關山川廟堂百鬼之法抱朴子曰：”道士常帶天水符，及上皇竹使符，老子左契，及守真一思三部將軍者，鬼不敢近人也。其次則論百鬼錄，知天下鬼之名字，及白澤圖九鼎記，則眾鬼自卻。其次服鶉子赤石丸，及曾青夜光散，及蔥實烏眼丸，及吞白石英只母散，皆令人見鬼，即鬼畏之矣

“抱朴子曰：”有老君黃庭中胎四十九真秘符，入山林，以甲寅日丹書白素，夜置案中，向北斗祭之，以酒脯各少少，自說姓名，再拜受取，內衣領中，關山川百鬼萬精虎狼蟲毒也。何必道士，亂世避難入山林，亦宜知此法也“。(『抱朴子・内篇・登涉』)

史料によると、「蓬莱札」は道士が海を渡る時に使用する道具の一つである。「札」は護符の意味で、「蓬莱」は「神話蓬莱」であると考えられるが、「道教蓬莱」の意味であるという可能性もあり、断定はできない。

葛洪のもう1つの道教著作『神仙伝』（成立年代不明）においては、「蓬莱」が道教仙人の物語として2件（〈史料 55 と 56〉）、3回言及され、『列仙伝』と同じように、「蓬莱」は地名として出現し、特徴などの島に関する描写はみられない。しかし、記述内容から仙人は道教の仙人であることは明らかであることから、この「蓬莱」は「神話蓬莱」仙島だけではなく、「道教蓬莱」の原形としてとらえられていることが指摘できよう。

道教が出現してから、道士の修行活動に応じ、洞天福地説が現れた。洞天福地説は東晋末期既に形成したが、今残されている記録において、最も早いのは南朝陶弘景（456－536）の『真誥』（成立年代不明）である。洞天福地説によって、神仙は景色の綺麗な山と島に住み、そこは宗教修行に適した場所である。洞天福地説に含まれた神仙が住む場所、いわゆる宗教修行に適した場所は『天地宮府図』に記載された十大洞天、三十六小洞天、七十二福地と十八水府、五鎮海瀆、二十四治、三十六靖廬及び十洲三島である。「道教蓬莱」は十洲三島の中に位置づけられる。十洲三島説東晋以後形成され、現存する記録において、最も早いのは『十洲記』（六朝（222－589））である。『十洲記』に記述された十洲三島は祖洲、瀛洲、玄洲、炎洲、長洲、元洲、流洲、生洲、鳳麟洲、聚窟洲の十洲と滄海島、方丈洲、蓬丘の三島である（〈史料 46〉）。

『十洲記』の完成によって、道教出現時から続いていた、「神話蓬莱」仙島と「道教蓬莱」神山とが混在するという曖昧な状況が終わり、「蓬莱」の道教仙境体系における位置付けが明確となった。また、『十洲記』によると、道教仙境の十洲三島は上古東海神話から影響を受けたとみられるが、両者は同一ではない。東海神話の東海三仙島は「瀛洲」、「方丈」、「蓬莱」であるが、『十洲記』の道教仙境の十洲三島への位置づけを見ると、「瀛洲」は十洲に入り、「方丈」、「蓬莱」は三島に入るが、その名称は「方丈洲」、「蓬丘」へと変化している。また、『十洲記』においては「蓬丘」の特徴について、「蓬

丘，蓬萊山是也。對東海之東北岸，週回五千里。外別有圓海繞山，圓海水正黑，而謂之冥海也。無風而洪波百丈，不可得往來。上有九老丈人，九天真王宮，蓋太上真人所居。唯飛仙有能到其處耳。」（〈史料 46〉）と記述されている。この記述から判断すると、「神話蓬萊」の特徴である「冥海」と「道教蓬萊」の特徴である「九老丈人」、「九天真王宮」とが混在していることが指摘できる。

道教が出現した後に成立した史書『三国志』（西晋・紀元 280 年-紀元 290 年）においては、「蓬萊」が 2 回（〈史料 47 と 48〉）言及されており、これら全てが秦の始皇帝の求仙活動に関する記述である。

その後、史書『後漢書』（紀元 432 年-紀元 445 年）では「蓬萊」は 5 回言及されている。

〈史料 58〉に示すように、『後漢書・列伝・竇融列伝』においては、「蓬萊」に関する記述は「道家蓬萊山」であり、「蓬萊」は「神話蓬萊」仙島ではなく、道教に関するものとして史書に現れている。〈史料 59〉と〈史料 60〉は「神話蓬萊」として文学の作品に引用され、〈史料 61〉は雑草の「蓬萊」であり、〈史料 62〉は秦の始皇帝の求仙活動に関する記述である。

『芸文類聚』（唐・紀元 624 年）においては「蓬萊」は 27 回言及されている。この中で、以前の典籍からの引用は 8 件（『史記』2 件、『列仙伝』3 件、『神仙伝』1 件、『抱朴子』1 件、『漢書』1 件）であり、庭園に関する記述は 1 件でありそれは『芸文類聚・卷八十七・果部下・杏』に「上林苑有蓬萊杏，東海都尉於台，獻杏一株，花雜五色，六出，雲是仙人所食者。」（〈史料 88〉）と記述されている。

「神話蓬萊」は 2 件（〈史料 71 と 89〉）記述されており、以前の記述と比べると、変化はない。「道教蓬萊」に関する記述は 1 件であり、『芸文類聚・卷四十二・樂部二・樂府』に「乘蹻追術士，遠之蓬萊山，靈液飛素波，蘭桂上參天，玄豹遊其下，翔鶴戲其巔，乘風忽登舉，彷彿見眾仙。」（〈史料 75〉）と記載されている。この描写を見ると、「道教蓬萊」に蘭桂などの植物が植えられ、玄豹、翔鶴などの動物もおり、その姿は「神話蓬萊」仙島と差異があることが指摘できる。

また、文学作品詩歌や賦などに引用された「蓬萊」は 15 件であり、この中で、描写がなく、名前だけを引用したものが 14 件（〈史料 64、65、66、69、72、73、74、76、78、79、83、84、85 と 87〉）であり、「神話蓬萊」であろうか、「道教蓬萊」であろうか、曖昧な状況で判断できない。これら 14 件以外の〈史料 68〉においては「神話蓬萊」の特徴が描写されている。即ち、『芸文類聚・卷八・水部上・海水』に「其中有蓬萊名岳，青丘奇山，阜陵別島，崐崙其間，其山則●崔嵬崱，嵯峨隆屈，披滄流以特起，擢崇基而秀出，其魚則有吞舟鯨鯢，●鰕龍鬚，蜂目豺口，狸班雉軀，怪體異名，不可勝圖，其蟲獸則素蛟丹虬，元龜靈鼉，修鼃巨鯢，紫貝蝮蛇，玄螭蚴虬，赤龍焚蘊，遷體改角，推舊納新，舉扶搖以抗翼，泛陽侯以濯鱗，其禽鳥則鷗鴻鸕鷀，駕鵝鳩鵲，朱背煒燁，縹翠蔥青，詳察浪波之來往，遍聽奔激之音響，力勢之所回薄，潤澤之所彌廣，普天之極大，橫率土而莫兩。」（〈史料 68〉）と描写されている。この描写は以前より内容が豊かであり、蛇、鸕鷀、などの動物の存在が記されている。しかし、この描写は文学作品の賦からのものであり、賦については一般的に誇張した描写が行われことから、この「蓬萊」についての描写は作者の想像による創作であると考えられる。

『通典』（唐・紀元 801 年）においては「蓬萊」が 5 回言及されている。そのうち、『通典・州郡十』に「古青州今置郡府七、縣三十二。東牟登四縣、蓬萊、文登、黃、牟平」（〈史料 93〉）と記載されており、『通典・古青州』に「登州今理蓬萊縣。」（〈史料 94〉）と記載されている。この 2 件は地名としての記録である。『通典・礼十五・諸雜祠』の「四曰陰主，祠三山。三山即蓬萊、方丈、瀛洲三神山。」（〈史料 91〉）という記載は秦の始皇帝の求仙活動に関する記述である。『通典・樂四・樂懸』に「大唐造蓬萊宮成，充庭七十二架。」（〈史料 92〉）と記載されている。ここの唐の宮殿「蓬萊宮」は唐の「大明宮」の別称である。また、『通典・職官八・秘書監』に「馬融為校書郎中，詣東觀典校秘書。當時重其職，故學者稱東觀為老氏藏室，道家蓬萊山焉。至魏，始置秘書校書郎。晉、宋以下無聞。至後魏，有秘書校書郎。」（〈史料 90〉）と記載されている。ここの「道家蓬萊山」は「道教蓬萊」であると考えられる。

清代(紀元 1705 年)に整理された『全唐詩』は清代の作品であるが、内容は全て唐代の詩であるため、唐代の文献として分析することとする。『全唐詩』において「蓬萊」は 238 回言及されている。この中で、道教に関する名詞として使用される「蓬萊」は 5 件(「蓬萊都水監」1 件、「蓬萊洞」2 件、「蓬萊会」1 件、「蓬萊仙会」1 件)であり、建築の名称に関する記録は 55 件であり、「太液池」の別称である「蓬萊池」は 3 件であり、植物の意味の「蓬萊」は 1 件であり、地名である「蓬萊」の記録は 2 件である。地名としての記録は、主に山東省の蓬萊県を指す。また、漢代の意味の「蓬萊」は 1 件である。これは李白の詩(〈史料 278〉)に登場したものである。詩の中の「蓬萊」は漢代の国家図書館である「蓬萊山」を指すものであり、詩の中の「蓬萊文章」は「漢代文章」の意味と考える。その他の 171 件は全て東海の「蓬萊」仙島を指すが、「神話蓬萊」であるのか、「道教蓬萊」であるのかが判断できない例もある。

『太平御覧』(宋・紀元 977 年-紀元 983 年)においては、「蓬萊」が 66 件、70 回言及されている。その中で、建築の名称は 3 件であり、そのうち、『太平御覧・職官部六十七・縣尉』に「玄宗聽政之暇，從禽自娛，又於蓬萊宮側立教坊，以習倡優曼衍之戲。」(〈史料 121〉)と記載されており、『太平御覧・木部六・楊柳下』に「司稼卿梁孝仁，高宗時監造蓬萊宮，於諸庭院列種白楊。」(〈史料 157〉)と記載されている。この 2 件に言及された「蓬萊宮」は唐の「大明宮」の別称であり、『太平御覧・疾病部三・聾』に言及された「掖墅蓬萊」(〈史料 146〉)は別荘の名前である。庭園に関する記述は 3 件(史料 126、129 と 158)であり、秦の始皇帝の求仙活動に関する記述は(史料 113)と(史料 116)である。また、以前の典籍からの引用は 35 件、37 回みられる(『列子・湯問』3 件、『山海經』1 件、『史記』6 件、『漢書』8 件、『後漢書』3 件、『列仙伝』9 件、『抱朴子』2 件、『神仙伝』2 件、『十洲記』1 件)。その中で、『山海經』からの引用とされる記述については留意が必要である。『太平御覧』においては以下の引用がみられる。

〈史料 102〉『山海經』曰：蓬萊山，海中之神山，非有道者不至。(『太平御

この記述は『山海経』において確認することができない。前半の「蓬萊山は海中の神山であり」については記述が確認できるが、後半の「道の修行がない人は島に行くことができない」という記述は見られないのである。この記述は、道教の成立後、『太平御覧』の作者あるいは他の人が加筆した可能性が考えられる。また、『抱朴子』についての引用にも齟齬がある。『太平御覧』は『山海経』を以下のように引用する。

〈史料 143〉『抱朴子』曰：蓬萊高上真書成，青天上皇以傳寧封，佩此真符，橫行江海。一名蓬萊太玄玉札，一名九流真書，北陵丈人授以馬師皇致龍來。又天帝丈人黃上真書佩之，知吉凶未兆之事。（『太平御覧・道部二十・伝授上』）

『抱朴子・内篇・登涉』原文にみられる「蓬萊札」は『太平御覧・道部二十・伝授上』において「蓬萊太玄玉札」に改変され、「九流真書」という新しい護符も加えられている。

『太平御覧』に「神話蓬萊」仙島に関する記述は9件ある。そのうち、4件〈史料 96、115、146 と 154〉は「蓬萊」の名詞だけが記載され、3件〈史料 100、155 と 156〉は「蓬萊」の特徴が描写されているが、以前の記録と一致している。〈史料 95〉と〈史料 135〉は新しい内容が記載されている。『太平御覧・天部八・雲』〈史料 95〉に「岐伯乗絳雲之車，駕十二白鹿遊於蓬萊之上。」と記載されており、中国上古時代の医者岐伯を12匹白鹿の車に乗って蓬萊山の上通る話を載せている。『太平御覧・楽部十六・琴中』〈史料 135〉に春秋戦国時期（紀元前770年－紀元前221年）の琴師俞伯牙が蓬萊山で琴を弾くことを載せている。

これらの物語は『太平御覧』の作者或は他の人が創作したものである可能性が高いと考える。また、この物語の創作は道教仙人の物語から影響を受けていると考えられる。『太平御覧』においては、「道教蓬萊」に関する官位が2回言及されており、それは「蓬萊

左仙公」と「蓬萊仙公」という、「道教蓬萊」山を管理する人々である。また、「道教蓬萊」山が 14 回言及されている。この中で、大部分の記述は仙人の物語を記述の中心とし、「蓬萊」は地名として記されるものであるが、「蓬萊」についての描写が 4 回見られた。史料によると、「蓬萊山」においては、玉のような赤い草があり、草の実を食べると酔って 300 年に寝ることになり〈史料 130〉、万年芝もあり〈史料 160〉、「蓬萊府北室金柱玉壁」に「鬱儀結鄰經」が彫刻されており〈史料 139〉、「九天真宮」という大真仙人が住んでいる建物も建てられている〈史料 141〉。

道教仙人の物語を記載している『太平広記』（宋・紀元 977 年-紀元 978 年）においては、「蓬萊」が 30 件、38 回言及されている。その中で、『太平広記・雜伝記三・長恨傳 陳鴻撰』に「昭陽殿里恩愛絶，蓬萊宮中日月長。」（〈史料 190〉）と記載されており、この「蓬萊宮」は唐の「大明宮」の別称であり、『太平広記・神仙三十五・成真人』に記載されている「蓬萊院」（〈史料 172〉）と『太平広記・神仙三十八・李泌』に記載されている「蓬萊殿延喜閣」と「蓬萊院」（〈史料 174〉）は「蓬萊宮」に関する建築である。

道教仙人の物語を記述の中心とし、「蓬萊」が地名として 12 回、仙人や道士達が「蓬萊」山へ行くという行動に関して 11 回言及されている。地名と行動以外の、「道教蓬萊」山の様子が描写された記述は 5 件である。

『太平広記・神仙二十・楊通幽』に「後於東海之上，蓬萊之頂，南宮西廡。有群仙所居，上元女仙太真者，即貴妃也。… “得道之人，入火不爇，入水不濡，躡虛如履實，觸實如蹈虛。雖九地之厚，巨海之廣，八極之遠，萬方之大。應念倏忽。何所拘滯乎。九地之厚起二十五字據明鈔本補。所以然者，形與道合。道無不在，毫芒之細。萬物之衆。道皆居之。”」（〈史料 168〉）という記述があり、「蓬萊」においては、宮殿が建てられ、群仙が住んでおり、貴妃「上元女仙太真」は「得道」（仙人になること）の方法を伝授することを示している。

『太平広記・神仙二十七・唐若山』においては「道士曰：“餘即若山也。將遊蓬萊，偶值江霧，維舟於此，與公垂曩昔之分，得暫相遇。詎忘之耶。乃攜紳登舟。江霧已霽。山峯

如畫。月光皎然。其舟凌空泛泛而行，俄頃已達蓬島。金樓玉堂，森列天表。神仙數人，皆舊友也。將留連之。中有一人曰：“公垂方欲佐國理務，數畢乃還耳。”紳亦務經濟之志，未欲棲止。衆仙復命若山送歸華山。後果入相，連秉旌鉞。去世之後，亦將復登仙品矣。」（〈史料 171〉）とあり、「蓬萊」においては、多数の「金樓玉堂」が並んでおり、道士唐若山の親友として、何人かの仙人は道士唐若山と挨拶するという話が記載されている。

『太平広記・女仙十三・楊敬真』には「倏然間已到蓬萊。其宮皆金銀，花木樓殿，皆非人間之製作。大仙伯居金闕玉堂中，侍衛甚嚴。」（〈史料 182〉）とあり、「蓬萊の宮殿はすべて金銀で建てられ、建築と植物すべては人間の物ではなく、宮殿の中に仙人が住んでおり、警備が厳しい」ということを示している。

また、「道教蓬萊」山に「穹隆」という名前の瓜を育てることが2回（〈史料 187〉と〈史料 189〉）言及されている。

『太平広記』においては、「蓬萊」を含む「道教蓬萊」山に関する名詞が4件みられる。その中で、2件（〈史料 163〉と〈史料 164〉）は「道教蓬萊」山を管理する官位「蓬萊都水監」であり、2件（〈史料 173〉と〈史料 182〉）は「道教蓬萊」山に建てられている建築（「蓬萊霞明観」、「蓬萊華院」）である。

また、『太平広記・神仙四十七・唐宪宗皇帝』（〈史料 176〉）に唐宪宗と道士玄解の話が記述されている。これは玄解は自ら縮小し、宮中の木刻海上三山芸術品に入るという物語である。

以上、道教出現時から唐宋時代までの期間における文献史料を検討した結果、「神話蓬萊」から「道教蓬萊」の概念が徐々に成立していく様子がうかがえた。しかしながら、唐詩などの文学作品においては、「神話蓬萊」と「道教蓬萊」とは明確には区別されず、混用・混在する状況がみられることが明らかとなった。また、道教仙人物語の影響を受け、「神話蓬萊」についても、新しい物語が創出されていることも指摘できる。

2. 4 「蓬莱」の概念の第4段階

「蓬莱」の概念の第4段階(第6時期)を多元期とする。「蓬莱」の多元期は元代の始め(1271年)から、清代の終わり(1912年)までである。

この時期において、文学における主流の形式は詞歌詞賦から小説へと移ってきている。明清時代の有名な小説において、「蓬莱」は多数引用されている。明清小説における「蓬莱」は既に「道教蓬莱」仙島としてとらえられているとみられるが、ストーリーを展開させるための新たな創作も行われている。明清小説に引用される「蓬莱」の特徴は、綺麗な自然風景を表現することにある。また、民間においては、「神話蓬莱」と「道教蓬莱」が混合し、「蓬莱」は道教から民間の神仙信仰の一部となった。「蓬莱」は発祥時の単一の仙島の名前からより複雑な概念になったといえる。本研究では、明清時代の小説から、「蓬莱」に関する記述を50件60か所を確認、抽出した。

以下、それぞれの記述について具体的に検討する。

明代(1368-1644)において、文学の形式は詞歌詞賦から小説になった。明清時代の有名な小説において、「蓬莱」は数多く引用されている。

『三国演义』(1350-1400)において、長江を描写する賦に「蓬莱」が借用され、長江について「雖大禹之智，不能測其淺深；離婁之明，焉能辨乎咫尺。於是馮夷息浪，屏翳收功；魚鱉遁跡，鳥獸潛踪。隔斷蓬萊之島，暗圍閶闔之宮。恍惚奔騰，如驟雨之將至；紛紜雜沓，若寒雲之欲同。」(〈史料192〉)と描写されており、比喻の方法で長江の仙境を表現している。

神話小説『封神演義』(1520-1560)においては、「蓬莱」が20件、28回言及されている。そのうち、21回は「道教蓬莱」仙山として使用されており、その中に、2件(〈史料198〉と〈史料207〉)は「道教蓬莱」仙山の様子も描写し、史料から見ると、「道教蓬莱」仙山に煙霧がまつわりながら立ち上り、松、竹、靈草などを植えている。鳳凰と鶴が飛んでいる。

他の7回の「蓬莱」の引用は仙境を描写する時、比喻の手法で仙境は「蓬莱」仙島の

ように綺麗な場所であることを表現している。

『西遊記』(1520－1580)においては16件、18回「蓬莱」が言及されている。そのうち、10回は「道教蓬莱」仙島として記述されており、『孫悟空三島求方 觀世音甘泉活樹』に「那行者看不盡仙景，徑入蓬莱。正然走處，見白雲洞外，松陰之下，有三個老兒圍碁，觀局者是壽星，對局者是福星、祿星。」(〈史料 218〉)とあるように、「蓬莱」仙島に壽星、福星と祿星3人の仙人が住んでいるということを描写されている。

他の8回の引用は、比喩の手法で仙境が「蓬莱」仙島のように綺麗な場所であることを表現している。

『金瓶梅』(1590－1610)においては、8件「蓬莱」が引用されている。6件は仙境を描写する時、比喩の手法で仙境は「蓬莱」仙島のように綺麗な場所であることを表現している。他の2件(〈史料 232〉と〈史料 232〉)は比喩の手法として使用されているが、仙境の表現ではない。〈史料 232〉においては、医者からもらった妙薬を「蓬莱」仙島からもらったような薬と表現している。〈史料 233〉においては、家に来た道士を「蓬莱」仙島からの仙人、とたとえている。

『儒林外史』(1750)においては、「蓬莱」を1回引用されている。これも仙境の比喩の表現である。『紅樓夢』(1780－1792)においては、4回「蓬莱」が引用されている。全ては仙境の比喩の表現である。

以上、明清時代の小説における蓬莱の用法について検討した結果、以下のことが明らかになった。

第1に、明清小説に関する「蓬莱」は既に「道教蓬莱」仙島として表現されていることである。『封神演義』と『西遊記』は歴史が神話になる物語である。歴史上の人物は道教の仙人のように描写され、仙人世界の構成も道教と一致している。従って、小説に言及された「蓬莱」も道教典籍に記述された「蓬莱」と一致している。しかし、ストーリーの展開上、作家自らが新たな要素を創作している。例えば、『西遊記』では「蓬莱」仙島に壽星、福星と祿星3人の仙人が住んでいるということが創作されている(〈史料 218〉)。

第2に、明清小説に引用される「蓬萊」は、綺麗な自然風景を表現していることである。『三國演義』が1件、『封神演義』が7件、『西遊記』が8件、『金瓶梅』が6件、『儒林外史』が1件、『紅樓夢』が4件に「蓬萊」を引用しているが、いずれも綺麗な自然風景の喩えとして蓬萊を用いている。ここれらの「蓬萊」は「道教蓬萊」仙島を意味するものではなく、仙境の意味として使用されていると考えられる。

小説は民間において盛行していたことから、明清時代において「蓬萊」は主に「道教蓬萊」として観念されていたといえよう。また、「蓬萊」は道教から民間の神仙信仰の一部分となっていた。「蓬萊」は単一の仙島の名称として用いられるのではなく、より複雑な概念に変化したといえるであろう。

第3節 「蓬萊島」の発祥と展開

以上のことを考察すると、「蓬萊」は「神話蓬萊」として戦国時代に記述が見られる。戦国時代の『列子・湯問』、『山海經』、『楚辭』などの文献にも「神話蓬萊」が言及されている。「神話蓬萊島」は古代中国における仙人が住む島であり、黒い冥海で囲まれている。「神話蓬萊島」の位置は「渤海之東」[列子・湯問（戦国・紀元前475年－紀元前221年）]である。

〈史料1〉 渤海之東不知幾億萬里，有大壑焉，実惟無底之谷，其下無底，名曰歸墟。八弦九野之水，天漢之流，莫不注之，而無増無減焉。其中有五山焉：一曰岱輿，二曰員嶠，三曰方壺，四曰瀛洲，五曰蓬萊。（『列子・湯問』）

「蓬萊島」の記録と姿は時代と共に変化されている。これについて、以下の3つの点について詳しく検討する。

3. 1 上古神話中の「神話蓬萊」と道教神山の「道教蓬萊」との比較

「蓬萊」仙島の様子は時代と共に変化している。それは「道教蓬萊」の出現と関係があると考えられる。

「蓬萊」は秦漢神仙思想の「神話蓬萊」から道教に引用される時、そのまま引用されたのではなく、変更された点もあった。具体的には以下の2点である。

第1に、上古神話中の神秘的な「神話蓬萊」から道教中の身近な「道教蓬萊」への変更である。

「神話蓬萊」仙島は神秘的、想像的なところである。『列子・湯問』に以下の記述がある。

〈史料1〉 其山高下周旋三萬里，其頂平處九千里。山之中間相去七萬里，以為鄰居焉。（『列子・湯問』）

すなわち、「神話蓬萊」仙島は外周3万里、上の平地は9000里、山と山の間は7万里である。『芸文類聚』（唐・紀元624年）によると、「神話蓬萊」仙島において、高くそびえる山と勢いの激しい流れがあり、巨大な鯨鯢、普通の姿ではない蛇、龍など不思議な動物と虫、靈亀、靈鳥が数多く島にいる（〈史料68〉）。また、「神話蓬萊」仙島は行くことができず、求めてはならないところである。『史記』『列仙伝』などの文献にもこのようなことが記載されている。

これに対して、「道教蓬萊」仙島は身近なものになった。『太平御覽』（北宋・紀元977年—紀元984年）と『太平広記』（北宋・紀元977年—紀元978年）の記載によると、仙人達と道士達日常的に「道教蓬萊」仙島を往復している。『太平広記』に仙人や道士達が「道教蓬萊」山へ行くという動作を11件回言及され、『太平御覽』によると、「道教蓬萊」仙島に「蓬萊太玄玉札」と「九流真書」という真符があり、これを持っていると誰でも海を渡れ、「道教蓬萊」仙島へ行くことができる（〈史料143〉）。

また、「道教蓬莱」山についての仙人達の住所と日常生活の描写をみると、「道教蓬莱」山の建築と動植物は人間より上品であるが、仙人は人間と同じように生活している。

『太平御覧』に「蓬莱山に九天真宮があり、それは大真仙人の住所である。」と記載されている(〈史料 141〉)。他に、『太平広記』において、「蓬莱院」、「蓬莱霞明观」、「蓬莱华院」などの「道教蓬莱」山に建ててられる建築も記載されている。これらの建築の名前から、道教の道観のような建築を感じられる。また、「道教蓬莱」山も人間世界のように、仙人の世界にも階層があり、「道教蓬莱」山を管理する官位も『全唐詩』に1件(「蓬莱都水監」)、『太平御覧』に2件(「蓬莱左仙公」と「蓬莱仙公」)、『太平広記』に2件(「蓬莱都水監」)言及されている。

第2に、上古神話中の特別な特徴が強い「神話蓬莱」仙島から、道教に関するすべての仙境がある特徴を持っている「道教蓬莱」仙島へと変更されたことである。

最初の記録『列子・湯問』から、「神話蓬莱」仙島は強い特徴を持っていた。『列子・湯問』によると、「神話蓬莱」仙島は：「上台と観などの建築は全て金玉で建てられ、動物は全て白色をしており、樹木の実が美味しく、その実を食べると、不老不死になれる。数多くの仙人がここ住んでいる。島は根がないため、常に波で上下に動いている…巨大な亀15匹が島を背負っている。」である(〈史料 1〉)。『史記』にもこれに似た記録があった(〈史料 14〉)。『芸文類聚』にも同じ記録があった(〈史料 89〉)。『史記』に「蓬莱山の芝城宮闕に龍の形の銅色の使者がいる。」と記載されている(〈史料 24〉)。

これらの記録から、「神話蓬莱」仙島は金玉製の建物があり、動物は全て白色をしており、食べたら不老不死になる果実があり、亀が島を背負っており、龍の形の銅色の使者がいるなどの特徴が分かる。また、他の上古神話中の仙境についての描写を見ると、「神話蓬莱」の特徴は他の上古神話中の仙境と同じではない。

一方、「道教蓬莱」仙島の描写について、『太平広記・神仙二十・楊通幽』に「道教蓬莱」で宮殿が建てられ、群仙が住んでおり、貴妃「上元女仙太真」は「得道」(仙人になること)の方法を伝授することが記述されている(〈史料 168〉)。『太平広記・神仙二十

七・唐若山』に「道教蓬萊」で多数の「金樓玉堂」が並んでおり、道士唐若山の親友として、何人かの仙人は道士唐若山と挨拶する話が記載されている（〈史料 171〉）。『太平広記・女仙十三・楊敬真』に「蓬萊の宮殿はすべて金銀で建てられ、建築と植物すべては人間の物ではなく、宮殿の中で、仙人が住んでおり、警備が厳しい」と記されている（〈史料 182〉）。これらの記述をみると、「道教蓬萊」の特徴を述べるより、「道教蓬萊」山に住んでいる仙人達の生活内容を伝えるものであったと考えられる。そして、他の道教仙境についての記述をみると、他の道教仙境の仙人達もほとんど同じ建築で同じように生活している。また、「道教蓬萊」山に成長されている動植物について、『太平広記』に「穹隆」という名前の瓜が育てられていることが記されている。『太平御覧・人事部一百三十八・酣醉』に「蓬萊山に玉のような赤い草があり、草の実を食べると酔って 300 年に寝ることになる」と記載されている（〈史料 130〉）。『太平御覧・薬部三・芝下』に「道教蓬萊」山に万年芝があること記載されている（〈史料 160〉）。『芸文類聚・卷四十二・楽部二・楽府』によると、兰桂、玄豹、翔鶴など道教仙境に常に出現される動植物が言及された（〈史料 75〉）。『封神演義』によると、「道教蓬萊」山に煙霧がまつわりながら立ち上り、松、竹、霊草などを植えており、鳳凰と鶴が飛んでいる（〈史料 198〉と〈史料 207〉）。

「道教蓬萊」山についての描写と他の道教仙境についての描写を比べると、記述の主たる内容は同一であり、特別の動植物が育てられているが、特徴が似ている他の動植物が他の道教仙境に成長されていることも多い。

「蓬萊」仙島の特徴が変更された理由は「蓬萊」仙島の歴史的な役割の変化であると考えられる。

上古神話を含める神仙思想は戦国末期（紀元前 300-紀元前 200 年頃）から発生し、秦漢時代（紀元前 221 年-紀元 8 年）に非常に盛んとなった。盛んになった理由として、のは秦の始皇帝と漢の漢武帝などの皇帝が求仙活動に関心が高いことから影響を受けたと指摘されている。皇帝の求仙要望を応えるため、方士達は神話中の仙境に具体的な姿を持

たせ、不思議で、神秘的な仙人の世界を創造し、皇帝を誤魔化し、利益を獲得した。皇帝の関心を引くため、仙境は具体的で、贅沢で、魅力的な描写となった。一方、存在していない場所であるため、方士達はこの嘘を皇帝に気づかせないために、海の中の探し難いところにあるという特徴をつけ、仙境は行くことができず、求めてはならないところであるということを強調し、仙境を見つけられなくても、方士達の責任ではないということを暗示したものと解釈できよう。具体的な事例として、最も有名なのは徐福の話である。『史記・列伝・淮南衡山列伝』の記載によると、秦の始皇帝は徐福を派遣し、仙境と不死不老薬を探させた。徐福は帰ると、「海の中の神仙に不死不老薬を頼んだが、神仙は始皇帝の礼が薄いため、薬を見せるが渡さない」という嘘をついた。そして、徐福は蓬莱仙島での見聞を始皇帝に報告し、神仙の要望も伝えた。始皇帝は喜んで、男女 3000 人、職人 100 人と沢山の物資を徐福に与え、もう一度東海に派遣させたが、徐福はこれらの人と物資を盗み、自分が王となり、二度と帰ってこなかった〈史料 24〉。漢代においても類似例がある（〈史料 38〉）。

道教が「神話蓬莱」仙島を神仙思想から引用し、神仙に関する仙境系統を充実させた。この引用は道教修行に役立たせることを目的としていたのであろう。そのため、道教に関する仙人達の生活と行動を重点に描写し、「神話蓬莱」仙島が持っていた道教修行にとって役割がない特徴をすべて消去したと思われる。また、道教の信奉者達を励ますため、仙人達と道士達日常的に「道教蓬莱」仙島を往復しているという記述を創作した。これらは修行すれば、一般の人間としても、誰でも海を渡れ、「道教蓬莱」仙島へ行くこと（仙人になること）ができるということを暗示する。このように道教の仙境が統一された背景には、崑崙と蓬莱の二つの神話システムが早期融合を遂げていたという近年の研究が指摘する状況があったものと考察される。

3. 2 「蓬莱」仙島の表現に関する用語の考察

『列子・湯問』（戦国時代）における初出の記録〈史料 1〉から、「蓬莱」は既に固有名

詞として使用されているが、表3に示しているように、時代の発展と共に「蓬」と他の文字と組み合わせた「蓬莱」の別称も多くなった。「蓬莱」の別称として、「蓬壺」の記録が最も多く、60件である。「蓬壺」最初の出典は東晋の『王子年・捨遺記』（東晋・紀元317年-紀元420年）である。『王子年・捨遺記』に「東海の中の三山、1つは方壺、即ち方丈であり、2つは蓬壺、即ち蓬莱であり、3つは瀛壺、即ち瀛州である。」（〈史料1009〉）と記載されている。

〈史料1009〉

三壺，則海中三山也。一曰方壺，則方丈也；二曰蓬壺，則蓬莱也；三曰瀛壺，則瀛洲也。形如壺器。此三山上廣、中狹、下方，皆如工製，猶華山之似削成。『王子年・捨遺記・高辛』

これは「神話蓬莱」の記録と考えられているが、道教の「壺」文化によると、「道教蓬莱」と関係があると思われる。唐代の『芸文類聚』（唐・紀元624年）が2件、『全唐詩』（清代紀元1705年）が48件で「蓬壺」が記載されている。全ての「蓬壺」は唐詩と賦などの文学作品の中で使用されており、意味は全て「蓬莱」仙島が、その中で、「神話蓬莱」であろうか、「道教蓬莱」であろうか、混在的、判断できない例も多い。その後、宋代の『太平広記』（宋・紀元977年-紀元978年）に4回言及され、全て「道教蓬莱」山を指している。その他、「蓬壺」は明代の小説『封神演義』（明・紀元1520年-紀元1560年）に1回、『西遊記』（明・紀元1520年-紀元1580年）に3回みられる。清代の字書『康熙字典』（清・紀元1710年-紀元1716年）にも「蓬壺」が2回言及され、全て東海仙島「蓬莱」を指している。1件は『王子年・捨遺記』からの引用であり、1件は『鮑昭・楽府』からの引用である。鮑昭（紀元414年-紀元466年）は中国南朝時代の文学家であり、楽府詩（中国古代民歌音楽）に「蓬壺」を引用している。このことから「蓬壺」は主に文学の作品において用いられており、「蓬莱」の意味を指すものであると指摘できる。

また、「蓬莱」の別称ではないが、「蓬莱」の意味を持つ単語も幾つかあった。

3. 3 「蓬莱」仙島に関連する用語に関する考察

初出の記録(戦国時代)から、「蓬莱」は古代中国で東の渤海の中にある仙人が住む山の一つであることが分かる。渤海の中においては、ほかの神山「方丈」と「瀛洲」も常に「蓬莱」と一緒にセットとして登場している。中国古典漢文『中国哲学書電子化計画』の中国古代文献を検索すると、東の渤海三神山に関する用語について、「瀛洲」は 87 件、「方丈」は 52 件、「瀛海」は 23 件、「方壺」は 15 件、「瀛壺」は 1 件、「壺梁」は 1 件が確認された。具体的な検索結果は 4、表 5 と表 6 に示している。

第 4 節 中国皇家園林における「蓬莱」の配置の展開と変遷

秦の始皇帝から、「蓬莱」島は歴代の皇家園林に応用されていたが、「蓬莱」の概念の変遷と共に、庭園に配置された「蓬莱」島はずべて同じとはいえない。この節では、中国皇家園林における「蓬莱」配置の展開と変遷について詳しく検討する。

4. 1 秦代

『史記』と『三輔黄図』によると、秦の始皇帝は都城咸陽に朝宮信宮と正寝北宮を建造し、咸陽の周囲東西 800 里、南北 400 里離宮別館を建造した。また、始皇帝 35 年に、朝宮は咸陽の信宮から渭南上林苑の阿房宮に変更された。主な庭園の位置は図 2(秦咸陽主な宮苑分布図)に示している。そのうち、「蘭池宮」について、「蓬莱」が配置されている記録がある。

地理史料の『三秦記』(漢代)と地志の『元和郡県図志』(唐 813 年)によると、蘭池宮における蘭池は東西 200 里(100km)、南北 20 里(10km)、池に「蓬莱」が配置されている。「蓬莱」についての記載は、『三秦記』においては「池において、土で蓬莱を作る」とある。また、『元和郡県図志』においては「池で蓬莱山を作る」とあり、両者には

多少の違いがある。石の鯨に関する記載は、両方とも「長さ 200 丈（666.67m）の石の鯨も彫刻されている」と記載された。中国最初の都城に関する記録書『歴代宅京記・関中一』（清代）引『秦記』（先秦）の記録によると、蘭池に蓬莱だけではなく、瀛洲も配置されている。『秦記』（先秦）の記録はほぼ事実であると認められているが、『秦記』は漢代末期に散佚されたと考えられているため、清代の文献に瀛州も配置されているという記録には不審な点もあるように思われる。

〈史料 1008〉 始皇引渭水為池，東西二百里，南北二十里，築土為蓬萊，刻石為鯨，長二百丈。（『三秦記』）

解釈：始皇帝は渭水の水から池を作く、池の規模は東西 200 里，南北 20 里であり、土で「蓬萊」を作成し、長さ 200 丈の石鯨も作った。

〈史料 1019〉 蘭池陂，即秦之蘭池也，在縣東二十五里。初，始皇引渭水為池，東西二百里，南北二十里，築為蓬萊山，刻石為鯨魚，長二百丈。（『元和郡縣圖志』）

解釈：蘭池陂（陂は池の意味である）、即ち秦の蘭池であり、県（咸陽県）の東 25 里に位置する。始皇帝は渭水の水から池を作成し、池の規模は東西 200 里，南北 20 里であり、「蓬萊山」を作成し、長さ 200 丈の石鯨も作った。

〈史料 1033〉 秦始皇都長安，引渭水為池，築為蓬，瀛，刻石為鯨，長二百丈，逢盜處也。（『歴代宅京記・関中一』引『秦記』）

解釈：秦の始皇帝は長安を都とし、渭水の水から池を作成し、「蓬」と「瀛」を作成し、長さ 200 丈の石鯨も作成し、盗人に逢うところである。

現存する古典漢文文献によると、秦の始皇帝は咸陽に何百もの離宮を建てており、天の星座、神仙に関する要素を庭園で表現したが、「蓬萊」に関する記録は離宮蘭池宮しかない。また、「蘭池宮」に関する「蓬萊」の記載から見ると、全てに「神話蓬萊」に関する

特徴である「石鯨」に言及している。このことから、秦の「蘭池宮」に配置された「蓬莱」は「神話蓬莱」と一致するといえる。

4. 2 漢代

西漢

秦代の都である咸陽は渭水の北岸に位置されているが、始皇帝は渭水の南岸に大規模な離宮を多数建造した。その後、西漢においては、図3(周秦漢唐都城変遷図)を示すように、都である長安は渭水の北岸の咸陽から渭水の南岸に移動された。漢武帝の時、武帝は秦代の始皇帝が建造した上林苑を修復・拡大し、昆明池を掘り、建章宮を建造し、渭水の南岸の離宮規模は秦代より大きくなった。西漢において、都城長安の中にある宮殿は未央宮、長樂宮、明光宮、桂宮、北宮であり、都城外の離宮と皇家園林は主に渭水の南岸に位置する上林苑と長安北西300里の甘泉山に位置する甘泉宮である。図4(西漢長安主な宮苑分布図)を示すように、上林苑は多数の宮殿と庭園を含め、規模が大きいであるが、計画は統一ではない。そのうち、「建章宮」について、「蓬莱」が配置されている記録がある。

建章宮は西漢太初元年(紀元前104年)に建造された離宮である(図5 西漢建章宮平面図)。『史記』(紀元前104年-紀元前90年)(〈史料12〉)によると、建章宮の北に泰液池を掘り、池に蓬莱、方丈、瀛洲、壺梁を配置している。この「壺梁」とは何であろうか。中国の古代漢文において、「壺梁」に関する記録現時点では2件確認されておらず、この単語についての解釈も少ない。1つの記録はこの『史記』の記録であり、「壺梁」は建章宮北の泰液池に蓬莱、方丈、瀛洲と一緒に配置されている。もう1つは後漢の班叔皮(紀元3年-紀元54年)が創作した『覽海賦』である。『覽海賦』において、班叔皮は「指日月以为表，索方瀛与壺梁」という文章で海を描写している。この「壺梁」は「方瀛」(方丈、瀛洲)と同じように、東海の神話と関係があると考えられる。

この2つの記述によると、「壺梁」は東海三神山と一緒に記述されており、両者には強い関係があるといえる。周維権は『中国古典園林史』(1990)において、「壺梁」を

「東海三島蓬萊、方丈、瀛洲のミニチュア景観」と解釈した。この解釈は「壺」から推測したのであろうが、この解釈については疑問がある。「壺梁」は3つの島の間の橋を意味すると推測する。それは、『説文』によると、「梁」は水の上の橋である¹⁴¹からである。

「壺」については、「蓬萊」、「瀛洲」、「方丈」に関して、「蓬壺」、「瀛壺」、「方壺」という別称もある。

『列子・湯問』（紀元前450年-紀元前375年）に東海仙島「方丈」は「方壺」が記載されている。

〈史料1〉渤海之东不知几亿万里，有大壑焉，实惟无底之谷，其下无底，名曰归墟。八弦九野之水，天汉之流，莫不注之，而无增无减焉。其中有五山焉：一曰岱輿，二曰员峤，三曰方壺，四曰瀛洲，五曰蓬萊。『列子・湯問』

この史料から、紀元前104年-紀元前90年に作成された『史記』においては、「壺梁」を「方壺」と記述していることがわかる。従って、「壺梁」の「壺」は「蓬壺」、「瀛壺」、「方壺」の略称と考え、「壺梁」は3つの島の間の橋を意味すると解釈すべきことが指摘できる。

以上のことから、『史記』によると、建章宮の泰液池には蓬萊、方丈、瀛洲3つの神山の全てが配置されており、ほかに「壺梁」などの要素があり、豊かな1つの大きな景観が構成されていたといえる。

地理書籍『三輔黄図』（南北朝時代(420年-589年)以前)と伝記『漢書・揚雄伝上』（紀元80年）にも、池においては蓬萊、瀛洲、方丈を配置していることが記述されている。『漢書・揚雄伝上』の中における「蓬萊」に関する記述は、文人揚雄（紀元前53年-紀元18年）の文学作品「羽獵賦并序」からのものであるが、文章の完成時期は建章宮とほぼ同じ時期ということから、文学作品においても、その記述は当時の実態をうかがう参考

になると考えられる。

〈史料 12〉於是作建章宮，度為千門萬戶。前殿度高未央，其東則鳳闕，高二十餘丈。其西則唐中，數十里虎圈。其北治大池，漸台高二十餘丈，名曰泰液池，中有蓬萊、方丈、瀛洲、壺梁，像海中神山龜魚之屬。其南有玉堂、璧門、大鳥之屬。乃立神明台、井幹樓，度五十餘丈，輦道相屬焉。（『史記・本記・孝武本紀』）

解釈：建章宮を作り、北に大きな池を掘り、泰液池と呼ばれ、20 丈(66.67m)を超える漸台(漸台、台の名前、漸、中国古代の川の名前、今の浙江)があり、池においては、蓬萊、方丈、瀛洲、壺梁が配置されており、海の中の神山、龜、魚などが象徴されている。

〈史料 1010〉武帝信仙道，取少君欒大妄誕之語，多起樓觀，故池中立三山，以像蓬萊，瀛洲，方丈（『三輔黃圖』）

解釈：武帝は仙人になることを信じており、方士少君、欒大などの人の言葉を聞き、多数の楼、觀などの建築を建て、池の中に三山を立て、蓬萊、瀛洲、方丈を象徴している。

〈史料 39〉武帝廣開上林，南至宜春、鼎胡、禦宿、昆吾，旁南山而西，至長楊、五柞，北繞黃山，瀕渭而東，週袤數百里。穿昆明象滇河，營建章、鳳闕、神明、駮娑，漸台、泰液像海水周流方丈、瀛洲、蓬萊。遊觀侈靡，窮妙極麗。雖頗割其三垂以贍齊民，然至羽獵田車戎馬器械儲侍禁御所營，尚泰奢麗誇詡，非堯、舜、成湯、文王三驅之意也。（『漢書・伝・揚雄伝上』）

解釈：武帝は上林苑を拡張し、昆明湖を掘り、雲南の昆明にある滇河を象徴し、建章宮、鳳闕、神明台、駮娑宮，漸台を營造した。泰液池は海を象徴し、水は方丈、瀛洲、蓬萊を周って流れる。

以上の史料から、建章宮の泰液池においては、蓬萊、方丈、瀛洲 3 つの島が配置され

ていたことが判明する。

昆明池は紀元前 119 年に掘り開かれた(図 6 上林苑昆明池平面図)。『史記・西南夷列伝』(〈史料 1006〉)によると、元狩元年(紀元前 122 年)、漢武帝が身毒国に使節を派遣し、布と竹の調達を試みたが、その使節は昆明にある滇国によって阻止された。このことから、武帝が滇国を討伐することとなった。滇国においては滇池があるため、武帝は上林苑で同じように昆明池を掘り、軍事の演習をしていた。その後、武帝は昆明池で神仙思想に関する要素を配置し、昆明池の役割が変わった。

『三輔故事』(清代)によると、昆明池の面積は 325 頃(21.67 km²)、池の中においては豫章台が配置されており、長さ 3 丈(10m)の石の鯨魚も彫刻されている。

〈史料 1044〉昆明池三百二十五頃，池中有豫章台及石鯨，刻石為鯨魚，長三丈。(『三輔故事』)

解釈：豫章は台の名前であり、「豫章」は伝説中の木の名前である。『神異經・東荒經』によると、「豫章」樹の高さは何千丈であり、切ると国の吉凶を占うことができる(『神異經・東荒經』：「東方荒外有豫章焉，此樹主九州。其高千丈，圍百尺，本上三百丈，本如有條枝，敷張如帳，上有玄狐黑猿。枝主一州南北並列，面向西南，有九力士操斧伐之，以佔九州吉凶。斫之復生，其州有福；創者州伯有病；積歲不復者，其州滅亡。」)。

また、『三輔黃図・池沼』によると、昆明池においては 2 つの石が配置されており、星の牽牛と織女を象徴していた。中国の神話によると、牽牛と織女は二人の神仙であり、天河の兩岸にいて、毎年一回天河の鵲橋で逢うことがある。昆明池におけるこの 2 つの石の配置から、昆明池は天河を象徴しているものといえる。

〈史料 1012〉『関輔古語』曰：昆明池中有二石人，立牽牛、織女於池之東西，以像

天河。(『三輔故事』)

解釈：昆明池においては2つの石があり、池の東岸においた石は牽牛星、池の西岸においた石は織女星を象徴し、昆明池は天河を象徴している。

昆明池に関する史料から、昆明池の配置は神話に関係があるが、「蓬莱」に関する記録はない。しかし、昆明池の中に配置された豫章台は神話の中の神木であり、「蓬莱」の特徴とする石の鯨魚も配置されていることから、この豫章台は「蓬莱」の意味も象徴している可能性もあると推測する。

後漢

後漢において、都城は長安から、東都洛陽に変遷された。都城内は南宮と北宮があり、北宮の後ろに大内御苑「濯龍苑」を配置されており、都城内の大内御苑は4つがあり、「濯龍苑」は規模最大である。ほかの3つは城東の「永安宮」、城西の「西園」、城南の南園「直里園」である。都城外の離宮は「畢圭灵昆苑」、「平楽苑」、「上林苑」、「広成苑」、「光風苑」、「鴻池」、「西苑」、「显陽苑」、「鴻徳苑」9つの記録がある。都城内と外の庭園について、「蓬莱」に関する記録はない。

ここで、秦代と漢代の皇家園林の「蓬莱」配置を総括すると、史料の記録がある庭園は秦代の「蘭池宮」と漢代の「建章宮」である。この2つの庭園を比較すると、以下の諸点が指摘できる。

第1に、秦代の「蘭池宮」と漢代の「建章宮」両方は宮城中の皇宮ではなく、郊外の離宮であること。

第2に、図1(秦咸陽主な宮苑分布図)、図2(周秦漢唐都城変遷図)と図3(西漢長安主な宮苑分布図)の庭園の位置を合わせて見ると、秦の離宮蘭池宮の位置は漢代の離宮建章宮と近い。漢の武帝は始皇帝の上林苑を修復・拡大し、昆明池を掘り、建章宮を建造する時、建章宮は蘭池宮の上に建造されたもの、あるいは、蘭池宮から影響を

受けた可能性が考えられる。

第3に、秦代の蘭池宮においては、「蓬萊」と蓬萊に関する特徴の「石鯨」が配置されており、西漢の建章宮は蓬萊、方丈、瀛洲3つの島を配置している。このことから、庭園における「蓬萊」の配置について、秦代は蓬萊山と蓬萊山の特徴を表現し、漢代は3つの島で仙境全体を表現することになったといえる。

4. 3 魏晉南北朝

魏晉南北朝時代とは、中国史において、後漢末期の黄巾の乱からはじまり、隋が中国を再び統一するまで、同時代の中国本土に複数の王朝が割拠していた時期を表す（184年-589年）。なお、長江中下流域（江南）における六朝時代がほぼこの時期と対応している¹⁴²。この時期には複数の王朝があるため、都の所在地も遷り変わってきた。主な都は鄴城、洛陽、建康3つの都市である。

鄴城

後漢末年、曹操は鄴城（今の河北臨漳縣西）を都として造営した。その後、鄴城は曹魏、後趙、冉魏、前燕、東魏、北齊6つの時代の都とされ、ほぼ400年の間、政治、経済、軍事、文化の中心となった。

鄴城の皇家園林について、曹魏時代から、曹操が御苑銅雀園を建造し、庭園に3つの台を作った（図7 曹魏時代鄴城平面図）。曹操が建造した庭園には神仙思想に関する要素が用いられていたが、「蓬萊」に関する記載はみられない。

その後、後趙時代、石虎（335-349）は旧城の南に新しい都を営造し、華林園を営造した。北齊時代、高緯が武平4年（573）に華林園を拡張し、仙都苑という名称に変更した（図8 北齊鄴城平面図）。『歴代宅京記卷十二 鄴下』によると、庭園においては5つの假山が配置されており、五嶽を象徴している。5つの假山の間に4つの池（東海、南海、西海、北海）が配置されており、四瀆を象徴している。

〈史料 1034〉苑中封土堆築為五座山，象徵五嶽。五岳之間，引來漳河之水分流四瀆為四海，東海，南海，西海，北海，彙為大池，又叫做大海。（『歴代宅京記 卷十二 鄴下』）

解釈：庭園の中に、5つの山を作り、五嶽を象徴し、5つの山の間に、漳河の水を引來し、4つの海を作り、四瀆を象徴した。東海，南海，西海，北海 4つの海を1つ大きな池を合流し、大きな池は大海と呼ばれる。

『礼記・王制』（秦漢時代）（〈史料 1007〉）によると、皇帝は自然の山と川を祭った、即ち五嶽と四瀆を祭ることである。四瀆は中国古代における4つの大河の総称であり、即ち“江、河、淮、濟”（長江、黄河、淮河、済水）である。四瀆についての最初の記録は『爾雅・釋水』（戦国-漢）であり、「江、河、淮、濟為四瀆。四瀆者，発源注海者也。（四瀆は長江、黄河、淮河、済河であり、海に合流する水である。）」（〈史料 1001〉）と記載されている。『史記』と『晋書』にも四瀆の記述がある（〈史料 1002〉と〈史料 1016〉）。

〈史料 1007〉天子祭天地，諸侯祭社稷，大夫祭五祀。天子祭天下名山大川：五嶽視三公，四瀆視諸侯。諸侯祭名山大川之在其地者。天子諸侯祭因國之在其地而無主後者。（『礼記・王制』）

解釈：天子は天地を祭り、諸侯は社稷を祭り、大夫は五祀を祭る。天子は天下の名山と大川を祭り、五嶽は三公として、四瀆は諸侯とする。

〈史料 1002〉東為江，北為濟，西為河，南為淮，四瀆已修，萬民乃有居。（『史记・殷本紀』）

解釈：長江は東方にあり、済河は北方にあり、黄河は西方にあり、淮河は南方にある。四瀆が設営されたので、萬民には居場所があった。

〈史料 1016〉東井南垣之東四星曰四瀆，江、河、淮、濟之精也。（『晋書・天文志』）

解釈：天の南の井宿における 4 つの星は四瀆であり、長江、黄河、淮河、済河のことである。

四瀆は中国古代における 4 つの大河の総称であるが、『歴代宅京記卷十二 鄴下』によると、庭園に 4 つの池(東海、南海、西海、北海)を掘り、4 つの池で 4 つの河を象徴した。しかし、この記述によると、この 4 つの池は最後に全て 1 つの池「大海」に合流している。地図が残されていないので、4 つの池は実は 4 つの河の形で配置されていたという可能性もある。

鄴城仙都苑に関する史料において、「蓬萊」に関する記録がないが、現代庭園研究においては、「一池三山」の観点から、鄴城仙都苑の「五岳四瀆」様式は「一池三山」の変形であると考えられている。この観点については、疑問もある。この点についての検討は後述する。

洛陽

洛陽(河南省西部に位置する)は後漢の都であり、『三国志・魏書・文帝紀』によると、黄初元年(220)、魏文帝曹丕が鄴城から洛陽を曹魏の都とし、司隸校尉部を設けた。泰始元年(265)、曹魏が西晋となった後も、都は未だ洛陽であった。『晋书地理志』に「及光武都洛阳，司隶所部与前汉不异。魏氏受禅，即都汉宫，晋仍居魏都」と記述され、東晋時代、洛陽は中京とされ、南朝の宋武帝、宋文帝、宋明帝まで続いてきたことがわかる。その後、太和 18 年(494)北魏の孝文帝が都を洛陽に変遷し、洛陽がふたたび都になった。後漢、曹魏、西晋、北魏の 330 年の間、洛陽は都として政治、経済、軍事、文化の中心となった。北周平齊以後、洛陽は東京として、六府を設置した。

洛陽の皇家園林について、曹魏時代青龍 3 年(235)に、魏明帝が後漢の旧園芳林園を拡張し、後に園名は華林園と変更された。

北魏文帝太和 17 年(493)からの大規模な都改造活動は中国古代都城史上、重要な画期にあたる。中国古代都城設計において、初めて「中軸線」を強調し、建築の空間序列を利

用し、封建の皇権を象徴していた。この「中軸線」の設計は後の中国封建時代の都城設計の基礎になった。この「中軸線」の設計の中に、皇宮御苑も含まれた。文帝は曹魏時代の華林園を拡張し、都城洛陽の御苑とした(図9 北魏洛陽平面図)。

華林園において、天淵池が掘り開かれた。『洛陽伽藍記・城内』(東魏・紀元547年)においては「華林園の中で大海、即ち魏天淵池があり、池に文帝九華台があり、高祖皇帝は台の上に清涼殿という建物を建て、世宗皇帝は大海に蓬萊山を配置され、山の上に仙人館が建てられ、仙人館に釣魚殿と虹霓閣がある。」と記述されている。そして、「蓬萊山」は「天淵池」の中に配置されていた。

〈史料 1014〉華林園中有大海，即魏天淵池，池中猶有文帝九華台。高祖於台上造清涼殿，世宗在海內作蓬萊山，山上有仙人館，上有釣台殿，並作虹蜺閣，乘虛來往。(『洛陽伽藍記・城内』)

解釈：華林園の中に、大海があり、即ち魏代の天淵池である。池においてはまだ文帝の九華台が残って、高祖は台の上に清涼殿を造り、世宗は大海の中に蓬萊山を造り、山の上に仙人館を建てて、上には釣台殿を造り、その間に虹蜺閣から來往する。

しかし、『水經注・卷十六・穀水』(北魏・紀元472年-紀元527年)によると、「蓬萊山」は「天淵池」に配置されておらず、「天淵池」の西における湖中の御坐石の前に配置されていた。

〈史料 1013〉谷水又東，枝分南入華林園，歷疏圃南，圃中有古玉井，井悉以珉玉为之，以緇石為口，工作精密，猶不變古，璨焉如新。又迤邐華宮南，歷景陽山北，山有都亭，堂上結方湖，湖中起御坐石也。御坐前建蓬萊山，曲池接筵，飛沼拂席，南面射侯，夾席武峙，背山堂上，則石路崎嶇，岩嶂峻險，云台风觀，纓帶

带阜，游观者升降阿阁，出入虹陞，望之状皃没鸾举矣。其中引水飞阜，倾澜瀑布，或枉渚声溜，潺潺不断，竹柏荫于层石，绣薄丛于泉侧，微飏暂拂，则芳溢于六空，寔为神居矣。其水東注天淵池，池中有魏文帝九华台，殿基悉是洛中故碑累之，今造钓台于其上。（『水經注·卷十六·穀水』）

解釈：谷水は東に流れ、南から华林園を入れ、圃の南に流れる。圃の中においては古い玉井があり、井は全部珉玉から造り、縑石はら口を造り、工作が精密であり、まだ新しく見える。また、瑶华宮の南、景阳山の北に流れ、山の中に、都亭が立て、堂の上に方湖が造り、湖の中に御坐石を配置した。御坐の前に蓬莱山を建てて、...水を東に天淵池を合流し、池においては魏文帝が造った九华台があり、殿基は全部洛中の古い碑から造って、今は上に釣台も造られている。

一般的に、庭園の池の水系は接続しているものと考えられることから、この「天淵池」の西における湖は「天淵池」の一部分であった可能性もある。史料から指摘できることは、洛陽の華林園の池には「蓬莱山」が配置されていたことである。

建康

建康(今の南京)は魏晋南北朝時代における中国南方政権の中心であった。最初は三国時代呉国の都であり、その後、東晋と南朝歴代も建康を都としていた。

建康の皇家園林について、東晋時代既に都市北方の天然湖であった玄武湖を利用し、御苑が建造された。その後、南朝宋元嘉 23 年(446)に玄武湖を拡張する際、『晋书』（唐代初期）によると、湖に「方丈」、「蓬莱」、「瀛洲」3つの島を配置する予定があったが、これは中止された。

〈史料 1015〉『何尚之传』：时造玄武湖，上欲于湖中立方丈、蓬莱、瀛洲三神山，尚之固谏，乃止。（『晋书』）

解釈：『何尚之传』：その時、玄武湖を造って、皇帝は湖の中に方丈、蓬莱、瀛

洲三つの神山を建てたいと考えが、尚之の諫めにより、皇帝はこの建造を中止した。

図 10(東晋、南朝建康平面図)に示すように、建康は南朝の齊代(479-502)に北方の洛陽と同じ「中軸線」の設定によって都城設計が行われた¹⁴³。玄武湖と南の華林苑は皇宮御苑と見られている。玄武湖南の華林苑には「蓬萊」に関する記載がないが、『六朝事蹟編類』(〈史料 1027〉)によると、建康の華林苑においては道教に関する要素が見られる。

ここで、魏晋南北朝の皇家園林における「蓬萊」配置を総括すると、史料の記録がある庭園は洛陽の華林園と建康の玄武湖である。この 2 つの庭園と秦漢の「蓬萊」配置を比較すると、以下の諸点が指摘できる。

第 1 に、「蓬萊」を配置する立地が変化した。秦漢時代の「蓬萊」は郊外の離宮に配置されていたが、魏晋南北朝の「蓬萊」は宮城内後ろの御苑に配置されている。この変化は魏晋南北朝時代における中国の北方と南方の両方にほぼ同時に新しい都城設計理念である「中軸線」を採用したことと関係があると考えられる。魏晋南北朝の 2 つの「蓬萊」配置(1 つは予定である)は「中軸線」計画中の一部分である。

第 2 に、洛陽の華林園は、秦代の蘭池宮と同様に「蓬萊」と蓬萊に関する特徴である仙境建築「仙人館」、「釣魚殿」と「虹霓閣」を配置しており、建康の玄武湖では漢代の建章宮のように、蓬萊、方丈、瀛洲 3 つの島を配置される計画であった。このことから、魏晋南北朝時代の「蓬萊」配置には固定の様式みられないということが指摘できる。

第 3 に、魏晋南北朝時代の「蓬萊」配置と秦漢時代を比べると、「蓬萊」配置の特徴が変化したことが明らかになった。秦漢時代の「蓬萊」配置に出現した「石鯨」がなくなったが、新しい特徴として「仙境建築」が出現した。

4. 4 隋代

紀元 581 年、北周の貴族楊堅が北周の静帝に代わり、隋の王朝を建立し、西漢の旧都

長安の南に新しい城を建造し、大興城の名前を付けた。大興城にある御苑は主に紀元 582 年に建造された大興宮後苑である。

隋の王朝は紀元 618 年の唐の王朝と交代し、数十年の短い間では大興城の建設も完成しておらず、唐代においても続けられた。大興城の建設は主に唐代に行われたため、庭園に関する内容は唐代の項において詳細に検討する。

隋煬帝大業元年（紀元 605 年）、隋煬帝が洛陽に遷都し、東京を造営した（『大業雜記』：「大業元年，敕有司於洛陽故王城東營建東京，以越國公楊素為營東京大監，安德公宇文愷為副。」）。隋代は短いので、隋代に関する文献も少ない。北宋の小説『海山記』によると、洛陽における庭園西苑は隋代に営造されたものであるという（図 11 唐洛陽平面図）。

北宋（960-1127 年）の『海山記』によると、西苑において、鄴城仙都苑と同じように、四海を象徴する池が掘られ、また、他の池いわゆる北海も掘られた。そして、北海の中には「蓬萊」、「方丈」、「瀛洲」を象徴する山も配置されている（〈史料 1022〉）。元代（1271 年-1368 年）の『河南志・卷三』においては西苑の北海に「蓬萊」、「方丈」、「瀛洲」を象徴する山も配置されていることも記述されており、山の上、「通真觀」、「集靈臺」、「總仙宮」など道教の特徴をもつ建築も建造されている（〈史料 1045〉）。

〈史料 1022〉乃闢地週二百里為西苑，役民力常百萬。苑內為十六院，聚巧石為山，鑿池為五湖四海。…又鑿北海，周環四十里。中有三山，效蓬萊、方丈、瀛洲，上皆臺榭迴廊。水深數丈，開溝通五湖四海。（『海山記』）

解釈：そして 200 里(100km)の周囲の土で西苑を造り、百万人の役を使えた。苑内に 16 の院を分けて、巧石から山を造り、池を掘り、五湖四海を象徴した。…

また、北海を掘り、周囲 40 里(20km)である。北海の中に、三の山があり、蓬萊、方丈、瀛洲を象徴し、上は台榭迴廊などの建築が建てた。水の深さは何丈であり、五湖四海に溝から連絡した。

〈史料 1045〉在苑内、造山為海周十餘里。水深數丈、中有方丈、蓬萊、瀛洲諸山、相去各三百步。山高水出百餘尺、上有通真觀、集靈臺、總仙宮分在諸山、別有浮橋水殿汎濫往來。（『河南志・卷三』）

解釈：苑の中に、山と海を造り、周囲は 10 何里である。水の深さは何丈であり、中には、方丈、蓬萊、瀛洲などの山があり、距離は各 300 歩である。山の高さは百餘尺、上は通真觀、集靈臺、總仙宮などの建築が建て、浮橋と水殿から連絡された。

ここで、隋代の皇家園林における「蓬萊」の配置のありようを総括すると、史料の記録がある庭園は洛陽の西苑である。この庭園に関する検討から、以下の諸点が指摘できる。

第 1 に、九洲池は洛陽の宮城内に配置されている御苑と違い、西苑は宮城外の西方に位置する。魏晉南北朝の「蓬萊」は宮城内の後ろの御苑（「中軸線」計画の一部分）に配置されていることと比べると、隋代の「蓬萊」配置は秦漢時代と同様、再び宮城外に戻った。しかし、秦漢時代の「蓬萊」は宮城外の離宮に配置されていたが、隋代は宮城外の御苑に配置されていることに相違点がある。

第 2 に、西苑では、1 つの庭園において、「五湖四海」と「一池三山」との 2 つの様式が同時に用いられていた。この「五湖四海」の配置は鄴城仙都苑の「五岳四瀆」様式から影響を受けたものと推測する。また、「五岳四瀆」、「五湖四海」と「一池三山」の様式に関する検討は後述する。

第 3 に、隋代の「蓬萊」配置は蓬萊、方丈、瀛洲 3 つの島を配置する様式であり、「蓬萊」の配置の特徴は、魏晉南北朝時代と同様に道教に関する「仙境建築」を山で建造するという点にあった。

4. 5 唐代

紀元 618 年、唐の王朝が隋に代わり、隋の都大興城の造営を継続し、長安の名前に戻

して、唐の都になった。宮城にはいくつかの宮殿と御苑が建造された(図 12 唐長安平面図)。

太極宮と禁苑

紀元 582 年に建造され始めた大興宮の造営を継続し、太極宮と更名された。大興宮の後苑も禁苑と更名された。

唐の同時代の史料『資治通鑑』によると、太極宮においては「東海池」、「北海池」、「南海池」を配置している(〈史料 1023〉)。記述がないが、この配置は鄴城仙都苑のように四瀆と関係がある可能性が考えられる(図 13 唐代太極宮平面図)。

〈史料 1023〉『閣本太極宮図』：太極宮中凡有三海池、東海池在玄武門內之東、近凝雲閣。北海池在玄武門內之西。又南有南海池、近咸池殿。(『資治通鑑・卷一百九十一』)

解釈：『閣本太極宮図』：太極宮の中に、三海池があり、東海池は玄武門内の東方にあり、凝雲閣と近い。北海池は玄武門内の西方にある。また、南方は南海池があり、咸池殿と近い。

太極宮の後ろに位置する禁苑は禁苑、西内苑、東内苑の 3 つの部分から構成され、範囲が広い。娯楽だけでなく、農業の産地としても利用されている(図 14 唐長安禁苑平面図)。

大明宮

唐太宗貞觀八年(634 年)から建造された大明宮は「東内」の別称もある。北宋の史書『唐会要』によると、龍朔二年に大明宮は蓬萊宮に更名された(〈史料 1024〉)。南宋の程大昌(1123—1195)による遊記『雍錄』によると、大明宮の更名の原因は殿後に蓬萊池があるからであった。

〈史料 1024〉貞觀八年十月。營永安宮。至九年正月。改名大明宮。以備太上皇清暑。公卿百僚。爭以私財助役。至龍朔二年。高宗染風痺。以宮內湫濕。乃修舊大明宮。改名蓬萊宮。北據高原。南望爽塏。六月七日。制蓬萊宮諸門殿亭等名。

(『唐会要・卷三十』)

解釈：貞觀八年十月、永安宮を營造した。至九年正月、大明宮に名称を変更された。太上皇清暑のための場所である。…龍朔二年において、高宗は風痺を引く、宮内湫濕のため、大明宮を修理し、蓬萊宮という名称に変更した。北の高原において、南方に向いて、涼しい。六月七日に、蓬萊宮諸門殿亭などの建築の名称も制定した。

〈史料 1025〉太宗初，於其地營永安宮以備太上皇清暑，…九年正月，改名大明宮。…龍朔二年，高宗染風痺，惡太極宮卑下，故新脩大明宮，改名蓬萊，取殿後蓬萊池為名也。(『雍錄』)

解釈：太宗初期、ここに永安宮を營造し、太上皇清暑のための場所である。…九年正月、大明宮の名称に変更した。…龍朔二年において、高宗は風痺を引く、宮内湫濕のため、大明宮を修理し、蓬萊宮という名称に変更した。この名前は宮殿の後ろの蓬萊池の名前からである。

清代(1692)に完成された『讀史方輿紀要』の『卷五十三・陝西二』に「蓬萊池在唐東內禁苑中。憲宗嘗畋遊於此。『志』雲：池在蓬萊殿北，亦名太液池。池中有蓬萊山，自蓬萊池西出玄武門，入重元門，即苑中也。重元蓋苑之南門，對宮門玄武門。又有魚藻池，亦在東苑內。唐穆宗時，嘗發神策軍濬之。其相近者又有凝碧池。(蓬萊池は唐の東內禁苑の中にある。憲宗は常にここに遊んできた。『志』から：池は蓬萊殿の北にあり、太液池の別称もある。池の中には蓬萊山がある。蓬萊池の西から玄武門を出て、重元門に入って、苑中に到着した。重元は苑の南門、宮門玄武門と對した。また、東苑内において、魚藻池もある。隣に、凝碧池もある。)」(〈史料 1036〉)と記述されている。この記述によると、

大明宮において、蓬萊殿北における太液池（蓬萊池）に蓬萊山が配置されている（図 15 唐代長安大明宮平面復元図）。

考古学的発掘調査の成果によると、太液池の規模は東西 484m、南北 310m である。中央やや北よりには蓬萊島と考えられる島が残存している¹⁴⁴。以上のことから、大明宮の太液池には蓬萊山が配置されていたといえる（図 16 太液池の発掘調査位置図）。

しかし、南宋（1127-1279 年）の『唐詩紀事』の巻 39 に記載され、李紳が創作した『憶春日太液池東亭侯對』においては、「宮鶯曉報瑞煙開，三島靈禽拂水回」（〈史料 1026〉）という詩句がある。この詩歌によると、太液池には三つの島があった。即ち、「蓬萊」、「方丈」、「瀛洲」の三つの島である。史料においては、大明宮は「蓬萊池」の存在によって「蓬萊宮」の別称があるとされており、「蓬萊山」のみが強調されたと考えることもできるが、発掘調査によって大明宮の蓬萊池に一つの島が配置されていたことが確認されたものの、他の 2 つの島が配置されていたとする根拠はない。したがって、李紳は「蓬萊山」である 1 つの島を見て、ここに「蓬萊」、「方丈」、「瀛洲」という三つの島を重ねあわせて表現した可能性もあると推測する。

また、大明宮の蓬萊池に配置された「蓬萊山」の特徴について、史書にはの記述が少ないが、『全唐詩』に記載された唐詩から、多少の推測ができる。

〈史料 274〉是時君王在鎬京，五云垂暉耀紫清。仗出金宮隨日轉，天回玉輦繞花行。始向蓬萊看舞鶴，還過菑石聽新鶯。（『全唐詩・卷一百六十六・侍從宜春苑奉詔賦龍池柳色初青聽新鶯百轉歌』李白著）

〈史料 282〉共愛朝來何處雪，蓬萊宮裡拂松枝。（『全唐詩・卷一百八十七・雪夜下朝，呈省中一絕』韋應物著）

〈史料 301〉蓬萊宮闕對南山，承露金莖霄漢間。西望瑤池降王母，東來紫氣滿函關。雲移雉尾開宮扇，日繞龍鱗識聖顏。（『全唐詩・卷二百三十・秋興八首』杜甫著）

〈史料 318〉内官先向蓬萊殿，金合開香瀉禦爐。（『全唐詩・卷二百六十七・宮詞五首』顧況著）

〈史料 413〉帝燭熒煌下九天，蓬萊宮曉玉爐煙。（『全唐詩・卷七百四十六・朝元引四首』陳陶著）

以上の「蓬萊宮」に関する唐詩から見ると、「蓬萊宮」においては、鶴を飼って松を育て、また、「承露」、「金莖」、「紫氣」、「香」、「禦爐」、「爐煙」など道教の「修仙」と関係がある要素に言及されている。

興慶宮

唐開元2年(714)に拡張された興慶宮は「南内」の別称もある。興慶宮について、「蓬萊」と関係がある記載がないが、「瀛洲」に関する配置「瀛洲門」がある(図17 唐長安興慶宮平面想像図)。

〈史料 1018〉興慶宮在皇城之東南，東距外郭城東垣。宮之西曰興慶門，其内曰興慶殿；次南曰金明門，門内之北曰大同門，其内曰大同殿。宮之南曰通陽門，北入曰明光門，其内曰龍堂。通陽之西曰花萼樓，東曰明義門，其内曰長慶殿。宮之北曰躍龍門，其内左曰芳苑門，右曰麗苑門。南走龍池，曰瀛洲門，門内曰南薰殿。瀛洲之左曰仙雲門，北曰新射殿。（『唐六典・卷七・尚書工部』）

解釈：興慶宮は皇城の東南方にあり、東は外郭城の東垣である。宮の西は興慶門であり、その内は興慶殿である。次の南方は金明門であり、門内の北は大同門であり、その内は大同殿である。宮の南は通陽門であり、北は明光門であり、その内は龍堂である。通陽門の西は花萼樓であり、東は明義門であり、その内は長慶殿である。宮の北は躍龍門であり、その内において、左は芳苑門であり、右は麗苑門である。南は龍池があり、前は瀛洲門であり、門の内は南薰殿である。瀛洲門の左は仙雲門であり、北は新射殿である。

都城長安の宮殿御苑以外に、「華清宮」、「九成宮」、「曲江」も唐代を代表する皇家離宮御苑である(図 18 唐長安近郊平面図)。華清宮、九成宮、曲江について、「蓬萊」に関する記述はないが、華清宮については、「瀛洲」と「方丈」に関する記述がある。

華清宮(今の西安市の東 35km の臨潼県に位置する)は、秦の始皇帝の温泉離宮として始まり、唐の天寶 6 年(747)に拡張され、華清宮と命名された(図 19 唐華清宮宮廷区平面想像図)。華清宮には数多の温泉が配置されており、史料によると、華清宮における長い温泉池の中に、瑟瑟(碧色の宝石)と沉香(薬材)を使用して作った山が配置されており、「瀛洲」と「方丈」を象徴していた。

〈史料 1021〉『明皇雜錄』曰：上於華清宮置長湯數十間屋。又為銀鏤漆船，至於楫棹皆飾以珠玉。又於湯中壘瑟瑟及沉香為山，以狀瀛洲、方丈。(『太平御覽・珍寶部七・瑟瑟』)

解釈：『明皇雜錄』によると、皇帝は華清宮に長湯数十間屋を建てて、銀鏤漆船も配置し、楫棹もすべて珠玉から飾る。また、お湯の中にも瑟瑟と沉香から山を造り、瀛洲、方丈を象徴した。

〈史料 1020〉又嘗於宮中置長湯屋數十間。環迴甃以文石。為銀鏤漆船及白香木船，置於其中。至於楫櫓，皆飾以珠玉。又於湯中，壘瑟瑟及沉香為山，以狀瀛洲方丈。(『太平廣記・奢侈一・玄宗』)

解釈：また、宮殿の中に、長湯何十間屋を建てて、文石から回した。銀鏤漆船と白香木船をお湯の中に配置し、楫棹もすべて珠玉から飾る。また、お湯の中にも瑟瑟と沉香から山を造り、瀛洲、方丈を象徴した。

ここで、唐代の皇家園林における「蓬萊」の配置を総括すると、史料の記録がある庭園は大明宮のみである。唐代の皇家園林に関する検討と前代の比較から、以下の諸点が指摘

できる。

第1に、唐代の「蓬莱」の配置は、皇家園林(宮殿)にとって、最も主要な要素となったことである。都城における最も重要な宮殿であった大明宮は、別称を「蓬莱宮」といい、「蓬莱殿」があり、その後ろに「蓬莱池」があり、「蓬莱池」の中には、「蓬莱山」が配置されている。このように、「蓬莱」という要素が歴史上、初めて強調された。

第2に、唐代の「蓬莱」の配置は、また魏晋南北朝の時期と同様に、宮城内後ろの御苑に戻されたことである。(唐代において、隋代に造営された洛陽の西苑は神都苑と更名されていたが、庭園の姿はまだ隋代のままであった。そのため、この庭園は唐代に含まず、隋代の庭園として取扱うこととする。)

第3に、大明宮において「蓬莱」が重視されたことに対して、その他の庭園では「蓬莱」に関する記述は一切みられないことである。庭園に東海仙境、或いは神仙思想を表現するにあたっては、「瀛洲」と「方丈」という要素が用いられた。

第4に、唐代において、大明宮の「蓬莱」の配置の特徴について、史書での記述が少ないことである。しかし、唐詩から見ると、「蓬莱山」に「仙境建築」を建てるという記述がほとんどないが、道教に関する特徴がみられる。このことから、唐代の「蓬莱」の配置の特徴は、前代と同様に道教と関係があるといえる。

4. 6 宋代

北宋

紀元960年、宋太祖趙匡胤が宋朝を立て、後周の旧都開封を東京と更名し、宋の都に定めた。北宋の前期においては、都城の御苑は主に後周の旧苑であり、宋徽宗が政和3年(1113)と政和7年(1117)に2つの大内御苑「延福宮」と「艮岳」を造営した(図20 北宋東京平面図)。延福宮について、「蓬莱」に関する記述がないが、「艮岳」についての記述がある。

宋徽宗は道教を信じ、道士の「都で山を作ったならば、皇帝は子孫が多くなる」という

意見から、東京において杭州の鳳凰山を象徴する万歳山を築いた。完成した後に、万歳山を艮岳という名前に変更した(図 21 艮岳平面想像図)。『宋史』によると、庭園の池、曲江において、「蓬壺」という名前の建築が建造されている。「其北又因瑤華宮火，取其地作大池，名曰曲江，池中有堂曰蓬壺，東盡封丘門而止。(その北に大池を造り、曲江の名称を付け、池の中に蓬壺という堂があり、東は封丘門までであった)」『宋史・誌第三十八・地理一』(〈史料 1029〉)。記載がないが、この池の中の建築「蓬壺」は池の中における島の上に建造されたものと考え。この島の上に「蓬萊」の別称「蓬壺」を命名する建築があることから、この島は「蓬萊」島を象徴しているものとみられる。

〈史料 1029〉

萬歲山艮嶽。政和七年，始於上清寶箓宮之東作萬歲山。山週十餘里，其最高一峰九十步，上有亭曰介，分東、西二嶺，直接南山。山之東有萼綠華堂，有書館、八仙館、紫石岩、棲真嶺、覽秀軒、龍吟堂。山之南則壽山兩峰並峙，有雁池、嘯嘯亭，北直絳霄樓。山之西有藥寮，有西莊，有巢雲亭，有白龍汧、濯龍峽，蟠秀、練光、跨雲亭，羅漢岩。又西有萬松嶺，半嶺有樓曰倚翠，上下設兩關，關下有平地，鑿大方沼，中作兩洲：東為蘆渚，亭曰浮陽。西為梅渚，亭曰雪浪。西流為鳳池，東出為雁池，中分二館，東曰流碧，西曰環山，有閣曰巢鳳，堂曰三秀，東池後有揮雪廳。復由嶺道上至介亭，亭左復有亭曰極目，曰蕭森，右復有亭曰麗雲、半山。北俯景龍江，引江之上流注山間。西行為漱瓊軒，又行石間為煉丹、凝觀、圓山亭，下視江際，見高陽酒肆及清澌閣。北岸有勝筠庵、躡雲台、蕭閒館、飛岑亭。支流別為山莊，為回溪。又於南山之外為小山，橫亘二里，曰芙蓉城，窮極巧妙。而景龍江外，則諸館舍尤精。其北又因瑤華宮火，取其地作大池，名曰曲江，池中有堂曰蓬壺，東盡封丘門而止。其西則自天波門橋引水直西，殆半里，江乃折南，又折北。折南者過閭闔門，為複道，通茂德帝姬宅。折北者四五里，屬之龍德宮。宣和四年，徽宗自為『艮嶽記』，以為山在國之艮，故名艮嶽。蔡條謂初名鳳

鳳山，後神降，其詩有“艮嶽排空霄”，因改名艮嶽。宣和六年，詔以金芝產於艮嶽之萬壽峰，又改名壽岳。蔡條謂南山成，又改名壽岳。岳之正門名曰陽華，故亦號陽華宮。自政和訖靖康，積累十餘年，四方花竹奇石，悉聚於斯，樓台亭館，雖略如前所記，而月增日益，殆不可以數計。宣和五年，朱勉於太湖取石，高廣數丈，載以大舟，挽以千夫，鑿河斷橋，毀堰拆閘，數月乃至，賜號“昭功敷慶神運石”，是年，初得燕地故也。勉緣此授節度使。大抵群閹興築不肯已。徽宗晚歲，患苑囿之眾，國力不能支，數有厭惡語，由是得稍止。及金人再至，圍城日久，欽宗命取山禽水鳥十餘萬。盡投之汴河，聽其所之。拆屋為新，鑿石為炮，伐竹為篋籬。又取大鹿數百千頭殺之，以啖衛士云。（『宋史・誌第三十八・地理一』）

東京の周囲には、「琼林苑」、「玉津園」、「宜春苑」、「含芳園」という4つの行宮後苑も建造された。神仙思想に関する要素は多少認められるが、「蓬萊」に関する記載はみられない。

南宋

紀元1127年、靖康の変以後、宋徽宗の第九子康王趙構は、南京應天府（今河南商丘）において新しい宋の王朝を立てた。いわゆる南宋である。紀元1138年、宋高宗が臨安府（今浙江杭州）を行在とし、遷都された。

臨安の大内御苑は「後苑」であり、西湖をめぐって行宮御苑も数多く建造された。臨安の皇家庭園に関する史料を分析すると、庭園は主に自然風景の鑑賞を目的とし、庭園の配置も自然風であり、「蓬萊」に関する記述はみられない(図22 南宋臨安宮苑分部図)。

ここで、宋代の皇家園林における「蓬萊」の配置を総括すると、史料の記録がある庭園は艮岳のみである。宋代の皇家園林に関する検討と前代の比較から、以下の諸点が指摘できる。

第1に、宋代の「蓬萊」の配置は、魏晉南北朝と唐代と同様に宮城内後ろの御苑に位

置したことである。宮城の近郊においては4つの行宮後苑があったが、「蓬萊」に関する記録はない。

第2に、宋代の「蓬萊」の配置は、「蓬萊山」あるいは「蓬萊島」ではなく、池中の島の上で建造された建築の名前として初めて使用されたことである。

第3に、史料においては、「蓬萊」の配置に関する特徴の記述はみられないが、庭園「艮岳」の特徴を見ると、庭園は道教に関係する要素を数多く使用していた。このことから、「蓬萊」の配置においても道教に関係がある要素として使用されていた可能性がある。

第4に、宋代において、「艮岳」における「蓬萊」の配置は、「蓬萊」のみを使用し、「方丈」と「瀛洲」に関する記述はみられない。

4. 7 元代

紀元1271年、モンゴル族が金と宋を追いやって、元王朝を立て、金の都であった「中都」を「大都」（今北京）と更名し、都に定めた。金代の章宗完顔璟（1168年－1208年）は、都「中都」に多数の庭園を建造した。元世祖は至元4年（1267）に金の「大都」の大寧宮を中心とし、新しい都「大都」を計画した。

金の大寧宮は大定19年（1179）から建造された行宮御苑である。『元宮詞百章箋注』において、「瓊華島非遼代遺物，乃金朝章宗時築，為另一才華冠六宮之李宸妃之梳妝台。乃賢『金台集南城詠古』詩凡十六首，其一為妝台，注云：「李妃所築，在今昭明觀後。妃嘗與章宗露坐，上曰：『二人土上坐。』妃應聲曰：『一月日邊明。』」柯九思『丹邱生稿』亦有同様記載。」という記事がある。これによると、大寧宮において、金の章宗完顔璟が妻李宸妃のために大きな湖を掘り、湖の中に「瓊華島」という島を配置し、島の上に広寒殿を建造した（図23 金中都と大寧宮の位置図）。

その後、元世祖は至元4年（1267）に新しい都城「大都」（今の北京）を造営する時、瓊華島と周りの湖と一緒に「太液池」の名前をつけ、御苑の主体として計画した（図24 元代大都平面図）。元代の史料『南村輟耕錄・卷二十一』（〈史料1028〉）によると、太液池

は宮室の西において、周囲何里(1里=500m)であり、芙蓉(ハス)を育てている。

太液池においては、万寿山、圓抵、犀山台という三つの島が配置されている。万寿山島は金の瓊華島である。名前について変更の原因は瓊華島を修復する時、宋代の皇家園林であった艮岳の石を用いたことにあると推測される。艮岳の別称である「万歳山」に因んだのであろう。(図 26 元代万歳山示意图)。

万寿山において、蟠龍が彫刻されている石の蛇口がある。廣寒殿、小玉殿などの建築の中にも、龍に関する装飾がみられる。

〈史料 1028〉廣寒殿在山頂，七間，東西一百二十尺，深六十二尺，高五十尺，重阿藻井，文石?地，四面瑣窗，板密其裏，遍綴金紅雲，而蟠龍矯蹇於丹楹之上。中有小玉殿，內設金嵌玉龍禦榻，左右列從臣坐床。『南村輟耕錄・卷二十一』

また、万寿山における建築の名前は、ほとんど仙境に関係がある。例えば、「廣寒殿」、「金露亭」、「玉虹亭」、「瀛洲亭」などである。他に、万寿山の建物小玉殿においては黒玉酒甕(黒玉製のお酒用かめ)が置かれてたことも記述されている。この酒甕は玉の白い筋に従って、魚と他の動物が波に浮かぶ姿が彫刻されている(写真 1 と 2)。

〈史料 1028〉小玉殿前架黒玉酒甕一。玉有白章，隨其形刻為魚獸出沒於波濤之狀。『南村輟耕錄・卷二十一』

圓抵は万寿山の南に位置し、万寿山と白玉石橋で繋がっている。主な建築は儀天殿である。東においては木橋があり、東の宮城に通ずる。西は船用の木吊橋が配置されている。皇帝は東の木橋を使用し、官員は西に船で移動する。

犀山台は圓抵の南に位置され、圓抵と繋がっていない。犀山台に木芍薬(牡丹)を植え

ている(図 25 元大都太液池示意图)。

〈史料 1028〉至元四年正月，城京師，以為天下本。右擁太行，左注滄海，撫中原，正南面，枕居庸，奠朔方，峙萬歲山。浚太液池，派玉泉，通金水，縈畿帶甸，負山引河，壯哉帝居！擇此天府。城方六十里，里二百四十步，分十一門。

...

萬壽山在大內西北太液池之陽，金人名瓊花島，中統三年修膳之，至元八年賜今名，其山皆疊玲瓏石為之，峰巒隱映，松檜隆鬱，秀若天成。引金水河至其後，轉機運糾，汲水至山頂，出石龍口，注方池，伏流至仁智殿後。有石刻蟠龍，昂首噴水仰出，然後由東西流入於太液池。山前有白玉石橋，長二百餘尺。直儀天殿後，橋之北有玲瓏石，擁木門五，門皆為石色。內有隙地，對立日月石。西有石棋枰，又有石坐床。左右皆有登山之徑，縈紆萬石中，洞府出入，宛轉相迷。至一殿一亭，各擅一景之妙。山之東有石橋，長七十六尺，闊四十一尺半。為石渠以載金水，而流於山後以汲於山頂也。

又東，為靈圃，奇獸珍禽在焉。廣寒殿在山頂，七間，東西一百二十尺，深六十二尺，高五十尺，重阿藻井，文石鋪地，四面瑣窗，板密其裏，遍綴金紅雲，而蟠龍矯蹇於丹楹之上。中有小玉殿，內設金嵌玉龍禦榻，左右列從臣坐床。前架黑玉酒甕一。玉有白章，隨其形刻為魚獸出沒於波濤之狀。其大可貯酒三十餘石。又有玉假山一峰，玉響鐵一懸。殿之後有小石筍二，內出石龍首，以?巽所引金水。西北有廟堂一間。仁智殿在山之半，三間，高三十尺。金露亭在廣寒殿東，其製圓，九柱，高二十四尺，尖頂上置琉璃珠，亭後有銅幡竿。玉虹亭在廣寒殿西，制度同金露。方亭在荷葉殿後，高三十尺，重屋八面，重屋無梯，自金露亭前復道登焉，又曰線珠亭。瀛洲亭在溫石浴室後，制度同方。玉虹亭前仍有登重屋復道，亦曰線珠亭。荷葉殿在方前，仁智西北，三間高三十尺，方頂，中置琉璃珠。溫石浴室在瀛洲前、仁智西北，三間，高二十三尺，方頂，中置塗金寶瓶。圓亭，又曰胭粉

亭。在荷葉稍西，蓋后妃添妝之所也，八面。介福殿在仁智東差北，三間，東西四十一尺，高二十五尺。延和殿在仁智西北，制度如介福。馬_ノ重室在介福前，三間。牧人之室在延和前，三間。庖室在焉馬前。東浴室更衣殿在山東平地，三間，兩夾。

太液池在大內西，週回若干裡，植芙蓉。

儀天殿在池中圓抵上，當萬壽山，十一楹，高三十五尺，圍七十尺，重簷，圓蓋頂，圓台址，_ヲ以文石，藉以花茵，中設禦榻，週闢瑣窗。東西門各一間，西北廁堂一間，台西向，列_ヲ磚龕，以居宿衛之士。東為木橋，長一百廿尺，闊廿二尺通大內之夾垣。西為木吊橋，長四百七十尺，闊如東橋。中闕之，立柱，架梁於二舟，以當其空。至車駕行幸上都，留守官則移舟斷橋，以禁往來。是橋通興聖宮前之夾垣。後有白玉石橋，乃萬壽山之道也。

犀山台在儀天殿前水中，上植木芍藥。隆福宮西御苑在隆福宮西，先后妃多居焉。香殿在石假山上，三間，兩夾二間，柱廊三間，龜頭屋三間，丹楹瑣窗，間金藻繪，玉石礎，琉璃瓦。殿後有石台，山後闢紅門，門外有侍女之室二所，皆南向並列。又後直紅門，並立紅門三。三門之外，有太子幹耳朵荷葉殿二。在香殿左右，各三間，圓殿在山前。圓頂上置塗金寶珠，重簷。後有流杯池，池東西流水圓亭二，圓殿有廡以連之。歇山殿在圓殿前，五間，柱廊二，各三間。東西亭二，在歇山後左右，十字脊。東西水心亭在歇山殿池中，直東西亭之南，九柱重簷。亭之後各有侍女房三所，所為三間。東房西向，西房東向。前闢紅門三，門內立石以屏內外，外築四垣以周之。池引金水注焉。棕毛殿在假山東偏，三間，後_ヲ頂殿三間。前啟紅門，立垣以區分之。儀鸞局在三紅門外西南隅，正屋三間，東西屋三間，前開一門。（『南村輟耕錄・卷二十一』）

元代詩人張昱の『輦下曲』に「直教海子望蓬萊，青雀傳言日几回。為造龍舟載天姆，院家催造画图來。」とある（〈史料 1030〉）。詩の中の「海子」は「太液池」であり、「蓬

菜」は「万寿山」を指すと考えられる。

明の洪武年間(1368-1398)、蕭洵の『故宮遺录』においては、「『海（湖）广可五六里，驾飞桥于海中，西渡半起瀛洲圆殿，绕为石城，散作洲岛。』故海中央为仪天殿，如海中岛也。」と記述されている（〈史料 1030〉）。この記録から、蕭洵は太液池中の「圓抵」島を「瀛洲」として捉えていたことが分かる。

元代は紀元 1271 年にはじまり、紀元 1368 年に終わる。短い百年の間に、庭園の建造はほとんど進んでおらず、御苑は太液池のみである。史料によると、庭園には 3 つの島が配置されていたが、それらが「蓬莱」、「瀛洲」、「方丈」の 3 つであったのかどうかは判然としない。「瀛洲亭」、「方亭」という名前の建築があることから、「蓬莱」島に「瀛洲」、「方丈」を配置しているとも考えられる。また、「圓抵」島は「瀛洲」であるという解釈もあるため、3 つの島が「蓬莱」、「瀛洲」、「方丈」を象徴していたとも考えられる。しかし、記事からいずれであるかを判断することは困難である。また、「蓬莱」という要素もただ元代の詩に出現され、庭園が確実に「蓬莱」と関係があったかどうかについても、確実な記録はみられない。

4. 8 明代

紀元 1368 年、明が元に代わって、建国され、南京が都となった。永楽 19 年、都は南京から元の都であった「大都」に戻り、「北京」と更名された。明代の都、北京において、都の周囲の離宮の造営活動は弱く、庭園は主に都城内の 6 つの大内御苑につくられた。6 つの大内御苑とは、宮城内の「御花園」と「建福宮花園」、宮城外皇城内の「万歳山」、「西苑」、「兔苑」と「東苑」である。そのうち、「西苑」は元代の「太液池」を継承したものである(図 27 明北京西苑と大内御苑の平面図)。

明代初期、太液池の配置はほとんど変化していない。その後、周維權(1990)によると、明天順年間(1457-1464)に太液池の空間構成には 3 つの変化があった¹⁴⁵。第 1 に「圓抵」島について、元代では東に木橋があり、東の宮城に通じていた。西は船用の木吊橋が配置

されていた。皇帝は東の木橋を使用し、官員は西に船で移動する。これが明代になり、「圓抵」島と池の東岸の間が土で埋められて、「圓抵」島は半島になり、元の土の高台は煉瓦の高台に改造され、島の名前も「圓抵」から「團城」に変更され、西の船用の木吊橋は石橋と改造されて「玉河橋」と命名された。この変化については、朱有燾（1379-1439）の『元宮詞百章箋注』にも記載されている。

〈史料 1031〉元之儀天殿，即明清之承光殿，惟今非在水中央，東與陸連耳。團城當即『輟耕錄』之圓坻，為元宮苑惟一可辨認之地，元代大宴時盛酒湏之大玉甕今貯於此。（『元宮詞百章箋注』）

解釈：元代の儀天殿はいわゆる明清時期の承光殿である。今は水中央の島ではなくて、東に陸と繋がっている。團城は『輟耕錄』に記載された圓坻であり、それは元代の宮苑にとって唯一のところであった。元代の大宴の時に用いられた、盛酒湏用の大玉甕は今もここにある。

史料によると、「圓抵」は半島になり、名前は「團城」に変更され、「儀天殿」は「承光殿」に変更され、万寿山の建物小玉殿に置かれた黒玉酒甕は「團城」に移動されたことを分かった。今の北京北海公園の「團城」には黒玉甕が1点を展示されている。この黒玉甕は記録のように小玉殿の黒玉酒甕が移動されたものであろう。第2に、太液池は南に拡大され、3つの部分に分けられたことである。「玉河橋」の北は「北海」と呼ばれ、「玉河橋」の南は「中海」と呼ばれ、新しく拡大された南の部分は「南海」と呼ばれる。「南海」に大きな島「南台」が建造されている。第3に、太液池の池岸を回って、庭園建築が次々と増築され、天然の景観から人工の景観に変わっていったことである。清代初期、钱謙益（1582-1664）は明代278年間の詩歌を編集して、『列朝詩集』を完成した。『列朝詩集』によると、明代に「万寿山」は「瓊華島」の名前に戻り、廣寒殿の前には元代に「瀛洲」、「方壺」、「玉虹」、「金露」という4つの亭が配置されていたが、既

に遺跡になった。『南村輟耕録・卷二十一』によると、廣寒殿の前に、「瀛洲」、「方亭」、「玉虹」、「金露」という4つの亭が配置されていたことから、「方亭」は「方壺」亭の意味もある可能性が高い。また、瓊華島に関する詩歌において、「蓬海」が出現することから、瓊華島は「蓬莱島」と関係があると考えられる。

〈史料 1032〉『瓊華島』：碧池懸帝闕，瓊島入仙家。洞口流雲氣，星濤湧日華。
桃源虛歲月，蓬海復塵沙。繡殿遊天女，燕支映夕霞。（在太液池中，從承光殿北度梁至島，有岩洞窈窕，磴道紆折，皆疊石為之。其巔古殿結構，翔起週回，綺牖玉檻，重階而上，榜曰廣寒之殿。相傳遼太后梳妝台，今欄檻殘壞，內金刻雲物猶彌覆棖棟間。下布以文石，傍一榻，亦前朝物。殿前舊有四亭，曰瀛洲、方壺、玉虹、金露，今惟遺址耳。詳見『輟耕録』。）（『列朝詩集・丙集第十六』）

解釈：『瓊華島』の詩文は：「碧池懸帝闕，瓊島入仙家。洞口流雲氣，星濤湧日華。桃源虛歲月，蓬海復塵沙。繡殿遊天女，燕支映夕霞。」（太液池において、承光殿北から梁至島に渡し、岩洞窈窕がある。これら全ては、石を積みあげて造られた。山の巔にある古い宮殿は、廣寒の殿である。ここは遼代の太后の梳妝台であるという伝説もあり、今は遺跡になった。殿前においては、昔四つの亭があり、瀛洲、方壺、玉虹、金露と呼ばれ、今は遺跡のみである。詳しくは『輟耕録』を見よ。）

他の5つの大内御苑に関する文献を検索すると、神仙思想に関する要素はみられるものの、「蓬莱」に関する記述はない。

以上、明代の皇家園林について検討した結果、「蓬莱」に関係がある庭園は「西苑」、つまり元代の「太液池」のみであった。史書における新しい記録はほとんどないが、明代の詩歌において、瓊華島を「蓬莱」島と解釈する詩歌がみられた。

4. 9 清代

紀元 1644 年、満族が中国の北の関所を攻めて、明を倒して、清の王朝を立てた。北京はほとんど破壊されることなく、清の都として用いられ続けた。6 つの大内御苑についてみると、「東苑」は寺院となり、「西苑」は改造された。他の 4 つの庭園はほぼ明代の姿を保っていた。

「西苑」についてみると、清代順治 8 年(1651)に、瓊華島において、南の建築は仏寺「永安寺」に改建され、山の上の廣寒殿の位置にはチベットラマ教の塔「小白塔」が建造された(図 29 清代乾隆時期の瓊華島平面図)。康熙年間、太液池北海の北岸と中海の東岸の建築は仏寺に改造され、南海の南台は拡張され、「瀛台」という名前に変更されて¹⁴⁶、康熙皇帝が日常事務を処理する宮殿となった。乾隆帝の時期にも西苑において改修が行われた(図 28 清代乾隆時期の北京西苑平面図)。

都城の大内御苑以外では、清代初期から北京の郊外において多数の離宮御苑が建造された。乾隆中期において、北京の北西郊外では、既に大規模な皇家園林群が形成されていた(図 30 康熙時期北京北西郊外の離宮御苑分部図)。何十所もの離宮御苑の中において、「蓬萊」と関係がある庭園は以下の 4 つである。

靜明園

靜明園のものは金代の芙蓉殿(玉泉行宮)であり、明正徳年間(1506-1521)には上下華嚴寺が建造された。清康熙 19 年(1680)澄心園と命名された行宮となった。康熙 31 年(1692)に靜明園と改称された。乾隆 18 年(1753)年に拡張され、その後、乾隆 57 年(1792)年にも大規模な拡張が行われ、「靜明園十六景」が整えられて盛期を迎えた。

周維權(1990)によると、靜明園の玉泉湖において、3 つの島が配置されており、それは「一池三山」の様式の応用である¹⁴⁷。しかしながら、このことを証する確実な史料は少なく、疑義がある。

避暑山莊

清代康熙 42 年(1703)年から、康熙皇帝は承德に皇家園林「避暑山莊」を建造した。

蕭爽(清)の『永憲錄』に(成立年代不明)「夾水為堤。逶迤曲折。徑分三枝。列大小洲三。形若芝英。若云煙。復若如意。有二橋通舟楫。」(〈史料 1046〉)と記されている。この記録によると、承德「避暑山莊」湖区の池と池の中における「如意洲」、「月色江聲」と「環碧」は、3つの島が土手で繋がっており、「灵芝」或いは「如意」(写真3と4)の姿のように見える姿はまさしく「如意洲」の名称と一致する。この姿は、今なお残されている。歴史の文献が見られないが、現代の中国庭園の「一池三山」についての研究の中に、承德「避暑山莊」湖区の池と池の中における「如意洲」、「月色江聲」と「環碧」3つの島は「一池三山」の様式と考えられている。

圓明園

清代康熙 48 年(1709)から建造された圓明園は雍正 3 年(1725)に拡張されており、福海(別称は東湖)に「一池三山」を配置している(図 31 清代雍正時期の圓明園平面図)。『欽定日下舊聞考・卷八十二』(清乾隆 53 年(1788))に「蓬島瑤臺在福海中央、門三楹、南嚮正殿七楹、殿前東為暢襟樓、西為神洲三島。東偏為隨安室、西偏為日日平安報好音。由蓬島瑤臺東南度橋為東島、有亭為瀛海仙山。西北度橋為北島、正宇三楹。蓬島瑤臺, 四十景之一、舊名蓬萊洲、後易今名。額為皇上御書、門額曰鏡中閣、與暢襟樓、隨安室額皆御書。神洲三島日日平安報好音、瀛海仙山諸額皆世宗御書。」(〈史料 1043〉)と記載されている。史料によると、「蓬島瑤台」は福海の中央に配置され、正殿の前、東に建築「暢襟樓」が建っており、西においては神洲三島があり、神洲三島には、東に建築「隨安室」、西に建築「日日平安報好音」方亭が建っている。「蓬島瑤台」の南東方向は東島と橋で繋がっており、東島に「瀛海仙山」亭が建ち、北西方向に北島と橋で繋がり、北島には「接秀山房」が建てられている(図 32 清代乾隆時期の圓明園平面図)。

中华民国 6 年(1917)に徐珂が編集した『清稗類鈔・宮苑類』に「蓬島瑤台, 在福海中央, 殿前東為暢襟樓, 西為神洲二島, 東偏為隨安室, 西偏為日月平安報好音。東南渡橋為東島, 有亭為瀛海仙山, 西北度橋為北島、接秀山房。」(〈史料 1048〉)と記述されている。内容はほぼ『欽定日下舊聞考・卷八十二』と同じであるが、「蓬島瑤台」西の神洲三

島は『清稗類鈔・宮苑類』に神洲二島として記述されている。『欽定日下舊聞考・卷八十二』においては神洲三島について、東と西両方面の建築があることが示され、神洲二島のほうがより信じられるが、『欽定日下舊聞考・卷八十二』は乾隆年間の史料であり、その時圓明園まだ使用されていることから考えると、『欽定日下舊聞考・卷八十二』の記述がより正確である可能性が高いと推測する(図 33 と 34 圓明園蓬島瑤臺)。

『御製詩集・初集卷二十二』においては「福海中作大小三島，仿李思訓畫意，爲仙山樓閣之狀。」(〈史料 1038〉)と、福海中に唐代画家李思訓(651-716、或い 648-713)の絵画(図 35 李思訓の山水樓閣)の雰囲気を模倣し、3つの島が作られていることが記されている。また、『欽定日下舊聞考・卷八十』の「蓬萊洲今為蓬島瑤臺、乃乾隆九年、皇上恭依避暑山莊三十六景四字題額之例更。」(〈史料 1042〉)によると、「蓬島瑤台」の元の名前は「蓬萊洲」であり、乾隆九年(1744)に乾隆皇帝が避暑山莊における三十六景は四字題額であるという例に基づいて変更されたことが記されている。

清漪園・頤和園

清代乾隆 15 年(1751)に建造された清漪園は、光緒 14 年(1888)に頤和園に更名された。

『清史稿・志九十三』に「乾隆十五年，甕山命名萬壽山，建行宮，改金海為昆明湖。明年更名清漪園。光緒十四年更名頤和園。」(〈史料 1047〉)と記されており、「乾隆 15 年に甕山は萬壽山と更名され、行宮を建て、金海に昆明湖と更名され、乾隆 16 年に清漪園と更名され、光緒 14 年に頤和園と更名された。」ということを示している(図 36 清漪園平面図、図 37 頤和園平面図)。

承徳の「避暑山莊」と同じように、清代の史料には見られないが、周維權(1990)によると、頤和園(清漪園)の昆明湖における「南湖島」、「藻鑒堂」と「治鏡閣」の3つの島は「一池三山」の様式と考えられている¹⁴⁸。周維權はこの推論の根拠は論じていないが、頤和園(清漪園)の「治鏡閣」に残された石製の扁額「蓬島煙霞」が唯一の根拠となると見られる。また、「南湖島」の平面図によると、「南湖島」は満月のような円形であり、島に建造された建築「望蟾閣」、「月波楼」などの名前からも、「南湖島」のテーマは月

宮仙境であると考えられることから、東海仙島との関係は薄いものと考えられる。

頤和園(清漪園)の昆明湖における島の意匠に関する記述は少ないが、昆明湖は杭州の西湖と関係すると、記述が幾つかみられる(図 38 清漪園と杭州西湖の比較)。『大清一統志・一』には「清漪園在圓明園西萬壽山、乾隆十六年開濬西湖」(〈史料 1035〉)と記され、『欽定日下舊聞考・卷八』に「清漪園在圓明園西萬壽山之麓、本名甕山、乾隆十六年恭逢聖母皇太后六旬萬壽、建大報恩延壽寺於山之陽、命名萬壽山並疏導玉泉諸派匯於西湖、易名曰昆明湖...昆明湖東西為長堤、西堤之外為西湖、其西南為養水湖。」(〈史料 1041〉)と記されている。これらの史料から、乾隆十六年(1752)に清漪園で西湖が掘られ、或いは、乾隆十六年に清漪園で西湖を修造して、「昆明湖」の名称に変更され、昆明湖の東西方に長堤が配置されて、西堤の外は西湖、西南は養水湖となったことがわかる。前述した〈史料 1047〉の内容を纏め整理したところ、金海が昆明湖と更名される間に「西湖」の名前が短期間使用されたこと、或いは昆明湖の一部が「西湖」と呼ばれたものと推測される。昆明湖は「西湖」の名前と関係があるだけでなく、意匠にも関係がある。昆明湖と西湖の平面図を比べると、昆明湖の構成は西湖とほぼ同じであり、西湖を模したものであることが明らかである。さらに、昆明湖の西堤には杭州西湖の蘇堤六橋が模倣され、同じく 6 つの橋が架けられた。

杭州西湖も「一池三山」の山水要素を配置したものと考えられている。また、乾隆皇帝は杭州に 6 回行っており、西湖の修造にも影響を与えた。昆明湖の「一池三山」様式は杭州西湖の「一池三山」を模倣したものである、或いは杭州西湖の「一池三山」様式は昆明湖の「一池三山」様式から影響を受けたものであると考えられるが、史料の分析結果によれば、昆明湖の「一池三山」様式と杭州西湖の両者には関係がみられないと結論される。

一般的に、杭州西湖の「一池三山」の三山は「三潭印月島」、「湖心亭」と「阮公墩」である。「三潭印月島」は明代萬曆 35 年(1607)に旧寺院水心保寧寺から修造されたものであり(〈史料 1039〉)、「湖心亭」は萬曆 4 年(1576)に再建され(〈史料 1040〉)、「阮公墩」についての記載は少ないが、一般的に、「阮公墩」が清代嘉慶 9 年(1804)に浙江

巡撫阮元によって杭州西湖をさらう時、沖積した土砂によって形成した島であると考えられている。このことから、今の杭州西湖の「一池三山」は建造当初からの意匠ではなく、三つの島があることから、現代の「一池三山」の観点から解釈されたものであると考える。清代乾隆 15 年(1751)に清漪園が建造されはじめた時には、杭州西湖にはまだ「一池三山」の様式が存在していなかったため、昆明湖の「一池三山」様式は杭州西湖の「一池三山」を模倣したものではないといえる。

以上の検討から、頤和園(清漪園)の昆明湖における「南湖島」、「藻鑒堂」と「治鏡閣」3つの島は「一池三山」の様式である、とする推論は根拠不十分である。

頤和園(清漪園)について、「蓬萊」に関する記述は少なく、唯一、関係と考えられるものは「治鏡閣」に残された石製の扁額「蓬島煙霞」であるが、この扁額の由来にも疑問がある。

ここで、清代の皇家園林における「蓬萊」の配置を総括すると、史料の記録がある庭園は圓明園のみである。清代の皇家園林に関する検討と前代の比較から、以下の諸点が指摘できる。

第 1 に、清代の「蓬萊」の配置は漢代と同様に、都城の郊外の離宮に配置されていること。

第 2 に、清代の「蓬萊」の配置は 3 つの島の様式であること。

第 3 に、清代の「蓬萊」の配置の様式について、3 つの島は全て橋で繋がっており、一体になったこと。

第 4 に、「蓬萊」の配置に関する記述から、「蓬萊」の特徴は強調されておらず、前代の「蓬萊」の配置と比べると、道教の特徴が弱いこと。

4. 10 本節の結論

以上、秦代から清代までの中国皇家園林における「蓬萊」の配置を検討した。これらをまとめると、以下の諸点が指摘できる。

第1に、「蓬萊」島は皇家園林における山水配置の1つの要素として、秦代から清代までの2000年の間に、主要な庭園構成要素として強調される時期（秦漢時代、隋唐時代など）があり、強調されていない時期（魏晉南北朝時代、宋代など）もあるが、「蓬萊」島は当初から近現代まで始終用いられており、皇家園林にとって非常に重要な構成要素の1つといえる。

第2に、「一池三山」の様式が盛期を迎えたとされる清代の蓬萊に関する記録は少ないこと。

第3に、皇家園林における「蓬萊」の配置は前の時代の庭園における「蓬萊」様式を伝承することより、「蓬萊」の概念の変化から影響を受けて、変化していることから、現代庭園研究で提出された「一池三山」様式の観点が成立した過程が指定できる。「一池三山」は歴史上ある時期（例えば秦の始皇帝の時期）に庭園で使用された山水配置様式であるが、これが後世の皇家園林のすべてにみられるわけではない。

「蓬萊」島を配置している中国皇家園林の数は多いが、すべての皇家園林に「蓬萊」島が配置されているわけではなく、配置されていない皇家園林も数多い。また、秦代から、「蓬萊」島が配置された庭園すべてに他の2つの島も配置されているともいえない。秦代の蘭池宮は「蓬萊」島のみ或いは「蓬萊」島と「瀛州」島の2島のみを配置していた。北魏・紀元224年に建造された洛陽華林園には「蓬萊」島のみが配置されていた。唐太宗貞観八年（634年）から建造された大明宮の太液池には「蓬萊」島のみが配置されているという史料があり、他の2つの島に関する記録はみられない。宋徽宗政和七年（1117）に営造された艮岳には「蓬萊」島のみが配置されていた。元世祖が至元4年（1267）に建造を始めた太液池において、万寿山は「蓬萊」島と記述されており、万寿山一つに「蓬萊」、「方丈」、「瀛洲」3つの島に関する要素がまとめて表現されていた。なお、「圓抵」島は「瀛洲」であるとも考えられるが、「犀山台」には3つの島に関する記述が見られなかった。清代康熙42年（1703）年から建造された承德「避暑山莊」と清代乾隆15年（1751）に建造された清漪園は「一池三山」の例とされているが、「蓬萊」、「方丈」、

「瀛洲」に関する史料は見られなかった。

以上の考察から、秦代から清代までの皇家園林において、「蓬莱」、「方丈」、「瀛洲」という3つの島に関する求仙思想は始終表現されてきているが、秦代から形成された固定の様式という「一池三山」様式が存在しているとはいえない。各時代の庭園においては、固定の様式を継承することより、当代の「蓬莱」という概念から造形化されたものであると解釈できる。

第4に、中国皇家園林の池に東海仙山を配置する時、島の数にかかわらず、最も優先されるものは「蓬莱」である。島が一つあれば、必ず蓬莱島であることから、東海には三つの仙島があるとされるが、中国皇家園林にとって、三つの中に最も重要なのは、「蓬莱」であるといえる。

第5節 本章の結論

史料と現存する遺構の分析、ならびに「蓬莱」の概念の時期区分とを対照すると、以下の諸点が指摘できる。

第1に、秦代から清代までの2000年の間に、皇家園林における「蓬莱」の配置は、「一池三山」という様式が踏襲されつづけたものではなく、「蓬莱」の概念の変化から影響を受け、変化してきている。

例えば、秦漢時代、庭園の「蓬莱」の配置は秦漢時代の「蓬莱」の概念と一致し、「神話蓬莱」の特徴である鯨魚などを庭園に造形化し表現している。漢代末期以後、「蓬莱」の概念には変化が生じ、鯨魚を造形する、などといった特徴が弱まってきた。漢代末期以後の庭園においては、「蓬莱」の配置に関する記述に鯨魚などの記述はみられない。

第2に、「蓬莱」の配置の変化は、「蓬莱」の概念が変化する時期とは、時差があり、ほぼ100年程度遅れて表面化している。

秦漢時代は、「蓬莱」概念の盛期であるが、同じ時期に皇家園林においてもこの時期の「蓬莱」概念を反映し、同じ形態・特徴が造形化されている。東漢末期（126年－144

年)に道教が出現すると、「蓬莱」の概念は神話神山から道教仙山に移っていった。北魏・紀元 224 年に建造された皇家園林の洛陽華林園直ちにこの変化が見られる。「華林園の中で大海、即ち魏天淵池があり、池に文帝九華台があり、高祖皇帝は台の上に清涼殿という建物を建て、世宗皇帝は大海に蓬萊山を配置し、山の上に仙人館が建てられ、仙人館に釣魚殿と虹霓閣がある。」(〈史料 475〉)から、「神話蓬莱」の特徴である鯨魚などはここでは見られず、「道教蓬莱」における「仙人が住んでいる建築がある」という特徴が見えるのである。その後、宋代まで、時代を経ても、「蓬莱」の概念は大きく変化していないことから、皇家園林に配置された「蓬莱」島にも大きな変化はみられない。また、東漢末期から隋代(581)の前までにおいては、「蓬莱」の概念については、道教における他の仙山と混在する時期であるため、皇家園林においては、紀元 571 年(北齊)に拡張される鄴城仙都苑は前の時期の庭園における「蓬莱」を伝承するのではなく、五嶽四瀆を表現している。紀元 582 年(隋)に建造された長安大興宮後苑には四瀆が表現されており、隋煬帝大業元年(紀元 605 年)に掘られた九洲池は東海の洲を表現していた。隋唐時代においては、「蓬莱」に関する文学作品が盛んであり、庭園にも「蓬莱」要素が重視され、「大明宮」には「蓬莱宮」との別称があった。明清時代、「蓬莱」の概念は複雑になっており、庭園の「蓬莱」島も複雑な要素と特徴が混ざっており、「蓬莱」は道教における多様な神仙の要素を全て包含する存在になった。元世祖は至元 4 年(1267)に建造を始めた太液池において、万寿山に蟠龍の要素を配置しており、建築においては、月などの仙境も表現している。万寿山は「蓬莱」島を象徴するという考えがあるが、「瀛洲」、「方壺」という名前の亭も建てられていたのである。現代の庭園研究において、清代康熙 42 年(1703)年から建造された承德「避暑山莊」には、「蓬莱」島を含む「一池三山」が配置されているが、島の名称である「如意洲」とこの周辺の設計から考えると、この庭園の意匠は「灵芝」或いは「如意」である。同じく、清代乾隆 15 年(1751)に建造された清漪園も「一池三山」が配置されていると考えられているが、「南湖島」のテーマは月宮仙境であると考えられる。

第3に、皇家園林における「蓬萊」の配置は、以前の時期の「蓬萊」の様式を踏襲するものではなく、「蓬萊」の概念の変化の影響を強受け、変化してきているものであるといえる。したがって、中国皇家園林は統一した固定の様式が続いてきたのではなく、当代の文化の変化に対応して、各時代の特徴を表現するものであるといえる。

第4に、「蓬萊」の配置の変化は「蓬萊」の概念の変化との時差がみられる。それは、中国皇家園林は当時の文化、文学、社会などの環境と密接な関係があり、時代の変化に応じて徐々に変容してきたものであるといえる。

第3章 日本庭園における「蓬莱」の配置の考察

第1節 本章における研究の背景、目的及び方法

第2章においては、中国庭園において、「蓬莱」の配置は以前の時期の「蓬莱」の様式を踏襲するものではなく、同時代の「蓬莱」の概念を造形化するものであることを論じた。それでは、日本の庭園においては、「蓬莱」の配置はどのように行われてきたのだろうか。ある時期に成立した「蓬莱」の様式を伝承するのか、あるいは、同時代の中国庭園の「蓬莱」の配置の影響を受けたのだろうか。本章においては、日本の飛鳥時代、奈良時代と平安時代の宮廷における庭園を対象とし、「蓬莱」の配置に関係がある要素の展開について検討する。

「蓬莱」は中国の神仙思想にとって重要な要素のひとつであり、第二章の検討によると、中国の「蓬莱」は、「神話蓬莱」から「道教蓬莱」を派生し、その後さらに多元な概念となったとみられる。日本の「蓬莱」は、中国から伝来された時から、ほぼ「道教蓬莱」の形として捉えられてきたが、「神話蓬莱」の特徴も伝来しており、日本の神話にも引用されている。つまり、日本における「蓬莱」は、中国よりも混乱した概念であったと考えられる。

先行研究によると、飛鳥時代の庭園において、既に中国道教神仙思想に関する要素が造形化され、表現されているが、これらの要素は「蓬莱」という島に関係があるか、いなかについては十分な検証が行われていない。

したがって、本章の第2節においては、斉明天皇時代に建造された石造物について、文献の考察から、両槻宮に関する石造物と須弥山石を対象として検討し、「蓬莱」との関係性について検討する。

本章の第3節においては、奈良時代の東院庭園において、池にある中島と北岸に配置された築山石組2点を対象として、文献を分析し、これらの要素と「蓬莱」との関係性について検討する。

本章の第4節においては、まず平安時代の貴族庭園様式である寝殿造庭園の意匠につ

いて考察し、その後、平安時代の宮廷庭園に関して嵯峨朝の漢詩を分析し、特に池中の中島が「蓬莱」島を表現したものであるのか、について検討する。

このように、本章においては、日本の飛鳥時代、奈良時代と平安時代の宮廷庭園において、「蓬莱」と関係性があると考えられる要素について検討し、日本庭園はどのように中国から道教神仙思想の影響を受けたかについて明らかにする。

第2節 飛鳥時代庭園の石造物と「蓬莱」との関係

593年、推古天皇は豊浦宮において即位した。以来、持統天皇が694年に藤原宮に都を遷すまでの100年間、歴代の天皇は宮を飛鳥の地に集中的に営み、飛鳥は政治・文化の中心地となった。この時代、中国では隋（581-618）・唐（618-907）による強力な古代帝国が形成された時期にあたり、東アジアは中国を中心に展開することになる。

推古天皇は603年、豊浦宮の近くに小墾田宮を造営して遷り、628年に崩御するまでの25年間、ここに皇居を営んだ。豊浦宮・小墾田宮では、聖徳太子が蘇我馬子と妥協をはかりつつ国政を執った。推古天皇の後をついだ舒明天皇は飛鳥岡の傍らに飛鳥岡本宮（630-636）を営んだが、後に、田中宮・厩坂宮と転々と宮を遷し、百濟宮も営造する。この間、小墾田宮も維持されていたとみられる。

舒明天皇が没すると、皇后の皇極天皇が皇位をつぎ（642）、飛鳥板蓋宮を営む。この時、唐での長い留学生活を終えて帰国した南淵請安や高向玄理らが中国の文物・制度をもたらし、中大兄皇子（のちの天智天皇）や中臣鎌足を中心にして、国家の制度を中国風に整える気運が高まってきた。

大化の政変後、皇極の弟、孝徳天皇が即位する。都は飛鳥を離れ、難波で新政が施かれる。しかし、それも10年とはつづかず、孝徳の在位中から、皇太子中大兄皇子・皇極上皇らは飛鳥に戻って、飛鳥河辺行宮に移り住む。孝徳没後、皇極が重祚して斉明天皇（655-661）となり、そのもとで、皇太子中大兄皇子が国政を執り仕切る。斉明天皇は、はじめ板蓋宮に入ったが、宮が焼失したため、暫し飛鳥川原宮に移ったのち、岡本宮の旧

地に後飛鳥岡本宮を造営する。

667 年、都を近江大津宮（-672）に遷し、翌年ここで中大兄は天智天皇として即位する。その後、672 年、大海人皇子が岡本宮の南に飛鳥浄御原宮を造営し、天武天皇として即位する。飛鳥では近江遷都の間も旧宮の後岡本宮は維持されていた。天武天皇が国家統治の拠点として、本格的な都城の建設を目指し、飛鳥の西北方、藤井ヶ原の地に、藤原宮と藤原京の建設を決定した。しかし、天武天皇の死（686）、続いて皇太子草壁皇子の死（689）によって、造営事業は頓挫せざるを得ず、本格的な工事は持統天皇によって推し進められ、694 年に遷都が実現した（図 39 飛鳥諸宮変遷図）。

飛鳥時代の短い 100 年間、『日本書記』によって、斉明（皇極）天皇は道教、とりわけ鬼道系信仰の持ち主であったと考えられている。また、斉明天皇は建築にも熱心であり、様々な建築、庭園の工事を行い、そのうち、道教に関するものもある。斉明天皇の在位時は中国の唐の時代であり、本研究でいう「蓬莱」の概念の第 3 段階展開期のⅢ期に位置する。この時、中国の「蓬莱」は、既に「神話蓬莱」から「道教蓬莱」へと展開し、「蓬莱」は新しい概念に変貌していた。

本節で、斉明天皇時代に建造された、道教と関係がある石造物などを対象として、これが「蓬莱」を表現しているものであるかという点について、検討する。具体的には斉明天皇時代に建造された両槻宮に関する石造物ならびに飛鳥寺の北に建造された須弥山石について考察する。

2. 1 両槻宮に関する石造物

『日本書紀』の斉明 2 年（656）の条に「田身の嶺に周れる垣を冠らしめ（田身は山の名なり。此をば大務と云ふ。）また嶺の上の両つの槻の樹の辺に 観を起て、号けて両槻宮とす。亦天つ宮と曰ふ。」とある。

文中の「観」という建築は「道観」のことを指し、中国道教の寺院のことである。道教寺院は等級によって、色々な名前が使用されている。道教神仙系統によると、人間と同様

に皇帝、平民などの等級があり、人間の皇帝が宮に住んでいるように、道教神仙系統において、皇帝、皇后などの皇室の神を祭る道観は道宮であるといえる。従って、「観を起て、号けて両槻宮とす」ということから、この両槻宮という道教建築は、道教神仙系統中の皇室の神仙と関係があるといえよう。福永光司（2003）によると、斉明天皇が「天宮」ともいわれた両槻宮をつくったのは、漢の武帝の故事にならい、不老長寿をもたらしてくれる神仙を迎えようとしたことである¹⁴⁹。両槻宮は観として、「宮」を使うことから、両槻宮は道教神仙と関係があることを示している。

両槻宮の位置について、奈良県立橿原考古研究所によって、岡酒船石遺跡を幾重にもとりまく砂岩切石の石垣、その北側にとりつく石敷き広場の実態が発掘調査によって明らかとされた。また、岡酒船石の据えられた丘に両槻宮があったことを確定的にした¹⁵⁰。

岡酒船石は平坦な上面に楕円形の窪みから三条の直線溝を直放射状に彫出すもので、南の谷合いに導水用の車石を連結することにより流水のための施設を構成するとみられる（写真 5）。そして、岡酒船石の据えられた丘の北裾から、平成 11 年（1999）から 12 年（2000）にかけての調査によって、亀形と方形と二つの酒船石を配置した石敷きの広場が発掘された。岡酒船石と亀形石槽はともに、両槻宮に付属するものであるという推測もある¹⁵¹。

また、岡酒船石と亀形石槽の用材である天理砂岩は、『日本書記』に記述された斉明天皇による「狂心の渠」と呼ばれた運河を使って天理市の豊田あたりから石を運んだものとみられることから、岡酒船石と亀形石槽は両槻宮の付属物ではなくても、斉明天皇時代に造られたものと考えられている。

岡酒船石と亀形石槽が両槻宮に付属する施設である可能性があることから、岡酒船石と亀形石槽の性格を検討し、両槻宮の性格について考察する。

2. 1. 1 岡酒船石

測量データによると、岡酒船石は東西長軸 5.5m、南北 2.3m、厚さ約 1m の扁平な長方形をしており、上面は岩肌を利用した平端面に楕円形と円形の窪みを直線溝で樹系図のよ

うに結んでいる。主軸にそって幅 10cm、深さ 3cm の断面 U 字形の溝を通し、右の東端の起点には南北 75cm、東西 26cm、深さ 6cm の楕円形の窪みをあけ、主軸に沿う直線と南へ 30 度、北へ 30 度外側に開いた直線溝を放射状に配置し、その先に各々上端径 54cm 前後、深さ 7-9cm の浅い鉢状の窪みをつけている。中央には主軸に沿った長さ 135cm、幅 70cm の長楕円形の窪みを掘っている。酒船石の底面は、丸みをもった野面のままであるが、西端には長さ 80cm、幅 40cm の枕石がある。酒船石の中軸の溝は東から西へ 5.5 度の傾斜を保っており、枕石は酒船石が西へ向う傾斜角度を固定する役目をもつ¹⁵²。

酒船石に関する史料については、宝暦元年（1751）の『古跡略考』（著者不明）に「酒船石」として、「飛鳥由来記には酒谷山、鳥形山の南半町、山の峰に大きな石がある。石の上に大壺と溝を堀り、上の壺に濁酒を盛て下へ流すと、清らかになって神酒となり、飛鳥社へ供える。このことが清酒の始めという。」（筆者による現代語）と記載されていた。

一酒船石 長二間横五尺三寸。飛鳥由来記ニハ酒谷山、鳥形山の南半町、山の峰に大石有。上に大壺を堀、これより溝あり、上の壺ニ濁酒を盛て下へ流し、清して神酒となし飛鳥社へ供ぶ。これ和国か清酒の始なりといふ。（『古跡略考』）

本居宣長が明和 9 年（1772）に書いた『須我笠能日記』によると、里人がこの石を「長者の酒ぶね」と言い伝えていたと言う。

又岡の里にかへり。三四町ばかりも北へはなれゆきて。右の方の高きところへ。一丁ばかりのぼりたる野中に。あやしき大石あり。長さ一丈二三尺。よこはひろき所七尺ばかりにて。硯をおきたらんようにして。いとたいらなる。中の程に。まろに長くゑりたる所あり。五六寸ばかりのふかさにて。庭もたひらなり。又その

かしらといふべきかたに。同じさまにちひさくまろにゑりたる所三ツある。中なるは中に大きにて。はしなる二ツは。又ちひさし。さてそのかしらの方の中にゑりたる所より。下ざまへほそきみぞを三すぢゑりたる。中なるは。かの広くゑりたる所へ。たださまにつづきて又石の下といふべき方のはし迄とほり。はしなる二すぢは。ななめに下りて。石の左り右のはしへ通り。又そのはしなるみぞに。おのおの枝ありて。左り右にちひさくゑれる所へもかよはしたり。かくて大かたの石のなりは。四すみいづこともかどなくもろにて。かしらのかたひろく。下はややほそれり。そもそも此石。いづれの世にいかなるよしにて。かくつくれるにか。いと心得がたき物のさまなり。里人はむかしの長者の酒ぶねといひつたへてこのわたりの畠の名をも。やがてさかぶねといふとかや。此石むかしは猶大きなりしを。高取の城きつきしをりに。かたはらをば。おほくかきとりもていにしとぞ。（『須我笠能日記』）

荒木田久老が天明2年（1782）に著した『大和河内旅路の記』にも、この石の名称を「長者の酒ふね」としている。

きのふ日くれて見残せて長者の酒ふねというを見にゆく。飛鳥の御社よりは南なる岡の上のたひらかなる所に有。硯をおきたらんやうにて、長さ壺丈あまりの石なるか中に長くまろに浅らにゑりたる所有て、そのかしらといふへき所にもまろに彫たる所三ところ、かなたこなた皆みそをゑりてかよはしたり。いかなるものとしもおもひしはかられず。ここの谷も酒たにといひしこの山の鳥形山といふと土佐守は云り。そもそも飛鳥の御社はもと神なひ山にたたせ給へりしを、天長6年に御さとしによりて鳥形山にうつし奉りしよし。日本後記に見えたり。されはこの酒ふねのあるあたりのひろくたひらかなる所や、そのかみの御社のあとにて、今の所には後にふたたひうつし奉りしにや。また此あたり今の御社の所

ましてすへて鳥形山といひしにやうたかはしくなんある。（『大和河内旅路の記』）

1751 年-1782 年の史料からみると、18 世紀中葉において酒船石との名称が使われていた。その位置は酒谷、鳥形山であり、石は酒造と関係があり、近所の御社の祭り活動と供物と関係があったようである。

しかし、現在では、本石造物は酒などの製造と関係があるとするより、宮殿と庭園の導水鑑賞施設であるとの解釈が妥当と考えられている。

町田章(1980)は『飛鳥の古墳と石造物』において「酒船石は、岡と出水のものを別個の石造物とし、岡の酒船石は車石につながって東方の山中から清水を導き、平野を見おろす丘陵の先端でこれを飲みかわすような儀式を想定する。」¹⁵³と指摘した。

猪熊兼勝(1982)は酒船石の南に接して出土した 18 個の車石を付属する導水石と考え、酒船石があるところから西の飛鳥板蓋宮推定地の宮内に横断する「曲水宴」の原形と考えた¹⁵⁴。また、比較の例として、韓国慶州の雁鴨池(東宮と月池)において池への注水場所には長辺 5m、短辺 4m の 2 段になった導水施設があり、小さな円孔と堰によって水を調節する仕掛けがあること。韓国慶州の鮑石亭にも湾曲する車石を連続して配列し、鮑の形に配置し、全体の長径 6m、短径 4.5m、円形の鉢に水を受け、水が巡り、「曲水宴」の施設と考えられている¹⁵⁵ことなどを挙げている。これらの事例は酒船石が「曲水宴」と関係がある導水を鑑賞する施設とみる説の類例として挙げられる。

他に、重松明久(1985)は酒船石の模様を考察し、酒船石の図像は道教の醴泉信仰と人体を宇宙の縮図と見る説の関係があり、酒船石の図像の底流には、人体の各部分に霊妙な機能があり、内臓器官の五臓六腑に神が宿るとすることを表現している、との考えを示した。また、重松明久は石の溝と円形・楕円形の窪みの構成は中国梁代の陶弘景の「天地陰陽昇降図」と似ているということも指摘している¹⁵⁶。

以上の検討から、酒船石は酒造と関係がある考えは否定されており、宮殿と庭園の導水

鑑賞施設とする考えが強く、他に、道教に関係がある施設とする説もあるが、酒船石には「蓬莱」との関係性はみられないと判断される。

2. 1. 2 亀形石槽

亀形石槽は岡の酒船石がある丘の北裾に据えられている。亀形の槽は前後 2.4m、左右 2.0m の亀の背に、外径 1.6m の円形の甲羅を彫り、内部の径 1.25m 部分は深さ 20cm に掘りくぼめられ、頭部には水を取り入れる、また尾部には水を排出する孔をうがっている。この北側にあって、頭部に水を供給する方形の槽は、長さ 1.35m、幅 1m、高さ 0.2m の外形に、長さ 93cm、幅 60cm の窪みをつけ、亀の頭部に向かって長さ 10cm の注ぎ口を作り出す。槽の北端部 42cm には高さ 15cm、幅 70cm のまな板状の台となっている¹⁵⁷(写真 6、7、8)。

中国の「神話蓬莱」の特徴をみると、「蓬莱」島は巨大な鼈に背負われていた。もしこの亀形石槽が南の丘に位置された両槻宮の付属施設であるとしたならば、巨大な鼈が「蓬莱」島を背負うという伝説と照らしあわせ、亀形石槽は両槻宮を背負って、両槻宮は仙人が住んでいる仙境「蓬莱」島を象徴することを表現している、との解釈が考えられよう。しかし、それならば、なぜそこで亀は石像ではなく、石槽として造形されているのかが疑問である。「蓬莱」島を背負う鼈のイメージとはいえないであろう。

ところで、亀形石槽の南西方に位置された高松塚古墳は藤原京期（694-710）に築造された終末期古墳であり、1972 年に極彩色の壁画が発見されたことにより注目されるようになった。古墳内の石室において、東壁・西壁・北壁（奥壁）・天井の 4 面に壁画が存在し、東壁に青龍とその上の日（太陽）、西壁に白虎とその上の月、奥の北壁には玄武が描かれ、四方四神を表現されている。（南壁には朱雀が描かれていた可能性が高いが、鎌倉時代の盗掘時に失われたものと思われる。）

高松塚古墳の壁画において四方四神の模様が使用されることから、藤原京期（694-710）において、中国における四方四神の文化の影響を受けていたといえる。その約 40 年前の斉明 2 年（656）に建造された両槻宮においても、四方四神の要素が使用された可

能性はないだろうか。四方四神の玄武は北方の神であり、脚の長い亀に蛇が巻き付く形で描かれることが多い。後漢末の魏伯陽は「周易参同契」で、玄武の亀と蛇の合わさった姿を、「玄武は亀蛇、共に寄り添い、もって牡牝となし、後につがいとなる」と、陰陽が合わさる様子に例えている。ここの亀形石槽には蛇の姿がないが、両槻宮の北方に位置していることから、此处の亀は北方を守る神玄武の亀を表現している可能性が指摘できよう。

さらに、「玄」は道教にとって重要な要素の1つである。色、方位、五行においても重要な意味が付けられている。「玄」は「黒」色を意味している。『説文解字』（東漢）は「玄、幽遠也。黒而有赤色者為玄。象幽而入覆之也。凡玄之屬皆從玄。𠄎，古文玄。胡涓切。¹⁵⁸」と解釈した。『説文解字』によると「玄」は、「黒而有赤色者」であり、即ち赤黒い色である。

また、「玄」は「北方」を意味している。五行説によると、「北方」の色は黒であることから、「玄」は「北方」の意味ももつ。『晋書・四夷傳』に「九夷八狄，被青野而互玄方；七戎六蠻，綿西宇而横南極。」とあり、この「玄方」は「北方」の意味である。

また、「玄」は「水」を意味している。五行説によると、「北方」の要素は水であることから、「玄」も「水」の意味ももつ。中国古代の図書館において、多くの書籍を火事から守るため天井の壁を黒く塗ることの理由は、黒は「玄」であり、「玄」は北方の要素として水の意味があることがあった。即ち、黒い天井は水の意味であり、火事から守るのである。

「玄武」は北方を守る神であり、名前において、「玄」を使う理由も、「玄」は北方の意味であることからであると考ええる。また、「玄武」は北方の神であり、「水神」を意味する。亀形石槽は水槽の形状を有することから、水と関係がある施設であり、ここに、玄武との関係が指摘できる。

2. 2 須弥山石と蓬莱

須弥山石は明治35年（1902）に、後岡本宮の北の方の飛鳥石神といわれる所から出土

した(写真9 須弥山石)。表面の文様を岩窟を表現しているとし、上方から水を取り入れ、四方の小孔から水を吹き出す噴水施設と指定されている。1986年飛鳥資料館が国立文化財研究所の分館として建設された際に、この石造物は模刻され、中段の一石を新たに加えた噴水施設として復元され、前庭に展示している¹⁵⁹。

復元作業の結果、須弥山石は高さ2.3m、3段積の円錐状をした噴水の機能を持つ饗宴の鑑賞用の装飾石であると推定された。石の全面に浮き彫りをし、上段に仏教世界の中心となる須弥山を表現し、中段にこれを取り巻く山脈、下段には水波紋を現している。下段石の据には木樋を組合せる仕口として高さ16cm、幅66cmの方形にくりこみがある。もとはもう1つ石があり、その分さらに高かったと推定されている。内側は、深さ約40cmの臼状に刻込んだ水槽となり、底には四方に直径5mmの小孔を穿っている。さらに水槽の縁部にも、底から垂直にあけられた直径2cmの小円孔が2本あり、うち1本は木樋仕口につながる。もう一本は余分な水を排水する役目を果たすと思われ、途中に孔を塞いで噴水の圧力を調節する仕掛けを持つ。中段の内側は漏斗を逆にしたように加工しており、上段は内側に窪みをつけた蓋になっている。つまり内部は魔法瓶の内部を思わせる。高所に据えられたタンクから流下した水は地中にかくされた木樋を通じて水槽に溜まり、下段の波間の小孔から幼児の小水の如く放水する。須弥山石の場合、この4つの噴き出し口は、世界を取り巻く大海に注ぐ4つの大河を表したものであろう。¹⁶⁰

『日本書紀』によると、斉明3年7月の条に、「辛丑、作須弥山像於飛鳥寺西。且設盂蘭盆会。暮饗觀貨邏人」とあり、斉明5年3月の条に、「甲午、甘檮丘東之川上、造須弥山而饗陸奥與越蝦夷」とある。斉明6年5月の条においては、「於石上池邊、作須弥山。高如廟塔。以饗肅慎冊七人」とある。これら3度の記録は、いずれも遠来の客を迎えた、饗宴の場でのデコレーションである。

この石造物が構えられた時代の背景について、直木孝次郎(2009)は斉明天皇の治世下において、東アジアの国際関係が緊張した時期であり、他の国の使節に対してへ、日本は文化国であり、その国力を誇る目的で、すなわち外交政策のために数多く石造物を造った

と推測している。¹⁶¹

須弥山石についての先行研究によると、出土した須弥山石と『日本書紀』に記録された斉明天皇が造った須弥山石とは同一物ではないとする解釈もみられる。また、出土した石造物はより大きな構造物の一部分であるとの解釈もみられる。

長井行は「博山炉と飛鳥遺物」(1903)において、斉明6年条に示される須弥山は巨大な石造物であり、出土した須弥山石は小さいものであることから両者は同一物ではないとの立場をとっている¹⁶²。その後、藪田嘉一郎は「推古廿年紀 須弥山紀考」(1934)においても、出土した須弥山石は小さく、「書紀」の須弥山とは同定できないとしたうえ、出土したものは大きな構造物の一部分であるとしている¹⁶³。佐藤小吉によって編集された「飛鳥誌」(1944)に、川勝政太郎は須弥山石の文様が連続しないことから、完全でないことを指摘している。

一方、須弥山石は中国の博山炉であるとの解釈がある。重田定一は「飛鳥京の須弥山」(1903)などの論文で、須弥山石は中国の博山炉であるとした。重田によると、三つの石は下から甲・乙・丙とし、乙号石下面には、他の石と組合うものと考えられる切込みがあり、甲号石と乙号石との間に丁合石の存在を推定する。甲号石を承盤に、丁号石を火袋に、乙・丙号石を山岳をかたどった蓋に擬している¹⁶⁴。しかし、この須弥山石は博山炉としたら、内側にはタールの痕跡があるはずであるが、今のところ内側にはタールの痕跡はみられないことから、この解釈が成立できないと考える。

さらに、須弥山石が曲水の宴に用いられたものであるとする解釈がある。矢島恭介は「飛鳥の須弥山と石彫人物について」(1949)において、石造物の出土地では、石組溝や井戸が発見されており、石造物を中心としその周囲に大小の溝をめぐらした、一種の造園計画になったものと推定した。具体的には、その場所は饗宴の場であり、石造物はいずれも噴水塔のようなもので、石組溝は曲水の宴に用いられたものと結論付けている¹⁶⁵。

野間清六は「飛鳥の石像遺物について」(1963)において、須弥山石は空洞内の空気圧によって間歇温泉のような噴水施設であるとの説を肯定し、石造物は庭園施設として酒を

まじえた饗宴の場であり、深く仏教的に解釈する必要がないと考えた¹⁶⁶。

町田章は「飛鳥の古墳と石造物」(1980)において、須弥山石は噴水施設であり、宮殿に付設された園池の一郭に据えられたものとする。須弥山石は、現在3個の石から成っているが、本来5個の石で構成されると推定するとともに、向原寺近くの暗渠の文様石をあげ、須弥山石は1個ではなかったと考える¹⁶⁷。

以上の諸見解のうち、本研究では、この須弥山石は曲水の宴に用いられたものであると考える説を肯定したい。噴水という形式から考えたとも、現在は日本でも西洋式の庭園には噴水施設があるが、それは明治以降のもので、日本式の庭園では古来そうした噴水は存しない。中国の庭園においても、18世紀から西洋式の噴水伝入された。したがって、この須弥山石は飛鳥時代のものであるなら、ただ鑑賞用の噴水より、酒をまじえた饗宴の道具として使う可能性が高い。

出土した須弥山石は、中国の博山炉の意匠・形態に類似していることから、曲水の宴に用いられたものとかまわず、博山炉との関係があるとみられる。

博山炉は、中国の漢代から晋代において民間で使されている香具の1つであり、多くは青銅製或いは陶器である。特徴は炉蓋の山の形である。博山炉の構造は主に炉体と土台からなり、炉体の上においては山形の蓋があり、人物の彫像、龍虎、鳥や獣などが彫刻され、香煙はくり抜き穴から通過し、雲と霧が山を回っている効果を演出した(写真10、11、12)。

考古学の成果によると、香炉の発祥地は「楚」であり、豆の形状で蓋には孔がある。戦国末期の南楚地区の墓で既に発見された鳳鳥銜環銅熏爐は、最古の香炉遺物である¹⁶⁸。楚の地の気候は湿度が高く、虫が多い。草を燃やすことから虫よけのため、香炉の原型が形成された。また、楚の地の文化は自由的、浪漫的な文化であり、神仙仙境に憧れ、それが香炉の蓋に鳳凰、仙人などの紋様にあらわれていると考えられる。

漢代の初期、楚の地の文化から香炉が伝承され、その後、さらに発展した。漢代において神仙思想が盛んでおり、また、鑑賞の視点から見るとも山の形がより芸術性があるなど

の理由から、博山炉は香炉の主な形として発展した。

徐廷禄は、博山炉は紀元前3世紀末の秦漢初めから紀元前2世紀末の前漢中期に盛行し、最も古いと考えられている博山炉はワシントン美術館所蔵の博山炉である、と述べた¹⁶⁹。西漢初期から東漢末期道教が出現する前の間において、博山炉は神仙思想と関係があるものとして使われたと考えられ、東漢末期に道教が出現した後に、博山炉は道教に関係がある道具としても使われたと考えられる。

魏晉南北朝時期において、仏教の盛行と共に、博山炉も仏教荘嚴道具としても使われていた。当時の仏像や、石窟などに多数の例が見える。その後、博山炉は具体的な様式として、伝承されてきた。

博山炉という名称について、最初に言及された文献は『西京雜記』である。『西京雜記・卷一』に「長安巧工丁緩者。為常蒲燈。七龍五鳳。雜以芙蓉蓮藕之奇。又作臥褥香爐。一名被中香爐。本出房風。其法後絕。至緩始更為之為機環轉運四周。而爐體常平。可置之被褥。故以為名又作九層博山香爐。鏤為奇禽怪獸。窮諸靈異皆自然運動。」とある。

『西京雜記』は漢代の作品であるが、現存する『西京雜記』において、引用される最初の記載は『隋書・經籍志』であることから、「九層博山香爐」という名称が漢代に既に存在していたか否かは判断できない。

また、現代の考古学において、この様式をもつ香炉は博山炉と呼ばれているが、出土したこの類のものの銘文において、「博山炉」という名称は示されていない¹⁷⁰。

最も早い記載は宋代の呂大臨が著した『考古図』に「按漢朝故事，諸王出閣則賜博山香爐，『晋東宮旧事』曰：太子服用則有博山香爐，像海中博山。下有槃貯湯使潤氣蒸香，以像海之回環。此器世多有之，形制大小不一」と記載した。

したがって、齊明天皇のとき(中国の唐の時代)、中国において、博山炉という様式の香炉は仏教と道教の両方において使われていたか、その呼称は不明であった。日本の場合は、博山炉という様式の香炉は仏教の道具として伝入されたと考えられる。山の形状である、仏教に関する道具であり、呼称不明の道具であったという諸点から推測すると、これ

を日本において「須弥山」として命名した可能性があると考えられよう。

その後、中国の宋の時代から、博山炉という様式の香炉が明確に博山炉として、仏教より道教の特徴が強くなり、一方、日本の場合博山炉という様式な香炉は仏教の須弥山と混ざって仏教の特徴が強くなった。したがって、今は中国の視点からみると、この博山炉様式な須弥山が違和感があると考ええる。

もし、この須弥山石は曲水の宴において用いられたものであり、博山炉のモチーフを借用したものであったとするならば、さらに二つの可能性があると考ええる。ひとつは博山香炉から、煙が出るイメージから、水を出す効果を設計したこと。もう1つの可能性は、博山炉の様式のように、蓋が山の形の酒尊や熨斗などのものもあることから、この酒と関係がある道具から直接水を出す効果を設計した可能性である。

この須弥山石は博山炉と関係がある可能性が高いが、「蓬莱」との関係性についてはどうであろうか。

博山炉の原型については、色々な諸説がある。先行研究を纏めると、博山炉は「博山」、「蓬莱山」、「須弥山」、「華山」となどの山を象徴する、との説がある。長村真吾は「博山炉原型考——崑崙山との関係を中心に」（2007）において、様々な根拠を挙げて、検討し、「博山」、「蓬莱山」、「須弥山」、「華山」となどの説を否定し、博山炉の原型は崑崙山であると結論している。

長村真吾によると、博山炉の原型を崑崙山とする根拠は3つである。

第1に、博山炉の動物意匠から見ると、博山炉に描かれている動物の虎と豹は、崑崙山を象徴する動物であり、崑崙山に住んでいる西王母の特徴である。他に、龍、羊、猿も描かれており、『楚辞・離騷』によると、龍と崑崙山とは密接な関係がある。『山海経』によると、羊と猿は崑崙山に住んでいる動物である¹⁷¹。

龍は崑崙山と密接な関係があるが、『芸文類聚・卷八・水部上・海水』によると、龍は蓬莱島とも関係がある（〈史料 68〉）。したがって、龍という要素だけで、博山炉の原型が崑崙山か蓬莱島である、とは判断できない。

〈史料 68〉其中有蓬萊名岳，青丘奇山，阜陵別島，崦嵫其間，其山則●崔嵬峯，嵯峨隆屈，披滄流以特起，擢崇基而秀出，其魚則有吞舟鯨鯢，●鰕龍鬚，蜂目豺口，狸班雉軀，怪體異名，不可勝圖，其蟲獸則素蛟丹虬，元龜靈鼈，修鼇巨鱉，紫貝螭蛇，玄螭蚴虬，赤龍焚蘊，遷體改角，推舊納新，舉扶搖以抗翼，泛陽侯以濯鱗，其禽鳥則鷗鴻鸕鶿，駕鵝鳩鵲，朱背煒燁，縹翠蔥青，詳察浪波之來往，遍聽奔激之音響，力勢之所回薄，潤澤之所彌廣，普天之極大，橫率土而莫兩。『芸文類聚・卷八・水部上・海水』

しかし、羊と猿については、「神話蓬萊」の特徴に関する史料の中に、蓬萊島に羊と猿がいるという記述は見られないことから、動物の意匠から見ると、蓬萊島より、博山炉の原型は崑崙山である可能性は高い。

第2に、博山炉の形態から見ると、博山炉の最も大きな特徴は山型の蓋である。『釋名』、『淮南子』、『楚辭』、『文選』によると、崑崙山は三層ないし九層であり、崑崙山を象った建造物は重層構造であり、漢代の人々にとって、重層構造であるものは崑崙山であるという観念の存在が分かる¹⁷²。

また、博山炉の蓋には山岳重疊文が刻まれているだけでなく円形という特徴もある。『六書故』によると、円形のものは崑崙と呼ばれていたこと¹⁷³が分かり、『神異経』によると、崑崙山の周囲は円く削ったようになっている。『十洲記』によると、崑崙山は伏せた盆のような形であり、盆の形は円形であることから、崑崙山の形態は円形であると考えられる。また、『道経』によると、崑崙山は伏せた蓋のようなものである¹⁷⁴。

さらに、蓋だけでなく、博山炉の形態は「山型の器身部分を細い脚部が支えている」とや承盤があることも特徴の1つである。全ての博山炉はこの「下狭上広」な特徴がもっている。『十洲記』によると、崑崙山は下が狭く、上が広いという構造になっており、このような形態から「崑崙」と呼ばれることが分かる（『十洲記』：「形は偃盆の如く、下

が狭く上は廣し。故に崑崙と曰ふ。(形如偃盆、下狭上廣。故曰崑崙)」)。したがって、崑崙山も「下狭上広」な特徴がもっている¹⁷⁵。

長村真吾にこれらの考察から、博山炉の形態については、「重層構造」、「円形」の蓋のよう、「下狭上広」などの特徴があり、全てが崑崙山の形と合っていることが分かる。

次に、博山炉の形態から見て、蓬莱島を原型として作った可能性があるかについて検討する。

「重層構造」の特徴について、「神話蓬莱」の特徴に関する史料を考察すると、『西京賦』によると、蓬莱は険しい山であることが分かるが、「重層構造」という特徴の記録が見られない。

「円形」の蓋について、「道教蓬莱」の特徴に関する史料を考察すると、『王子年・捨遺記・高辛』によると、蓬莱の形は壺器のように、上は広く、中は狭く、下は方形であり、華山と似ており、「蓋」の特徴は備えていない。

〈史料 1009〉

三壺，則海中三山也。一曰方壺，則方丈也；二曰蓬壺，則蓬萊也；三曰瀛壺，則瀛洲也。形如壺器。此三山上廣、中狹、下方，皆如工製，猶華山之似削成。

『王子年・捨遺記・高辛』

また、この蓬莱と似ている華山の形は『山海経・西山経』によると、四方形である（『山海経・西山経』：「又西六十里を、太華の山と曰ふ。削成して四方なり（又西六十里、曰太華山。削成而四方）」）。したがって、「円形」の蓋についても「蓬莱」の特徴と合わないと考えられる。

「下狭上広」の特徴について、前文の考察から、『王子年・捨遺記・高辛』によると、蓬莱の形は壺器のように、上は広く、中は狭く、下は方形であることから、蓬莱は「下狭上広」の特徴が持っていないことが分かる。

また、博山炉の形態からみると、「蓬莱山」説の1つの根拠は博山炉が承盤があり、海を象徴し、上の蓋は蓬莱島を象徴している。宋代の龍大淵は『古玉図譜』巻79で、「炉下承盤貯湯薫香、象大瀛海也。蓋上三峰象蓬莱三島也。」（炉下の承盤の湯を貯へて香を薫ずるは、大瀛海を象るなり。蓋上の三峯は蓬莱三島を象るなり。）と述べ、蓬莱山説をとっている。長村は承盤がない博山炉もある点から、博山炉の原型は蓬莱山と決めることはできないと指摘した¹⁷⁶。

一方、博山炉の承盤が海を象徴し、上の蓋と炉体は海中の山を象徴しているという点に関して、「蓬莱」、「方丈」、「瀛洲」などの山をはじめ、この条件を満たす山は数多い。『山海経・西山経』によると、崑崙山も四方から河水、赤水、洋水、黒水が流れ出、この条件も満たすと考えられる。したがって、博山炉の形態から見ると、蓬莱島より、博山炉の原型は崑崙山である可能性が高い。

第3に、博山炉の天の特徴から見ると、博山炉において、天の四神、青龍、白虎、朱雀、玄武と天の牽牛星の意匠が見える¹⁷⁷。崑崙山も天と密接な関係があると考えられる。『山海経・西山経』によると、崑崙山は天帝の地面に建造された都であり、それは他の山が持っていない特徴である。崑崙山の円形、九層、蓋のような特徴も天の特徴である。それに対して、「神話蓬莱」に関する記載からみると、「蓬莱」は天との物理距離も文化距離も非常に遠いと考える。物理距離について、「蓬莱」は渤海の東に何億万里のどころにあり、根がなし、西極になくなる可能性もある島であり、天の物理距離が非常に遠い。また、「蓬莱」は世外桃源のような場所であり、天との文化距離も非常に遠いと考えられる。したがって、博山炉は天の特徴を持っている点から、蓬莱島より、博山炉の原型は崑崙山である可能性が高い。

また、博山炉において、天の象徴がある蓮華も使用されていた。『淮南子』によると、若木の梢に十の太陽があり、それは蓮華のような形をしている。『楚辞・天問』によると、若木が崑崙山で生えている。博山炉における蓮華は天の象徴があるだけでなく、崑崙山にある若木も表れていると考えられる。

以上の検討から、蓬莱島より、博山炉の原型は崑崙山である可能性が高いと考えられる。

したがって、斉明天皇時代に建造された須弥山石の意匠について、中国の博山炉のモチーフを表現して設計された可能性が高いが、この須弥山石は中国の「崑崙山」と関係があり、「蓬莱」と関係がないと推断できる。

本節においては、斉明天皇在位の時期に建造されたとされるいくつかの石造物を対象として、これらの石造物が中国の道教神仙思想と関係があるかについて検討した結果、いずれも「蓬莱」との関係はみられないと考察された。

第3節 東院庭園に関する「蓬莱」

1967年、平城宮東に張り出した部分の南東隅から庭園の遺構が発見された。この場所は『続日本紀』にみえる「東院」にあたることから、発見された庭園は「東院庭園」となづけられた(図40 奈良時代前半の平城宮)。

平城宮は他の日本古代都城の宮殿地区には例のない東の張出し部を持ち、この張出し部の南半は、奈良時代を通じて「東宮」と呼ばれたようだが、孝謙・称徳天皇の時代には特に「東院」と呼ばれた。称徳天皇はこの地に「東院玉殿」を建て、宴会や儀式を催した

178。

高瀬要一の「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について」(2007)によると、遺構は奈良時代のものであり三時期の変遷がみられる。

まとめると、奈良時代初めの第一期においては、平城宮の大垣が逆L字型に囲っており、その隅の形に合わせ、第一期の東院庭園の園池も汀線の出入りがない逆L字形の池であり、飛鳥時代の幾何学的な池の影響をまだ残している状態と考えられる(図41 第一期の園池平面図)。

第二期は奈良時代前半で、汀線の出入りが多くなり、池の周囲には一部が張り出すようにつくられた二棟の建物が建てられ、建物は南側にもある。蛇行する水路が池の西側と南側に作られており、護岸の立ち上がり部分には、淵にそって玉石を一石ずつ置き、その上

にさらに玉石を斜面に沿って張付けており、玉石の上は少し大きめの礫を斜面に沿って貼り付けた形と考え、池底においては写真 14 と 15 に示すように 30cm 位の玉石が島状に敷かれているが、池の中心部と池の淵には玉石は敷かれていない(図 42 第二期園池の平面図、写真 13)。

第三期は、奈良時代末期の姿である。池の形はさらに出入りが多く複雑になり、南西部においては、中島がつくられ、中島南側の洲浜に礫敷きがあり、この部分だけは径 10cm を超える大きな礫を帯状に敷き詰めており、写真 16 のように蛇行している。東側の汀が少し張り出し、池の汀は緩やかな傾斜の洲浜で、汀線の出入りが大きく、池の北端中央においては大ぶりの景石からなる築山が設けられる。全体で 30 石位の石を組んでおり、復原整備の時に、元々立っていた石もあるのではないかという意見もあったが、立て直されたのは 2 石で、残りは発掘当時のままである(写真 17)。第二期でも建物が池に張り出して造られていたが、中央建物からさらに東岸にかけて橋が掛かる。池東北部には南北方向の橋が架かり、敷地東南隅においては楼阁状の建物が建てられ、次第に平安時代の庭園に近づいているという印象を受ける(図 43 第三期園池の平面図)。

復原整備では、下層の遺構を保護するという基本的な考えに基づき、第三期の池を復原している。築山や汀付近にある景石はそのまま見せ、中央建物は 40cm しか地盤を上げずに、平たく薄い基礎の上に建てた(写真 18)。隅楼など、その他の建物では 60cm 位地盤を上げている。洲浜は奈良時代の遺構面に対して 10cm 高くなる形で仕上げ、60cm 上げた地盤に建つ建物部分に接する洲浜は本来よりも少し急勾配の洲浜となった¹⁷⁹(図 44 東院庭園復元整備平面図)。

復原された東院庭園の写真(写真 19)から見ると、池底から岸边にかけてゆるやかな勾配で小石を敷きつめた洲浜が出入りのある汀線をかたちづくっており、神仙世界を表現され则认为られている。では、この庭園の配置には「蓬莱」との関係があるのだろうか。

「蓬莱」との関係性が考えられる要素としては、池にある中島と池の北岸に配置された築山石組という二つの要素である。以下、この 2 つを対象に検討する。

3. 1 池にある中島と「蓬莱」の関係

考古学発掘調査の成果によると、庭園の池にある中島は第三期に作られたものである。

庭園の第三期は、奈良時代末期の姿であり、中国の中唐と同じ時期である。

奈良時代においては天平文化が盛んであり、当時の皇族や貴族は遣唐使によってもたらされた周（武周）の武則天や唐の玄宗の文化を積極的に取り入れ、中国風（漢風）・仏教風の文化の影響が列島の地域社会へ浸透していった¹⁸⁰。東院庭園の第三期は第一期と第二期に比べると、変化もある。これらの変化は中国の唐文化からの影響を受けたと考えられる。

第二章の第4節における検討において、唐代の大明宮は唐太宗貞観八年（634年）から建造され、北宋の史書『唐会要』によると、龍朔二年（662年）に大明宮は蓬莱宮に更名された（〈史料 1024〉）ということを述べた。龍朔二年（662年）、大明宮においては、既に蓬莱池と蓬莱島が配置されていた。つまり、奈良時代末期、東院庭園の第三期において中島を配置する時には、中国では大明宮に既に蓬莱島が配置されていたのである。したがって、東院庭園の池と中島は大明宮の蓬莱池と蓬莱島を模した可能性があると考えられる。

3. 2 北岸に配置された築山石組と「蓬莱」の関係

東院庭園の池の北岸に、写真 17 の築山石組があり、写真 21 のように復原整備された。

この築山石組も第三期に作られたものであり、極楽浄土の思想を反映した須弥山或いは神仙思想を表現した蓬莱山と見られている。

奈良時代、仏教も盛んでおり、鎮護国家の思想とあいまって国家の保護下に置かれていよいよ発展し、国を守るための法会や祈祷がさかんにおこなわれた。特に、奈良時代後期の孝謙天皇（称徳天皇）がより仏教を重視し、東院庭園のこの築山石組は仏教と関係がある須弥山を表現している可能性もあると考えられよう。しかし、築山石組は池の北岸に位置している。仏教の須弥山は宇宙の中心に位置するものであることから、北岸に位置する

石組は須弥山である可能性は低いと考える。

一方、復元された築山石組は正倉院御物の唐から伝来した池庭の模型と考えられる仮山（写真 20）と類似しており、東院庭園の築山石組の意匠は中国から影響を受けたと考えられよう（写真 26）。

ところで、713 年（和銅 3 年）には諸国に「風土記」の編纂が命じられた。現存する『丹後国風土記』には「浦島伝説」があり、ここに「蓬莱」という地名を見ることができる。このことから、奈良時代に日本は神仙思想、蓬莱島などの中国道教要素の影響を受けていたものたと考えられる。

しかし、中国においてはすでに「道教蓬莱」の出現によって、「神話蓬莱」の特徴は弱化し、ほかの仙山、仙境の特徴と総合化されるようになっていた。したがって、写真 20 の仮山が蓬莱を表現するかいなかについては判断できない。このことと同様、意匠のみから、東院庭園の池の北岸の築山石組が「道教蓬莱」を表現するかどうかについては判断できない。

また、「蓬莱」は島であり、中国の皇家園林においては、「蓬莱」は池の中以外には配置されていない。したがって、もし東院庭園の池岸に配置された築山石組が蓬莱を象徴するものであるならば、これは日本庭園独自の蓬莱山の配置であるといえ、中国との大きな違いであると考えられる。

中国道教における仙境システムは時代との共に発展し、より複雑となり、その種類も数多くなった。一方、日本の道教仙境においては、蓬莱への言及が最も多い。このことから、中国道教仙境システムが日本に伝入するに際して、それが複雑であったため、道教と関係がある仙境は総合され、単純化されて「蓬莱山」とされた可能性があるかと推測する。

この推測に立てば、東院庭園が神仙仙境を表現するものであるならば、池の北岸の築山石組は蓬莱山を表現していると考ええる。しかし、ここの「蓬莱」は中国の特定の東海の三つの神島の 1 つの「神話蓬莱」ではなく、道教神仙山が総合化されたものであると考ええる。

以上のことから、東院庭園は中国道教神仙思想を表現した庭園であり、中島と築山石組

は中国の「蓬莱」をモチーフとして中国の神仙島、神山を表現するものであると考察する。

第4節 平安初期庭園の中島と「蓬莱」

前節において、奈良時代の東院庭園の中島について考察し、庭園における中島は「蓬莱」島と考えられることを指摘した。しかしこれは特定の東海の三つの神島の1つの「神話蓬莱」を表現するものではなく、中国道教神仙思想と関係がある道教神仙山を総合化したものであった。

平安時代について、特にその中期の貴族の邸宅（いわゆる寝殿造）庭園においても、中島が配置されている。この中島は中国の皇家園林、特に庭園の「蓬莱」要素と、どのような関係があるか。本節では、平安時代初期庭園の中島と「蓬莱」との関係について検討する。

4. 1 平安時代初期における庭園の形式

日本国語大辞典によると、寝殿造は古代・中世にわたる、京都の貴族の住宅の形式であり、中央の南向きの寝殿を中心にその東・西・北に対の屋があり、その間を、廊下（「細殿」「渡殿(わたどの)」などという）で連絡する。寝殿の南は中庭をへだてて池があり、この池に面して東西に釣殿をのばし建てる。邸の四方には築垣をめぐらし東西に門を置く。室内はすべて板敷で、几帳・ついたてなどでしきりをし、人のすわるところに畳を敷き、外部には蔀戸、妻戸を入れる¹⁸¹。

中国において、紀元前から周、漢、唐、宋、元、明などを経て清朝に至るまで一貫して守ってきた建築配置形式は南北方向中軸対称の形式である。具体的に言えば、南正面に正門を開き、その中心線上に主要殿堂を並べ、その左右対称に付属屋を配する形式である。寝殿造は南正門制を止めて、東西正門制に改めることであった。この最初の例は神泉苑である。文献的に東西正門の存在が立証されたのは『内裏式』に「先一日所司供張神泉苑御座東南八許尺鋪皇太子座、（中略）訖左右相撲司各在東西正門外」と記載された。正殿の

南方に中島を持つ大池の存在は創建からのものであることから、神泉苑は『内裏式』の文献より早く創建されていたが、創建当初から東西正門制であったことと考えられていた¹⁸²。

神泉苑の創建時期について、桓武天皇による神泉苑への行幸は延暦 19 年(800 年)7 月 19 日には早くも見られ、桓武天皇の延暦 13 年(794 年)における平安遷都から僅か 6 年目である。神泉苑の創建は延暦 19 年より以前になされていたことから、神泉苑の創建はほぼ平安京の造営と同時に行われたものと見られる。

4. 2 寝殿造形式と浄土宗曼陀羅

神泉苑が東西正門制に変更された理由は、寝殿造の形式が関係しているとする。太田静六は、寝殿造に見られる南池と中島の発想は浄土変相図中の宝楼阁曼陀羅によるものであるとしている¹⁸³。

太田はその理由の 1 つとして、寝殿以下を宝楼阁に見たてた上で南池を宝池と考え、この形式的に類似するばかりでなく、儀礼や饗宴に際しても寝殿造りでは原則的に樂所を中島に設けており、これが宝楼阁曼陀羅に描かれることと一致することを指摘した。

樂所を中島に設けることについては、高陽院の例が挙げられている。

万寿元年 9 月 19 日に行われた駒競行幸の際に、『栄華物語』（駒競べの行幸）に、「樂所の物の音どもくらうなるまっにいみいじうおもしろし。中島にぞ樂所はせさせ給ける。」と記され、樂所は池中に設けられることを示し、太田はこの樂所は浄土変相において樂所を池中に設けることと一致すると考える。

また、駒競行幸に際しても、後一条天皇が高陽院に行幸されて寝殿に入御される時、有様が『小右記』当日条に天皇が西門から入られて西中門を通り、西対から昇殿された後、渡殿を経て寝殿に入御される間、龍頭鵜首舟が漕ぎ出て舟樂を奏しながらお迎えしたと記載されている。太田はこの記載も曼陀羅中に描かれるものと一致すると考える。

理由のもう 1 つとして、浄土変相に見る宝楼阁の構造が寝殿造の構造が一致することで挙げている。図 45 に示す平等院鳳凰堂本尊後壁に描かれた浄土変相において、中央の宝

閣から左右に廊が延びて左右閣に通じ、左右閣からは更に廊が前方に出て末端に小楼が立ち、小楼は池に臨んで営まれ、宝閣正面の池中には舞台も見える。太田によると、宝閣が東西棟なのに対し、左右閣は南北棟である関係は寝殿造における寝殿と対屋との場合に一致し、池畔に立つ小楼は寝殿造においての釣殿に相当すると考える。しかし、構造は完全に一致するとは言えなく、寝殿造において、寝殿から東西対屋に通じる渡殿が、宝楼閣の左右廊に比べると短い。太田はこの点について、寝殿造では東西一町という限定された敷地内に収める関係から、東西渡殿は長く取りたくとも取れない実状によることから考える。

しかし、平等院は、永承7年(1052)に関白藤原頼通が宇治別業を寺に改めたもので、阿弥陀堂(鳳凰堂)は翌天喜元年(1053)に完成していたものであり、現在の本尊後壁画の年代は天喜元年より下ることが昭和の解体修理によって指摘している¹⁸⁴。前文によると、寝殿造の最初の例とする神泉苑は延暦19年(800年)の前に既に建造されたことが分かる。また、平等院が別業を寺に改めたものということから、元々の別業は平安時代貴族の住宅として寝殿造の形式で建造されたという可能性も高いと考えられる。また、杉本宏によると、「鳳凰堂の第1回改造に伴って描かれた本尊後壁画には、平等院の景観が投影される機会は十分であり、この寺への期待を描いたとも思える特異な壁画の主題を考慮すれば、現実の庭園景観が図相に影響を与えた可能性は高いものと考えるのである。¹⁸⁵」

以上の考察から、寝殿造は浄土変相図を参考して建営されたとは考えにくい。むしろ浄土変相図は寝殿造に参考して描いたものである可能性が高いと考える。

4. 3 平安初期庭園と唐の宮殿

太田静六の『寝殿造の研究』(1987)によると、平城京における第二次朝堂院および内裏を中心とする復原図と唐の大明宮の復原図を比べると、基本的には両者が同一構成からなることに気付き、都城と宮殿を営む際に、唐の太極宮より、大明宮を第一の範としたことを考える¹⁸⁶。

また、太田静六の『寝殿造の研究』(1987)によると、平安京の太極殿を中心とする朝堂院(八省院)と紫宸殿を中心とする内裏と完全に分離する点など、平城京より日本化の方面もあるが、平安京も中国唐の時代の宮殿と関係が深いといえる。

例えば、図 46 平安京朝堂院図から見ると、太極殿の前に龍尾壇が設けられ、龍尾壇の東に蒼龍楼、西に白虎楼を配している。大明宮における含元殿含元殿の前に龍尾道が設けられ、龍尾道の東に翔鸞閣、西に栖鳳閣を配していることから、平安京の太極殿は大明宮における含元殿と同じ配置であると考ええる。

また、平安京に関する建築の名称についても、唐の太極宮から太極殿、承香殿、日華門と月華門の名称を借用し、唐の大明宮から紫宸殿、翔鸞楼、栖鳳楼、龍尾道と宣政門の名称を借用し、唐の洛陽宮から仁寿殿、貞観殿、応天門と飛香舎の名称を借用した¹⁸⁷。

以上のことから、平城京と平安京の八省院および内裏の配置は、唐の大明宮から影響を受けていたと考えられる。

前述したように、ほぼ同じ時期に造営されていたが、平安京の形式は大明宮に深く影響を受けるが、神泉苑は日本人好みの東西正門制に変更された。この変化と共に、庭園の位置も中国と異なってきた。位置が変わっても、全く影響を受けないとは言えないと考える。

中国の唐代皇家園林において、池の位置にかまわず、形と配置だけを見ると、唐の太極宮においては、池が3つ配置されており、島がある記載がなく、興慶宮においては池が1つ配置されており、島がある記載がなく、西苑においては池が1つ配置されて島が3つあり、大明宮においては池が1つ配置されており島が1つある。

図 47 寝殿造の構造を見ると、寝殿造の庭園は建築の南に1つの池を設けられ、橋と1つの中島を配置されている。『日本庭園辞典』によると、寝殿造庭園は平安時代、皇族および貴族などの寝殿造住宅にともなう庭園様式である。三位以上の上級貴族の典型的な寝殿造庭園では、正殿である寝殿と東西の対屋、それらを結ぶ渡殿、対屋から南に伸びる中門廊などで囲われた空間に造られた。寝殿の南面に広場を置き、その南に池を設け、池への導水は北東方からの遣水によることを基本とする。平安時代の『作庭記』では、各種の

儀式や行事を行うために広場は南北長 20m 前後の大きさが必要であり、その南に中島のある池を置く、また、島は寝殿の真正面は避けたうえ、斜めに反橋、その先は平橋を架ける、といった寝殿造庭園の構造やデザインに関する様々な記述が見られる¹⁸⁸。

この形式から見ると、最も類似する形は大明宮である。大明宮の中島は蓬莱島であるが、寝殿造庭園の中島は蓬莱島といえるのであろうか。

4. 4 平安初期庭園に関する漢詩から見る神仙思想

先行研究にみると、廣安春華は平安時代初期に編纂された『凌雲集』、『文華秀麗集』、『経国集』などに収録された庭園に関連する漢詩を整理し、詠み込まれた情景の傾向を分析し、邸宅ごとの特性を比較、検討し、主に平安初期の庭園(神泉苑、冷然院、嵯峨院、河陽離宮、淳和院と閑院)を分析し、個々の庭園の形態と機能の特性を明らかにした¹⁸⁹。この研究から、平安初期の庭園に関する漢詩の中に、庭園の自然風景に関する内容が多いが、神仙思想に関する仙境を言及したものもあると見られた。

廣安が検討された平安初期の庭園(神泉苑、冷然院、嵯峨院、河陽離宮、淳和院と閑院)は復原想像図から見ると、庭園の中に、すべて中島が配置されている。これらの庭園は「蓬莱」と関係があるか。ここから、廣安が検討した漢詩を対象とし、平安初期の庭園(神泉苑、冷然院、嵯峨院、河陽離宮、淳和院と閑院)と「蓬莱」の関係について考察する。

4. 4. 1 神泉苑と「蓬莱」

神泉苑は、平安京造都の際、大内裏の南に接して営まれた禁苑である(図 48)。神泉苑の文献上の初出は、延暦 19 年(799)7 月乙卯(19 日)条の「幸_二神泉苑_一」で、その創建は桓武天皇が平安京遷都の際に大内裏の南側に設けた離宮であった¹⁹⁰。廣安によると、嵯峨朝において、神泉苑を詠んだ漢詩と賦は、『凌雲集』から 14 首、『文華秀麗集』から 5 首、『経国集』から 13 首、空海が著した漢詩文集『遍照發揮性靈集』から 1 首の全 33 首存在する¹⁹¹。この 33 首の漢詩の中に、5 首においては、仙境の要素が言及された。こ

こから具体的に検討する。

(1)「雑言。於神泉苑待讌、賦落花篇応製」においては、「仙源」、「桃源」を言及された。「雑言。於神泉苑待讌、賦落花篇応製」は小野岑守(777-830)が創作した漢詩であり、嵯峨天皇による作品「神泉苑花宴賦落花篇」に対する応制である。

【原文】

三陽二月春云半
雑樹衆花咲且散
鑾駕早来遍歴覧
奇香詭色互留翫
昔聞一県榮_二河陽_一
今見仙源避_二秦漢_一
此時澹蕩吹_二和風_一
落藥因_レ之満_二遠空_一
梅院不_レ掃寸餘紫
桃源委積尺所紅
看_レ花_レ落
落花寂寂聴無_レ声
青黄赤白天然染
南北東西非有情
遊蝶息_レ尋葉初見
群蜂罷_レ釀巢纔生
待_二花宴_一
花宴何太合_二良辰_一
玉管千調無_二他曲_一

【読み下し文】

三陽二月春云に半ばなり、
雑樹衆花咲き且つ散らふ。
鑾駕早く来りて遍く歴覧し、
奇香詭色互ひに留翫せしむ。
昔聞きつ一県河陽に榮えしを、
今し見る仙源秦漢を避ることを。
此の時に澹蕩に和風吹き、
落藥これに因りて遠空に満つ。
梅院掃はず寸餘の紫、
桃源委積りぬ尺所の紅。
花の落つることを看る、
落花寂寂にして聴くに声なし。
青黄赤白天然の染、
南北東西非有の情。
遊蝶尋ぬること息めて葉初めて見ゆ、
群蜂釀むること罷めて巢纔に生ふ。
花宴に待す、
花宴何ぞただ良辰に合へる。
玉管千調他し曲なし、

金疊百味自能醇

金疊百味自らによく醇し。

臺上美人奪_二花綵_一

台上の美人花綵を奪ふ、

欄中花綵妬_二美人_一

欄中の花綵美人を妬む。

人花両両共相對

人花両両共に相對ふ、

誰得_二分明_一偽与真

誰か分明くこと得む偽と真と。

借問花節有_レ期否

借問す花節期あるか否かを、

花開花落億万春

花開き花落つ億万の春。

「雑言。於神泉苑待讌、賦落花篇応製」小野岑守

【大意】

陽春の二月、春も半ばになり、様々な樹木の花々は咲いたり散ったりしている。鸞輿は早くもこの苑に來り、あらゆるところを巡り回って花を御覧になる。珍しい花の香や変わった花の色は天子の鸞輿を留めて賞翫させるほど素晴らしいものだ。むかし、河陽県という一県をすべて花で飾った潘岳の故事を聞いた。また、秦や漢の乱を避けて桃花源へ入り自適の生活を送った人々のことを書いた陶淵明の「桃花源記」があるが、今はそれにも比すべき神泉苑という地に、俗世を避けて花を賞美する君臣が集う。ちょうど今、のどかに春風が吹き、落花の蘂が風に運ばれて空遠くまで飛び、満ちる。梅が咲く庭は掃除もせず一寸余りも紫の花弁が積もっている。桃の花が咲く桃源郷のようなこの庭には一尺ばかりも紅色の花弁が積み重なっている。落花を見る。落花は静かに落ちて、耳を傾けても何の音もしない。散る花は青黄赤白の天然自然の染め物のようであり、四方八方に無心の情をもって飛び散る。ひらひら飛ぶ蝶はもはや花を尋ねることをやめ、ようやく木々にも葉が見え始める。群蜂は蜜を醸し出すことをやめ、やっと巣を作り始める。今、神泉苑の花の宴に侍る。この花の宴は春のなんと良い季節にするのだろうか。管楽器の発する数限りないしらべは、他のリズムの曲を合わせてもよく調和し、酒樽の酒の色々な味は自然に濃く美味い。舞台の上の美しい舞姫ら

は花の色を奪わんばかりに美しく、欄干のなかに散る落花の色は美女の艶色を妬まんばかりの美しさである。美人と花は二つながらともに相対して美色を競い、美しくみえるのは人か花か、その真偽の程を判別することは誰ができようか。少しお尋ねしたいものだ。花の季節に限りがあるのだろうか。いや、花々が咲き散るこの季節は永遠に続くのである¹⁹²。

詩句「今見仙源避秦漢（今し見る仙源秦漢を避ることを）」と「桃源委積尺所紅（桃源委積りぬ尺所の紅）」に言及された「仙源」と「桃源」の出典は中国の東晋文学家陶淵明が創作した『桃花源記』である。陶淵明は現実の不満に対して、自由、平和の「桃源」世界を創作したが、この後、道教も「桃源」を借用し、唐代道士司馬承禎の『天地宮府図』にも、「桃源」を36小洞天に入れ（桃源山洞は36小洞天の35、「周回七十裏，名曰白馬玄光天。在玄洲武陵縣，屬謝真人治之。」『天地宮府図』）、『太平御覧・卷663・道部・五・地仙』引用『桃花源記』、桃源に住んでいる人達は秦代から東晋時代まで5、6百年ずっと暮らしていることから、仙人と認め、路がないことも仙人の方術の結果であると考え、このように、「桃源」は道教仙境になった。

〈史料 1050〉陶潜『桃花源記』曰：晋太康中，武陵人捕魚，從溪而行，忘路遠近。忽逢桃花林，夾岸芳華鮮美，落英繽紛。林盡得山，山下有一小口，初極狹，行四五步，豁然開朗。屋宇連接，雞犬相聞，男女衣著，悉如外人。見漁父驚，為設酒食。雲先世避秦難，率妻子來此，遂與外隔。問今是何代，不知有漢、魏、晋。既出，白太守，遣人隨往尋之，迷不復得。『太平御覧・卷663・道部・五・地仙』

ここの詩句は、神泉苑に花を賞美する君臣は「桃花源記」の中の秦や漢の乱を避けて桃花源へ入り自適の生活を送った人々と比喻し、この神泉苑も「桃花源」のような世外仙境

であることを示している。

(2)「九月九日於神泉苑宴群臣、各賦一物、得秋菊」は節会で嵯峨天皇による漢詩である。詩句「聞道仙人好所_レ服(聞道く仙人好みて服する所ぞと)」に、菊は仙人が好んで服用するものと説明された。嵯峨天皇は神泉苑を営造し、菊を植え、菊は仙人が服用することを強調することから、神泉苑の意匠は仙境と関係があることが推測できる。

【原文】

旻商季序重陽節
菊為_レ開_レ花宴_二千官_一
藥耐_二朝風_一_二今日笑_一
榮霑_二夕露_一_二此時寒_一
把盈_二玉手_一_二流_レ香遠_一
摘入_二金杯_一_二辨_レ色難_一
聞道仙人好所_レ服
対_レ之延_レ寿動_レ心看

【読み下し文】

旻商の季序重陽の節、
菊の花を開くが為に千官を宴す。
藥は朝風に耐えて今日し笑む、
榮は夕露に霑ひて此の時し寒し。
把りて玉手に盈てては香を流ふること遠し、
摘みて金杯に入るれば色を辨くこと難し。
聞道く仙人好みて服する所ぞと、
これに對ひて寿を延べむと心を動かして看る。

「九月九日於神泉苑宴群臣、各賦一物、得秋菊」嵯峨天皇

【大意】

今日は九月九日の節会である。この佳節の景物である菊が咲いたので、数多の文武百官を参加させて御宴を開いたのである。菊の藥は朝風に耐えて今日九日の日に咲き微笑むが、その花は夜露に濡れて今や寒げに見える。菊を採って玉のように美しい手に満たすと、その香りは遠くまで流れ伝わっていく。また、摘み取って金色の酒杯に入れると、杯と菊の黄金が区別できないほど美しい。聞くとくろによれば、菊は仙人が好んで服用するらしい。この菊に長寿を願い、菊に心を寄り添わせてみる¹⁹³。

(3)「九月九日侍宴神泉苑、各賦一物、得秋山」は菅原清公の漢詩で、神泉苑の山を詠んでいる時、中国の東海三神山と五岳も言及され、神泉苑の山はこれらの山に比すべき意匠であるとする。「仙人の住むという三つの仙山（蓬萊・瀛州・方丈）は遙か青海原の外に立ち、名山である五つの名山（泰山・衡山・嵩山・華山・恒山）は陰しく中国本土の中に聳える」という内容から、蓬萊は三つの仙山の1つとして、神泉苑の山の類比対象であるが、神泉苑の山は蓬萊から意匠を持って建造されたこととは言えない。

【原文】

三山縹眇滄瀛外
五岳嵯峨赤県中
防_レ露古松千載翠
待_レ風危葉九秋紅
落泉曝_レ布懸_二飛鵠_一
晴雨収_レ糸閉_二薄虹_一
仁者楽_レ山何所_レ寄
国家襟帯在_二西東_一

【読み下し文】

三山縹眇なり滄瀛の外、
五岳嵯峨なり赤県の中。
露を防ぐ古松千載に翠なり、
風を待つ危葉は九秋に紅なり。
落泉布を曝して飛鵠を懸く、
晴雨糸を収めて薄虹閉づ。
仁者山を楽しむは何の寄する所ぞ、
国家の襟帯西東に在り。

「九月九日侍宴神泉苑、各賦一物、得秋山」 菅原清公

【大意】

仙人の住むという三つの仙山（蓬萊・瀛州・方丈）は遙か青海原の外に立ち、名山である五つの名山（泰山・衡山・嵩山・華山・恒山）は陰しく中国本土の中に聳える。露をしのぎ立つ御苑の古松は千年もの間、変わらぬ緑を保ち、風を待って危うく散ろうとする木の葉は今紅葉している。庭に落ちる瀑布の水は白い布をさらしたかのように白く垂れて、あたかも飛び渡る白い鵠（くぐい）のようだ。晴れゆく雨はかぼそい糸のような筋を収め、薄くなった虹は消えてゆく。仁者が山を楽しむとは一体どのような根拠があるのか、それは山が国家の襟や帯として

東西に聳えているからだ¹⁹⁴。

(4)「晩夏神泉苑、同勒—深臨陰心—、応製一首」は菅野真道(741-814)による作品であり、「晩夏の眺め」という題詞で詠まれている。第一、二句「王母仙園近 竜宮宝殿深(王母が仙園近し、竜宮の宝殿深し)」では、「王母仙園」と「竜宮宝殿」の2つ中国の仙境要素を引用された。神泉苑は西王母の苑と竜王の宮の宝殿に比すべき、ここも仙境であることを表現されている。

【原文】

王母仙園近
竜宮宝殿深
追涼天蹕幸
縦賞鳳輿臨
竹疎長竿節
松傾小蓋陰
酔臣迷—聖造—
唯有—歳寒心—

【読み下し文】

王母が仙園近し、
竜宮の宝殿深し。
追涼天蹕幸したまふ、
縦賞鳳輿臨ます。
竹は疎し長竿の節、
松は傾く小蓋の陰。
酔臣聖造に迷ふ、
唯に歳寒の心有るのみ。

「晩夏神泉苑、同勒—深臨陰心—、応製一首」は菅野真道

【大意】

この禁苑は西王母の苑の近くにある。竜王の宮の宝殿にも比すべき禁苑の御殿は奥深く静まりかえっている。涼しさを求めて行幸し賜い、心のままに楽しもうとして鸞輿はここに臨御なされた。竹はまばらに生えて長い竿のような節をみせている。松は斜めに傾いて小さい笠のような陰を作っている。酒に酔いしれた我ら臣下は、聖天子のなし賜うことは測り知れず広大であるので、戸惑うほどである。寒気の厳しい冬にもしばまず常緑を保つ松や竹のように貞忠の心を尽くそう

(5)「秋日観神泉苑」は空海による漢詩であり、行幸で詠まれたものである。「高台神構非人力（高台は神の構へ人力に非ず）」という詩句から、神泉苑の高台は神仙が造ったものと考え、神泉苑は仙境ということを表現している。また、「鶴響聞天馴御苑 鵠翅且戢幾将飛 游魚戯藻数吞鉤 鹿鳴深草露霑衣（鶴の響天に聞こえて御苑に馴れたり、鵠の翅且く戢めて幾ばくか将に飛ばんとす。游魚藻に戯れて数鉤を呑み、鹿深草に鳴きて露衣を霑す）」という詩句から、神泉苑において、鶴、鵠、鹿などの動物がいる。鶴、鵠、鹿などの動物は中国の道教仙境によく住んでいる動物であることから、神泉苑は仙境のような所ということを示している。

【原文】

イニ神泉観ニ物候ニ
心神怳惚不能帰
高台神構非ニ人力ニ
池鏡泓澄含ニ日暉ニ
鶴響聞ニ天馴ニ御苑ニ
鵠翅且戢幾将飛
游魚戯ニ藻数吞ニ鉤
鹿鳴ニ深草ニ露霑ニ衣
一翔一住感ニ君徳ニ
秋月秋風空入ニ扉
銜ニ草啄ニ梁何不ニ在
蹢躅率舞在ニ玄機ニ

【読み下し文】

神泉にイニして物候を観る、
心神怳惚として帰ること能わず。
高台は神の構へ人力に非ず、
池鏡泓澄として日暉を含めり。
鶴の響天に聞こえて御苑に馴れたり、
鵠の翅且く戢めて幾ばくか将に飛ばんとす。
游魚藻に戯れて数鉤を呑み、
鹿深草に鳴きて露衣を霑す。
一びは翔り一びは住って君の徳を感じ、
秋の月秋の風空しく扉に入る。
草を銜み梁を啄んで何ぞ在らざらん、
蹢躅として率い舞って玄機に在り。

「秋日観神泉苑」 空海

【大意】

神泉苑を歩み風光を楽しむと、その美しさに恍惚として帰ることも忘れてしまう。高台（築山）は神が造形物にして人力のかなうところではなく、鏡のように澄み渡った池は日輪が輝く。鶴の声が天に響き、御苑に馴れ、鵠（ハクチョウ）はここで佇み力を得て、また大空に舞う。遊魚は藻と戯れて時には釣針を呑み、鹿は深草に鳴いて、露が衣を濡らす。鳥は一度この御苑に舞えば天子の恩を感じ、一度ここに住めば天子の徳を感じる。秋月も秋風も遮るものはなく御苑に入り、獣は草を食み、鳥は粟を啄み満たされる。鳥獣が自由に舞い遊ぶごとく、人々も豊かで楽しめるのも全て天子の徳にあるのである¹⁹⁶。

以上、5首の仙境の要素が言及される神泉苑を詠んだ漢詩をとりあげた。「雑言。於神泉苑待讌、賦落花篇応製」においては、この神泉苑も「桃花源」のような世外仙境であることを示している。「九月九日於神泉苑宴群臣、各賦一物、得秋菊」においては、嵯峨天皇は神泉苑を造営し、菊を植え、菊は仙人が服用することを強調していることから、神泉苑の意匠は仙境と関係があることが推測できる。「晩夏神泉苑、同勒_二深臨陰心_一、応製一首」においては、神泉苑が西王母の苑と竜王の宮の宝殿と比すべき、神泉苑も仙境であることが表現されている。「秋日観神泉苑」においては、神泉苑は仙境のような所ということを示している。

これら4首の漢詩から、神泉苑の意匠は中国の道教仙境から影響を受けていることが分かるが、「蓬萊」と関係があるとは言えない。

他に、「九月九日侍宴神泉苑、各賦一物、得秋山」においては神泉苑の山を詠んでいる時、中国の東海三神山と五岳も言及され、「蓬萊」は東海三神山の1つであることから、「蓬萊」の要素には言及されたと考えられる。漢詩において、神泉苑の山は東海三神山と五岳の山に比すべき意匠であるが、確実に、神泉苑の山は蓬萊から意匠を持って建造されたこととは言えない。

したがって、5 首仙境の要素が言及される神泉苑を詠んだ漢詩の分析の結果、神泉苑の意匠は中国の道教仙境から影響を受けるが、「蓬莱」と関係があるとは言えないと考察される。

4. 4. 2 冷然院と「蓬莱」

冷然院は、嵯峨天皇時代に左京二条二坊三町～六町の四町の敷地で造営された離宮のひとつである（図 49）。廣安によると、平安時代前期、特に嵯峨朝を対象とするため、桓武朝の延暦 14 年（795）から清和朝の貞観 17 年（875）の 1 度目の火災までの記録を抜粋し、冷然院を詠んだ漢詩と賦は全部で 6 首ある。嵯峨天皇による勅撰漢詩集『文華秀麗集』に収められたものが 4 首、平安時代前期終盤および中期と時代は下がるものの、当庭園に関連する漢詩と賦が各 1 首である¹⁹⁷。

この 6 首の冷然院を詠んだ漢詩においては、主に庭園の自然風景に関する漢詩であるが、2 首は風景だけの内容であり（嵯峨天皇の「冷然院各賦一物、得澗底松。一首」に松の景色を描写され、桑原広田の「冷然院各賦一物、得水中影。応製。一首」に池と岸の景色を描写された）、残った 4 首は全て仙境と関係がある要素に言及している。

(1)「秋日冷然院新林池。探得池字。応製。一首。」においては、中国神仙思想に関する要素に言及されている。

「秋日冷然院新林池。探得池字。応製。一首。」は、ある秋の日の冷然院行幸の際に、冷然院に新しく造営された庭園について詠んだ漢詩であり、作者は嵯峨天皇の弟・淳和皇太弟である。廣安によると、秋の行幸記録は 2 つがあり、この漢詩が詠まれたのは年代的に古い弘仁 7 年（817）8 月丁巳（24 日）であると推定されている¹⁹⁸。

【原文】

君王本自耽_二幽趣_一

泉石初看此地奇

積水全含湖裏色

【読み下し文】

君王本自り幽趣に耽り

泉石初めて看すに此の地奇し

積水全く含む湖裏の色を

重巖不_レ謝_二硤中危

重巖謝らず 硤中の危きを

径栽晩竹春餘粉

径に栽うる晩竹春餘の粉

歳浅新林未_レ拱枝

歳浅き新林未だ拱かぬ枝

景物仍堪_レ遊_二聖目_一

景物仍し聖目を遊ばしむるに堪へぬ

何_レ勞整駕向_二瑶池_一

何ぞ 勞かむ整駕して瑶池に向かはむことを

「秋日冷然院新林池。探得池字。応製。一首。」『文華秀麗集』

【大意】

嵯峨天皇は幽趣を好み、この地に新林池を造られた。庭園のたたずまいは靈妙である。池の水はまるで湖水のように深く美しい色をみせる。幾重にも重なった巖は溪谷の陰しさに劣らない。小道に植栽されたタケは春の名残の粉を吹き、植えられたばかりの樹木はいまだ抱きかかえられる程には成長していない。この風景の眺めは天皇を楽しませるもので、ここにいれば仙境にあるという瑶池に向かう苦勞をする必要などありはしない¹⁹⁹。

この詩は中国唐の時代の漢詩と同じように、前部分は庭園の景色を描写し、大意に解釈するように、庭園においては、「池の水はまるで湖水のように深く美しい色をみせ、幾重にも重なった巖は溪谷の陰しさに劣らなく、小道に植栽されたタケは春の名残の粉を吹き、植えられたばかりの樹木はいまだ抱きかかえられる程には成長していない」という景色を描写した。続いて、後部分も中国の漢詩と同じように、庭園の景色について、感想を発表し、庭園の風景の眺めは天皇を楽しませるもので、ここにいれば仙境にあるという瑶池に向かう苦勞をする必要などありはしない、という考えが示されている。この漢詩に出現された「瑶池」は、中国の神話における崑崙山に関する要素である。「瑶池」は崑崙山における西王母の住む所であり、崑崙山の特徴としても中国の文学作品の中にも示されている。「景物仍堪_レ遊_二聖目_一、何_レ勞整駕向_二瑶池_一」の詩句に、冷泉院の景色が瑶池より綺麗、あるいは瑶池と同じ綺麗という描写から、冷泉院は崑崙山仙境と比較することが分

かり、ここが崑崙山のようなところ、或いは崑崙山よりいいところ、ということを述べている。しかし、ここには崑崙山の例が出て来るが、蓬萊は示されていない。

(2)「冷然院各賦一物、得瀑布水。応製。一首」にも、中国神仙思想に関する要素が言及された。「冷然院各賦一物、得瀑布水。応製。一首」は平安時代初期の官吏と詩人である桑原腹赤（都腹赤）（789～825）が創作したものである。桑原腹赤は遣渤海副使桑原秋成の子で、弟の貞継とともに上奏し氏姓を都宿禰に改めた。文章生を経て、少内記、大内記、大学頭、文章博士などを歴任し、正五位下となった²⁰⁰。

【原文】

【読み下し文】

兼山傑出院中陰	兼山傑出し院中陰しく
一道長泉曳レ布開	一道の長泉布を曳きて開く
驚鶴偏随レ飛勢レ至	驚鶴偏に飛勢に随ひて至り
連珠全逐レ逆流レ頹	連珠全く逆流を逐ひて頹る
巖頭照レ日猶零レ雨	巖頭に日は照れど猶し雨零り
石上無レ雲鎮聴レ雷	石上に雲無くして鎮に雷を聴く
疇昔耳聞今眼見	疇昔耳に聞き 今眼に見る
何勞絶レ粒訪レ天台レ	何ぞ 労かむ粒を絶ちて天台を訪はむことを

「冷然院各賦一物、得瀑布水。応製。一首」 桑原腹赤 『文華秀麗集』

【大意】

重なった山々が聳えて院のなかは陰しく、滝が白い布を引き伸ばした様に落ちる。水が落ちる様子は、驚いて飛び去るツルのように一直線である。ほとぼしる流れに白い珠が連なって落ちていく。岸の巖に日は照るが、滝の滴は降り注ぐ雨のようで、滝の音がまるで雷のように響いている。昔はこの滝のことを耳にしたが、今は実際にこの目で見ている。どうして、穀物を断ってまで霊仙のいる天台山の滝を訪うような苦勞をしようか²⁰¹。

この詩も前の「秋日冷然院新林池。探得池字。応製。一首」と同じように、前部分は庭園の景色を描写している。全詩は庭園の滝について書かれ、詳しく言えば、大意の解釈のように、庭園における重なった険しい山々から、滝が白い布を引き伸ばした様に落ち、水が落ちる様子は、驚いて飛び去るツルのように一直線であり、ほとぼしる流れに白い珠が連なって落ちていく。岸の巖に日は照るが、滝の滴は降り注ぐ雨のようで、滝の音がまるで雷のように響いている。その後、後部分も庭園の景色について、感想を記し、庭園の滝のことは昔には聞いたが、今回実際に見たところ、穀物を断ってまで霊仙のいる天台山の滝を訪う必要がない、という。この漢詩に示された「天台山」は、仏教天台宗の発祥地であるが、道教とも深い関係がある。この「天台山」は仏教に関する要素であろうか、道教に関する要素であろうか。

廣安は、行幸で詠まれた作品として、松の景色を描写した「冷然院各賦一物、得澗底松。一首」、池と岸の景色を描写した「冷然院各賦一物、得水中影。応製。一首」と、「冷然院各賦一物、得瀑布水。応製。一首」は、同じ詩宴での御製1首（「冷然院各賦一物、得澗底松。一首」）と応製2首（「冷然院各賦一物、得水中影。応製。一首」と「冷然院各賦一物、得瀑布水。応製。一首」）であることから、これらの漢詩の叙景対象はあくまでも冷然院の庭園であり、「遊天台山賦」という先行テキストを媒介として再構成された冷然院の風景であることを考える必要がある、と指摘している²⁰²。「遊天台山賦」は晋代の孫綽が創作した文学作品であり、賦に「天台山者、蓋山岳之神秀者也。涉海則有方丈、蓬萊，登陸則有四明、天台，皆元聖之所遊化，靈仙之所窟宅。」とあることから、天台山は仙人が住んでいる場所である（「靈仙之所窟宅」）。また、全文を見ると、天台山の仏教要素は表現されておらず、「非夫遠寄冥搜，篤信通神者，何肯遙想而存之」、「嗟台岳之所奇挺，實神明之所扶持」、「乎吾之將行，仍羽人於丹丘，尋不死之福庭」などの描写から、「遊天台山賦」では、主に天台山の道教神仙要素について述べた作品であると考えられる。以上の3つの漢詩の叙景対象は「遊天台山賦」という先行テキストを媒介

として再構成された冷然院の風景であることとするならば、「冷然院各賦一物、得瀑布水。応製。一首」の中に言及された「天台山」は仏教に関する「天台山」より、道教仙境に関する「天台山」の可能性が高いと考えられる。

〈史料 1051〉天台山者，蓋山岳之神秀者也。涉海則有方丈、蓬萊，登陸則有四明、天台，皆元聖之所遊化，靈仙之所窟宅。夫其峻極之狀，嘉祥之美，窮山海之富，盡人神之壯麗矣。所以不列於五嶽，闕載於常典者，豈不以所立冥奧，其路幽迴，或倒景於重溟，或匿峰於千嶺。始經魑魅之塗，卒踐無人之境。舉世罕能登陟，王者莫由禋祀。故事絕於常篇，名標於奇紀，然圖像之興，豈虛也哉。非夫遺世玩道，絕粒茹芝者，烏能輕舉而宅之。非夫遠寄冥搜，篤信通神者，何肯遙想而存之。餘所以馳神運思，昼詠宵興，俛仰之間，若已再升者也。方解纓絡，永托茲嶺。不任吟想之至，聊奮藻以散懷。

太虛遼廓而無閼運自然之妙，有融而為川瀆，結而為山阜，嗟台岳之所奇挺，實神明之所扶持。蔭牛宿以曜峰，托靈越以正基，結根彌於華岱。直指高於九疑，應配天於唐典。齊峻極於周詩，邈彼絕域，幽邃窈窕。近智者，以習見而不之。之者，以路絕而莫曉。晒夏蟲之疑冰，整輕翻而思矯。理無隱而不彰，啟二奇以示兆。赤城霞起以建標，瀑布飛流以界道，睹靈驗而遂徂忽。乎吾之將行，仍羽人於丹丘，尋不死之福庭，苟台嶺之可攀，亦何羨於層城，釋域中之常戀，暢超然之高情，被毛褐之森森，振金策之鈴鈴。披荒榛之蒙龍，陟峭嶠之崢嶸。濟檣溪而直進落五界，而迅徵跨穹窿之懸，磴臨萬丈之絕冥，踐莓苔之滑石，搏壁立之翠屏，攬樛木之長蘿，援葛藟之飛莖，雖一冒於垂堂，乃永存乎。長生必契誠於幽，昧履重險而逾平。既克於九折路，威夷而修通，恣心目之寥朗，任緩步之從容，藉萋萋之纖，草蔭落落之長松，觀翔鸞之裔裔，聽鳴鳳之嚶嚶，過靈溪而一濯疏。煩想於心胸，盪遺塵於旋流發五蓋之遊，蒙追羲農之絕軌。躡二老之元踪陟，降信宿迄於仙都。雙闕雲竦以夾路，瓊台中天而懸，居朱閣玲瓏於林間，玉堂陰映於高隅。彤

雲斐亹以翼樞，皦月炯晃於綺疏。八桂森挺以凌霜，五芝含秀而晨敷。惠風佇芳於陽林，醴泉湧溜於陰渠。建木滅景於千尋琪樹，璀璨而垂珠。王喬控鶴以沖天，應真飛錫以躡虛。騁神變之，揮霍忽出，有而入無，於是遊覽，既週體靜心閒，害馬已去，世事都捐 投刃，皆虛。目牛無全，凝思幽岩，朗詠長川爾。乃義和亭，午遊氣高騫法鼓，琅琅以振響，眾香馥馥以揚煙。肆覲天宗爰集，通仙挹以元玉之膏漱，以華池之泉，散以像外之說，暢以無生之篇，悟遣有之不盡覺涉。無之有間泯，色空以合跡。忽即有而得元釋二名之。同出消一，無於三幡，恣語樂以終日；等寂默於不言，渾萬像以冥觀兀同體於自然。（「遊天台山賦」）

道教仙境に関する「天台山」について、第2章第3節「蓬莱」の概念の第3段階において述べたように、道教洞天福地説によって、神仙は景色の綺麗な山と島に住み、そこは宗教修行に適した場所であり、洞天福地説に含まれた神仙が住む場所、いわゆる宗教修行に適した場所は『天地宮府図』に記載した十大洞天、三十六小洞天、七十二福地と十八水府、五鎮海濱、二十四治、三十六靖廬及び十洲三島である。

この三十六小洞天の中の第二十七洞天「金庭洞」は天台山にある。天台山の号は「金庭崇妙天」であり、位置は天台山琼台峰の麓であり、範囲は桐柏宮を中心とする九つの峯（玉女、臥龍、紫霄、翠微、玉泉、蓮花、華琳、香琳、玉霄）が囲まれた仙境である。桐柏宮の歴史は周の時代の周灵王太子晋が仙人になって、桐柏金庭洞天を管理する神話から初め、その後、漢代の末期に、道士葛玄がここで丹薬を練るこのもある。明代の王思任が書いた『天台山記』によると、「金庭洞」において、瑤池と蕊室も建てて、白鹿、青禽、靈芝、瑞草など仙境にいる動物と植物も成長している。

〈史料 1052〉下落金庭洞天，乃分探之。始走至，至則為桐柏宮，九峰環裏，三井元湛址，如仰盂有平田数十頃，乃司馬承禎修鍊地。按『真誥』記吳有勾曲之金陵，越有桐柏之金庭，三災不生，洪波不登，是宮，肇於周，靈於晋，盛於唐，

扈於梁宋。其為瑤池蕊室，玉宇丹台，白鹿青禽，靈芝瑞草者，不可勝紀。（「天台山記」）

史料には「瑤池」の要素に言及されている。第2章第3節において検討したように、道教が出現した後、崑崙、蓬萊など上古神話における特別な仙境は道教の一般的な仙境にとりいわれ、独特な特徴も道教の色々な仙境に応用され、崑崙、蓬萊などの特定の仙境の特徴より、一般的な道教仙境の特徴となった。したがって、ここの「瑤池」も崑崙の話ではなく、道教仙境の要素として配置されている。

「金庭洞」仙境において、南北においては、宮殿前両側に配置される高楼のように、2つの峯があり、「雙闕」の名称が付られている。この「雙闕」について、「遊天台山賦」にも「雙闕雲竦以夾路，瓊台中天而懸，居朱閣玲瓏於林間，玉堂陰映於高隅」の描写もある。このことから、「遊天台山賦」に描写された景色は「金庭洞」仙境の景色である可能性が高いと考えられる。

仙境中の盆地において、玉梭溪という小さい川があり、川の前両側に青龍、白虎両丘、印、劍両岩が配置されており、水口のところ広く開け、三つの井状な深潭を経て、巨大な滝を形成される。この滝は明代文学作家劉仁錫から「天下第一」と賞賛した桐柏滝である。

「冷然院各賦一物、得瀑布水。應製。一首」の最後に「今回実際に滝を見ると、穀物を断ってまで靈仙のいる天台山の滝を訪う必要がない」と感想された詩句の中の天台山の滝は「金庭洞」仙境の桐柏滝であるとも考えられる。「遊天台山賦」に「金庭洞」仙境における描写もあることから、この漢詩の中に言及された天台山の滝は「金庭洞」仙境の桐柏滝ではなくても、道教仙境と関係があると判断される。この詩句において、庭園の滝と天台山の滝を比較し、庭園も仙境であることも表現していると考えられる。

(3)「九日侍宴冷然院。各賦山人採藥。十韻。應制（毎句用一藥名二）」にも中国道教仙人の話を言及された。「九日侍宴冷然院。各賦山人採藥。十韻。應制（毎句用一藥名二）」は島田忠臣（828～892）が寛平3年（891）頃に編纂された『田氏家集』に収

められている作品である。

【原文】

山人参_レ跡薛蘿幽
旻景天晴採_レ藥遊
乍嗽_レ円施花水面
随_レ行斜滑石巖頭
欲_レ扶_二老到_一殷勤摘
教_レ苦_二心懷_一子細求
氣白_二前原_一真性逸
樹黄_二連野_一道心優
犬牙小逕来侵_レ月
龍胆深叢去趣_レ秋
誰計常思松子遇
未_レ知要繞葛陂投
愛_二將寓木_一長栖_レ露
遮_二弃重樓_一独枕_レ流
不_レ忍_二冬隣_一山植尽
暫防_二風急_一岸陰留
人銜_二快志_一筌筐滿
水寫_二清声_一洗始休
軟脚当_レ帰雲洞裏
事須_二万歳用_一仙羞_二

【読み下し文】

山人跡に参れば、薛蘿幽なり
旻景天晴れ、藥を採りて遊ぶ
乍ち漱げば、円く施る花水の面
行くに随ひて、斜めに滑る石巖の頭
老いの到るを扶けんと欲して、殷勤に摘み
心懷を苦しめ、子細に求む
氣は前原に白くして、真性逸しみ
樹連野に黄にして、道心優かなり
犬牙の小逕、来りて月を侵し
龍胆の深叢、去きて秋を趣ふ
誰か計らむ、常に思ひて松子に遇ふことを
未だ知らず、要め繞りて葛陂に投ぐることを
寓木を愛將して、長く露に栖み
重樓を遮弃して、独り流れに枕す
冬隣りなるを忍びず、山植尽き
暫く風の急なるを防ぎて、岸陰に留まる
人は快志を銜みて、筌筐滿ち
水は清声を寫して、洗始休ふ
軟脚当に帰すべし、雲洞の裏
事須く万歳に仙羞を用ゐるべし

「九日侍宴冷然院。各賦山人採藥。十韻。応制（毎句用一藥名二）」

島田忠臣 『田氏家集』

【大意】

山人が山道を分け入るが、カズラ類が生い茂って暗い。秋空は晴れて明るく、薬草採りにいく。口を漱げば、水紋が花の散り込む水面に広がり、進むにつれて、岩の辺りでは斜めに滑りやすい。老いの到来を助けようと、丁寧に薬草を摘み、仔細に探し求める。秋の気は前方の野原に白く、樹木は連なっている野いっばいに黄葉している。入り組んだ小道を来て月を楽しみ、リンドウの深い草むらを行き過ぎ、秋を追い求める。誰が日ごろから赤松子に会うことを取り計らおうとするだろうか。費長房がクズの沼に投げた仙杖を捜し求めることも自分には必要ない。ヤドリギを愛して、長らく露のなかに住み、幾重にも重なった楼閣を捨て去り、一人流れに枕して耳を洗い清める。冬が隣に来て草木が枯れてしまうのに耐えられない。しばらく強風を防ぐのに崖の陰にとどまる。魚を採るふせごも薬草の籠も満ちて快い。水の流れは清らかな管弦の響きのような水音を立て、私は手を洗い口を漱いで憩う。歩き疲れて雲の洞の中の我が住まいに帰る時が来た。永遠に仙人の食べ物である薬草を用いるのが良いであろう²⁰³。

詩句「誰計常思松子遇 未_レ知要繞葛陂投(誰か計らむ、常に思ひて松子に遇ふことを未だ知らず、要め繞りて葛陂に投ぐることを)」の中に言及した「葛陂投」は、中国道教の方士費長房と関係がある。『後漢書・列傳・方術列傳下』(〈史料 1052〉)によると、東漢時代に、費長房という人は一人の老翁と会って、一緒に瓢箪に入り、方術を勉強した後、老翁から竹杖をもらい、竹杖に乗ると、飛ぶことができる。老翁は「この竹杖に乗ったら、何処へでも行ける。到着したら、竹杖を葛陂(植物龍竹の別称)の中に投げよ」と費長房に伝えた。

〈史料 1053〉

費長房者、汝南人也。曾為市掾。市中有老翁賣藥，懸一壺於肆頭，及市罷，輒

跳入壺中。市人莫之見，唯長房於樓上睹之，异焉，因往再拜奉酒脯。翁知長房之意其神也，謂之曰：“子明日可更來。”長房旦日復詣翁，翁乃與俱入壺中。唯見玉堂嚴麗，旨酒甘肴盈衍其中，共飲畢而出。翁約不聽與人言之。後乃就樓上候長房曰：“我神仙之人，以過見責，今事畢當去，子寧能相隨乎？樓下有少酒，與卿為別。”長房使人取之，不能勝，又令十人扛之，猶不舉。翁聞，笑而下樓，以一指提之而上。視器如一昇許，而二人飲之終日不盡。

長房遂欲求道，而顧家人為憂。翁乃斷一青竹，度與長房身齊，使懸之舍後。家人見之，即長房形也，以為縊死，大小驚號，遂殯葬之。長房立其傍，而莫之見也。於是遂隨從入深山，踐荊棘於群虎之中。留使獨處，長房不恐。又臥於空室，以朽索懸萬斤石於心上，眾蛇競來齧索且斷，長房亦不移。翁還，撫之曰：“子可教也。”復使食糞，糞中有三蟲，臭穢特甚，長房意惡之。翁曰：“子幾得道，恨於此不成，如何！”

長房辭歸，翁與一竹杖，曰：“騎此任所之，則自至矣。既至，可以杖投葛陂中也。”又為作一符，曰：“以此主地上鬼神。”長房乘杖，須臾來歸，自謂去家適經旬日，而已十餘年矣。即以杖投陂，顧視則龍也。家人謂其久死，不信之。長房曰：“往日所葬，但竹杖耳。”乃發塚剖棺，杖猶存焉。遂能醫療眾病，鞭笞百鬼，及驅使社公。或在它坐，獨自恚怒，人問其故，曰：“吾責鬼魅之犯法者耳。”

汝南歲歲常有魅，偽作太守章服，詣府門椎鼓者，郡中患之。時魅適來，而逢長房謁府君，惶懼不得退，便前解衣冠，叩頭乞活。長房呵之雲：“便於中庭正汝故形！”即成老鰲，大如車輪，頸長一丈。長房復令就太守服罪，付其一割，以敕葛陂君。魅叩頭流涕，持割植於陂邊，以頸繞之而死。

後東海君來見葛陂君，因淫其夫人，於是長房劾系之三年，而東海大旱。長房至海上，見其人請雨，乃謂之曰：“東海君有罪，吾前系於葛陂，今方出之，使作雨也。”於是雨立注。

長房曾與人共行，見一書生黃巾被裘，無鞍騎馬，下而叩頭。長房曰：“還它馬，赦汝死罪。”人問其故，長房曰：“此狸也，盜社公馬耳。”又嘗坐客，而使至苑市鮓，須臾還，乃飯。或一日之閑，人見其在千里之外者數處焉。

後失其符，為眾鬼所殺。

『後漢書・列傳・方術列傳下』

詩句「軟脚当レ帰雲洞裏 事須三万歳用二仙羞一(軟脚当に帰すべし、雲洞の裏 事須く万歳に仙羞を用ゐるべし)」では、疲れたら、雲の洞の中ある住む場所に帰り、仙人を食べる薬草を食べて、万歳になることを描写し、庭園の中の山洞と植物は仙境にある仙人が住んでいる山洞と仙人が食べる薬草と同じである、ここも仙境のような場所だ、ということが示されている。

(4)「暮春、侍宴冷泉院池亭、同賦花光水上浮。應製」において、冷泉院は「萬葉の仙宮」、「百花の洞」と比喻され、ここは仙境のようなところということを示した。

【原文】

冷泉院者萬葉之仙宮、
百花之一洞也
景趣幽奇、
煙霞勝絶
…(後略)…

【読み下し文】

冷泉院は萬葉の仙宮、
百花の一洞なり
景趣幽奇き、
煙霞勝絶なり
…(後略)…

「暮春、侍宴冷泉院池亭、同賦花光水上浮。應製」

菅原文時 『本朝文粹』

【大意】

冷然院はよろずよの仙宮（後院）で、万花の咲き乱れる邸宅でもある。景趣は趣深く珍しい様子で、極めて素晴らしいものである。…(後略)…²⁰⁴

以上で、6首漢詩の中に、1首は中国仙境に関する「瑤池」、1首は中国道教仙境に関する「天台山」、1首は中国道教方士に関する「葛陂」、1首は道教仙境に関する「仙宮」、「洞」を言及された。この結果、平安時代において、冷泉院に関する漢詩から見ると、冷泉院の意匠は中国の道教仙境から影響を受けたものと推測できる。しかし、中国道教仙境の要素は引用されているが、「蓬莱」の要素には言及されていない。このことから、冷泉院の庭園の中島は「蓬莱島」と関係があるとはいえないと考察される。

4. 4. 3 嵯峨院と「蓬莱」

嵯峨院は平安京の西郊、嵯峨野に造営された離宮であり、『拾芥抄』においては「遍照寺在_レ西、嵯峨天皇御在所」と記されており、現在の京都市右京区嵯峨大沢にある大覚寺にあたる²⁰⁵。廣安によると、嵯峨朝において嵯峨院が詠まれた漢詩は5首であり、『文華秀麗集』から3首、『経国集』、『本朝無題詩』から各1首である。

このうち、仙境に関係がある漢詩は1首があり、藤原明衡が創作した「夏日大覚寺即事」である。

【原文】

晨出_二洛城_一日漸闌
嵯峨古院得_二盤桓_一
披_レ雲先礼_二氷顔潔_一
当_レ夏独垂_二雪鬢寒_一
葱北教文難_レ悟_レ李

院主頼公令_二予読_二西天正教述序_一。

荊南気味愁斟_レ蘭

于_レ時有_二盃酒_一

梵宮華構龜陰旧

【読み下し文】

晨に洛城を出て 日も漸く闌けなんとし

嵯峨古院に 盤桓することを得たり

雲を披きては 先づ氷顔の潔きを礼み

夏に当たりても 独り雪鬢寒きを垂れたり

葱北の教文 李を悟りて難く

荊南の気味 愁ひて蘭を斟みたり

梵宮の華構 龜陰に旧り

左伝云。亀陰者亀山之陰也。

仙洞珍奇馬腦残

仙洞の珍奇 馬腦残れり

太上天皇馬腦御枕。于レ今在ニ此寺ニ也。

松岸風生秋百尺

松岸風生て秋百尺

竹籬曉至露千竿

竹籬曉至て露千竿

何因遠覓蓬瀛地

何に因てか遠く覓めん 蓬瀛の地

象外勝形此处看

象外の勝形は 此の処に看ん

「夏日大覚寺即事」藤原明衡

【大意】

夜明けに城を出て、だんだんと日も昇ってきたところで、嵯峨古院をぶらぶらと歩き回っている。覆い隠しているものを除き、御仏の御顔に拝したが、夏であるのに独り雪のように白毛を垂れる己の身が切ない。御仏の教えもその奥理は悟り難く、強いて酒を傾け味わうわけである。この寺の立派な構えも亀山の北の地に歳月を重ね、この故地には太上天皇が御使用になられた珍宝の馬瑙の御枕が残されているとか。松の岸边に風が吹いて秋涼を感じさせ、竹籬には明け方の露がおりるという好ましき。どうして遠く神仙の境など求める必要があらうか。なんとなれば、俗外の勝地のすばらしさを、この地で十分見て楽しめるからである²⁰⁶。

「夏日大覚寺即事」は藤原明衡の漢詩で、平安時代中期に完成した『本朝無題詩』に収められている。この漢詩は、嵯峨院が大覚寺になってから後の様子を詠んだものであるが、参考までに示す²⁰⁷。

詩句「仙洞珍奇馬腦残(仙洞の珍奇 馬腦残れり)」から、嵯峨院に残った太上天皇の馬腦御枕は「仙洞珍奇」の形容詞を付けている。道教の仙人が住んでいる場所は常に「仙洞」と呼ばれ、道教仙境の宝物のような物が嵯峨院にあることから、嵯峨院も仙境のよう

な場所だ、ということが示されている。また、最後の詩句「何因遠覓蓬瀛地 象外勝形此
処看(何に因てか遠く覓めん 蓬瀛の地 象外の勝形は 此の処に看ん)」は「俗外の勝地
のすばらしさを、この地で十分見て楽しめるから、遠く「蓬莱」、「瀛洲」など神仙の境
を求める必要がない」ということを詠んで、「蓬莱」、「瀛洲」の要素に言及されている。

しかし、ここの「蓬莱」、「瀛洲」は嵯峨院の景色の比較対象として、嵯峨院の意匠の
モチーフではないと考えられることから、嵯峨院の意匠は「蓬莱」と関係があるとは言え
ないと考えられる。

4. 4. 4 河陽離宮と「蓬莱」

河陽離宮は、淀川上流域の山崎に位置し、具体的には現・離宮八幡宮（京都府乙訓郡
大山崎町字大山崎小字西谷 21—1）付近一帯にあったと考えられている²⁰⁸。廣安によると、
嵯峨朝において河陽離宮が詠まれた漢詩は 36 首であり、そのうち、『凌雲集』から 8 首、
『文華秀麗集』から 20 首、『経国集』から 2 首、『本朝無題詩』から 1 首、『群書類
従』（134 巻・文筆部 13）から 5 首である。

36 首漢詩のうち、5 首には仙境の要素が言及されている。

(1、2) 御製の「江上船」と朝野鹿取が御製に応じて詠んだ「江上船」においては、長
い淀川を行く帆船の様子を詠んでおり、仙境の要素が表現されている。

【原文】

一道長江通千里
漫漫流水漾行船
風帆遠没虚無裡
疑是仙查欲上_レ天

【読み下し文】

一道の長江千里に通ひ、
慢々なる流水行船を漾はす。
風帆遠く没る虚無の裡、
疑ふらくは是れ仙查の天に上らむとするかと

「江上船」 御製

【大意】

筋の長い川が千里の遠くまでも通じ、 広く豊かな水上を航行する船が漂って

いる。風をはらんだ帆は遠く、霧や靄のなかに消える。あたかも仙人の筏が天に昇ろうとするのではないかと思われるようだ²⁰⁹。

【原文】

江潮漫漫流幾年
日夜送迎往還船
已似_下飛龍遊_中雲裏_上
還看_下翔鳳入_中天辺_上

【読み下し文】

江潮漫漫流ること幾年ぞ、
日夜送迎す往還の船。
已に飛龍の雲裏に遊べるに似て
還た翔鳳の天辺に入るを見る
「江上船」 朝野鹿取

【大意】

川にさし入る潮が漫々と漲って流れている。いったい幾年月こうやって流れているのだろう。夜も昼も往来する船を送り、また迎える。河上の船の様子は飛びかける龍が雲の中で遊んでいるようであり、飛びかける鳳凰が天にかけ入るのを見るようでもある²¹⁰。

御製の「江上船」においては、淀川を行く帆船の帆に風を孕み、遠く靄のなかに消えていく様子を仙人の筏と比喻し、朝野鹿取の「江上船」においては、淀川を行く船の様子は飛びかける龍が雲の中で遊んでおり、飛びかける鳳凰が天にかけ入ることを比喻し、淀川が仙境であるということが示されている。

(3) 坂田永河の「雑言。奉和聖製河上落花詞一首」にも、「武陵」が言及され、庭園の濃厚な香りは陶淵明が創作した『桃花源記』に記載された武陵の漁夫が桃源境に案内しようと迷った故事と同じような場所であることを詠んだ。そして、次の「輕盈髣髴陽台夢(輕盈髣髴たり陽台の夢)」という詩句から、庭園における軽やかで美しい落花は楚襄王の夢に現れた巫山の神女と比喻し、河陽離宮のお花は仙境の花のようなものであることから、河陽離宮も仙境であったと考えられる。

【原文】

天子乗_レ春幸_二河陽_一
河陽旧来花作_レ県
一県併是落花時
落花颿颿映_二江辺_一
濃香不_レ異武陵迷
輕盈髣髴陽台夢
山路吹落明月中
渡頭紛紛細草叢
惜_二落花_一
飛来飛去任_二春風_一
将花擬_レ人人将_レ故
人故花新遞惜_レ紅
只為_二芬芳_一近_レ仙看
万樹榮暉一種同
看_二落花_一
一半蕭灑一半結
今歲蹉跎雖_二落尽_一
明年還復堪_二攀折_一

【読み下し文】

天子春に乗じて河陽に幸す、
河陽は旧来花を県と作す。
一県併て是れ落花の時、
落花颿颿江辺に映ろふ。
濃香異にあらず武陵の迷、
輕盈髣髴たり陽台の夢。
山路吹落す明月の中、
渡頭紛紛たり細草の叢。
落花を惜しむ、
飛び来り飛び去り春風に任す。
花を人に擬え人故りなむとす、
人故り花新しく遞ひに紅を惜しむ。
ただ芬芳をなし仙に近きを看る、
万樹榮暉し一種同じ。
落花を看る、
一半は蕭灑し一半は結ぶ。
今歲蹉跎として落ち尽くすと雖も、
明年還復攀折に堪えむ。

「雑言。奉和聖製河上落花詞一首」 坂田永河

【大意】

春の季節に促されて、河陽に行幸した。潘岳の昔より、河陽は花が著名である。
河陽の至るところで落花のときを迎え、落花は翻り川辺に輝いている。濃厚な香
りは武陵の漁夫が桃源境に案内しようと迷った故事と同じく、 軽やかで美しい

落花は楚襄王の夢に現れた巫山の神女のごとくである。河陽離宮の裏、月明かりの中落花が吹き散り、淀川の渡し場では十分に伸び切らない草むらに落花が入り乱れる。落花を惜しむ。春風が吹くままに、こちらに飛び来ては、飛び去って行く。年を重ねる人は色あせようとするわが紅顔を惜しみ、新しく咲く花は散りゆく紅色を惜しむかのようだ。花はひたすら芳しく香り、仙境に近いようだ。数多の樹木がともに花で輝く。落花をみる。花が半分散り、半分は枝に残っている。今年の春は忽ち過ぎ、花はことごとく散ってしまったが、来年もまた再び花開き、枝を手折ることができよう²¹¹。

(4) 有智子内親王の「雑言。奉和聖製河上落花詞。」にも「武陵」が言及されている。漢詩の最初から、武陵の桃源郷の伝説は、遠い昔よりむなしく伝わり、地形が奥深く、旅人を迷わせ、今日の前の河陽の花が桃源郷の花のように咲いたことを詠んでいる。続いて、最後に、「唯有_二釣船鏡中度_一 還疑_二查客与_レ天来_一（唯し釣船の鏡中を度ること有り、還りて查客天より来たれるかと疑う）」という詩句から、月光の中、淀川に釣り船が浮かんでおり、筏に乗って天の川をみたというあの客が天から降りてきたと思うことを詠んでいる。これらの詩句から、河陽離宮も仙境のような所として詠まれているといえよう。

【原文】

本自空伝武陵溪

地体幽深來者迷

今見河陽一縣花

花落紛紛接_二烟霞_一

孤嶼芳菲薄晚暉

夾岸飄飄後前飛

【読み下し文】

本自空しく伝ふ武陵の溪、

地体幽深にして来る者迷ふ。

今し見る河陽一県の花、

花落つこと紛紛にして烟霞に接ぐ。

孤嶼芳菲にして薄晩に暉る、

夾岸飄飄にして後前に飛ぶ。

歴覧＝江村－花猶故

経過＝民舎－人復稀

対落花

落花猶未レ歇

桃花李花一段発

儻忽帶レ風左右渡

須臾攀折日将レ暮

歴乱香風吹不レ止

湖裏彩浪無数起

看＝落花－

落花作レ雪満＝空裡－

空裡飛散投＝江水－

可憐漁翁花中廻

可憐水鳥蘆裡哀

唯有＝釣船鏡中度＝

還疑＝查客与レ天来＝

江村を歴覧するに花猶し故る、

民舎を経過するに人も復稀らなり。

落花に対ふ、

落花猶し歇まず、

桃花李花一段発く。

儻忽にして風を帯びて左右に渡る、

須臾にして攀折し日まさに暮れなむとす。

歴乱なる香風吹きて止まず、

湖裏の彩浪無数に起る。

落花を見る

落花雪に作りて空裡に満つ、

空裡に飛び散りて江水に投る。

憐れぶべし漁翁花中を廻る、

憐れぶべし水鳥蘆裡哀しぶ

唯し釣船の鏡中を度ること有り、

還りて查客天より来たれるかと疑う。

「雑言。奉和聖製河上落花詞。」 有智子内親王

【大意】

遠い昔よりむなしく伝わる武陵の桃源郷の伝説、地形が奥深く、旅人を迷わせる。今まさに目にしているのは河陽の花が咲き乱れた光景である。落花が散り、煙霞の間を舞う。淀川の川中の一つの離れ小島に落花が香り高く夕方に輝いている。川の兩岸では落花が風に翻り前や後ろに舞い飛ぶ。淀川べりの村をあちこち見て回ると花はすでに散り、民家を通り過ぎると人も疎らである。散りゆく花にむかう。やむことなく花は散り、桃や李の花が開く。忽ち、花は風に煽られてあちらこちらに飛び交い、花の枝を手折ろうとするが日が暮れようと

している。 入り乱れる花の香りを含んだ風が吹きやまず、 波の上に花が散り、
鮮やかな波があまた起こる。漁夫は水面に浮か花弁の間をぬいめぐり、水鳥は蘆
の間で鳴いている。月光の中、淀川に釣り船が浮かんでいる。筏に乗って天の川
をみたというあの客が天から降りてきたのではないかと思う²¹²。

(5)嵯峨上皇の「七言山居驟筆一首」に「蘿戸閉来無_二一事_一 莫_レ言吾侶隠須_レ招(蘿戸
閉ち来り一事も無く、言ふこと莫れ吾が侶須く隠招くべしと)」の詩句があり、仙人のよ
うに隠遁する話が詠まれている。

【原文】

孤雲秋色暮蕭條
魚鳥清機復寥寥
欹_レ枕山風空蕭殺
横_レ琴溪月自逍遙
僻居人_レ老文章拙
幽谷年深鬢髮凋
蘿戸閉来無_二一事_一
莫_レ言吾侶隠須_レ招

【読み下し文】

孤雲秋色暮れ蕭條たり、
魚鳥清機復寥寥たり。
枕を欹つるに山風空しく蕭殺す、
琴を横たふるに溪月自づからに逍遙す。
僻居人老い文章拙し、
幽谷年深く鬢髮凋む。
蘿戸閉ち来り一事も無く、
言ふこと莫れ吾が侶須く隠招くべしと。

「七言山居驟筆一首」 太上天皇

【大意】

雲が一つ浮かぶ。晩秋になり、物寂しい。山居の近くの魚や鳥もまた物悲しい。
枕をそばだてて聞くに、山に吹く風が空しく響き、秋の侘しさを駆り立てる。琴
を横たえると、溪月は自ら秋空を逍遙する。辺鄙なところに隠遁する私も老いた
が文章はいまだに拙い。 幽谷は年を経ても変わらないが、 私の髪は少なくな
り年老いた。 サルオガセの生い茂る家の戸は一度もたたかれることはない。言

うな、仲間と共に隠遁すればいいなどと²¹³。

以上 5 首の漢詩の分析から、2 首においては、淀川が仙境のような所であることを詠んでおり、2 首は、河陽離宮のお花は武陵の桃源郷仙境のお花のようなものであると詠んでおり、1 首においては河陽離宮の景色を見て、仙人のように隠遁することが詠まれている。これらの内容から、河陽離宮の意匠は神仙仙境との関係があるといえる。しかしながら、「蓬莱」の要素に言及されていないことから、河陽離宮の意匠は「蓬莱」と関係が無いと考えられる。

4. 4. 5 淳和院と「蓬莱」

淳和院（西院）は嵯峨天皇の弟で第 53 代天皇となった淳和天皇（在位 823-833）の離宮である。淳和院は時代天皇が大伴親王であった時代からの邸宅であった「南池」であり、南池は弘仁・天長年間に現れる名称で、天長 10 年(823)に淳和太上天皇の後院となつてから、「淳和院」とする記録が現れる。そのころ「西院」の異称もあらわれ、この名称は現在もこの付近一帯の地名として残っている²¹⁴。

廣安によると、嵯峨朝において淳和院が詠まれた漢詩は 10 首であり、そのうち、『凌雲集』から 4 首、『文華秀麗集』から 2 首、『本朝無題詩』から 3 首、『本朝文粹』から 1 首となっている²¹⁵。10 首漢詩のうち、4 首には仙境の要素が言及されている。

(1) 嵯峨天皇の「夏日皇太弟南池」に庭園の景色を詠んで、漢詩の最後に「天下の人々は等しく、皇太子も徳を備えており、どうしてわざわざ皇太子の補佐役を求める為に、商山という四人の隠遁者の住む山を訪れる必要があるだろうか」という感想が述べられている。直接に庭園の比喩ではないが、庭園の景色を見ることから、天下のことを考え、仙境の話につながっている。

【原文】

納涼儲式南池裏

【読み下し文】

納涼す儲式の南池の裏、

尽洗_二煩襟_一碧水湾

岸影見知楊柳処

潭香聞得芰荷間

風来前浦収_レ煙遠

鳥散後林欲_レ暮閑

天下共言貞_二万国_一

何勞_二羽翼_一訪_二商山_一

尽くに煩襟を洗ふ碧水の湾。

岸影見て知りぬ楊柳の処、

潭香聞くこと得たり芰荷の間。

風来り前浦煙を収めて遠し、

鳥散り後林暮れなむとして閑けし。

天下共に言ふ万国を貞すと、

何ぞ労かむ羽翼して商山を訪はむことを。

「夏日皇太弟南池」 嵯峨天皇『凌雲集』

【大意】

暑さを避けて涼みをする東宮の南池のほとり、煩わしい心をすっかり洗い落してしまうこの青い水を湛えた池の浦で、池岸に映る水影をみてはヤナギの所在を知り、池淵の辺りににおう香を聞いては、それがヒシやハスのある辺りから漂うことを知ったのである。風が吹いて来て、前の池の入江に立ち込めていた靄が収まり遠くまで眺めることができるようになり、鳥が立ち去って、後ろの林は暮れようとして静かである。天下の人々は等しく、「天下に大善があると天下は正しくなる」と言う、もちろん皇太子もこのような徳を備えているのだが、どうしてわざわざ苦勞してまで鳥の翼に乗って（皇太子の補佐役を求める為に）、商山という四人の隠遁者の住む山を訪れる必要があるだろうか²¹⁶。

(2) 嵯峨天皇はもう 1 つの漢詩、「秋日皇太弟池亭、賦天字」にも、仙境の要素が言及されている。

【原文】

玄圃秋云肅

池亭望_二爽天_一

【読み下し文】

玄圃秋云に肅しく、

池亭爽天を望む。

遠声驚_二旅雁_一

遠声旅雁に驚く、

塞引聴_二林蟬_一

塞引林蟬に聴く。

岸柳帷初断

岸柳帷初めて断ゆ、

潭荷葉欲_レ穿

潭荷葉穿たれむとす。

肃然幽興処

肃然に幽興の処にして、

院裡満_二茶煙_一

院裡茶煙満つ。

「秋日皇太弟池亭、賦天字」 嵯峨天皇『凌雲集』

【大意】

東宮の御苑の辺りは秋が厳しく、池辺の亭から爽やかな秋空が望まれる。旅の空を飛ぶ秋雁の遠音に驚き、寒そうな声でなく林の秋蟬の声に耳を傾ける。池の岸辺の柳の茂った葉はやっと散り始め、池の淵の蓮の葉は破れようとしている。ここは物寂しく、静かな趣のあるところであって、池亭の庭の辺りには茶煙が立ち込めている²¹⁷。

「玄圃秋云肃(玄圃秋云に肃しく)」の詩句において、「玄圃」という要素が詠まれている。「玄圃」は「瑤池」と同じように中国の神話における崑崙山に関する要素である。

「玄圃」は崑崙山の山頂に位置し、金台、玉楼などが配置されている。『淮南子・卷四・墜形訓』においては、「玄圃」について、「崑崙之丘，或上倍之，是謂涼風之山，登之而不死。或上倍之，是謂懸圃，登之乃靈，能使風雨。或上倍之，乃維上天，登之乃神，是謂太帝之居。(崑崙の山、倍登ったら、涼風の山であり、ここに来たら、不死になる。さらに倍登ったら、懸圃であり、ここに来たら、靈力をもらい、風雨を使える。さらに倍登ったら、上天に到着し、神になり、太帝の居場所である。)」という記述がある。

「瑤池」と同じように、道教が出現した後、崑崙、蓬萊など上古神話における特別な仙境は道教の一般的な仙境になり、独特な特徴も道教の色々な仙境に応用され、崑崙、蓬萊などの特定な仙境の特徴より、一般的な道教仙境の特徴となった。したがって、ここの

「玄圃」も崑崙の話ではなく、道教仙境の要素として配置されている可能性もあると考える。

この漢詩においては、嵯峨天皇が淳和院の景色を詠まれる時、直接に仙境の名前を付けることから、淳和院の意匠にも仙境と関係があると考えられる。

(3) 菅原在良の「秋日淳和院即事」においては、淳和院の景色を描写した後に、「今到＝勝形仙洞地＝ 放遊終日感＝心肝＝（今勝形仙洞の地に到り、放遊して終日心肝を感ましむ）」という詩句を詠んで、淳和院は仙境にも匹敵する勝地であると称賛しており、淳和院の意匠には仙境と関係があると考えられる。

【原文】

季商九月興難_レ闌
偶伴_＝詩朋_＝動_＝筆端_＝
仏閣年深香火旧
禅窓秋暮衲衣寒
荒籬逼_レ砌対_＝東菊_＝
遠岫繞_レ牆望_＝上闌_＝
今到_＝勝形仙洞地_＝
放遊終日感_＝心肝_＝

【読み下し文】

季商九月興闌き難く
偶詩朋を伴ひて筆端を動かせり
仏閣年深くして香火旧り
禅窓は秋暮れて衲衣寒し
荒籬砌に逼りて東菊に対かひ
遠岫牆を繞りて上闌を望む
今勝形仙洞の地に到り
放遊して終日心肝を感ましむ

「秋日淳和院即事」 菅原在良 『本朝無題詩』

【大意】

秋も末の九月は興趣尽き難く、こうしてひょっこり詩友と詩作を共にすることになった。この仏閣は歳月を重ね、香を焚くにも風情があり、窓辺に秋も暮れ、墨染の衣も寒く感じられる。捨て置かれたまがきは東の軒先にあり、菊が望まれる。遠くの山は垣根を囲む様で、上闌山が眺められる。今こうして優れた仙境ともいうべき地に来て、思うままに遊び、一日中哀れを嘯みしめたのである²¹⁸。

(4)源順の「晩秋遊淳和院。同賦波動水中山」にも仙境の要素が言及されている。

「雖_二彼崑閬_一 何以加_レ之(彼の崑閬と雖も、何を以てかこれに加へん)」の詩句においては、「崑閬」の要素が言及されている。「崑閬」は崑崙山における門苑の意味であり、常に文学作品の中に、崑崙山などの仙境として引用されている。例えば、南朝・宋の鮑照の『舞鶴賦』に「指蓬壺而翻翰，望崑閬以揚音」の詩句があり、唐代の穀神子の『博異志・陰隱客』に「修行七十萬日，然後得至諸天、或玉京、蓬萊、崑閬、姑射。」を記載し、「崑閬」は道教仙境の1つの崑崙山を指して言及され、清代の俞樾の『春在堂隨筆・卷四』に「昨遊崑閬循丹梯，海天一碧揩瑠瓊」と書き、「崑閬」も道教仙境とされている。

「雖_二彼崑閬_一 何以加_レ之(彼の崑閬と雖も、何を以てかこれに加へん)」の詩句から、淳和院の景色は崑崙山の仙境と比較しても、負けないことを表現し、この漢詩からも、淳和院の意匠は仙境と関係があると推測できる。

【原文】

淳和院者
橘太后之別宮也
太后落_レ飴入_レ道之日
一掃_二椒庭之塵_一
長住_二蓮臺之月_一
爾來人事雖_レ訛
地勢如_レ舊
軒檻重重
碧波亭之構不_レ異
池塘眇眇
青草湖之樣相同

【読み下し文】

淳和院は、
橘太后の別宮なり。
太后飴を落とし道に入りたまひしの日、
一たび椒庭の塵を掃きて、
長く蓮月の臺に住す。
爾來人事訛れりと雖も、
地勢舊のごとし。
軒檻重重たり、
碧波亭の構異ならず、
池塘眇眇たり、
青草湖の樣相同じ。

雖_二彼崐閬_一

何以加_レ之

矧亦水銜_二山影_一

山任_二波心_一

底深則山又深

波動則山又動

誰謂巖靜

轉_二數仞於一池之秋_一

誰謂嶺高

浸_二青黛於綠潭之曉_一

是以輕漾卷兮微微

崎嶇吐_レ雲之色頻蕩

細丈鋪兮瑟瑟

崔嵬戴_レ石之勢不_レ閑

則知強楚拔_レ山之力

不_レ如_二季商吹_レ水之風_一

…（後略）…

彼の崐閬と雖も、

何を以てかこれに加へん。

矧んや亦水は山影を銜み、

山は波の心に任せり。

底深ければ則ち山又深く、

波動けば則ち山又動く。

誰か謂ふ巖靜なりと。

數仞一池の秋に轉ず。

誰か謂ふ嶺高しと。

青黛を綠潭の曉に浸せり。

是を以て輕漾卷きて微微たり、

崎嶇雲を吐崎嶇吐くの色頻りに蕩く、

細文鋪きて瑟瑟たり、

崔嵬石を戴くの勢閑かならず。

則ち知りぬ強楚の山を抜くの力、

季商水を吹くの風にしかざるを。

…（後略）…

「晩秋遊淳和院。同賦波動水中山」 源順 『本朝文粹』

【大意】

淳和院は橘太后の別宮である。太后が落飾入道の日、俗世の塵を一掃し、仏門に入られた。その後人々の往来は少なくなったとはいえども、地勢は昔と変わらない。軒檻は重壮で碧波亭の佇まいも昔のままである。池の堤は遥か遠くに望め、青草湖の様子も変わらない。あの崐閬（仙人の住处）といえども、どうしてここに何を加えようというのか、いや加える必要はない。水は山影をふくみ、山影は水心に任せてゆらゆらと動く。池底が深ければ、水に映り込んだ山もまた

高く聳え、波が動けば山が動く。誰が巖静だなどというのだろうか、数仞(中国古代の高さ深さの単位)をころころと変えるのは池に映る秋の様子である。誰が嶺高だと言うのか、青黛(藍染めなどに使う青い染料)を侵すのは水を深く湛えた淵に浮かぶ暁である。さざ波が起こり、陰しい山から様々な雲が湧く。風で細かい水文が起こり、霊妙な築山と石組がゆらめく。すなわち、山を貫くほどの力は水面を吹く風の力より弱いことを知るのだ。(以下略)²¹⁹

以上、4首の漢詩を分析した結果、嵯峨天皇の「夏日皇太弟南池」と「秋日皇太弟池亭、賦天字」においては仙境の要素が言及されていた。「夏日皇太弟南池」には直接に庭園の比喻ではないが、庭園の景色を見ることから天下のことを考え、仙境の話が出てくる。「秋日皇太弟池亭、賦天字」においては、淳和院の景色を詠まれる時、直接に仙境の名前「玄圃」を付ていることから、淳和院の意匠は仙境と関係があると考えられる。菅原在良の「秋日淳和院即事」においては、淳和院は仙境にも匹敵する勝地であると称賛され、源順の「晚秋遊淳和院。同賦波動水中山」にも「崑閬」の要素が言及され、淳和院の景色は崑崙山の仙境と比較しても負けないことが表現されている。これらの漢詩から、淳和院の意匠は仙境と関係があると推測できる。しかし、「蓬莱」の要素が言及されていないことから、河陽離宮の意匠も「蓬莱」と関係が無いと考えられる。

4. 4. 6 閑院と「蓬莱」

閑院は、平安時代初期に藤原冬嗣(775～827)が創建した邸宅である。現在の京都市中京区小川通二条下ル古城町西福寺内に当たる(図50)。廣安によると、嵯峨朝において閑院が詠まれた漢詩は6首である²²⁰。

そのうち3首は同じ行幸の際に詠まれた漢詩で、嵯峨天皇が漢詩を詠み、淳和皇太弟と滋野貞主がそれに応えて詩を賦したものである(淳和皇太弟の「夏日左大將軍藤原朝臣閑院納涼。探得閑字。応製。一首。」に夏の植栽を詠まれており、嵯峨天皇の「夏日左大將軍藤冬嗣閑居院」に庭園の風景と活動を詠まれており、滋野貞主の「夏日倍幸左大將藤

原冬嗣閑居院、応製」にも庭園の風景と活動を詠まれた)。

1 首は、藤原冬嗣が閑院にて藤原吉野と甲斐の判官・藤原某に送った漢詩に、巨勢識人が和したもの「敬和左神策大將軍春日閑院餞美州藤大守甲州藤判官之作。一首」であり、閑院の庭園についての描写が非常に少ない。

1 首は、淳和皇太弟が詠んだ「餞美州掾藤吉野。得花字。一首」、この漢詩も餞別の作品であり、1 首は、閑院にヤナギを移植した出来事について滋野貞主が詠んだ漢詩「五言遙和播州長史丹治中得絮柳請植左大將軍閑院之作」であり、主に庭園の植栽に関する描写である。

この 6 首の漢詩からみると、閑院においては、神仙思想に関する要素には言及されていない。これは閑院は藤原冬嗣の邸宅であり、天皇の離宮ではないことと関係があると考えられる。

本節の検討から、平安初期の宮廷の建築と庭園の様式は浄土変相図に参考して建造することより、浄土変相図は建築と庭園に参考して描いたものの可能性が高いと考えられ、寝殿造の庭園様式は中国の唐の時代の皇家園林に影響を受けたものとする。

庭園の形式から見ると、最も類似する形は大明宮である。大明宮の庭園における中島は蓬萊島であるが、6 個の中島が配置された平安時代初期の庭園を例として、嵯峨朝の漢詩から検討した結果、庭園の意匠は神仙思想と関係があり、庭園における中島は神仙島であることがうかがえるが、蓬萊島との関係はみられない。

第 5 節 本章の結論

本章において、飛鳥時代庭園の石造物、奈良時代の東院庭園、平安初期の庭園の中島を対象として、「蓬萊」との関係について検討した。その結果、以下の 3 点について指摘した。

第 1 に、第三章において検討した飛鳥時代、奈良時代と平安時代初期の事例から見ると、これらの宮廷庭園の事例においては、確実に「蓬萊」と関係がある庭園構成要素を見

ることはできなかった。

第2に、平安時代以前、日本庭園は既に中国の道教神仙思想から影響を受けていた。しかし、様々な要素が混在して表現されていたことから、奈良時代において、日本庭園はすべての中国の道教仙境を「蓬莱」の名称のもとに総合化表現していたものと考えられる。

第3に、平安時代の初期の庭園においては、唐代の大明宮の「蓬莱島」のような中島が配置されていた。しかしながら、これらの中島には「蓬莱」との関係性はみられなかった。

第4章 終章

本研究の各章を通じて得られた成果は下記のようにまとめられる。

第1章では中国と日本の庭園及び「蓬莱」に関する先行研究を整理し、研究に至る背景を述べ、研究課題と位置づけを明確にし、研究の目的と研究方法について述べた。

中国庭園における「蓬莱」に関する先行研究によれば、その特徴は主に「一池三山」であるとの説がほぼ定説となっており、庭園を紹介する専門書や一般書においてもほぼ全てがこの説に言及している。しかしながら、「一池三山」に関する先行研究においては、以下の内容について検討されていない。第1に、「一池三山」様式について時代順に具体的にどのような様子で庭園に配置されるか、どのような特徴があるか。第2に、「一池三山」様式が時代順によってどのように変化してきたのか。第3に、その変化の背景にはどのような要因があるのか。

すなわち、「一池三山」様式は秦漢時代に形成され、その後も歴代の皇家園林で応用されたという観点が指摘されているが、本研究においては、中国皇家園林における蓬莱の配置を検討するなかで、この観点について検証した。

日本庭園については、飛鳥時代、奈良時代、平安時代の庭園において、「蓬莱」との関係性が考えられる庭園構成要素がいくつかあるが、これらに関する検証は十分になされてきたとはいえない。

そこで本研究では「蓬莱」の概念と応用の観点から、中国と日本の庭園における「蓬莱」の配置を具体的に検討し、「蓬莱」に関する幾つかの問題を明らかにする。具体的には以下の二つの目的がある。一つは、中国皇家園林における「蓬莱」という用語及び「蓬莱島」がどのように発祥し、発展してきたのかを文献によって明らかにする。さらに庭園への応用や、時代と共に変化する「蓬莱」の配置について明らかにすることである。もう一つは、日本の飛鳥時代、奈良時代と平安時代に、宮庭庭園における「蓬莱」と関係性が考えられる要素について検討し、「蓬莱」との関係性を検討・考察することである。

第2章では中国における「蓬莱」の語源と変遷について史料をもとに考察し、次に庭

園における「蓬莱島」の展開と変遷について検討し、最後に中国皇家園林における「蓬莱」の配置の展開と変遷を考察した。その結果、以下のことを明らかにした。

「蓬莱」の語源について、「蓬莱」の展開と変遷は4つの段階、6つの時期に分けられることを示した。

「蓬莱」の発生期は上古時期(約紀元前3000年-約紀元前2070年)から戦国前期(紀元前5世紀)までである。「蓬」と「萊」の本来の意味は植物の名前であるが「蓬莱」は初出の時点において、既に固有名詞として使用されている。「蓬莱」についての最初の記録は戦国時代の『列子・湯問』(戦国前期・紀元前5世紀)であり、『列子・湯問』により以前の書籍に「蓬莱」がすでに出現している可能性も高いと考える。

「蓬莱」の盛期は最初の記録(紀元前5世紀)から、東漢末期(126年-144年)道教が出現する以前である。この時期、皇帝が神仙思想に強い関心を持ったことから、求仙活動に関する「蓬莱」についての記述が以前より増加している。しかし、記述の量の増加の原因は皇帝の求仙活動からのみといえるであろうか。秦代以前の「蓬莱」に関する記述は、秦の始皇帝が多数の記録を燃したことから残されていない可能性も考えられるからである。

史料の分析の結果、秦代から漢代までにおいて、「蓬莱」に関する記述は主に皇帝の求仙活動に関するものであった。「蓬莱」は主に東海仙島の名前として記録されている。

「蓬莱」島の特徴などについての具体的な記録は2点しかない。1点は最初の記録『列子・湯問』に記述された「蓬莱」の特徴である。もう1点は後代の創作である可能性がある。この時期、「蓬莱」の概念が盛んであったが、その内容は、発生期から変化はみられない。

「蓬莱」の派生期は東漢末期(126年-144年)道教が出現する時から宋代の終わり(紀元1279年)までであり、さらに、派生Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ3つの時期に細分できる。「蓬莱」の派生Ⅰ期は東漢末期(126年-144年)に道教が出現する時から、『十洲記』(六朝(222-589))が完成するまでである。この時期において、道教に関する文献に示される「蓬莱」は、具体的な描写が少ないため、「神話蓬莱」であるのか、「道教蓬莱」であるのか、判断できない例も多い。派生Ⅱ期は『十洲記』(六朝(222-589))の完成後

から隋代の始め(581)までである。この時期において、道士の修行活動に応じ、洞天福地説が現れた。洞天福地説は東晋末期既に形成されたが、現存する記録において、最も早いのは南朝陶弘景(456-536)の『真誥』(成立年代不明)である。「道教蓬萊」は洞天福地説の中の十洲三島に位置する。十洲三島説に東晋以後に形成され、その初出は『十洲記』(六朝(222-589))においてである。『十洲記』によると、道教仙境の十洲三島は上古東海神話から影響を受けたとみられるが、変化もある。東海神話の東海三仙島である「瀛洲」、「方丈」、「蓬萊」は、『十洲記』の道教仙境の十洲三島にとりいわれ新たな位置づけが行われたのであるが、「瀛洲」は十洲の一つとなり、「方丈」、「蓬萊」は三島に入り、その名称は「方丈洲」、「蓬丘」と改められた。また、『十洲記』に記述されている「蓬丘」の特徴についてみると、そこには「神話蓬萊」と「道教蓬萊」の特徴が混在して表現されていることがわかる。この時期の「道教蓬萊」はまだ「神話蓬萊」の特徴を持っているが、『十洲記』の完成によって、道教が出現から続いた、「神話蓬萊」と「道教蓬萊」の概念が混在するという曖昧な状況が終わり、「蓬萊」の道教仙境体系における位置づけが明らかになった。派生Ⅲ期は隋代の始め(581)から、宋代の終わり(紀元1279年)までである。この時期において、唐宋時代までの史書においては、「神話蓬萊」と「道教蓬萊」は明確に分別して記されているが、唐詩などの文学作品においては、「神話蓬萊」と「道教蓬萊」とが混用される状況がみられた。また、道教仙人物語の影響を受け、「神話蓬萊」についても、新しい物語が出現したということも明らかとなった。

「蓬萊」の多元期は元代の始め(1271年)から、清代の終わり(1912年)までである。この時期において、文学の主流をしめる形式は詞歌詞賦から小説へと移ってきている。明清時代の有名な小説において、「蓬萊」も引用されている。明清小説に関する「蓬萊」は既に「道教蓬萊」仙島として捉えられているとみられるが、ストーリーを展開させるための新たな創作も行われている。明清小説に引用される「蓬萊」の特徴は、綺麗な自然風景を表現することにある。民間においては、「神話蓬萊」と「道教蓬萊」が混合し、「蓬萊」は道教から民間の神仙信仰の一部分となった。「蓬萊」は発祥した時の単一の仙島の名前

からより複雑な概念になったといえる。

「蓬莱島」の発祥と展開については、以下の3点について検討・考察した。

1 つは、「蓬莱」仙島の様子は時代と共に変化しており、これには「道教蓬莱」の出現と深く関わっているという点である。

「蓬莱」仙島は秦漢神仙思想の「神話蓬莱」から道教に引用される際、そのまま引用されたのではなく、変更された点があった。具体的には以下の2点である。第1に、上古神話中の神秘的な「神話蓬莱」から道教中の身近な「道教蓬莱」への変更である。「神話蓬莱」仙島は神秘的、想像的なところである。また、「神話蓬莱」仙島は行くことができず、求めてはならないところである。これに対して、「道教蓬莱」仙島は身近なものになった。仙人達と道士達は日常的に地上の世界と「道教蓬莱」の仙島を往復しているのである。また、「道教蓬莱」山についての仙人達の居所と日常生活の描写をみると、「道教蓬莱」山の建築と動植物は人間より上品であるが、「道教蓬莱」山においては人間世界と同様、仙人の世界にも階層があり、仙人は人間と同じように生活している。

第2に、上古神話中の特別な特徴が強い「神話蓬莱」仙島から、道教に関するすべての仙境がある特徴を持っている「道教蓬莱」仙島への変更である。「神話蓬莱」仙島においては金玉製の建物があり、動物は全て白色をしており、食べると不老不死になる果実があり、亀が島を背負っており、龍の形の銅色の使者がいる、などの特徴があった。また、他の上古神話中の仙境についての描写を見ると、「神話蓬莱」の特徴は他の上古神話中の仙境と同じではない。

一方、「道教蓬莱」仙島の描写をみると、「道教蓬莱」の特徴を述べることで、「道教蓬莱」山に住んでいる仙人達の生活内容を伝えている。そして、他の道教仙境についての記述をみると、他の道教仙境の仙人達もほとんど同じ建築で同じように生活している。

「道教蓬莱」山についての描写と他の道教仙境についての描写を比べると、記述の中心内容は一致しており、特別の動植物が育てられているが、特徴が似ている他の動植物が他の道教仙境で育てられていることも多い。

「蓬莱」仙島の特徴の変更の原因は、「蓬莱」仙島の歴史的な役割の変化であると考えられる。「神話蓬莱」について、皇帝の求仙要望を応えるため、方士達は神話中の仙境に具体的な姿を持たせ、不思議で、神秘的な仙人の世界を創造し、皇帝を誤魔化し、利益を獲得した。皇帝の関心を引くため、仙境は具体的で、贅沢で、魅力的な描写となった。一方、存在していない場所であるため、その虚構に気づかれないように、「海の中の探し難い」ところにあるという特徴をつけ、仙境は行くことができず、求めてはならないところであるということを強調し、仙境を見つけられなくても、方士達の責任ではないということを示した。

このようにして、「道教蓬莱」仙島を神仙思想から引用し、神仙に関する仙境系統を充実させたのである。この引用は道教修行に役立つことを目的とした。そのため、道教に関する仙人達の生活と行動を重点に描写し、「神話蓬莱」仙島が持っている道教修行にとって役割がない特徴を全て弱めたものと考えられる。

また、道教の信奉者達を励ますため、仙人達と道士達日常的に「道教蓬莱」仙島を往復しているという記述も多い。修行すれば、一般の人間であっても、誰でも海を渡れ、「道教蓬莱」仙島へ行くこと(仙人になること)ができる、ということを示している。

2点目は「蓬莱」仙島の表現に関する用語についての検討・考察である。「蓬莱」は時代の発展と共に使われるようになり、「蓬」と他の文字と組み合わせた「蓬莱」の別称も多くなった。「蓬莱」の別称としては「蓬壺」の記録が最も多く、主に文学作品において「蓬莱」の意味を指すことが明らかとなった。また、「蓬莱」の別称ではないが、「蓬萊」の意味を持つ単語も幾つかみられた。

3点目は「蓬莱」仙島に関連する用語についての検討・考察である。初出の記録(戦国時代)から、「蓬莱」は古代中国で東の渤海の中にある仙人が住む山の一つであることが分かる。渤海の中においては、ほかの神山「方丈」と「瀛洲」も常に「蓬莱」と一緒にセットとして登場している。「方丈」と「瀛洲」も「蓬莱」と同様に時代の発展と共に変化してきたといえよう。

中国皇家園林における「蓬萊」配置の展開と変遷についての検討の結果、下記の諸点が指摘できる。

まず第一に、「蓬萊」島は皇家園林の山水配置の 1 つの要素として、少なくとも秦代から清代まで始終継承されており、皇家園林にとって非常に重要な要素の 1 つであったといえる。

しかしながら、皇家園林における「蓬萊」配置は前の時代の庭園「蓬萊」様式をそのまま伝承するものではなく、「蓬萊」の概念の変化からの影響を受け、変化してきている。また、秦代から、「蓬萊」島が配置された庭園に他の 2 つの島が常に随伴して配置されたとは言えない。これらのことから、秦代から清代までの皇家園林において、「蓬萊」、「方丈」、「瀛洲」3 つの島に関する求仙思想が始終表現されているが、秦代から形成された固定の様式という「一池三山」様式をそのまま継承するものではなかった。

第二に、中国皇家園林の池に東海仙山が配置されるにあたって、池に幾つの島が配置されようとも、それが 1 つの島であったとしたらそれは「蓬萊」である。このことから、東海には三つの仙島があるが、中国皇家園林にとって、三つの中で最も重要な島は「蓬萊」である。

第二章の検討から、結論は以下のように纏められる。

第 1 に、秦代から清代までの 2000 年の間に、皇家園林における「蓬萊」の配置はすべて同じ様式と特徴で庭園に表現されるではなく、前の時代の庭園の「蓬萊」様式を伝承するより、「蓬萊」の概念の変化から影響を受け、変化している。

第 2 に、「蓬萊」配置の変化は「蓬萊」の概念の変化より、多少時差があり、ほぼ 100 年程度遅れて表れている。

第 3 に、皇家園林における「蓬萊」配置は前の時代の庭園「蓬萊」様式を伝承するより、「蓬萊」の概念の変化から影響を受け、変化してきていることから、中国皇家園林は庭園という形式の歴史的の伝承、庭園の歴史的の一致性より、庭園は同時代の文化の変化に対応して、これとの関連性を重視するものであるといえる。

第4に、「蓬莱」配置の変化は「蓬莱」の概念の変化と時差が100年程度あることから、中国皇家園林は当時の文化、文学、社会などの環境と密接な関係があり、時代の変化に応じて徐々に変容してきたものであるといえる。

第3章では日本庭園における「蓬莱」の配置を考察し、飛鳥時代の庭園に関する石造物と「蓬莱」との関係、奈良時代の東院庭園と「蓬莱」との関係、平安時代初期の宮庭庭園の中島と「蓬莱」との関係という3つの観点から検討した。その結果、以下の3点を指摘した。

第1に、飛鳥時代庭園の石造物と「蓬莱」の関係について、斉明天皇時代に建造された両槻宮に関する石造物と飛鳥寺の北に建造された須弥山石2点について考察した結果、①酒船石は道教に関係がある施設との捉え方も行われているが、酒船石は「蓬莱」との関係性が見られないことを論じた。②亀形石槽は「蓬莱」を背負う鼈との解釈もあるが、北方を守る神玄武の亀を表現している可能性があることについて論じた。即ち、「玄」は「黒」を意味し、黒は五行説では「北方」の色とされ、「水」を表していることから、玄武は水神であると解釈される。亀形石槽は水槽の形であり、水と関係がある施設であることから、玄武との関係から指摘できる。③後岡本宮の北の方の飛鳥石神といわれる所から発掘された須弥山石は中国の博山炉をモチーフとして表現された可能性が高く、博山炉の原型は崑崙山である可能性が高いことから、この須弥山石は中国の「崑崙山」と関係があり、「蓬莱」との関係性がないと推断した。

第2に、東院庭園に関する「蓬莱」について考察した結果、奈良時代末期、東院庭園の第三期に中島が配置された際、唐の大明宮において、既に蓬莱島が配置されていたことを顧みると、東院庭園の池と中島は大明宮の蓬莱池と蓬莱島を表現していた可能性があることを指摘した。しかしながら、唐代以前に、池中に1つの島のみを配置することで、蓬莱島を象徴する庭園の事例がみられる(魏晋南北朝の洛陽の華林園)ことから、東院庭園の中島は蓬莱島を象徴していると断定することはできない。一方、北岸に配置された築山石組は、正倉院御物の仮山(唐から伝来した池庭の模型と考えられる)と形態が類似して

いることから、東院庭園の築山石組の意匠は唐からの影響を受けたものと考えられる。しかしながら、奈良時代において、日本は神仙思想、蓬莱島などの中国道教の要素から影響を受けた。中国において、「道教蓬莱」の出現によって、「蓬莱」の特徴は弱化し、ほかの仙山、仙境と融合されていく傾向が見られることを顧みれば、仮山そのものも、これが蓬莱を表現したものであるとの断定はできない。したがって、意匠の特徴を根拠として、東院庭園の池の北岸の築山石組が「道教蓬莱」を表現しているものか否かの判断はできないといえる。

東院庭園が神仙仙境を表現する庭園であったとするならば、池の北岸の築山石組は蓬莱山を表現していることとなる。しかし、その「蓬莱」は、中国の特定の東海の三つの神島の1つの「神話蓬莱」ではなく、道教神仙山全てを象徴する「道教蓬莱」として表現されているものと考察した。

第3に、平安時代初期の庭園における「蓬莱」について考察した結果、平安初期の建築と庭園の様式は浄土変相図を参考として造営されたものではなく、むしろ浄土変相図を建築と庭園に参考して描いたものの可能性が高いと考えられ、寝殿造の庭園は中国の唐の時代の皇家園林に影響を受けたものと考察した。

平安時代初期の宮庭庭園の形式に、最も類似する中国皇家園林は大明宮である。大明宮の中島は蓬莱島である。しかし、中島が配置された平安時代初期の庭園を例として、嵯峨朝の漢詩から検討した結果、庭園の意匠は神仙思想と関係があり、庭園の中島は神仙島と見られるが、これが蓬莱島であるとはいえない。

①神泉苑について、漢詩から見ると、嵯峨朝において、神泉苑を詠んだ漢詩と賦は、『凌雲集』から14首、『文華秀麗集』から5首、『経国集』から13首、空海が著した漢詩文集『遍照發揮性靈集』から1首の全33首存在する。この33首の漢詩の中に、5首においては、仙境の要素が言及されている。

5首の仙境の要素が言及される神泉苑を詠んだ漢詩の中に、「雑言。於神泉苑待讌、賦落花篇応製」においては、この神泉苑も「桃花源」のような世外仙境であることを示し

ている。「九月九日於神泉苑宴群臣、各賦一物、得秋菊」においては、嵯峨天皇は神泉苑を造営し、菊を植え、菊は仙人が服用することを強調していることから、神泉苑の意匠は仙境と関係があることが推測される。「晩夏神泉苑、同勒—深臨陰心_二、応製一首」においては、神泉苑が西王母の苑と竜王の宮の宝殿と比すべき、神泉苑も仙境であることを表現されている。「秋日觀神泉苑」においては、神泉苑は仙境のような所ということを示している。

これら4首の漢詩から、神泉苑の意匠は中国の道教仙境から影響を受けることが分かるが、「蓬莱」と関係があるとは言えない。

他に、「九月九日侍宴神泉苑、各賦一物、得秋山」においては神泉苑の山を詠んでいる時、中国の東海三神山と五岳も言及され、「蓬莱」は東海三神山の1つであることから、「蓬莱」の要素に言及されたと考える。漢詩において、神泉苑の山は東海三神山と五岳の山に比すべき意匠であるが、確実に、神泉苑の山は蓬莱から意匠を持って建造されたこととは言えない。

したがって、5首の仙境の要素が言及される神泉苑を詠んだ漢詩の分析の結果、神泉苑の意匠は中国の道教仙境から影響を受けるが、「蓬莱」と関係があるとは言えない。

②冷然院について、冷然院を詠んだ漢詩と賦は全部で6首ある。嵯峨天皇による勅撰漢詩集『文華秀麗集』に収められたものが4首、平安時代前期終盤および中期と時代は下がるものの、当庭園に関連する漢詩と賦が各1首である。そのうち、4首は全て仙境と関係がある要素が言及された。

1首は中国仙境に関する「瑤池」、1首は中国道教仙境に関する「天台山」、1首は中国道教方士に関する「葛陂」、1首は道教仙境に関する「仙宮」、「洞」に言及している。その結果、平安時代において、冷泉院に関する漢詩から見ると、冷泉院の意匠は中国の道教仙境から影響を受けると推測できる。しかし、中国道教仙境の要素を引用するものの、「蓬莱」の要素に言及されていないことから、冷泉院の庭園の中島は「蓬莱島」と関係があることは言えない。

③嵯峨院について、嵯峨朝において嵯峨院が詠まれた漢詩は5首であり、『文華秀麗集』から3首、『経国集』、『本朝無題詩』から各1首である。このうち、仙境に関係がある漢詩は1首があり、藤原明衡が創作した「夏日大覚寺即事」である。詩句から、道教仙境の宝物のような物が嵯峨院にあることから、嵯峨院も仙境のような場所ということが暗示されていると考えられる。また、嵯峨院の景色の比較対象として、「蓬莱」、「瀛洲」の要素に言及されているが、嵯峨院の意匠のモチーフではないと考えられることから、嵯峨院の意匠は「蓬莱」と関係があるとは言えないと考える。

④河陽離宮について、嵯峨朝において河陽離宮が詠まれた漢詩は36首であり、そのうち、『凌雲集』から8首、『文華秀麗集』から20首、『経国集』から2首、『本朝無題詩』から1首、『群書類従』（134巻・文筆部13）から5首である。36首漢詩の中に、5首は仙境の要素が言及されている。

5首の漢詩の分析から、2首においては、淀川が仙境のような所であることを詠み、2首においては、河陽離宮のお花は武陵の桃源郷仙境のお花のようなものを詠み、1首においては、河陽離宮の景色を見て、仙人のように隠遁することが詠まれている。これらの内容から、河陽離宮の意匠は神仙仙境とも関係がある可能性があると考えられるが、「蓬莱」の要素に言及されていないことから、河陽離宮の意匠も「蓬莱」との関係は無いと考えられる。

⑤淳和院について、嵯峨朝において淳和院が詠まれた漢詩は10首であり、そのうち、『凌雲集』から4首、『文華秀麗集』から2首、『本朝無題詩』から3首、『本朝文粹』から1首となっている。10首漢詩の中に、4首は仙境の要素に言及されている。

4首の漢詩を分析し、その結果、嵯峨天皇の「夏日皇太弟南池」と「秋日皇太弟池亭、賦天字」において、仙境の要素が言及されている。「夏日皇太弟南池」に直接に庭園の比喻ではないが、庭園の景色を見ることから、天下のことを考え、仙境の話につながっている。「秋日皇太弟池亭、賦天字」においては、淳和院の景色を詠まれる時、直接に仙境の名前である「玄圃」が示されていることから、淳和院の意匠は仙境と関係があると考え

られる。菅原在良の「秋日淳和院即事」においては、淳和院は仙境にも匹敵する勝地であると称賛し、源順の「晩秋遊淳和院。同賦波動水中山」にも「崑閬」の要素が言及され、淳和院の景色は崑崙山の仙境と比較しても負けないことが表現されている。これらの漢詩から、淳和院の意匠は仙境と関係があると推測できる。しかし、「蓬莱」の要素に言及されてないことから、河陽離宮の意匠も「蓬莱」と関係が無いと考える。

⑥閑院について、嵯峨朝において閑院が詠まれた漢詩は6首であり、閑院においては、神仙思想に関する要素が言及されてない。この原因は閑院が藤原冬嗣の邸宅であり、天皇の離宮ではないことと関係があると考ええる。

以上の検討から、日本の蓬莱に関して、以下の3点を指摘することはできる。

第1に、第三章において検討した飛鳥時代、奈良時代と平安時代初期の事例から見ると、これらの宮廷庭園の事例において、確実に「蓬莱」と関係がある配置を見出すことはできなかった。

第2に、平安時代以前、日本庭園は既に中国の道教神仙思想から影響を受けた。しかし、色々な要素が混在して表現されたことから、奈良時代において、すべての中国の道教仙境をまとめて、「蓬莱」の名称として表現した可能性が考えられる。

第3に、平安時代初期の宮廷庭園において、唐代の大明宮の「蓬莱島」のような中島が配置されている。しかしながら、これらの中島は仙境を表現するものではあっても、「蓬莱」との関係を見ることはできない。

(121048 字)

註記

- ¹ 吳天明「神仙思想的起源和變遷」『海南大學學報人文社會科學版』(22). 2004 年
- ² 北宋·宋敏求『長安志·卷六·宮室四唐』:「貞觀八年置為永安宮, 明年改曰大明宮, ……龍朔三年大家興造, 號曰蓬萊宮, 咸亨元年改曰含元宮, 尋復大明宮。」
- ³ 中國社會科學院語言研究所詞典編纂室『現代漢語詞典』、商務印書館. 1979 年
- ⁴ 陳植「中國造園史略」『新農通議』 1(4). 1930 年. pp3-9
- ⁵ 陳植『造園學概論』中國建築工業出版社. 2009 年
- ⁶ 童寯『江南園林志』中國工業出版社. 1963 年
- ⁷ 劉致平『中國居住建築簡史』中國建築工業出版社. 1990 年
- ⁸ 周維權『中國古典園林史』清華大學出版社. 1990 年
- ⁹ 張家驥『中國造園史』黑龍江人民出版社. 1987 年
- ¹⁰ 汪菊淵『中國古代園林史』中國建築工業出版社. 2006 年
- ¹¹ 闕鐸「大都宮苑圖考」『中國營造學社彙刊』 1(2). 1930 年. pp3-9
- ¹² 曹汛「疊山名家戈裕良」『中國園林』(2). 1986 年. pp53-54
- ¹³ 劉敦楨『蘇州古典園林』中國建築工業出版社. 1979 年
- ¹⁴ 潘谷西「蘇州園林的觀賞點和觀賞路線」『建築學報』(6). 1963 年. pp14-18
- ¹⁵ 潘谷西「蘇州園林的布局問題」『南工學報』(3). 1963 年. pp45-65
- ¹⁶ 陳從周「常熟園林」『文物參考資料』(3). 1958 年. p45-47; 陳從周『揚州園林』上海科學技術出版社. 1983 年
- ¹⁷ 陳植『園冶註釋』中國建築工業出版社. 1981 年
- ¹⁸ 陳植ら『中國歷代名園記選註』安徽科學技術出版社. 1983 年
- ¹⁹ 陳植『長物志校註』江蘇科學技術出版社. 1984 年
- ²⁰ 陳從周·蔣啓霆『園綜』同濟大學出版社. 2004 年
- ²¹ 邵忠ら『蘇州歷代名園記選註』中國林業出版社. 2004 年
- ²² 朱啟鈴『哲匠錄』中國建築工業出版社. 2004 年
- ²³ 曹汛「造園大師張南垣(一)」『中國園林』(1). 1988 年. pp21-26 ; 曹汛「造園大師張南垣(二)」『中國園林』(3). 1988 年. pp2-9
- ²⁴ 陳從周『說園』同濟大學出版社. 1984 年
- ²⁵ 吳世昌「魏晉風流與私家園林」『學文月刊』 1(2). 1934 年. pp3-9
- ²⁶ 孫篠祥「中國山水畫論中有關園林布局理論的探討」『園藝學報』 3(1). 1964 年. pp63-74
- ²⁷ 宗白華「空間意識和空間美感」『中國園林藝術概觀』江蘇人民出版社. 1987 年. pp5-16
- ²⁸ 吳天明「神仙思想的起源和變遷」『海南大學學報人文社會科學版』(22). 2004 年
- ²⁹ 郭璞傳(秦)『山海經』廣陵書社. 2003 年
- ³⁰ 司馬遷(漢)『史記』中華書局. 2009 年
- ³¹ 魏全瑞(南北朝), 何清谷 校注『三輔黃圖校注』三秦出版社. 2006 年
- ³² 酈道元(北魏)『水經註』岳麓書社. 1995 年
- ³³ 楊炫之(東魏)『洛陽伽藍記』中華書局. 2011 年
- ³⁴ 李吉甫(唐)『元和郡縣圖志』中華書局. 1983 年
- ³⁵ 張敦頤(宋), 張忱石點校『六朝事跡編類』中華書局. 2011 年
- ³⁶ 劉斧(宋)『青瑣高議』上海古籍出版社. 1983 年
- ³⁷ 顧炎武(明)『歷代宅京記』中華書局. 2004 年
- ³⁸ 畢沅(清), 張沛點校『關中勝跡圖志』三秦出版社. 2004 年
- ³⁹ 杜爽「想像與真實—崑崙與蓬萊神話中山岳意象的文化解讀」『中國風景園林學會會議論文集』. 2015 年. pp397-400
- ⁴⁰ 薛莹「魏晉南北朝蓬萊仙話研究」修士論文. 2007 年
- ⁴¹ 陳剛「唐前蓬萊神話流變考」博士論文. 2011 年
- ⁴² 劉曉清「唐人小說中的蓬萊仙境研究」修士論文. 2014 年

- 43 王敏「宋詞中の蓬萊意象群研究—以蓬萊意象為中心」修士論文. 2017 年
- 44 張瑞嫻「多元文化影響与蓬萊仙境信仰的形成」修士論文. 2012 年
- 45 董韶軍「道教文化与蓬萊閣古建築」『春秋』(3). 2014 年. pp57-59
- 46 楊猛「蓬萊閣建築布局与芸術文化探析」『黒河学刊』(5). 2016 年. pp49-50, p52
- 47 周維權『中国古典園林史』清華大学出版社. 1990 年
- 48 張家驥『中国造園史』黒龍江人民出版社. 1987 年
- 49 汪菊淵『中国古代園林史』中国建築工業出版社. 2006 年
- 50 苑坤「試論神仙文化与中国古典園林芸術—以蘇州園林为例」修士論文. 2009 年
- 51 陳文娟「蓬萊神話对中国古代園林造景的影響」『設計』(04). 2014 年
- 52 呂正平, 李賓「探究中国古典園林芸術中“一池三山”的起源」『広東園林』(06). 2013 年
- 53 謝志「論西漢建章宮太液池“一池三山”的園理」『陶瓷科学与芸術』(07). 2013 年
- 54 田建林「浅談“一池三山”」『市場論壇』(4). 2004 年
- 55 韓鈺「蓬萊仙話景觀模式對中國古典園林的影響」修士論文. 2015 年
- 56 周宏俊「借景の展開と構成: 日本・中国造園における比較研究」博士論文. 2012 年. p8
- 57 近藤正一『庭園図説』博文館. 1909 年
- 58 杉本文太郎『日本庭造法図解』建築書院. 1910 年
- 59 田村剛『庭園鑑賞法』成美堂. 1919 年
- 60 上原敬二『庭園学概要』新光社. 1923 年
- 61 周宏俊「借景の展開と構成: 日本・中国造園における比較研究」博士論文. 2012 年. p9
- 62 横井時冬『園芸考』大八洲学会. 1889 年
- 63 外山英策『室町時代庭園史』岩波書店. 1934 年
- 64 森蘊『平安時代庭園の研究』桑名文星堂. 1945 年
- 65 森蘊『中世庭園文化史: 大乘院庭園の研究』奈良国立文化財研究所. 1959 年
- 66 森蘊『寝殿造系庭園の立地的考察』奈良国立文化財研究所. 1962 年
- 67 伊東忠太「西苑」『庭園』1(1). 1918 年. p20
- 68 周宏俊「借景の展開と構成: 日本・中国造園における比較研究」博士論文. 2012 年. p10
- 69 龍居松之助「北京住宅の庭」『庭園』5(2). 1923 年. pp8-9
- 70 後藤朝太郎『満支風景庭園鑑』成美堂. 1934 年
- 71 岡大路『支那庭園論』彰國社. 1943 年
- 72 杉村勇造『中国の庭』求龍堂. 1966 年
- 73 佐藤昌『中国造園史(上, 中, 下)』日本公園緑地協会. 1991 年
- 74 田中淡「中国造園史研究の現状と諸問題」『造園雑誌』51(3). 1988 年. pp190-199
- 75 田中淡『中国古代造園史料集成』中央公論美術出版. 2003 年
- 76 稻次敏郎『庭園と住居のありやうと見せかた・見えかた: 日本・中国・韓国』山海堂. 1990 年
- 77 外村中「明末清初以前の中國庭園における太湖石について」『Landscape Research Japan Online』59(1). 1995 年. pp24-36
- 78 仙田満ら「中国園林における廊的空間に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』(542). 2001 年. pp261-267
- 79 沈悦「中国清時代における揚州庭園の石組構成とその造景に関する研究」『Landscape Research Japan Online』65(5). 2002 年. pp439-442
- 80 章俊華「中国皇家庭園と私家庭園の「屋宇」による空間構成の特徴とその比較について」『Landscape Research Japan Online』63(5). 2000 年. pp399-402
- 81 小寺駿吉「中国園林典籍」『庭園と風景』11(1). 1929 年. p7
- 82 田治六郎「洛陽名園記と金陵諸園記とから見た宋明兩代の庭園」『造園雑誌』13(1). 1949 年. pp11-16
- 83 田治六郎「李漁の庭園論」『造園雑誌』14(2). 1953 年. pp25-36
- 84 田治六郎「謝肇淛の庭園論」『造園雑誌』16(3・4). 1953 年. pp16-19
- 85 橋川時雄『解説: 園治』渡辺書店. 1970 年
- 86 上原敬二『解説園治』加島書店. 1972 年

- ⁸⁷ 佐藤昌『園冶研究』日本造園修景協会東洋庭園研究会. 1986 年
- ⁸⁸ 松村明『大辞林 第三版』三省堂. 2006 年
- ⁸⁹ 下出積与『神仙思想』吉川弘文館. 1968 年
- ⁹⁰ 武内義雄『神僊説』岩波書店. 1935 年
- ⁹¹ 津田左右吉『神僊思想の研究:津田左右吉全集第 10 卷』岩波書店. 1964 年
- ⁹² 青木正児『支那小説の溯源と神仙説』春秋社. 1970 年
- ⁹³ 窪徳忠『世界宗教史叢書 9 道教史』山川出版社. 1977 年
- ⁹⁴ 大形徹「神仙思想研究小史:神仙思想はどのように研究されてきた(1)」『中国研究集刊』(27). 2000 年. pp1-23
- ⁹⁵ 小林正明「蓬莱の島と六条院の庭園」『鶴見大学.Studies in Japanese Language and Literature』(24). 1987 年. pp1-28
- ⁹⁶ 田中淡『都市の中の理想郷:庭園と音楽』朝日百科世界の歴史 95. 1990 年. pp590-591
- ⁹⁷ 金子裕之『古代庭園の思想:神仙世界への憧憬』角川書店. 2002 年
- ⁹⁸ 相馬知奈「州浜考:庭園文化の影響」『Japanese Literature』56(4). 2007 年. pp1-10
- ⁹⁹ 堀澤眞澄「日本庭園において古来から残存する神仙蓬莱石について」『日本庭園学会誌』(21). 2009 年. pp59-62
- ¹⁰⁰ 安藤重和「竹取物語と神仙思想:天の羽衣の由来」『日本文化論叢』(20). 2012 年. pp5-14
- ¹⁰¹ 善養寺淳一「『懷風藻』に於ける吉野仙境観の成立—神仙思想受容の一側面—」『大正大学大学院研究論集』(38). 2014 年. pp67-86
- ¹⁰² 童寯『江南園林志』中国建築工業出版社. 1984 年. pp7-8, pp44-45
- ¹⁰³ 張十慶『作庭記譯註与研究』天津大學出版社. 2004 年
- ¹⁰⁴ 池田二郎『日本造園設計与鑑賞』中国科学技術出版社. 1992 年
- ¹⁰⁵ 大橋治三『日本庭園造型与源流』河南科学技術出版社. 2000 年
- ¹⁰⁶ 枅野俊明『日本造園心得』中国建築工業出版社. 2014 年
- ¹⁰⁷ 秋元通明『作庭記:自然式庭院設計法則』華中科技大学出版社. 2016 年
- ¹⁰⁸ 孟宪仁「春秋時代『竹取物語』原型伝入日本考」『日本研究』(03). 1986 年
- ¹⁰⁹ 李天送「中国的神話故事对日本小説『竹取物語』の影響」『厦門大学学報(哲学社会科学版)』(2). 1988 年
- ¹¹⁰ 卢静達「『竹取物語』中「不老不死」思想的研究」修士論文. 2009 年
- ¹¹¹ 卢静達「日本古代不死薬的考察—以『竹取物語』為中心」『文学界(理論版)』(5). 2011 年
- ¹¹² 王春苗「『竹取物語』对中国嫦娥奔月的接受及化用」『河南理工大学学報(社会科学版)』(2). 2014 年
- ¹¹³ 曹儀婕「論『竹取物語』的奔月情節」『甘肃广播电视大学学报』(3). 2015 年
- ¹¹⁴ 曹儀婕「論『竹取物語』的長生無憂追求」『焦作大学学报』(2). 2015 年
- ¹¹⁵ 趙蕤「浅析中国道教对日本神話伝説的影響」『中華文化論壇』(5). 2013 年
- ¹¹⁶ 張楊「从浦島伝説的演变探求中国文化的影響」修士論文. 2011 年
- ¹¹⁷ 童寯『造園史綱』中国建築工業出版社. 1983 年
- ¹¹⁸ 張十慶「作庭記与園冶—中日古代造園專書的比較」『中國園林』9(1). 1993 年. pp19-22
- ¹¹⁹ 劉庭風『中日古典園林比較』天津大學出版社. 2003 年
- ¹²⁰ 曹林娣『中日古典園林文化比較』中国建築工業出版社. 2004 年
- ¹²¹ 重森三玲「支那庭園と日本庭園」『林泉』(55). 1939 年. pp165-171
- ¹²² 稻田尚之「中国の庭園—特に江南の林園, 及日本庭園との比較について」『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』(30). 1985 年. pp65-75
- ¹²³ 張綺曼「中国・日本住空間の比較研究:中国の庭園と日本の庭について」『デザイン学研究』(54). 1986 年. pp37-42
- ¹²⁴ 周宏俊「借景の展開と構成:日本・中国造園における比較研究」博士論文. 2012 年
- ¹²⁵ 楊馥妃「中国と日本の庭園比較研究:『園冶』と『作庭記』との比較を介して」『history and theory of architecture』(72). 2002 年. pp593-596

- 126 曹林娣「蓬萊神話與中日園林仙境布局」『煙台大學學報・哲學社會科學版』(2).2002年. pp4-8
- 127 中国社会科学院語言研究所詞典編集室『現代漢語詞典』商務印書館.1979年. p854
- 128 <https://ctext.org/zhs> Dr. Donald Sturgeon, Department of East Asian Languages and Civilizations, Harvard University(2018年5月4日閲覧)
- 129 周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年
- 130 張家驥『中国造園史』黑龍江人民出版社.1987年
- 131 汪菊淵『中国古代園林史』中国建築工業出版社.2006年
- 132 陳文娟「蓬萊神話对中国古代園林造景的影響」『設計』(04).2014年
- 133 呂正平, 李賓「探究中国古典園林芸術中“一池三山”的起源」『広東園林』(06).2013年
- 134 謝志「論西漢建章宮太液池“一池三山”的園理」『陶瓷科学与芸術』(07).2013年
- 135 田建林「浅談“一池三山”」『市場論壇』(4).2004年
- 136 苑坤「試論神仙文化与中国古典園林芸術--以蘇州園林为例」修士論文.2009年
- 137 呂正平, 李賓「探究中国古典園林芸術中“一池三山”的起源」『広東園林』(06).2013年
- 138 謝志「論西漢建章宮太液池“一池三山”的園理」『陶瓷科学与芸術』(07).2013年
- 139 韓鈺「蓬萊仙話景觀模式對中國古典園林的影響」修士論文.2015年
- 140 陳剛は「唐前蓬萊神話流變考」(2011)に「蓬萊」の最初の記録は『山海經』である。原因は『山海經』の創作は漢代であるが、記載されている内容は殷商時代に遡ることである。本研究は書籍の完成年代を基準として、最初の記録は『列子』と考える。
- 141 『説文』:「梁, 水橋也。」
- 142 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』<https://ja.wikipedia.org/wiki/魏晉南北朝時代>(2018年10月28日閲覧)
- 143 周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年. p52
- 144 今井晃樹「唐長安城大明宮太液池の共同発掘調査」『奈良文化財研究所紀要』2003年. pp3-5,
- 145 周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年. p118
- 146 周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年. p125
- 147 周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年. p213
- 148 周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年. p243
- 149 福永光司『日本の道教遺跡を歩く』朝日新聞社.2003年. p14
- 150 奈良文化財研究所『あすかの石造物』2000年. p26
- 151 奈良文化財研究所『あすかの石造物』2000年. pp26-27,34
- 152 奈良文化財研究所『あすかの石造物』2000年. p33
- 153 町田章『飛鳥の古墳と石造物―飛鳥・白鳳の美術 高松塚と藤原京、日本美術全集第3巻』1980年
- 154 猪熊兼勝「酒船石」『明日香風』4.1982年
- 155 奈良文化財研究所『あすかの石造物』2000年. pp37
- 156 重松明久「酒船石の図像的研究」『古代国家と道教』1985年
- 157 奈良文化財研究所『あすかの石造物』2000年. pp36
- 158 [東漢]許慎『説文解字』今釈: 岳麓書社.1997年. p545
- 159 直木孝次郎『飛鳥の都』吉川弘文館.2009年. p174; 奈良文化財研究所『あすかの石造物』2000年. p30
- 160 奈良文化財研究所『あすかの石造物』2000年. p38
- 161 直木孝次郎『飛鳥の都』吉川弘文館.2009年. p174; 奈良文化財研究所『あすかの石造物』2000年. pp175-176
- 162 長井行「博山炉と飛鳥遺物」『考古界』3(8).1903年
- 163 藪田嘉一郎「推古廿年紀 須弥山紀考」『史迹と美術』1934年. pp163-164
- 164 重田定一「飛鳥京の須弥山」『考古界』3(6).1903年
- 165 矢島恭介「飛鳥の須弥山と石彫人物について」『国華』58(12).1949年

- 166 野間清六「飛鳥の石像遺物について」『大和文華』39.1963年
- 167 町田章『飛鳥の古墳と石造物—飛鳥・白鳳の美術—高松塚と藤原京、日本美術全集第3巻』1980年
- 168 高至喜『楚文物図典』湖北教育出版社.2000年
- 169 徐廷祿『金容権訳』2005年.p199
- 170 長村真吾「博山炉原型考：昆仑山との関係を中心に」『アジアの歴史と文化』(11).2007年.pp57-75
- 171 長村前掲論文(170).pp60-62
- 172 長村前掲論文(170).pp62-63
- 173 『六書故』巻29:「凡そ物の圓渾なるは崑崙と曰ふ。」(凡物之圓渾曰崑崙。)
- 174 長村前掲論文(170).p63
- 175 長村前掲論文(170).p64
- 176 長村前掲論文(170).p59
- 177 長村前掲論文(170).pp65-66
- 178 <https://www.nabunken.go.jp/heijo/museum/page/toin.html> (2019年7月20日閲覧)
- 179 高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題点-」『日本庭園学会誌』(16).2007年.pp3-10
- 180 <https://ja.wikipedia.org/wiki/天平文化> (2019年7月22日閲覧)
- 181 <https://kotobank.jp/word/寝殿造-82294> (2019年09月10日閲覧)
- 182 太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館.1987年.p31
- 183 太田前掲書(182).p33
- 184 杉本宏「鳳凰堂阿弥陀浄土図と平等院庭園」『日本庭園学会誌3』1995年.pp2-3
- 185 杉本前掲論文(184).p6
- 186 太田前掲書(182).pp8-9(大明宮をみると含元殿を中心とする南郭と、その北方に続く紫宸殿ないし蓬莱殿を中心とする北郭の構成は、平城京における太極殿を中心とする南郭、即ち朝堂院と、内裏正殿を中心とする北郭とから成立する関係と全く変わらない。)
- 187 太田前掲書(182).p11
- 188 小野健吉『岩波日本庭園辞典』岩波書店.2004年.pp155-156
- 189 廣安春華「漢詩からみた平安時代初期の庭園—特に嵯峨朝を中心として—」.2018年
- 190 廣安前掲論文(189).p13
- 191 廣安前掲論文(189).p19
- 192 廣安前掲論文(189).pp20-21
- 193 廣安前掲論文(189).p23
- 194 廣安前掲論文(189).pp25-26
- 195 廣安前掲論文(189).p40
- 196 廣安前掲論文(189).p44
- 197 廣安春華「冷然院庭園の意匠と利用に関する研究—冷然院をめぐる漢詩から—」『日本庭園学会誌』27号.2013年.p17
- 198 廣安前掲論文(197).p17(秋の行幸記録は、1つ目が、弘仁7年(817)8月丁巳(24日)条「冷然院に幸す。文人に命じて詩を賦せしむ。侍臣に禄を賜ふこと差有り。」(『類聚国史』)、2つ目が弘仁11年(820)8月丙戌(16日)条「冷然院に幸す。文人に命じて詩を賦せしむ。」(『類聚国史』)である。冷然院は、桓武朝の記録に4度登場する近東院が前身であるという説が有力である。そうすると題詞の「新林池」は、近東院の庭園が嵯峨朝に入り改修されたと考えるのが順当であり、この漢詩が詠まれたのは年代的に古い弘仁7年8月丁巳(24日)であると推定されている。)
- 199 廣安前掲論文(197).p17
- 200 廣安前掲論文(197).p19
- 201 廣安前掲論文(197).p19
- 202 廣安前掲論文(197).p20
- 203 廣安前掲論文(197).p21
- 204 廣安前掲論文(197).p23

- ²⁰⁵廣安前掲論文（189）. p60
²⁰⁶廣安前掲論文（189）. pp67-68
²⁰⁷廣安前掲論文（189）. p68
²⁰⁸『日本歴史地名大系(26)―京都府の地名―』、平凡社、1981 年、p2683
²⁰⁹廣安前掲論文（189）. p86
²¹⁰廣安前掲論文（189）. p86
²¹¹廣安前掲論文（189）. p90
²¹²廣安前掲論文（189）. pp93-94
²¹³廣安前掲論文（189）. p97
²¹⁴廣安前掲論文（189）. p100
²¹⁵廣安前掲論文（189）. p104
²¹⁶廣安前掲論文（189）. p105
²¹⁷廣安前掲論文（189）. pp106-107
²¹⁸廣安前掲論文（189）. p109
²¹⁹廣安前掲論文（189）. pp111-112
²²⁰ 廣安春華「閑院庭園の意匠と利用に関する研究―閑院をめぐる漢詩から―」『日本庭園学会誌』27 号. 2013 年. p32

参考文献

古漢文文獻

- 郭璞傳(秦):山海經:廣陵書社, 2003
司馬遷(漢):史記:中華書局, 2009
許慎(東漢):說文解字:岳麓書社, 1997
魏全瑞(南北朝), 何清谷 校注;三輔黃圖校注:三秦出版社, 2006
酈道元(北魏):水經註:岳麓書社, 1995
楊炫之(東魏):洛陽伽藍記:中華書局, 2011
李吉甫(唐):元和郡縣圖志:中華書局, 1983
張敦頤(宋), 張忱石點校:六朝事跡編類:中華書局, 2011
劉斧(宋):青瑣高議:上海古籍出版社, 1983
顧炎武(明):歷代宅京記:中華書局, 2004
畢沅(清), 張沛點校:關中勝跡圖志:三秦出版社, 2004

書籍

- 橫井時冬(1889):園芸考:大八洲学会
近藤正一(1909):庭園圖說:博文館
田村剛(1919):庭園鑑賞法:成美堂
上原敬二(1923):庭園學概要:新光社
後藤朝太郎(1934):滿支風景庭園鑑:成美堂
武內義雄(1935):神僊說:岩波書店
岡大路(1943):支那庭園論:彰國社
童寯(1963):江南園林志:中國工業出版社
津田左右吉(1964):神僊思想の研究:津田左右吉全集第10卷:岩波書店
青木正兒(1970):支那小説の溯源と神僊說:春秋社
窪德忠(1977):世界宗教史叢書9 道教史:山川出版社
杉村勇造(1966):中國の庭:求龍堂
下出積与(1968):神僊思想:吉川弘文館
橋川時雄(1970):解說:園冶:渡辺書店
上原敬二(1972):解說園冶:加島書店
中國社會科學院語言研究所詞典編纂室(1979):現代漢語詞典、商務印書館
劉敦楨(1979):蘇州古典園林:中國建築工業出版社
町田章(1980):飛鳥的古墳と石造物—飛鳥・白鳳の美術 高松塚と藤原京、日本美術全集第3卷
陳植(1981):園冶註釋:中國建築工業出版社
日本歷史地名大系(26)—京都府の地名—:平凡社、1981
童寯(1983):造園史綱:中國建築工業出版社
陳植ら(1983)編:中國歷代名園記選註:安徽科學技術出版社
陳從周(1983):揚州園林:上海科學技術出版社
陳植(1984):長物志校註:江蘇科學技術出版社
陳從周(1984):說園:同濟大學出版社
佐藤昌(1986):園冶研究:日本造園修景協會東洋庭園研究会
張家驥(1987):中國造園史:黑龍江人民出版社
江溶ら(1987)編:中國園林藝術概觀:江蘇人民出版社
太田静六(1987):寢殿造の研究:吉川弘文館
劉致平(1990):中國居住建築簡史:中國建築工業出版社
周維權(1990):中國古典園林史:清華大學出版社
稻次敏郎(1990):庭園と住居のありやうと見せかた・見えかた:日本・中國・韓國:山海堂
佐藤昌(1991):中國造園史(上, 中, 下):日本公園綠地協會
池田二郎(1992):日本造園設計と鑑賞:中國科學技術出版社
大橋治三(2000):日本庭園造型と源流:河南科學技術出版社

高至喜(2000):楚文物図典:湖北教育出版社
 奈良文化財研究所(2000):あすかの石造物
 金子裕之(2002):古代庭園の思想:神仙世界への憧憬:角川書店
 田中淡(2003):中国古代造園史料集成:中央公論美術出版
 劉庭風(2003):中日古典園林比較:天津大學出版社
 福永光司(2003):日本の道教遺跡を歩く:朝日新聞社
 曹林娣(2004):中日古典園林文化比較:中国建築工業出版社
 張十慶(2004):作庭記譯註与研究:天津大學出版社
 陳從周・蔣啓霆(2004)選編:園綜:同濟大學出版社
 邵忠ら(2004)編:蘇州歷代名園記選註:中国林業出版社
 朱啟鈴(2004):哲匠録:中国建築工業出版社
 小野健吉(2004):岩波日本庭園辞典:岩波書店
 徐廷祿(2005):金容權訳
 汪菊淵(2006):中国古代園林史:中国建築工業出版社
 松村明(2006):大辞林 第三版:三省堂
 陳植(2009):造園学概論:中国建築工業出版社
 直木孝次郎(2009):飛鳥の都:吉川弘文館
 枅野俊明(2014):日本造園心得:中国建築工業出版社
 秋元通明(2016):作庭記:自然式庭院設計法則:華中科技大学出版社

雜誌論文

長井行(1903):博山炉と飛鳥遺物:考古界
 重田定一(1903):飛鳥京の須弥山:考古界』3(6)
 伊東忠太(1918):西苑:庭園 1(1)
 龍居松之助(1923):北京住宅の庭:庭園 5(2)
 小寺駿吉(1929):中国園林典籍:庭園と風景 11(1)
 陳植(1930):中国造園史略:新農通議
 闕鐸(1930):大都宮苑圖考:中国營造学社彙刊 1(2)
 吳世昌(1934):魏晉風流與私家園林:學文月刊 1(2)
 戴田嘉一郎(1934):推古廿年紀 須弥山紀考:史迹と美術
 重森三玲(1939):支那庭園と日本庭園:林泉(55)
 田治六郎(1949):洛陽名園記と金陵諸園記とから見た宋明兩代の庭園:造園雜誌 13(1)
 矢島恭介(1949):飛鳥の須弥山と石彫人物について:国華』58(12)
 田治六郎(1953):李漁の庭園論:造園雜誌 14(2)
 田治六郎(1953):謝肇淛の庭園論:造園雜誌 16(3・4)9
 陳從周(1958):常熟園林:文物參考資料(3)
 潘谷西(1963):蘇州園林的觀賞點和觀賞路線:建築學報(6)
 潘谷西(1963):蘇州園林的布局問題:南工學報(3)
 野間清六(1963):飛鳥の石像遺物について:大和文華』(39)
 孫篠祥(1964):中國山水畫論中有關園林布局理論的探討:園藝學報 3(1)
 猪熊兼勝(1982):酒船石:明日香風(4)
 童寯(1984):江南園林志:中国建築工業出版社
 稻田尚之(1985):中国の庭園--特に江南の林園,及日本庭園との比較について:京都市立芸術大学美術学部研究紀要 (30)
 重松明久(1985):酒船石の図像的研究:古代国家と道教
 張綺曼(1986):中国・日本住空間の比較研究:中国の庭園と日本の庭について:デザイン学研究(54)
 孟宪仁(1986):春秋時代『竹取物語』原型伝入日本考:日本研究(03)
 曹汎(1986):豊山名家戈裕良:中国園林(2)
 小林正明(1987):蓬萊の島と六条院の庭園:鶴見大学.Studies in Japanese Language and Literature. (24)
 曹汎(1988):造園大師張南垣(一):中国園林(1)

- 曹汎(1988):造園大師張南垣(二):中国園林(3)
- 田中淡(1988):中国造園史研究の現状と諸問題:造園雑誌 51(3)
- 李天送(1988):中国的神话故事对日本小説『竹取物語』の影響:厦門大学学報(哲学社会科学版)(2)
- 田中淡(1990):都市の中の理想郷:庭園と音楽,(朝日百科世界の歴史 95)
- 張十慶(1993):作庭記と園冶—中日古代造園專書的比較:中國園林 9(1)
- 外村中(1995):明末清初以前の中國庭園における太湖石について:Landscape Research Japan Online 59(1)
- 杉本宏(1995):鳳凰堂阿弥陀浄土図と平等院庭園:日本庭園学会誌(3)
- 章俊華(2000):中国皇家庭園と私家庭園の「屋宇」による空間構成の特徴とその比較について:Landscape Research Japan Online 63(5)
- 大形徹(2000):神仙思想研究小史:神仙思想はどのように研究されてきた(1):中国研究集刊(27)
- 仙田満ら(2001):中国園林における廊的空間に関する研究:日本建築学会計画系論文集(542)
- 沈悦(2002):中国清時代における揚州庭園の石組構成とその造景に関する研究:Landscape Research Japan Online 65(5)
- 楊馥妃(2002):中国と日本の庭園比較研究:『園冶』と『作庭記』との比較を介して:history and theory of architecture (72)
- 吴天明(2004):神仙思想的起源和變遷:海南大学学報人文社会科学版(22)
- 田建林(2004):浅談“一池三山”:市場論壇(4)
- 薛莹(2007):魏晉南北朝蓬萊仙話研究:修士論文
- 相馬知奈(2007):州浜考:庭園文化の影響:Japanese Literature 56(4)
- 長村真吾(2007):博山炉原型考:崑崙山との関係を中心に:アジアの歴史と文化 (11)
- 高瀬要一(2007):平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について—整備後の現状と問題点—:日本庭園学会誌 (16)
- 苑坤(2009):試論神仙文化与中国古典園林芸術—以蘇州園林為例, 修士論文
- 堀澤眞澄(2009):日本庭園において古来から残存する神仙蓬萊石について:日本庭園学会誌 (21)
- 蘆静達(2009):『竹取物語』中「不老不死」思想的研究:修士論文
- 陳剛(2011):唐前蓬萊神話流變考:博士論文
- 蘆静達(2011):日本古代不死薬的考察—以『竹取物語』為中心:文学界(理論版)(5)
- 張楊(2011):从浦島伝說的演变探求中国文化的影響:修士論文
- 張瑞嫻(2012):多元文化影響与蓬萊仙境信仰的形成:修士論文
- 周宏俊(2012):借景の展開と構成:日本・中国造園における比較研究, 博士論文
- 安藤重和(2012):竹取物語と神仙思想:天の羽衣の由来:日本文化論叢(20)
- 河原武敏(2012):中国思想の影響を受けたわが国の庭園施設について:日本庭園学会誌(26)
- 呂正平, 李宾(2013):探究中国古典園林芸術中“一池三山”的起源:広東園林(06)
- 謝志(2013):論西漢建章宮太液池“一池三山”的園理:陶瓷科学与芸術(07)
- 趙蕤(2013):浅析中国道教对日本神話伝說的影響:中華文化論壇(5)
- 廣安春華(2013):冷然院庭園の意匠と利用に関する研究—冷然院をめぐる漢詩から—:日本庭園学会誌(27)
- 廣安春華(2013):閑院庭園の意匠と利用に関する研究—閑院をめぐる漢詩から—:日本庭園学会誌(27)
- 劉晓清(2014):唐人小説中の蓬萊仙境研究:修士論文
- 董韶軍(2014):道教文化与蓬萊閣古建築:春秋(3)
- 陳文娟(2014):蓬萊神話对中国古代園林造景的影響:設計(04)
- 善養寺淳一(2014):『懷風藻』に於ける吉野仙境觀の成立—神仙思想受容の一側面—:大正大学大学院研究論集(38)
- 王春苗(2014):『竹取物語』对中国嫦娥奔月的接受及化用:河南理工大学学報(社会科学版)(2)

曹儀婕(2015):論『竹取物語』の奔月情節:甘肅廣播電視大學學報(3)
曹儀婕(2015):論『竹取物語』の長生無憂追求:焦作大學學報(2)
杜爽(2015):想像与真實-崑崙与蓬萊神話中山岳意象的文化解讀:中國風景園林學會會議論文集
楊猛(2016):蓬萊閣建築布局与芸術文化探析:黑河學刊(5)
王敏(2017):宋詞中的蓬萊意象群研究--以蓬萊意象為中心:修士論文
廣安春華(2018):漢詩からみた平安時代初期の庭園—特に嵯峨朝を中心として—:博士論文

ウェブサイト

<https://ctext.org/zhs> Dr. Donald Sturgeon, Department of East Asian Languages and Civilizations, Harvard University(2018/5/4 閲覧)
<http://basel.nijl.ac.jp/~tkoten/>(2018/10/20 閲覧)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/蓬萊>(2018/11/20 閲覧)
<http://gejirin.com/src/Ha/harami.html>(2018/11/20 閲覧)
<http://gejirin.com/src/Ha/haraasamamiya.html>(2018/11/20 閲覧)
http://www.tofukuji.jp/temple_map/hojo_south_garden.html(2018/11/20 閲覧)
<https://www.nabunken.go.jp/heiho/museum/page/toin.html>(2019年7月20日閲覧)
<https://ja.wikipedia.org/wiki/天平文化>(2019年7月22日閲覧)
<https://kotobank.jp/word/寝殿造-82294>(2019年09月10日閲覧)

資料一覧

史料.....	3
1. 「蓬萊」概念に関する史料.....	3
2. 庭園における「蓬萊」配置に関する史料.....	126

史料

1. 「蓬萊」概念に関する史料

〈史料 1〉

湯又問：“物有巨細乎？有修短乎？有同異乎？”革曰：“渤海之東不知幾億萬裏，有大壑焉，實惟無底之穀，其下無底，名曰歸墟。八弦九野之水，天漢之流，莫不注之，而無增無減焉。其中有五山焉：一曰岱輿，二曰員嶠，三曰方壺，四曰瀛洲，五曰蓬萊。其山高下周旋三萬裏，其頂平處九千裏。山之中閑相去七萬裏，以為鄰居焉。其上臺觀皆金玉，其上禽獸皆純縞。珠玕之樹皆叢生，華實皆有滋味，食之皆不老不死。所居之人皆仙聖之種；一日一夕飛相往來者，不可數焉。而五山之根，無所連箸，常隨潮波上下往還，不得暫峙焉。仙聖毒之，訴之於帝。帝恐流於西極，失群仙聖之居，乃命禺強使巨鼈十五舉首而戴之。迭為三番，六萬歲一交焉。五山始峙而不動。而龍伯之國，有大人，舉足不盈數千而暨五山之所，一釣而連六鼈，合負而趣，歸其國，灼其骨以數焉。於是岱輿員嶠二山流於北極，沈於大海，仙聖之播遷者巨億計。帝憑怒，侵滅龍伯之國使厄。侵小龍伯之民使短。至伏羲神農時，其國人猶數十丈。從中州以東四十萬裏，得僬僇國。人長一尺五寸。東北極有人名曰暲人，長九寸。荊之南有冥靈者，以五百歲為春，五百歲為秋。上古有大椿者，以八千歲為春，八千歲為秋。朽壤之上有菌芝者，生於朝，死於晦。春夏之月有蠓蚋者，因雨而生，見陽而死。終北之北有溟海者，天池也，有魚焉。其廣數千裏，其長稱焉，其名為鯢。有鳥焉。其名為鵬，翼若垂天之雲，其體稱焉。世豈知有此物哉？大禹行而見之，伯益知而名之，夷堅聞而志之。江浦之閑生麼蟲，其名曰焦螟，群飛而集於蚊睫，弗相觸也。棲宿去來，蚊弗覺也。離朱子羽，方晝拭眚揚眉而望之，弗見其形；俞師曠方夜擲耳俛首而聽之，弗聞其聲。唯黃帝與容成子居空桐之上，同齋三月，心死形廢；徐以神視，塊然見之，若嵩山之阿；徐以氣聽，砰然聞之若雷霆之聲。吳、楚之國有大木焉，其名為檮，碧樹而冬生，實丹而味酸；食其皮汁，已憤厥之疾。齊州珍之，渡淮而北，而化為枳焉。鸛鵒不逾濟，貉逾汶則死矣。地氣然也。雖然形氣異也，性鈞已，無相易已。生皆全已，分皆足已。吾何以識其巨細？何以識其修短？何以識其同異哉？”（『列子・湯問』）

〈史料 2〉

蓬萊山在海中。（『山海經・海內北經・』）

〈史料 3〉

既已，齊人徐市等上書，言海中有三神山，名曰蓬萊、方丈、瀛洲，仙人居之。請得齋戒，與童男女求之。於是遣徐市發童男女數千人，入海求仙人。（『史記・本紀・秦始皇本紀』）

〈史料 4〉

還過吳，從江乘渡。並海上，北至琅邪。方士徐市等入海求神藥，數歲不得，費多，恐譴，乃詐曰：“蓬萊藥可得，然常為大蛟魚所苦，故不得至，願請善射與俱，見則以連弩射之。”始皇夢與海神戰，如人狀。問占夢，博士曰：“水神不可見，以大魚蛟龍為候。今上禱祠備謹，而有此惡神，當除去，而善神可致。”乃令入海者齎捕巨魚具，而自以連弩候大魚出射之。自琅邪北至榮成山，弗見。至之罘，見巨魚，射殺一魚。遂並海西。（『史記・本紀・秦始皇本紀』）

〈史料 5〉

少君言於上曰：“祠灶則致物，致物而丹沙可化為黃金，黃金成以為飲食器則益壽，益壽而海中蓬萊仙者可見，見之以封禪則不死，黃帝是也。臣嘗遊海上，見安期生，食臣棗，大如瓜。安期生仙者，通蓬萊中，合則見人，不合則隱。”於是天子始親祠灶，而遣方士入海求蓬萊安期生之屬，而事化丹沙諸藥齊為黃金矣。（『史記・本紀・孝武本紀』）

〈史料 6〉

居久之，李少君病死。天子以為化去不死也，而使黃鍾史寬舒受其方。求蓬萊安期生莫能

得，而海上燕齊怪迂之方士多相效，更言神事矣。（『史記・本紀・孝武本紀』）

〈史料 7〉

入海求蓬萊者，言蓬萊不遠，而不能至者，殆不見其氣。上乃遣望氣佐侯其氣雲。（『史記・本紀・孝武本紀』）

〈史料 8〉

自得寶鼎，上與公卿諸生議封禪。封禪用希曠絕，莫知其儀禮，而群儒采封禪尚書、周官、王制之望祀射牛事。齊人丁公年九十餘，曰：“封者，合不死之名也。秦皇帝不得上封。陛下必欲上，稍上即無風雨，遂上封矣。”上於是乃令諸儒習射牛，草封禪儀。數年，至且行。天子既聞公孫卿及方士之言，黃帝以上封禪，皆致怪物與神通，欲放黃帝以嘗接神仙人蓬萊士，高世比德於九皇，而頗采儒術以文之。群儒既以不能辯明封禪事，又牽拘於詩書古文而不敢騁。上為封祠器示群儒，群儒或曰“不與古同”，徐偃又曰“太常諸生行禮不如魯善”，周霸屬圖封事，於是上絀偃、霸，盡罷諸儒弗用。（『史記・本紀・孝武本紀』）

〈史料 9〉

上遂東巡海上，行禮祠八神。齊人之上疏言神怪奇方者以萬數，然無驗者。乃益發船，令言海中神山者數千人求蓬萊神人。公孫卿持節常先行候名山，至東萊，言夜見一人，長數丈，就之則不見，見其跡甚大，類禽獸雲。群臣有言見一老父牽狗，言“吾欲見巨公”，已忽不見。上既見大跡，未信，及群臣有言老父，則大以為仙人也。宿留海上，與方士傳車及閑使求仙人以千數。（『史記・本紀・孝武本紀』）

〈史料 10〉

天子既已封禪泰山，無風雨災，而方士更言蓬萊諸神山若將可得，於是上欣然庶幾遇之，

乃復東至海上望，冀遇蓬萊焉。奉車子侯暴病，一日死。上乃遂去，並海上，北至碣石，巡自遼西，曆北邊至九原。五月，返至甘泉。有司言寶鼎出為元鼎，以今年為元封元年。

（『史記·本紀·孝武本紀』）

〈史料 11〉

十一月乙酉，柏梁災。十二月甲午朔，上親禪高臺，祠後土。臨渤海，將以望祠蓬萊之屬，冀至殊庭焉。（『史記·本紀·孝武本紀』）

〈史料 12〉

上還，以柏梁災故，朝受計甘泉。公孫卿曰：“黃帝就青靈臺，十二日燒，黃帝乃治明庭。明庭，甘泉也。”方士多言古帝王有都甘泉者。其後天子又朝諸侯甘泉，甘泉作諸侯邸。勇之乃曰：“越俗有火災，複起屋必以大，用勝服之。”於是作建章宮，度為千門萬戶。前殿度高未央，其東則鳳闕，高二十餘丈。其西則唐中，數十裏虎圈。其北治大池，漸臺高二十餘丈，名曰泰液池，中有蓬萊、方丈、瀛洲、壺梁，象海中神山龜魚之屬。其南有玉堂、璧門、大鳥之屬。乃立神明臺、井幹樓，度五十餘丈，輦道相屬焉。（『史記·本紀·孝武本紀』）

〈史料 13〉

今天子所興祠，泰一、後土，三年親郊祠，建漢家封禪，五年一修封。薄忌泰一及三一、冥羊、馬行、赤星，五，寬舒之祠官以歲時致禮。凡六祠，皆太祝領之。至如八神諸神，明年、凡山他名祠，行過則祀，去則已。方士所興祠，各自主，其人終則已，祠官弗主。他祠皆如其故。今上封禪，其後十二歲而還，遍於五嶽、四瀆矣。而方士之候祠神人，入海求蓬萊，終無有驗。而公孫卿之候神者，猶以大人跡為解，無其效。天子益怠厭方士之怪迂語矣，然終羈縻弗絕，冀遇其真。自此之後，方士言祠神者彌眾，然其效可睹矣。（『史記·本紀·孝武本紀』）

〈史料 14〉

自威、宣、燕昭使人入海求蓬萊、方丈、瀛洲。此三神山者，其傳在勃海中，去人不遠；患且至，則船風引而去。蓋嘗有至者，諸仙人及不死之藥皆在焉。其物禽獸盡白，而黃金銀為宮闕。未至，望之如雲；及到，三神山反居水下。臨之，風輒引去，終莫能至云。世主莫不甘心焉。及至秦始皇并天下，至海上，則方士言之不可勝數。始皇自以為至海上而恐不及矣，使人乃賁童男女入海求之。船交海中，皆以風為解，曰未能至，望見之焉。其明年，始皇復游海上，至琅邪，過恒山，从上黨歸。後三年，游碣石，考入海方士，从上郡歸。後五年，始皇南至湘山，遂登會稽，并海上，冀遇海中三神山之奇藥。不得，還至沙丘崩。

（『史記・書・封禪書』）

〈史料 15〉

同 5（『史記・書・封禪書』）

〈史料 16〉

同 6（『史記・書・封禪書』）

〈史料 17〉

同 7（『史記・書・封禪書』）

〈史料 18〉

同 8（『史記・書・封禪書』）

〈史料 19〉

同 9（『史記・書・封禪書』）

〈史料 20〉

同 10（『史記・書・封禪書』）

〈史料 21〉

同 11（『史記・書・封禪書』）

〈史料 22〉

同 12（『史記・書・封禪書』）

〈史料 23〉

同 13（『史記・書・封禪書』）

〈史料 24〉

又使徐福入海求神異物，還為偽辭曰：「臣見海中大神，言曰：『汝西皇之使邪。』」臣答曰：「然。」「汝何求」曰：「願請延年益壽藥。」神曰：「」。汝秦王之禮薄，得觀而不得取「即從臣東南至蓬萊山，見芝成宮闕，有使者銅色而龍形，光上照天於是臣再拜問曰：「宜何資以獻。」海神曰：「以令名男子若振女與百工之事，即得之矣」秦皇帝大說，遣振男女三千人，資之五穀種種百工而行。徐福得平原廣澤，止王不來（『史記・列傳・淮南衡山列傳書』）

〈史料 25〉

「古聖人勞躬養神，節欲適情，尊天敬地，履德行仁，是以上天歆焉，永其世而豐其年。故堯秀眉高彩，享國百載。及秦始皇覽怪迂，信禳祥，使盧生求羨門高，徐市等入海求不死之藥。當此之時，燕，齊之士，釋鋤耒，爭言神仙。方士於是趣咸陽者以千數，言仙人食金

飲珠，然後壽與天地相保。於是數巡狩五嶽，濱海之館，以求神仙蓬萊之屬。數幸之郡縣，富人以貲佐，貧者築道旁。其後，小者亡逃，大者藏匿；吏捕索掣頓，不以道理名宮之旁，廬舍丘落，無生苗立樹；百姓離心，怨思者十有半“書”曰：。’享多儀，儀不及物曰不享

“故聖人非仁義不載於己，非正道不禦於前是以先帝誅文成，五利等，宣帝建學官，親近忠良，欲以絕怪惡之端，而昭至德之塗也。（『塩鉄論・卷六・散不足』）

〈史料 26〉

惟昊天兮昭靈，陽氣發兮清明。
風習習兮和暖，百草萌兮華榮。
堇荼茂兮扶疏，蘅芷雕兮瑩嫿。
愍貞良兮遇害，將夭折兮碎糜。
時混混兮澆讎，哀當世兮莫知。
覽往昔兮俊彥，亦詘辱兮系累。
管束縛兮桎梏，百貿易兮傳賣。
遭桓繆兮識舉，才德用兮列施。
且從容兮自慰，玩琴書兮遊戲。
迫中國兮迤狹，吾欲之兮九夷。
超五嶺兮嵯峨，觀浮石兮崔嵬。
陟丹山兮炎野，屯餘車兮黃支。
就祝融兮稽疑，嘉己行兮無為。
乃回謁兮北逝，遇神孀兮宴娛。
欲靜居兮自娛，心愁戚兮不能。
放餘轡兮策駟，忽飄騰兮浮雲。
蹕飛杭兮越海，從安期兮蓬萊。
緣天梯兮北上，登太一兮玉台。

使素女兮鼓簧，乘戈和兮謳謠。

聲噉詭兮清和，音晏衍兮要淫。

咸欣欣兮酣樂，餘眷眷兮獨悲。

顧章華兮太息，志戀戀兮依依。（『楚辭·九思·傷時』）

〈史料 27〉

十二月，禪高裡，祠后土東臨勃海，望祠蓬萊。春還。受計於甘泉。（『漢書·紀·武帝紀』）

〈史料 28〉

象載瑜，白集西，食甘露，飲榮泉。赤雁集，六紛員，殊翁雜，五採文，神所見，施祉福，登蓬萊，結無極。（『漢書·志·禮樂志』）

〈史料 29〉

自威，宣，燕昭使人入海求蓬萊，方丈，瀛洲，此三神山者，其傳在勃海中，去人不遠。蓋嘗有至者，諸仙人及不死之藥皆在焉。其物禽獸盡白，而黃金銀為宮闕未至，望之如雲；及到，三神山反居水下，水臨之患且至，則風輒引船而去，終莫能至雲。世主莫不甘心焉。（『郊祀志·郊祀志上』）

〈史料 30〉

是時，李少君亦以祠灶，谷道，卻老方見上，上尊之。少君者，故深澤侯人，主方。匿其年及所生長。常自謂七十，能使物，卻老。其遊以方遍諸侯。無妻子。人聞其能使物及不死，更饋遺之，常餘金錢衣食。人皆以為不治產業而饒給，又不知其何所人，愈信，爭事之。少君資好方，善為巧發奇中。常從武安侯宴，坐中有年九十餘老人，少君乃言與其大父遊射處，老人為兒從其大父，識其處，一坐盡驚少君見上，上有故銅器，問少君少君曰：

“。此器齊桓公十年陳於柏寢”已而按其刻，果齊桓公器一宮盡駭，以為少君神，數百歲人也少君言上：“祠灶皆可致物，致物而丹沙可化為黃金，黃金成以為飲食器則益壽，益壽而海中蓬萊仙者乃可見之，以封禪則不死，黃帝是也。臣嘗遊海上，見安期生，安期生食臣棗，大如瓜。安期生仙者，通蓬中，合則見人，不合則隱。“於是天子始親祠灶，遣方士入海求蓬萊安期生之屬，而事化丹沙諸藥齊為黃金矣。久之，少君病死。天子以為化去不死也，使黃鍾史寬舒受其方，而海上燕齊怪迂之方士多更來言神事矣。（『郊祀志·郊祀志上』）

〈史料 31〉

入海求蓬萊者，言蓬萊不遠，而不能至者，殆不見其氣。上乃遣望氣佐候其氣雲。（『郊祀志·郊祀志上』）

〈史料 32〉

自得寶鼎，上與公卿諸生議封禪，封禪用希曠絕，莫知其儀體，而群儒採封禪尚書，週官，王制之望祀射牛事。齊人丁公年九十餘，曰：“。封禪者，古不死之名也秦皇帝不得上封陛下必欲上，稍上即無風雨，遂上封矣。”上於是乃令諸儒習射牛，草封禪儀。數年，至且行。天子既聞公孫卿及方士之言，黃帝以上封禪皆致怪物與神通，欲放黃帝以接神人蓬萊，高世比德於九皇，而頗採儒術以文之。群儒既已不能辯明封禪事，又拘於詩書古文而不敢聘。上為封祠器視群儒，群儒或曰“不與古同”，徐偃又曰“太常諸生行禮不如魯善”，週霸屬圖封事，於是上黜偃，霸，而盡罷諸儒弗用。（『郊祀志·郊祀志上』）

〈史料 33〉

上遂東巡海上，行禮祠八神。齊人之上疏言神怪奇方者以萬數，乃益發船，令言海中神山者數千人求蓬萊神人。公孫卿持節常先行候名山，至東萊，言夜見大人，長數丈，就之則不見，見其跡甚大，類禽獸雲。群臣有言見一老父牽狗，言“吾欲見鉅公”，已忽不見。上既

見大跡，未信，及群臣又言老父，則大以為仙人也。宿留海上，與方士傳車及間使求神仙人以千數。（『郊祀志·郊祀志上』）

〈史料 34〉

天子既已封泰山，無風雨，而方士更言蓬萊諸神若將可得，於是上欣然庶幾遇之，復東至海上望焉。奉車子侯暴病，一日死。上乃遂去，並海上，北至碣石，巡自遼西，歷北邊至九原。五月，乃至甘泉，週萬八千裡雲。（『郊祀志·郊祀志上』）

〈史料 35〉

明年，幸泰山，以十一月甲子朔旦冬至日祀上帝於明堂，後每修封其贊饗曰：“。天增授皇帝泰元神策，周而復始皇帝敬拜泰一”東至海上，考入海及方士求神者，莫驗，然益遣，幾遇之。乙酉，柏梁災。十二月甲午朔，上親禪高裡，祠后土。臨勃海，將以望祀蓬萊之屬，幾至殊庭焉。（『郊祀志·郊祀志下』）

〈史料 36〉

上還，以柏梁災故，受計甘泉公孫卿曰：“。黃帝就青靈臺，十二日燒，黃帝乃治明庭明庭，甘泉也”方士多言古帝王有都甘泉者。其後天子又朝諸侯甘泉，甘泉作諸侯邸勇之乃曰：“粵俗有火災，復起屋，必以大，用勝服之”於是作建章宮，度為千門萬戶。前殿度高未央。其東則鳳闕，高二十餘丈。其西則商中，數十裡虎圈。其北治大池，漸台高二十餘丈，名曰泰液，池中有蓬萊，方丈，瀛州，壺梁，象海中神山龜魚之屬。其南有玉堂璧門大鳥之屬。立神明台，井幹樓，高五十丈，輦道相屬焉。（『郊祀志·郊祀志下』）

〈史料 37〉

後五年，上復修封於泰山。東遊東萊，臨大海。是歲，雍縣無雲如割者三，或如虹氣蒼黃，若飛鳥集棧陽宮南，聲聞四百裡。隕石二，黑如鬣，有司以為美祥，以薦宗廟。而方士

之候神入海求蓬萊者終無驗，公孫卿猶以大人之跡為解。天子猶羈縻不絕，幾遇其真。

（『郊祀志・郊祀志下』）

〈史料 38〉

成帝末年頗好鬼神，亦以無繼嗣故，多上書言祭祀方術者，皆得待詔，祠祭上林苑中長安城旁，費用甚多，然無大貴盛者，谷永說上曰：“臣聞明於天地之性，不可或以神怪；知萬物之情，不可罔以非類諸背仁義之正道，不遵五經之法言，而盛稱奇怪鬼神，廣崇祭祀之方，求報無福之祠，及言世有仙人，服食不終之藥，攬輿輕舉，登遐倒景，覽觀縣圃，浮游蓬萊，耕耘五德，朝種暮獲，與山石無極，黃冶變化，堅冰淖溺，化色五倉之術者，皆奸人惑眾，挾左道，懷詐偽，以欺罔世主。聽其言，洋洋滿耳，若將可遇；求之，蕩蕩如系風捕景，終不可得是以明王距而不聽，聖人絕而不語昔週史萇弘欲以鬼神之術輔尊靈王會朝諸侯，而週室愈微，諸侯愈叛。楚懷王隆祭祀，事鬼神，欲以獲福助，卻秦師，而兵挫地削，身辱國危。秦始皇初並天下，心於神仙之道，遣徐福，韓終之屬多齎童男童女入海求神採藥，因逃不還，天下怨恨。漢興，新垣平，齊人少翁，公孫卿，欒大等，皆以仙人黃冶祭祠事鬼使物入海求神採藥貴幸，賞賜累千金，大尤尊盛，至妻公主，爵位重綦，震動海內。元鼎，元封之際，燕齊之間方士瞋目扼腕，言有神仙祭祀致福之術者以萬數。其後，平等皆以術窮詐得，誅夷伏辜。至初元中，有天淵玉女，鉅鹿神人，轅陽侯師張宗之姦，紛紛復起。夫周秦之末，三五之隆，已嘗專意散財，厚爵祿，竦精神，舉天下以求之矣。曠日經年，靡有毫釐之驗，足以揆今經曰：‘享多儀，儀不及物，惟曰不享。’論語說曰：‘子不語怪神’唯陛下距絕此類，毋令奸人有以窺朝者。”“上善其言。（『郊祀志・郊祀志下』）

〈史料 39〉

其十二月羽獵，雄從。以為昔在二帝三王，宮館臺榭沼池苑囿林麓藪澤財足以奉郊廟，禦賓客，充庖廚而已，不奪百姓膏腴谷土桑柘之地。女有餘布，男有餘粟，國家殷富，上下交

足，故甘露零其庭，醴泉流其唐，鳳皇巢其樹，黃龍遊其沼，麒麟臻其囿，神爵棲其林昔者禹任益虞而上下和，山木茂；成湯好田而天下用足；文王囿百里，民以為尚小；齊宣王囿四十里，民以為大：裕民之與奪民也。武帝廣開上林，南至宜春，鼎湖，禦宿，昆吾，旁南山而西，至長楊，五柞，北繞黃山，瀕渭而東，週袤數百裡。穿昆明象滇河，營建章，鳳闕，神明，馭娑，漸台，泰液象海水週流方丈，瀛洲，蓬萊。遊觀侈靡，窮妙極麗。雖頗割其三垂以贍齊民，然至羽獵田車戎馬器械儲侍禁御所營，尚泰奢麗誇詡，非堯，舜，成湯，文王三驅之意也。（『漢書·傳·揚雄傳·揚雄傳上』）

〈史料 40〉

夙夜連率韓博上言：“有奇士，長丈，大十圍，來至臣府，曰欲奮擊胡虜自謂巨毋霸，出於蓬萊東南，五城西北昭如海瀕，輜車不能載，三馬不能勝。即日以大車四馬，建虎旗，載霸詣闕。霸臥則枕鼓，以鐵箸食，此皇天所以輔新室也。願陛下作大甲高車，賁育之衣，遣大將一人與虎賁百人迎之於道。京師門戶不容者，開高大之，以視百蠻，鎮安天下。“博意欲以風莽。莽聞惡之，留霸在所新豐，更其姓曰巨毋氏，謂因文母太后而霸王符也。徵博下獄，以非所宜言，棄市。（『漢書·傳·王莽傳·王莽傳下』）

〈史料 41〉

四年冬十月。行幸雍，祠五畤。東行幸汾陰。十有一月甲子。立后土祠於汾陰。禮畢。行幸滎陽。還至洛陽。詔問週王后。得孽子嘉。封為周子南君。以奉週祀。春二月。中山王勝薨。諡曰靖王。勝樂酒。好內色。有男子百二十餘人。夏。封方術士欒大為樂通侯。位上將軍，欒大，膠東人也。以方術言於上曰。臣嘗往東海中。見安期羨門之屬。臣師曰。黃金可成。河水決可塞不死。之藥可得。仙人可致也。然臣恐效文成將軍。則方術之士。掩口不能言矣。文成將軍者。齊人也，姓李。字少翁。以方術進。拜為文成將軍。上以客禮待之。於甘泉宮中。畫太乙諸鬼神像所設祭祀。欲以致其神。歲餘。其方不效。乃為帛書以飯牛。偽言牛腹中有奇書。殺而祀之。上識其手書。問之果服，乃誅。上既殺文成而悔之。及得欒大

甚喜。乃大敢為大言。處之不疑上使驗小方。鬥棋。棋自相觸。大言能致其師。陛下必欲致之。則貴其使者。令有親屬。以客禮待之。上乃拜大為五利將軍。天士將軍。地士將軍。大通將軍。凡四將軍四印。賜列侯甲第。童十人。乘輿厩馬帷帳器物。以充其家。以衛長公主妻之。黃金萬斤。上親至其家。自公主大臣將軍卿相已下。皆致酒其家。刻玉印曰天道將軍。使者衣羽衣。夜立白茆上。大亦衣羽衣立白茆上。受印綬。以示不臣。於是五利將軍。嘗夜祠其家。欲下其神。後裝欲入東海中。雲求其師。至大山。不敢入海。上使人隨而驗之。皆妄言不效。先是方士李少君。乃言能致物卻老。少君嘗至武安侯家。有老人年九十餘。少君乃言與老人大父遊獵處。老人為兒時識其家處。一坐盡驚。上有古銅器。以問少君。少君對曰。此器。齊桓十年陳於柏寢下。案其刻銘。果齊桓公。時皆謂少君數百歲人也。少君言祠灶可致物如丹砂。可化為黃金。黃金成以為飲食器。則益壽。而蓬萊仙人可得見也。見之以封禪則不死。黃帝是也。其後方多不效。而少君病死。道士以為化去不死也。齊人公孫卿。言黃帝得寶鼎。而神化登於天。讖書言漢興正當黃帝之運。漢之聖德者。在高祖之孫。上曰。嗟乎。誠得如黃帝。吾視去妻子如脫屣爾。拜卿為郎。使候神於太室。是時言神怪方術者以萬數。入海求仙人者數千人。上幸東萊。夜見大人長數丈。就之則不見。見大人跡。諸方士後皆無驗。上益厭倦。然猶羈縻不絕。冀望其真。上嘗疾病。有巫為上致神君。貴者曰太乙。其次曰太禁。司命之屬皆從之。雲非可見。但聞其言。言與人音等也。時去則若風肅然。嘗以夜至。或以晝至。或居室帷幄中。上禮之然後入。因巫為主人。關通飲食。所欲言。又置禱官。張羽旗。設祭具以祀。神君所。上使人記之。其言世俗所知。亦無餘殊者。而上心甚善之。其事秘。世莫傳也。而信以為神矣。（『前漢紀・孝武皇帝紀四』）

〈史料 42〉

太初元年冬十月。行幸太山。十有一月甲子朔旦。冬至。祠上帝於明堂。乙酉。柏梁台災。夏侯始昌先言其災日。始昌。魯人也。明於陰陽以術進。而為梁王太傅。上甚重之。以選昌為王太傅。十有二月。湏高裡。祠后土。東臨渤海。望祀蓬萊。還受計於甘泉宮。春二月。

起建章宮。夏五月。正律歷。以寅月為正首。色尚黃。數用五。定官名。正律歷。協音樂。昔夏以寅月為正。殷以醜月為正。週以子月為正。承三統。十一月。幹之初九。其位在子。天氣始起。生陰陽之化。故子為天統。六月坤之初六。其位在未。陰受陽任。成剛柔之刑。其衝在醜。故十二月為地統。正月幹之九三。萬物湊出於地。人奉之而承之。故寅為人統。自夏殷及週。三變而復故。漢用夏正。天統始施化於子半。日萌生而色赤。地統受之於醜始。化而色黃。半日色化而白。統受之於寅始。孽成而黑。至寅半日生色青。故夏色尚黑。殷色尚白。週色尚赤。律歷。一曰備數。二曰和聲。三曰審度。四曰嘉量。五曰權衡。參伍以變。錯綜其數。校之氣物。和之心耳。以達自然之數。以順性命之理。數者。一十百千萬也。本起黃鍾之數。始於一。積之無窮。以週備事物之數。職在太史掌之。聲者。宮商角徵羽。所以諧八音。正情性。移風俗也。八音者。土曰缶。匏曰笙。皮曰鼓。竹曰管。絲曰弦。石曰磬。金曰鍾。木曰柷敔。角者。觸也。物出於地。載芒角也。徵者。祉也。物盛而繁祉也。宮者。中也。商者。量也。物盛而可量度也。羽者。宇也。物聚而覆宇之也。合之五行。則角為木。於五常為仁。於五事為貌。商為金為義為言。徵為火為禮為視。羽為水為智為聽。宮為土為信為思為心。宮為君。商為臣。角為民。徵事。羽為物。六律。律法也。以統氣類物。子曰黃鍾。寅曰太族。辰曰姑洗。午曰蕤賓。申曰夷則。戌曰無射。六呂。呂。助也。以助陽宣氣。未曰林鍾。酉曰南呂。亥曰應鍾。醜曰大呂。卯曰夾鍾。巳曰中呂。黃鍾。黃中色也。鍾。種也。言以中色布種物也。大呂。呂。助陽也。（『前漢紀·孝武皇帝紀五』）

〈史料 43〉

太族。族。湊也。言湊地上爾也。夾鍾。夾輔陽也。姑洗。姑。固也。洗。潔也。言固潔物也。中呂。陰始起未發。居中而助陽也。蕤賓。蕤。繼也。賓。導也。言陽導物而繼之也。林鍾。林。居也。言陰受陽任。居鍾物也。夷則。夷。傷也。則。法也。言陽正法。使陰夷當傷之物也。南呂。南。任也。陰受陽。任成物也。無射。射。厭也。陽究陰。成終而復始。無厭之也。應鍾。陰應陽而後鍾物也。五聲之本。生於黃鍾。黃鍾之律。長九寸為管。

或損或益。以定五聲。九六相生陰陽。之應。故三分黃鍾。損一下生林鍾。三分林鍾。益一上生太簇。三分太簇。損一下生南呂。三分南呂。益一上生姑洗。三分姑洗。損一下生應鍾。三分應鍾。益一上生蕤賓。三分蕤賓。損一下生大呂。三分大呂。益一上生夷則。三分夷則。損一下生夾鍾。三分夾鍾。一上生無射。三分無射。損一下生中呂。陰陽相生。自黃鍾始。而左轉八八六十四為位。其法皆用銅。職在太樂。太常掌之。度者。分寸尺丈引也。所以度長短也。本起於黃鍾之長。以秬黍之中者。一黍廣度之。九十分黃鍾之長。一黍為一分。十分為一寸。十寸為尺。十尺為丈。十丈為一引。而五度審矣。職在內官。廷尉掌之。量者。龠合升鬥斛也。所以量多少。本起黃鍾之龠。以秬黍之中者。千有二百實為一龠。十龠為合。十合為升。十升為鬥。十鬥為斛。而五量為嘉矣。龠者興也。合者。合也。升者。登也。鬥者。聚也。斛者。角也。職在太倉。大司農掌之。權衡者。所以平輕重銖兩斤鈞石也。本起黃鍾之重。龠容千有二百黍。重十二銖。二十四銖為兩。十六兩為斤。三十斤為鈞。四鈞為石。銖者。從微至見。可殊異也。兩者。兩鍾之重也二十四氣為象。斤者。明也。三百八十四銖為易。二篇之文鈞。陰陽變動之象。十六兩為斤。斤者。四時乘四方之象也。者。以平均物也。三十斤。一月之象也。石者。大也。權之大者也。四鈞。四時之象也。重一百二十斤。十二月之象也。而五權備矣。物與權均而生衡。衡運而生規。規圓而生矩。矩方而生繩。繩直而生物定矣。是謂五則。君臣用焉。以定國禮。百工由焉。以為法式。職在鴻臚。鴻臚掌之。夫推歷生律。制器。權衡規矩。準繩度量。探賾索隱。鉤深致遠。莫不用焉。匈奴單于好殺伐。左右大都尉。欲殺單于以降漢。於是使因桿將軍公孫敖。築受降城於塞外。事覺。左右大都尉誅死。秋八月。行幸安定。發天下謫民。遣貳師將軍李廣利徵大宛。秋。大蝗自東方飛至燉煌。（『前漢紀·孝武皇帝紀五』）

〈史料 44〉

其十一年。令太史更推三萬六千歲歷紀。六歲一改元。佈告天下。時匈奴寇邊。莽乃大募發丁男死罪囚吏民奴。一切稅吏民皆三十取一。傳募有伎術者。待以不次之位。上言便宜者以萬數矣。或言能渡水不用舟楫。連馬接車濟百萬之師。或言不持門儲。食藥物。馬不飢。或

言能飛。一日千里。莽輒試之。取大鳥翮作翼。頭與身皆著毛。通引环鈕。飛數百步輒墮。莽知其不可用。苟欲獲其名。皆拜大將軍。賜以車馬待詔。發遣大司馬武建伯嚴尤。與將軍廉丹擊匈奴。皆賜姓王。大凡十三部。將四十萬眾。三百日糧。欲同時並出塞。追匈奴內之丁零。因分其地。立呼韓邪十五子。嚴尤諫曰。匈奴為害久矣。周秦漢皆徵之。然皆未得上策者。週得中策。漢得下策。秦無策焉。當週宣王之時。獫狁內侵。命將驅之。盡境而反。其視夷狄之侵。譬猶蚊蚋之。驅之而已。故天下稱明。是為中策。漢武帝選將練兵。齎糧深入。雖有克獲之功。胡輒報之。兵連禍結。四十餘年。中國罷耗。匈奴亦創艾。而天下稱武。是為下策。始皇不忍小忿。而輕民力。恢長城之固。延袤萬里。轉輸之行。起於負海。疆場未定。中國內竭。以喪社稷。是為無策。今天下遭陽九之厄。比年饑饉。而北邊尤甚。今發四十萬眾。齎三百日之糧。東據海岱。南取江淮。然後能備。計其道裡。一年尚未集合。兵先至者。聚居暴露。師老械朽。勢不可用。此一難也。邊城空虛。不能奉軍糧。內調郡國。不相及屬。此二難也。計一人三百日食。用米十八斛以往。非牛力不能勝。牛又當自齎食。加二十四斛。重矣。胡地沙鹵。多乏水草。事揆之。軍出不滿百日。牛必死盡。且餘糧尚多。人不能勝。此三難也。秋冬甚寒。春夏則多風。鑊薪炭。重不可勝。食糒飲水。以歷四時。師有疾疫之憂。勢不能久。此四難也。輜重自隨。則輕銳者少。不得疾行虜徑。遁逃。勢不相及。幸而逢虜。則累輜重。如遇險阻。銜尾相隨。虜邀遮前後。危殆不測。此五難也。大用民力。功不可必立。臣伏憂之。莽不聽。又復引古者名將樂毅白起不用之意。及論邊事凡三篇。及當出師庭議。尤固爭之。宜先憂山東。莽怒。策尤為庶人。以董忠代之。師久屯不行。運轉不已。天下騷動。翼平連率田況奏。言民資不實。莽復三十稅一。以況忠言憂國。進爵為伯。眾皆罵之。夙夜連率韓博上言。有奇士巨毋霸。長一丈六尺。大九圍。來至臣府。曰欲奮擊匈奴。出於蓬萊東南五城西北。輅車不能勝。即以大車駟馬。載霸詣闕。願陛下作大甲高車。賁育之衣。遣大將軍一人。虎賁百夫迎之。於道。京師門不容者。開大高之。欲以示百蠻。意欲以諷莽。莽聞而惡之。留霸新豐。更其姓曰巨毋霸。謂因文太后霸王符也。博以非所宜言。棄市。（『前漢紀·孝平皇帝紀』）

〈史料 45〉

謹按『太史記』：秦始皇欺於徐市之屬，求三山於海中，通同道，隱形體，弦詩想蓬萊，而不免沙丘之禍。孝武皇帝茲益迷謬，文成、五利處之不疑，妻以公主，賜以甲第，家累萬金，身佩四印，辭窮情得，亦旋梟裂。淮南王安銳精黃白，庶幾輕舉，卒離親伏白刃之罪。劉向得其遺文，奇而獻之。成帝令典尚方鑄作事，費甚多而方不驗。劾向大辟，系須冬獄，兄陽成侯乞入國半，故得減死。秦、漢以天子之貴、四海之富，淮南竭一國之貢稅，向假尚方之饒，然不能有成者，夫物之變化固自有極，王陽何人，獨能乎哉？語曰：“金不可作，世不可度。”王陽居官食祿，雖為鮮明，車馬衣服，亦能幾所，何足怪之！乃傳俗說，班固之論陋於是矣。（『風俗通義·王陽能鑄黃金』）

〈史料 46〉

祖洲在東海 瀛洲在東海 炎洲在南海 玄洲在北海 長洲在東海 元洲在北海 流洲在西海
生洲在東海 鳳麟洲在西海 聚窟洲在西海
蓬丘，蓬萊山是也。對東海之東北岸，周回五千裏。外別有圓海繞山，圓海水正黑，而謂之冥海也。無風而洪波百丈，不可得往來。上有九老丈人，九天真王宮，蓋太上真人所居。唯飛仙有能到其處耳。（『海內十洲記』）

〈史料 47〉

二年春正月，魏作合肥新城。詔立都講祭酒，以教學諸子。遣將軍衛溫，諸葛直將甲士萬人浮海求夷洲及亶洲，亶洲在海中，長老傳言秦始皇帝遣方士徐福將童男童女數千人入海，求蓬萊神山及仙藥，止此洲不還。世相承有數萬家，其上人民，時有至會稽貨布，會稽東縣人海行，亦有遭風流移至亶洲者。所在絕遠，卒不可得至，但得夷洲數千人還。（『三國志·吳書二·吳主傳』）

〈史料 48〉

安期生者，琅琊人也，受學河上丈人，賣藥海邊，老而不仕，時人謂之千歲公。秦始皇東遊，請與語，三日三夜，賜金璧，直數千萬，出置阜鄉亭而去，留赤玉舄為報留書與始皇曰：“後數十年，求我於蓬萊山下”。及秦敗，安期生與其友蒯通交往，項羽欲封之，卒不肯受。（『三國志·高士傳·卷中·安期生』）

〈史料 49〉

安期先生者，琅琊阜鄉人也。賣藥於東海邊，時人皆言千歲翁。秦始皇東遊，請見，與語三日三夜，賜金璧度數千萬。出，於阜鄉亭皆置去，留書，以赤玉舄一雙為報，曰：“後數年求我於蓬萊山。”始皇即遣使者徐市、盧生等數百人入海，未至蓬萊山，輒逢風波而還。立祠阜鄉亭海邊十數處雲。（『列仙傳·安期先生』）

〈史料 50〉

寥寥安期，虛質高清。乘光適性，保氣延生。聊悟秦始，遺寶阜亭。將遊蓬萊，絕影清泠。（『列仙傳·安期先生』）

〈史料 51〉

服閭者，不知何所人也，常止莒，往來海邊諸祠中。有三仙人於祠中博賭瓜，雇閭，令擔黃白瓜數十頭，教令瞑目。及覺，乃在方丈山（在蓬萊山南）。後往來莒，取方丈山上珍寶珠玉賣之，久矣。一旦，髡頭著赭衣，貌更老，人問之，言坐取廟中物雲。後數年，貌更壯好，鬢髮如往日時矣。（『列仙傳·服閭』）

〈史料 52〉

負局先生者，不知何許人也，語似燕、代間人。常負磨鏡局徇吳市中，磨鏡一錢。因磨之，輒問主人，得無有疾苦者，輒出紫丸藥以與之，得者莫不愈。如此數十年。後大疫病，家至戶到與藥，活者萬計，不取一錢，吳人乃知其真人也。後住吳山絕崖頭，懸藥下與人。

將欲去時，語下人曰：“吾還蓬萊山，為汝曹下神水。崖頭一旦有水，白色，流從石間來，下服之。”多愈疾。立祠十餘處。（『列仙傳·負局先生』）

〈史料 53〉

或人問曰：“彭祖八百，安期三千，斯壽之過人矣。若果有不死之道，被何不遂仙乎豈非稟命受氣，自有修短，而彼偶得其多，理不可延，故不免於雕隕哉”抱朴子答曰：按彭祖經云，其自帝嚳佐堯，歷夏至殷為大夫，殷王遣採女從受房中之術，行之有效，欲殺彭祖，以絕其道，彭祖覺焉而逃去去時年七八百餘，非為死也黃石公記雲：彭祖去後七十餘年，門人於流沙之西見之，非死明矣。又彭祖之弟子，青衣烏公，黑穴公，秀眉公，白兔公子，離婁公，太足君，高丘子，不肯來七八人，皆歷數百歲，在殷而各仙去，況彭祖何肯死哉？又劉向所記列仙傳亦言彭祖是仙人也。又安期先生者，賣藥於海邊，瑯琊人傳世見之，計已千年。秦始皇請與語，三日三夜。其言高，其旨遠，博而有證，始皇異之，乃賜之金璧，可直數千萬，安期受而置之阜鄉亭，以赤玉舄一量為報，留書曰，複數千載，求我於蓬萊山。如此，是為見始皇時已千歲矣，非為死也。又始皇剛暴而驚很，最是天下之不應信神仙者，又不中以不然之言答對之者也。至於問安期以長生之事，安期答之允當，始皇惺悟，信世間之必有仙道，既厚惠遺，又甘心欲學不死之事，但自無明師也，而為盧敖徐福輩所欺弄，故不能得耳。向使安期先生言無符據，三日三夜之中，足以窮屈，則始皇必將烹煮屠戮，不免鼎俎之禍，其厚惠安可得乎？（『抱朴子·內篇·極言』）

〈史料 54〉

或問涉江渡海關蛇龍之道抱朴子曰：“道士不得已而當遊涉大川者，皆先當於水次，破雞子一枚，以少許粉雜香末，合攪器水中，以自洗濯，則不畏風波蛟龍也。又佩東海小童符，及制水符，蓬萊札，皆卻水中之百害也。又有六甲三金符，五木禁。又法，臨川先祝曰：卷蓬卷蓬，河伯導前關蛟龍，萬災消滅天清明又金簡記雲，以五月丙午日日中，搗五石，下其銅五石者，雄黃，丹砂，雌黃，礬石，曾青也。皆粉之，以金華池浴之，內六一神爐中鼓下

之，以桂木燒為之，銅成以剛炭煉之，令童男童女進火，取牡銅以為雄劍，取牝銅以為雌劍，各長五寸五分，取土之數，以厭水精也。帶之以水行，則蛟龍巨魚水神不敢近人也。欲知銅之牝牡，當令童男童女俱以水灌銅，灌銅當以在火中向赤時也，則銅自分為兩段，有凸起者牡銅也，有凹陷者牝銅，各刻名識之。欲入水，以雄者帶左，以雌者帶右。但乘船不身涉水者，其陽日帶雄，陰日帶雌。又天文大字，有北帝書，寫帛而帶之，亦關風波蛟龍水蟲也“或問曰：關山川廟堂百鬼之法抱朴子曰：”道士常帶天水符，及上皇竹使符，老子左契，及守真一思三部將軍者，鬼不敢近人也。其次則論百鬼錄，知天下鬼之名字，及白澤圖九鼎記，則眾鬼自卻。其次服鶉子赤石丸，及曾青夜光散，及蔥實烏眼丸，及吞白石英只母散，皆令人見鬼，即鬼畏之矣“抱朴子曰：”有老君黃庭中胎四十九真秘符，入山林，以甲寅日丹書白素，夜置案中，向北斗祭之，以酒脯各少少，自說姓名，再拜受取，內衣領中，關山川百鬼萬精虎狼蟲毒也。何必道士，亂世避難入山林，亦宜知此法也“。（『抱朴子·內篇·登涉』）

〈史料 55〉

去十餘年，忽然還家，去時已老，還更少壯，頭髮還黑語其家雲：“七月七日，王君當來過，到其日，可所作數百斛飲食，以供從官“，乃去。到期日，其家假借盆甕作飲食數百斛，羅列覆置庭中，其日方平果來，未至經家，則聞金鼓簫管人馬之聲，比近，皆驚，不知何所在。及至經家，舉家皆見方平，著遠遊冠，朱服虎頭鞶裳，五色綬帶劍，少須，黃色，長短中型人也。乘羽車，駕五龍，龍各異色，麾節幡旗，前後導從，威儀奕奕如大將軍也。有十二玉壺，皆以臘蜜封其口，鼓吹皆乘麟，從天上下，懸集，不從道行也。既至，從官皆隱，不知所在，惟見方平坐耳。須臾，引見經父母兄弟，因遣人召麻姑相問，亦莫知麻姑是何神也言。方平敬報，久不在民間，今集在此，想姑能暫來語否有頃，信還，但聞其語，不見所使人也答言：“麻姑再，比不相見忽已五百餘年，尊卑有序，修敬無階思念，煩信承來，在彼登當傾倒，而先被記當案行蓬萊，今便暫住，如是。當還，還便親覲。願未即去，如此兩時間。“麻姑來，來時亦先聞人馬之聲，既至，從官當半於方平也。麻姑至，蔡經亦

舉家見之。是好女子，年十八九許，於頂中作髻，餘發散垂至腰，其衣有文章而非錦綺，光彩耀日，不可名字，皆世所無有也入。拜方平，方平為之起立。坐定，召進行廚，皆金玉杯盤無限也，餽膳多是諸花果，而香氣達於內外，擘脯而行之松柏炙，雲是麟脯也麻姑自說：

“接待以來，已見東海三為桑田，向到蓬萊，水又淺於往昔，會時略半也，豈將復還為陵陸乎。”方平笑曰：“聖人皆言，海中行復揚塵也。”麻姑欲見蔡經母及婦侄，時經弟婦新產數十日，麻姑望見，乃知之曰：“噫，且止，勿前。”“求少許米至，得米，便以撒地，謂以米祛其穢也，視米皆成真珠。（『神仙傳·卷三·王遠』）

〈史料 56〉

茅君者，名盈字叔申，咸陽人也高祖父蒙，字初成，學道於華山，丹成，乘赤龍而升天，即秦始皇時也，有童謠曰：“神仙得者茅初成，駕龍上天升太清，時下玄洲戲赤城，繼世而往在我盈，帝若學之臘嘉平。”其事載史紀詳矣。秦始皇方求神仙長生之道，聞謠言，以為己姓符合謠識，當得升天，遂詔改臘為嘉平，節以應之，望祀蓬萊，使徐福將童男童女，入海求神仙之藥。（『神仙傳·卷三·茅君』）

〈史料 57〉

初修上林苑，群臣遠方，各獻名果異樹，亦有制為美名，以標奇麗。梨十：紫梨、青梨、實大。芳梨、實小。大谷梨、細葉梨、縹葉梨、金葉梨、出瑯琊王野家，太守王唐所獻。瀚海梨、出瀚海北，耐寒不枯。東王梨、出海中。紫條梨。棗七：弱枝棗、玉門棗、棠棗、青華棗、梔棗、赤心棗、西王棗。出崑崙山。栗四：侯栗、榛栗、瑰栗、嶧陽栗。嶧陽都尉曹龍所獻，大如拳。桃十：秦桃、桴桃、緇核桃、金城桃、綺葉桃、紫文桃、霜桃、霜下可食。胡桃、出西域。櫻桃、含桃。李十五：紫李、綠李、朱李、黃李、青綺李、青房李、同心李、車下李、含枝李、金枝李、顏淵李、出魯。羌李、燕李、蠻李、侯李。柰三：白柰、紫柰、花紫色。綠柰。花綠色。查三：蠻查、羌查、猴查。棓三、青棓、赤葉棓、烏棓。棠四：赤棠、白棠、青棠、沙棠。梅七：朱梅、紫葉梅、紫華梅、同心梅、麗枝梅、燕梅、猴

梅。杏二：文杏、材有文采。蓬萊杏。東郭都尉幹吉所獻。一株花雜五色，六出，雲是仙人所食。桐三：椅桐、梧桐、荊桐。林檎十株，枇杷十株，橙十株，安石榴，檉十株，白銀樹十株，黃銀樹十株，槐六百四十，千年長生樹十株，萬年長生樹十株，扶老木十株，守宮槐十株，金明樹二十株，搖風樹十株，鳴風樹十株，琉璃樹七株，池離樹十株，離婁樹十株，白俞●，杜●，桂蜀漆樹十株，楠四株，樅七株，栝十株，楔四株，楓四株。

餘就上林令虞淵得朝臣所上草木名二千餘種。鄰人石瓊就餘求借，一皆遺棄。今以所記憶，列於篇右。（『、京雜記·第一』）

〈史料 58〉

永初中，三輔遭羌寇，章避難東國，家於外黃。居貧，蓬戶蔬食，躬勤孝養，然講讀不輟，太僕鄧康聞其名，請欲與交，章不肯往，康以此益重焉。是時學者稱東觀為老氏臧室，道家蓬萊山，康遂薦章入東觀為校書郎。（『後漢書·列傳·竇融列傳』）

〈史料 59〉

自未央而連桂宮，北彌明光而涉長樂，陵塏道而超西墉，混建章而外屬，設壁門之鳳闕，上栢棧而棲金雀。內則別風之嶠嶢，眇麗巧而竦擢，張千門而立萬戶，順陰陽以開闔。爾乃正殿崔巍，層構厥高，臨乎未央，經駘盪而出馭娑，洞杙詣與天梁，上反宇以蓋戴，激日景而納光。神明鬱其特起，遂偃蹇而上躋，軼雲雨於太半，虹霓回帶於禁楣，雖輕迅與漂狡，猶愕眙而不敢階。攀井幹而未半，目眴轉而意迷，含櫺檻而卻倚，若顛墜而復稽，魂恍恍以失度，巡迴塗而下低既。懲懼於登望，降週流以徬徨，步甬道以縈紆，又杳窳而不見陽。排飛闔而上出，若遊目於天表，似無依之洋洋。前唐中而後太液，攬滄海之湯湯，揚波濤於碣石，激神岳之嵒嵒，濫瀛洲與方壺，蓬萊起乎中央。於是靈草冬榮，神木叢生，岩峻崔嵬，金石崢嶸抗。仙掌與承露，擢雙之金莖，軼埃壙之混濁，鮮顯氣之清英。騁文成之丕誕，馳五利之所刑，庶松喬之群類，時遊從乎斯庭，實列仙之攸館，匪吾人之所寧。（『後漢書·列傳·班彪列傳上』）

〈史料 60〉

佔既吉而無悔兮，簡元辰而俶裝。旦餘沐於清原兮，晞餘發於朝陽，漱飛泉之瀝液兮，咀石菌之流英。翺鳥舉而魚躍兮，將往走乎八荒。過少皞之窮野兮，問三丘乎句芒。何道真之淳粹兮，去穢累而票輕。登蓬萊而容與兮，鰲雖拼而不傾留瀛。洲而採芝兮，聊且以乎長生。憑歸雲而遐逝兮，夕餘宿乎扶桑。嚙青岑之玉醴兮，餐沆瀣以為糧。發昔夢於木禾兮，谷崑崙之高岡。朝吾行於湯谷兮，從伯禹於稽山。集群神之執玉兮，疾防風之食言。（『後漢書·列傳·張衡列傳』）

〈史料 61〉

爾乃清夜晨，妙技單，收尊俎，徹鼓盤。惘焉若醒，撫劍而歎。慮理國之須才，悟稼穡之艱難。美呂尚之佐週，善管仲之輔桓。將超世而作理，焉沉湎於此歡！於是罷女樂，墮瑤台。思夏禹之卑宮，慕有虞之土階。舉英奇於仄陋，拔髦秀於蓬萊。君明哲以知人，官隨任而處能。百揆時敘，庶績咸熙。諸侯慕義，不召同期。繼高陽之絕軌，崇成，莊之洪基。雖齊桓之一匡，豈足方於大持？爾乃育之以仁，臨之以明。致虔報於鬼神，盡肅恭乎上京。馳淳化於黎元，永曆世而太平。（『後漢書·列傳·文苑列傳下』）

〈史料 62〉

會稽海外有東鯤人，分為二十餘國。又有夷洲及澶洲。傳言秦始皇遣方士徐福將童男女數千人入海，求蓬萊神仙不得，徐福畏誅不敢還，遂止此洲，世世相承，有數萬家。人民時至會稽市。會稽東冶縣人有入海行遭風，流移至澶洲者。所在絕遠，不可往來。（『後漢書·列傳·東夷列傳』）

〈史料 63〉

『東京賦』曰：濯龍芳林，九谷八溪，芙蓉覆水，秋蘭被涯。今也，山則塊阜獨立，江無復

彷彿矣谷水又東，枝分南入華林園，歷疏圃南，圃中有古玉井，井悉以珉玉為之，以緇石為口，工作精密，猶不變古，璨焉如新。又迳瑤華宮南，歷景陽山北，山有都亭，堂上結方湖，湖中起禦坐石也。禦坐前建蓬萊山，曲池接筵，飛沼拂席，南面射侯，夾席武峙。背山堂上則石路崎嶇，岩嶂峻險，雲飈風觀，纓轡帶阜，遊觀者升降阿閣，出入虹陞，望之狀鳬沒鸞舉矣。其中引水飛皋，傾瀾瀑布，或枉渚聲溜，潺潺不斷，竹柏蔭於層石，繡薄叢於泉側，微飈暫拂，則芳溢於六空，寔為神居矣。其水東注天淵池，池中有魏文帝九華台，殿基悉是洛中故碑累之，今造釣台於其上。池南直魏文帝茅茨堂，前有『茅茨碑』，是黃初中所立也。其水自天淵池東出華林，迳聽訟觀南，故平望觀也。魏明帝常言，獄，天下之命也，每斷大獄，恆幸觀聽之。以太和三年，更從今名。觀西北接華林隸簿，昔劉楨磨石處也。

（『水經註·卷十六·谷水』）

〈史料 64〉

『梁簡文帝詠風詩』曰：飄飄散芳勢，泛漾下蓬萊，傳涼入鏤檻，發氣滿瑤台，委禾週邦偃，飛鵠宋都回，亟搖故葉落，屢盪新花開，暫舞驚鳬去，時送蕊香來，已拂巫山雨，何用卷寒灰。（『藝文類聚·卷一·天部上·風』）

〈史料 65〉

『陳張正見賦得山卦名詩』曰：蓬萊遁羽客，巖穴轉蒙籠，雲歸仙井暗，霧解石橋通，影帶臨峰鶴，形隨雜雨風，尋師不失路，咸欲馭飛鴻。（『藝文類聚·卷七·山部上·總載山』）

〈史料 66〉

【賦】『晉孫綽遊天台山賦序』曰：天台山者，蓋山岳之神秀者也涉海則有方丈蓬萊，登陸則有四明天台，皆玄聖之所遊化，靈仙之所窟宅，夫其峻極之狀，嘉祥之美，窮山海之瑰富，盡人神之壯麗矣。所以不列於五嶽，闕載於常典者，豈不以其所立冥奧，其路幽迴，或

倒景於重溟，或匿峰於千嶺，始經魑魅之塗，卒踐無人之境，舉世罕能登陟，王者莫由禋祀，理無隱而不彰，啟二奇以示兆，赤城霞起而建標，瀑布飛流以界道。（『藝文類聚·卷七·山部上·天台山』）

〈史料 67〉

『神仙傳』曰：麻姑謂王方平曰：自接待以來，見東海三為桑田，向到蓬萊，水乃淺於往者略半也豈復為陵乎。（『藝文類聚·卷八·水部上·海水』）

〈史料 68〉

『晉潘岳滄海賦』曰：徒觀其狀也。則湯湯蕩蕩，瀾漫形沉，流沫千里，懸水萬丈，測之莫量其深，望之不見其廣，無遠不集，靡幽不通，群溪俱息，萬流來同，含三河而納四瀆，朝五湖而夕九江，陰霖則興雲降雨，陽霽則吐霞曜日，煮水而鹽成，剖蚌而珠出，其中有蓬萊名岳，青丘奇山，阜陵別島，崐崘其間，其山則●崔嵬崱，嵯峨隆屈，披滄流以特起，擢崇基而秀出，其魚則有吞舟鯨鯢，●鰕龍鬚，蜂目豺口，狸班雉軀，怪體異名，不可勝圖，其蟲獸則素蛟丹蚪，元龜靈鼃，修鼃巨鱉，紫貝脰蛇，玄螭蚴蚪，赤龍焚蘊，遷體改角，推舊納新，舉扶搖以抗翼，泛陽侯以濯鱗，其禽鳥則鷗鴻鸕鶿，駕鵝鵠鵠，朱背煒燁，縹翠蔥青，詳察浪波之來往，遍聽奔激之音響，力勢之所回薄，潤澤之所彌廣，普天之極大，橫率土而莫兩。（『藝文類聚·卷八·水部上·海水』）

〈史料 69〉

【賦】『吳楊泉五湖賦』曰：乃天地之玄源，陰陽之所徂，上值箕斗之精，與雲漢乎同模，受三方之灌溉，為百川之巨都，居楊州之大澤，苞吳越之具區，南與長江分體，東與巨海合流，太陰之所埒，玄靈之所遊，追湖水而往還，通蓬萊與瀛洲，爾乃詳觀其廣深之所極，延袤之規方，邈乎浩浩，漫乎洋洋，西合乎蒙汜，東苞乎扶桑，日月於是出入，與天漢乎相望，左有苞山，連以醴瀆，岸嶺崔嵬，穹窮紆曲，右有平原廣澤，蔓延旁薄，原隰陂阪，各

有條格，茹蘆葢，隱軫錯，衝風之所去，零雨之所薄。（『藝文類聚·卷九·水部下·湖』）

〈史料 70〉

『漢書』曰：賈山奏事吳王曰：吳有諸侯之位，而實富於天子，遊曲台，臨上路，不如朝夕之池，深壁高壘，副以闕城，不如長江之固，江淮之險。

又曰：太液池中有蓬萊方丈瀛洲，象神山也。（『藝文類聚·卷九·水部下·池』）

〈史料 71〉

『符子』曰：堯曰：餘坐華殿之上，森然而松生於棟，餘立櫺扉之內，霏焉而雲生於牖，雖面雙闕，無異乎崔巍之冠蓬萊，雖背墉櫺，無異乎回巒之縈崑崙，餘安知其所以安。（『藝文類聚·卷一十一·帝王部一·帝堯陶唐氏』）

〈史料 72〉

『魏崔琰述初賦』曰：。琰性頑口訥，至二十九，粗關書傳，聞北海有鄭徵君者，當世名儒，遂往造焉道由齊都而作述初賦曰：有鄭氏之高訓，吾將往乎發蒙，灑餘發於蘭池，振餘佩於清風，望高密以函徵，戾衡門而造止，觀遊夏之峨峨，聽大猷之篇記，高洪崖之耿介，羨安期之長生，登川山以永望，臨洞浦之廣溟，左揚波於湯谷，右濯岸於蒙汜，運混元以升降，與三光而終始，蓬萊蔚其潛興，瀛壺崛以駢羅，列金台之蹇產，方玉闕之嵯峨。（『藝文類聚·卷二十七·人部十一·行旅』）

〈史料 73〉

【銘】『週庾信思舊銘』曰：歲次攝提，星居鶉首，梁故觀寧侯蕭永卒，嗚呼哀哉人之戚也既非金石所移，士之悲也寧有。春秋之異，高台已傾，稷下有聞琴之泣，壯士一去，燕南有擊築之悲，項羽之晨起帳中，李陵之徘徊歧路，無假窮秋，於時悲矣。況復魚飛武庫，豫有棄甲之徵，鳥伏狄泉，先見橫流之兆，星紀吳亡，庚辰楚滅，原隰載馳，輾轅長往，甲裳失

矣。餘皇棄焉。河流酸棗，杞梓與檣櫓俱沉，海淺蓬萊，魚鱉共蛟龍並盡，燃香復道，詎斂冤魂，載酒屬車，寧消愁氣，芝蘭蕭艾之秋，形殊而並悴，羽毛鱗介之怨，聲異而俱哀，幕府昔開，俊賢翹首，為羈終歲，門人謝焉。及乎東首告辭，西陵長往，山陽車馬，永別郊門，潁川賓客，遙悲松路，嵇叔夜之山廬，尚多楊柳，王子猷之舊徑，唯餘竹林，王孫葬地，方為長樂之宮，列土埋魂即是將軍之墓，昔嘗歡宴，風月留連，追憶平生，宛然心目，美酒酌焉。（『藝文類聚·卷三十四·人部十八·懷舊』）

〈史料 74〉

『魏陳王曹植平陸東行』曰：閭闔開，天衢通，被我羽衣乘飛龍，飛龍與仙期，東上蓬萊採靈芝，●芝採之可服食，年若王父無終極。（『藝文類聚·卷四十一·樂部一·論樂』）

〈史料 75〉

『升天行』曰：乘蹻追術士，遠之蓬萊山，靈液飛素波，蘭桂上參天，玄豹遊其下，翔鶴戲其巔，乘風忽登舉，彷彿見眾仙。（『藝文類聚·卷四十二·樂部二·樂府』）

〈史料 76〉

『後漢張衡西京賦』曰：昔班固睹世祖遷都於洛邑，懼將必逾溢制度，不能遵先聖之正法也故假西都賓盛稱長安舊制，有陋洛邑之議，而為東都主人折禮衷以答之，張平子薄而陋之，故更造焉。有憑虛公子者，況青鳥與黃雀，伏櫺檻而俯聽，聞雷霆之相激，柏梁既災，越巫陳方，建章是經，用厭火祥，圓闕竦以造天，若雙碣之相望，鳳騫翥於薨標，咸溯風而欲翔，幹雲霧而上達，狀亭亭以迢迢，神明崛其特起，井幹疊而百層，上飛闔而仰眺，正睹瑤光與玉繩，列瀛洲與方丈，夾蓬萊而駢羅，長風激於別島，起洪濤而揚波，海若遊於玄渚，鯨魚失流而蹉跎，立修莖之仙掌，承雲表之清露，屑瓊蕊以朝餐，必性命之可度，爾乃廓開九市，通闐帶闔，旗亭五重，俯察百隧。隧，列肆道也。上林禁苑，跨谷彌阜，東至鼎湖，邪界細柳，掩長楊而聯五柞，黃山而款牛首，乃有昆明靈沼，黑水玄汜，週以金堤，樹

以柳杞，豫章珍館，揭焉中峙，牽牛立其左，織女處其右，日月於是乎出入，象扶桑與蒙汜，其魚則鮪鯢鱣魴，修額短項，大口折鼻，詭類殊種，鳥則鸛鵒鵠鵙，駕鵝鴻鸕，南翔衡陽，北棲雁門，於是孟冬作陰，寒風肅殺，雨雪飄颻，冰霜慘烈，天子乃駕雕軫，六駿駁，戴翠帽，倚金較，華蓋承辰，天罩先驅，千乘雷動，萬騎龍趨，縱獵徒，赴長莽，迺卒清候，武士赫怒，河渭為之波蕩，吳岳為之阨堵，百禽悽遽，騃瞿奔觸，喪精亡魂，失歸忘趣，矢不虛舍，鋌不苟躍，當足見蹶，值輪被轢，乃使迅羽輕足，尋景追括，鳥不暇舉，獸不得發，青骹摯於鞬下，韓盧噬於縲末，於是鳥獸殫，目觀窮，遷延邪睨，集乎長楊之閒，酒車酌醴，方駕授邕，升觴舉燧，既醕鳴鍾，懷佯乎五柞之館，旋憩昆明之池，浮鷁首，翳雲芝，垂翟葆，建羽旗，齊棹女，縱棹歌，奏淮南，度陽阿，大駕幸乎平樂，張甲乙而襲翠被，臨回注之廣場，程角抵之妙戲，烏獲扛鼎，都盧尋橦，衝狹燕濯，胸突鈇鋒，跳丸劍之揮霍，走索上而相逢，度曲未終，雲起雪飛，巨獸百尋，是為曼延，神山崔嵬，欵從背見，白象行孕，垂鼻麟困，海鱗變而成龍，狀蜿蜒以蜃蜃。（『藝文類聚·卷六十一·居處部一·總載居處』）

〈史料 77〉

『史記』曰：蓬萊方丈瀛洲，此三山在海中，諸仙人不死藥皆在焉黃金白銀為闕。

又曰：建章宮東鳳闕，高二十丈。（『藝文類聚·卷六十二·居處部二·闕』）

〈史料 78〉

【啟】『梁簡文帝謝敕賜解講錢啟』曰：無勞磁石之火，金貨猥臻，非遊玉壘之川，銅山可見，舒王濟之埒，猶覺有餘，假劉寔之繩，穿而不盡，慧輪究竟，爰降曲私，福田成滿，仰由慈被，榮光獨照，自均若木，負恩知重，竊譬蓬萊。（『藝文類聚·卷六十六·產業部下·錢』）

〈史料 79〉

【賦】『魏毋丘儉承露盤賦』曰：樹根芳林，濯景天池，嘉木靈草，綠葉素枝，飛閣鱗接而從連，層台偃蹇以橫施，龜龍怪獸，嬉遊乎其中，詭類壯觀，雜遝眾多，若乃肇制模熔，應變入神，窮數極理，究盡物倫，命班爾，召淳均，撰蘭借，簡良辰，採名金於昆丘，斬扶桑以為薪，詔燭龍使吐火，運混元以陶甄，毆陰陽而役神物，豈取力於烝民，用能弗營，不日而成，匪雕匪斫，天挺之靈，雄幹碣以高立，幹雲霧而上徵，蓋取象於蓬萊，實神明之所憑，峻極過於閼風，鳳高翔而弗升，遠而望之，若紫霓下鄰，雙鸛集焉。即而視之，若璆琳之柱，華蓋在端，上際辰極，下通九原，仙掌仙掌，既平且安，越古今而無匹，信奇異之可觀，又能致休徵以輔性，豈徒虛設於芳園，採和氣之精液，承清露於飛雲。（『藝文類聚·卷七十三·雜器物部·盤』）

〈史料 80〉

『史記』曰：蓬萊仙丈瀛洲，此三神山者，在渤海中，蓋嘗有至者，諸仙人及不死藥生焉其物禽盡白，而黃金白銀為宮闕，未至，望之如雲，及到，三神山反居水下，欲到則風引舡而去，終莫能至。

又曰：黃帝採首山銅，鑄鼎於荊山之下，鼎既成，有龍垂胡髯，下迎黃帝，黃帝上騎，群臣后宮從上者，七十餘人，小臣不得上，乃悉持龍髯，龍髯拔，墮黃帝弓，百姓仰空望，帝既上，乃抱其弓與胡髯，故後世因名其處曰鼎湖，其弓曰烏號。（『藝文類聚·卷七十八·靈異部上·仙道』）

〈史料 81〉

『列仙傳』曰：安期生，瑯耶阜鄉人，賣藥海邊，時人皆言千歲公，秦始皇請見，與語三日三夜，賜金璧數萬，出於阜鄉亭皆置去，留書，以赤玉舄一量為報曰：復千歲，來求我於蓬萊山下，始皇遣使者數人入海，未至蓬萊山，輒風波而還，立祠阜鄉亭，海邊十處。（『藝文類聚·卷七十八·靈異部上·仙道』）

〈史料 82〉

『列仙傳』曰：負局先生，語似燕代間人，因摩鏡，輒問主人得無有疾苦者，若有，輒出紫丸赤藥與之，莫不愈，數十年後，大疫，每到戶與藥，愈者萬計，不取一錢，後止吳山絕崖，世世懸藥與人曰：吾欲還蓬萊山，為汝曹下神水，崖頭一旦有水白色，從石間來下，服之多所愈，立祠十餘年。（『藝文類聚·卷七十八·靈異部上·仙道』）

〈史料 83〉

『晉郭璞遊仙詩』曰：吞舟躋海底，高浪駕蓬萊。（『藝文類聚·卷七十八·靈異部上·仙道』）

〈史料 84〉

『庾信和趙王遊仙詩』曰：藏山還採藥，有道得從師，京兆陳安世，成都李意其，玉魚傳相鶴，太一受飛龜，白日香薪寺，青泥美熟芝，山精逢照鏡，樵客值圍棋，石文如碎錦，藤苗似亂絲，蓬萊在何處，漢後欲遙祠。（『藝文類聚·卷七十八·靈異部上·仙道』）

〈史料 85〉

『梁吳筠採藥大布山詩』曰：我本北山北，緣澗採山麻，九莖日反照，三葉長生花，可用蠲憂疾，聊持駐景斜，景斜不可駐，年來果如駟，安得崑崙山，偃蹇三珠樹，三珠始結莢，絳葉，凌朱台，玉台白鳳，金鼎青龍胎，韓眾及王子，何世無仙才，安期儻欲顧，相見在蓬萊。（『藝文類聚·卷八十一·藥香草部上·藥』）

〈史料 86〉

『抱朴子』曰：安期生賣藥海邊，始皇異之，賜以金璧，直數千萬，安期生去而置之於阜鄉亭，以赤玉舄為報留書曰：後千歲，求我於蓬萊山。（『藝文類聚·卷八十四·寶玉部下·

壁』)

〈史料 87〉

【檄】『梁吳筠檄江神責週穆王璧』曰：昔穆王南巡，自郢徂閩，遺我文璧，僉曰此津，貫緯百紀，薦歷千春，念茲文璧，故問水濱，江漢曷之，自求多益，反我名瑞，躍此華璧，則富有漢川，世為江伯，如有負穢心迷，懷鬱情戚，藏玉泥中，匿圭魚腹，使公孫躡波而長呼，子羽濟川而怒目，攸飛舞劍而東臨，災丘躍馬而南逐，打素蛤而為粉，碎紫貝其如粥，又有川人勇俊，處乎閩濮，水居百里，泥行萬宿，右睨而河傾，左吒而海覆，乃把昆吾之銅，純鈞之鐵，被魚鱗之衣，赴螺蚌之穴，引澍東隅，移燠北島，使蓬萊之根，鬱而生塵，瀛洲之足，淨而可掃，按驪龍取其頷下之珠，搗鯨魚拔其眼中之寶，皇恩所被，繁枯潤涸，威之所加，窮河絕漠，願子三思，反此明玉。（『藝文類聚·卷八十四·寶玉部下·璧』）

〈史料 88〉

『南嶽夫人傳』曰：仙人有三玄紫杏西京雜記曰：上林苑有蓬萊杏，東海都尉於台，獻杏一株，花雜五色，六出，雲是仙人所食者。（『藝文類聚·卷八十七·果部下·杏』）

〈史料 89〉

『符子』曰：東海有鰲焉冠蓬萊而遊於滄海，騰躍而上則幹雲，沒而下潛於重泉，有紅蟻者聞而悅，與群蟻相要乎海畔，欲觀鰲之行，月餘未出群作也數日風止，海中隱淪如岬，其高概天，或遊而西群蟻曰：。彼之冠山，何異乎我之載粒也。逍遙壤封之巔，歸服乎窟穴之下，此乃物我之適，自己而然，我何用數百裡勞形而觀之乎。（『藝文類聚·卷九十七·蟲豸部·蟻』）

〈史料 90〉

秘書校書郎：馬融為校書郎中，詣東觀典校秘書當時重其職，故學者稱東觀為老氏藏室，

道家蓬萊山焉至魏，始置秘書校書郎。晉，宋以下無聞。至後魏，有秘書校書郎。北齊亦有校書郎。後周有校書郎下士十二人，屬春官之外史。隋校書郎十二人，煬帝初，減二人，尋更增為四十人。大唐置八人，掌讎校典籍，為文士起家之良選。其弘文，崇文館，著作，司經局，並有校書之官，皆為美職，而秘書省為最。（『通典·職官八·秘書監』）

〈史料 91〉

始皇東遊海上，祠八神，求仙人其祀莫知起時八神：。一曰天主，祠天齊天齊淵水，居臨災南郊山下者二曰地主，祠泰山梁父蓋。天好陰，祠之必於高山之下時，命曰時。地貴陽，祭之必於澤中圜丘。三曰兵主，祠蚩尤。蚩尤在東平陸監鄉，齊之西境也。四曰陰主，祠三山。三山即蓬萊，方丈，瀛洲三神山。五曰陽主，祠之罘山。山在東萊。六日月主，祠之萊山。山在東萊長廣。皆在齊北，並勃海。七曰日主，祠盛山。山在東萊不夜縣，門入海，最居齊東北隅，以迎日出。八曰四時主，祠瑯琊。瑯琊在齊東北，蓋歲之所始也。皆各用牢具祠，而巫祝所損益，圭幣雜異焉。罘音浮。（『通典·禮十五·諸雜祠』）

〈史料 92〉

大唐造蓬萊宮成，充庭七十二架。武后還東都，乃省之。皇后庭，諸後廟及郊祭並二十架，同舞八佾。先聖廟及皇太子朝廟並九架，舞六佾。懸間設祝敵各一，祝於左，敵於右。鐸於，撫拍，頓相，鐃，鐸次列於路鼓南。舞人列於懸北登。歌二架，登於堂上兩楹之前。編鐘在東，編磬在西。登歌工人坐堂上，竹人立堂下。殿庭加設鼓吹於四隅。燕享陳清樂，西涼樂。架對列於左右廂，設舞筵於其間。（『通典·樂四·樂懸』）

〈史料 93〉

古青州今置郡府七，縣三十二

東牟登四縣蓬萊文登黃牟平（『通典·州郡十』）

〈史料 94〉

登州今理蓬萊縣。春秋牟子國也。戰國屬齊。秦屬齊郡。漢以下並屬東萊郡。大唐武太后分萊州，置登州，或為東牟郡。（『通典·古青州』）

〈史料 95〉

『黃帝岐伯經』曰：岐伯乘絳雲之車，駕十二白鹿遊於蓬萊之上。（『太平御覽·天部八·雲』）

〈史料 96〉

『博物志』曰：中國之域，左濱海，右通流沙，方而言之，萬五千里，面二千五百裡，東至蓬萊山，西至隴右，後跨薊北，前及衡嶽，若計共四萬有三億之餘。降朝鮮岷山，東治可西也，隴川以南及北海之國，此是堯舜，土及萬里，湯時七千里，此後亦無常，隨德優劣也。（『太平御覽·地部一·地上』）

〈史料 97〉

『漢書·王莽傳』曰：有奇士，大十圍，自言巨無霸，出於蓬萊山，輶車不能載，三馬不能勝。（『太平御覽·地部三·蓬萊山』）

〈史料 98〉

『武帝紀』曰：太初元年十二月祀后土，東臨渤海，望祀蓬萊。（『太平御覽·地部三·蓬萊山』）

〈史料 99〉

『十洲記』曰：蓬萊山外別有海，謂之溟海，無風而洪波百丈，有九氣丈人，九天真君宮。（『太平御覽·地部三·蓬萊山』）

〈史料 100〉

『玄中記』曰：東海之大者，有巨鰲焉，以背負蓬萊山。（『太平御覽·地部三·蓬萊山』）

〈史料 101〉

『列子』曰：渤海之東有大海，其中有山，一曰岱輿，二曰員嶠，三曰方壺，四曰瀛洲，五曰蓬萊其上台觀皆金玉，禽獸皆純縞，珠玕之樹皆聚生，實皆有滋味，食之不老不死，人皆仙聖，一日一夕，飛翔來往。（『太平御覽·地部三·蓬萊山』）

〈史料 102〉

『山海經』曰：蓬萊山，海中之神山，非有道者不至。（『太平御覽·地部三·蓬萊山』）

〈史料 103〉

『列仙傳』曰：安期生，瑯琊阜鄉人，時人皆言千歲，秦始皇與語，賜金璧數千萬，出阜鄉亭，皆置去，留以赤玉舄一量為報。曰：“後千歲，求我蓬萊山下。”（『太平御覽·地部三·蓬萊山』）

〈史料 104〉

『列仙傳』曰：負局先生，語似燕岱間人，吳市中摩鏡，一錢因摩之，輒問主人得無有疾苦，輒出紫赤藥與之，莫不時愈，後上吳山，懸藥下與萬姓欲去時，語下人曰：“吾欲還蓬萊山。”（『太平御覽·地部三·蓬萊山』）

〈史料 105〉

『神仙傳』曰：麻姑謂王方平曰：自接待已來，三見海水變桑田，蓬萊之清淺也。（『太平

御覽·地部三·蓬萊山』)

〈史料 106〉

『列仙傳』曰：服閭者，不知何許人常止菖，往來海邊諸祠中有三仙人於祠中博，賭瓜，使服閭擔黃瓜十枚，令瞑目，乃止方丈山，在蓬萊山南，時往菖取珍寶賣之。（『太平御覽·地部三·方丈山』）

〈史料 107〉

『史記封禪書』曰：齊宣王，燕昭王使人求蓬萊，方丈，瀛洲，此三神山，傳在海中，去人不遠，望之如雲中，及至則三山反在水下，欲至則風引船而去，莫能至者。仙人不死藥皆在焉，黃金白玉為宮闕。（『太平御覽·地部三·瀛洲山』）

〈史料 108〉

『茅山記』曰：咸通中，東海蓬萊觀龔道者，初入此山，斷谷茹芝，十餘年後，因正月朔旦焚香洞門，恍惚之間得入洞中。經由一十三日，備見洞府岩壁山川，星辰日月，靈異難詳。（『太平御覽·地部六·茅山』）

〈史料 109〉

『南越志』曰：此山本名蓬萊山，一峰在海中，與羅山合，因名焉山有洞通句曲，又有璇房瑤室七十二所。（『太平御覽·地部六·羅浮山』）

〈史料 110〉

裴淵『廣州記』曰：羅山隱天，惟石樓一路時有閒遊者，少得至山際大樹合抱，極目視之，如薺菜在地山之陽有一小嶺，雲蓬萊邊山浮來著此，因合號羅浮山。（『太平御覽·地部六·羅浮山』）

〈史料 111〉

『列仙傳』曰：負局先生上吳山，語下人：“吾欲還蓬萊山，為汝曹下神水。”崖頭一旦有水，白色，從石間下，服之多癒疾。（『太平御覽・地部二十四・水下』）

〈史料 112〉

『神仙傳』曰：麻姑謂王方平曰：“自接待以來，見東海三為桑田，向到蓬萊，水乃淺於往者略半也，豈復將為陵陸乎？”（『太平御覽・地部二十五・海』）

〈史料 113〉

『吳志』曰：孫權遣衛溫、諸葛直將甲士萬人，浮海求夷洲及亶洲在海中，長老傳言，秦始皇遣方士徐福將童男女數千人入海求蓬萊神仙及仙藥，止此不返，世世相承有萬家，其上人民時有至會稽貨市。（『太平御覽・地部三十四・洲』）

〈史料 114〉

『抱朴子』曰：崑崙及蓬萊，其上鳥獸飲玉井泉，皆長生不死也。（『太平御覽・地部三十五・泉水』）

〈史料 115〉

『符子』曰：許由謂堯曰：“坐於華殿之上，面雙闕之下，君之榮願亦已足矣夫？”堯曰：“餘坐華殿之上，森然而鬆生於棟；余立於櫺扉之內，霏焉而云生於牖。雖面雙闕，無異乎崔嵬之冠蓬萊；雖背墉郭，無異乎回轡之縈崑崙。余安知其所以不榮？”（『太平御覽・皇王部五・帝堯陶唐氏』）

〈史料 116〉

方士徐福等入海求神藥，數歲不得，費多，恐譴，乃詐曰：“蓬萊藥可得，然常為大蛟魚所害，故不得至。願請善射與俱，見則以連弩射之。”始皇夢與海神戰，如人狀。以問占夢，博士曰：“水神不可見，以大魚蛟龍為候。今上禱祠備謹，而有此惡神，當除去，而善神可致。”乃命入海者齎捕巨魚具，而自以連弩候大魚出射之。自瑯琊北至營城山，弗見。至之罘見巨魚，射殺一魚，遂並海西。至平原津而病。始皇惡言死，群臣莫敢言死事。上病益甚，乃為璽書賜公子扶蘇曰：“與喪，會咸陽而葬。”書已封在中車府令趙高行符璽事所，未授使者。七月丙寅，始皇崩於沙丘平台。時年五十，在位三十七年。（『太平御覽・皇王部十一・始皇帝』）

〈史料 117〉

『漢書』曰：孝武作建章宮，為千門萬戶。有鳳凰闕，高二十餘丈，中有蓬萊、方丈、瀛洲、壺梁，像海中神山。南有玉堂璧門大鳥之屬。立神明台、井幹樓，度高五十餘丈，輦道相屬焉。（『太平御覽・居處部一・宮』）

〈史料 118〉

『漢書』曰：牂牁郡有桂浦闕。

又曰：蓬萊、方丈、瀛洲，此三山在海中，諸仙人不死藥皆在焉，黃金、白銀為闕。事具仙部。

又曰：建章宮東鳳闕，高二十丈。（『太平御覽・居處部七・闕』）

〈史料 110〉

『漢書』：李少君言祀灶皆可致神物，而丹沙可化為黃金，黃金成以為器，以食則益壽，壽益則海中蓬萊仙者乃可見之，封禪則不死，黃帝是也。天子親祀灶焉。（『太平御覽・居處部十四・灶』）

〈史料 120〉

華嶠『後漢書』曰：學者稱東觀為老氏藏室，道家蓬萊山。王融『曲水詩序』曰：“記言事於仙室。”謂藏室也。（『太平御覽・職官部三十一・秘書監』）

〈史料 121〉

『唐新語』曰：玄宗聽政之暇，從禽自娛，又於蓬萊宮側立教坊，以習倡優曼衍之戲。酸棗尉袁楚客以為天子春秋方壯，宜節之以雅，恐從禽好鄭將盪上心，乃引由余太康義上疏以諷，玄宗納之。（『太平御覽・職官部六十七・縣尉』）

〈史料 122〉

『後漢書』曰：光武起，王莽下天下能為兵法者六十三家數百人，並以為軍吏；選練武衛，招募猛士，『說文』雲：募，廣求也。旌旗輜重，千里不絕。時有長人巨無霸，王莽連率韓博上言：有奇士長一丈，大十圍，自謂巨無霸，出於蓬萊東南五城西北昭如海濱。輅車不能載，三馬不能勝，臥則枕鼓，以鐵箸食。見前書。長一丈，大十圍，以為壘尉，鄭玄注：『周禮』六軍壁三壘。崔瑗『中尉箴』曰：堂堂黃帝，設為壘尉。尉者，主壘壁之事。又驅諸猛獸猛或作獷。獷，猛貌，音古猛反。虎豹犀象之屬，以助威武，自秦、漢出師之盛，未嘗有也。（『太平御覽・兵部三十七・出師』）

〈史料 123〉

王隱『晉書』曰：戴洋病亡，天神使為酒藏吏。受符持幡，麾將士蓬萊諸山，五日更生。（『太平御覽・兵部七十二・麾』）

〈史料 124〉

『漢書』曰：東方朔上書曰：“臣朔少失父母，長養兄嫂。年十三學書，三冬文史足用。年二十二，長九尺三寸。”

又曰：王莽夙夜連率韓博士言：“有奇士，長一丈，大十圍，來至臣府，曰欲奮擊胡虜。自謂巨毋霸，出於蓬萊東南，五城西北昭如海瀕，輶車不能載，三馬不能勝。即日以大車四馬，建虎旗，載霸詣闕。霸臥則枕鼓，以鐵箸食，此皇天所以輔新室。”（『太平御覽・人事部十八・長中國人』）

〈史料 125〉

『列子』曰：渤海之東有大壑焉，中有五山：一曰岱輿，二曰員嶠，三曰方壺，四曰瀛洲，五曰蓬萊。群聖居之，帝使巨鰲十五舉首而戴之，迭為三番。龍伯之國有大人，一釣而連六鰲，合負而歸。於是，岱輿、員嶠二山沉於大海。帝馮怒，侵滅龍伯之國，使小。至伏羲、神農時，其國人猶長數十丈。（『太平御覽・人事部十八・長絕域人』）

〈史料 126〉

『晉書』曰：『何尚之傳』：時造玄武湖，上欲於湖中立方丈、蓬萊、瀛洲三神山，尚之固諫，乃止。時又造華林園，並盛暑，欲興人工，尚之又諫，宜加休息。（『太平御覽・人事部九十四・諫諍三』）

〈史料 127〉

劉向『列仙傳』曰：安期先生者，時人皆言千歲公。秦始皇請與語，三日三夜，賜金璧數千萬，出於阜鄉亭，皆置去，留書，以赤玉舄一量為報。曰：“後千歲求我於蓬萊山下。”（『太平御覽・人事部一百一十九・贈遺』）

〈史料 128〉

吳均『續齊諧記』曰：弘農楊寶，見一黃雀為鷗梟所搏，取之以歸。置巾箱中，養之百餘日，毛羽成，朝去暮還。後寶夕讀書未臥，有黃衣童子向寶再拜曰：“我王母使臣，昔使蓬萊，不慎為梟所搏，蒙君仁愛救拯。今當受使南海，不得奉侍，以白環四枚與寶，令君子孫

潔白，且位登三事，當如此環矣。”（『太平御覽・人事部一百二十・報恩』）

〈史料 129〉

『漢武帝故事』曰：又起建章宮，為千門萬戶。其東鳳闕高二十丈，其北太液池，池中漸台高二十丈。池中又為三山，以像蓬萊、方丈、瀛洲，削金石為魚龍禽獸之屬。其南有玉台，玉堂基與中央前殿等去地十二門，階陛皆用玉璧。又作神明台，井幹樓，高五十餘丈，皆懸閣輦道相屬焉。其後又為酒池肉林，聚天下四方奇異鳥獸於其中，鳥獸能言能歌舞，或奇形異態，不可稱載。傍別造華殿，四夷珍寶充之，琉璃珠玉、火浣布、切玉刀不可稱數。巨像、大雀、獅子、駿馬充塞苑廐。自古已來，所未見者必備。（『太平御覽・人事部一百三十四・奢』）

〈史料 130〉

『尸子』曰：赤縣洲者，實為崑崙之虛，其東則鹵水島。山左右蓬萊，玉紅之草生焉。食其一實，醉臥三百歲而寤。（『太平御覽・人事部一百三十八・酣醉』）

〈史料 131〉

皇甫士安『高士傳』曰：荷蕢者，衛人也。避亂不仕，自匿姓名。孔子擊磬於衛，乃荷蕢而過孔氏之門，曰：“有心哉，擊磬乎？”既而曰：“磴磴乎莫已知，期已而已矣。深則厲，淺則揭。”孔子聞之，曰：“果哉，蔑之難矣！”

又曰：安期先生者，瑯琊人。受學河上丈人，賣藥海邊，老而不仕。時人謂之千歲公。秦始皇東遊，請與語三夜，賜金璧，值數千萬。出，置阜鄉亭而去，赤玉舄為報，留書與始皇曰：“後數十年，求我於蓬萊山下。”及秦敗，安期先生與其友蒯通同往見項羽。羽欲封之，卒不肯受。見『列仙傳』。（『太平御覽・逸民部七・逸民七』）

〈史料 132〉

『史記·封禪書』曰：今天子即位，尤敬鬼神之祀。元年，漢興以六十餘歲矣。天下又安，搢紳之屬皆望天子封禪，改正度也。而上向儒術，招賢良，趙綰、王臧等以文學為公卿，欲議古立明堂城南以朝諸侯，革巡狩、封禪、改歷、服色，事未就，會竇太后治黃老言，不好儒術，諸所興為皆廢。是時李少君亦以祠灶、谷道、卻老方，見上，上尊之。少君言上曰：“祠灶則致物，致物而丹砂可化為黃金；黃金成，以為飲食器，則益壽；益壽而海中蓬萊仙者乃可見，見之以封禪則不死，黃帝是也。”上與公卿諸生議封禪。封禪用希曠絕，莫知其儀禮，而群儒採封禪『尚書』、『周官』、『王制』之望祀射牛事。上於是乃令諸儒習射牛，草封禪儀。群儒既不能辯明封禪事，又牽拘於『詩』、『書』古文而不能騁，於是上盡罷諸儒。遂東幸緱氏，禮登中岳太室。從官在山下，聞若有言“萬歲”雲。於是以三百戶封太室奉祠，遂東巡海上。四月，還至奉高。上令諸儒及方士言封禪，人人殊，不經，難施行。天子至梁父，禮祠地主。乙卯，令侍中儒者皮弁薦紳，射牛行事。封太山下東方，如郊祀太一之禮。封廣丈二尺，高九尺，其下則有玉牒書，書秘。禮畢，天子獨與侍中奉車子侯上太山，亦有封。其事皆禁。明日，下陰道。丙辰，禪太山下趾東北肅然山，如祭后土禮。天子皆親拜見，衣上黃而盡用樂焉。江淮間一茅三脊為神藉，五色土益雜封。縱遠方奇獸蜚禽及白雉諸物，頗以加禮。兕牛犀象之屬不用。皆至太山祭后土。封禪祠，其夜若有光，晝有白雲起封中。天子從禪還，坐明堂，群臣更上壽。（『太平御覽·禮儀部十五·封禪』）

〈史料 133〉

『郊祀志』曰：太始四年春，三月甲申，修封。丙戌，禪石閭。夏四月，幸不其，如淳曰：其音基。不其，山名，因以為縣。祠神人於交門宮，應劭曰：神人，蓬萊仙人之屬也。晉灼曰：瑯琊縣有交門宮，武帝所造。若有向坐拜者，作交門之歌。師古曰：如有神人景象，向祠坐而拜也。（『太平御覽·禮儀部十五·封禪』）

〈史料 134〉

『漢書』曰：武帝幸不其，如淳曰：其音基。不其，山名，因以為縣。祠神人於交門宮，應

劭曰：神人、蓬萊仙人之屬也。瑯琊縣有交門宮，武帝所造。若有向。坐拜者。作『交門之歌』。（『太平御覽・禮儀部二十一・拜』）

〈史料 135〉

『樂府解題』曰：『水仙操』，伯牙學琴於成連先生，三年不成，至於精神寂寞，情之專一，尚未能也。成連雲：“吾師方子春，今在東海中，能移人情。”乃與伯牙俱往。至蓬萊山，留宿伯牙曰：“子居習之，吾將迎師。”刺船而去，旬時不返。伯牙近望無人，但聞海水洞滑崩澌之聲，山林窅冥，群鳥悲號，愴然而歎曰：“先生將移我情。”乃援琴而歌，曲終，成連回，刺船，迎之而還。伯牙遂為天下妙矣。（『太平御覽・樂部十六・琴中』）

〈史料 136〉

『登真隱訣』曰：三清九宮，並有僚屬，例左勝於右。其高總稱曰道君，次真人、真公、真卿。其中有御史玉郎諸小號，官位甚多也。女真則稱元君夫人，其名仙夫人之秩比仙公也。夫人亦隨仙之大小，男女皆取所治處，以為署號，並有左右。凡稱太上者，皆一宮之所尊。又有太清右仙公，蓬萊左仙公，太極仙侯，真伯仙監、仙郎、仙扶。（『太平御覽・道部四・天仙』）

〈史料 137〉

『史記』曰：蓬萊、方丈、瀛州，在渤海中，去人不遠，蓋常有至者，諸仙及靈藥宰繕。其物禽獸盡白，未至，望之如雲。（『太平御覽・道部五・地仙』）

〈史料 138〉

『老君傳』：九真五石，並日暫入太陰。權過三官者，始得上解之法。又曰：王遠字方平，見蔡經骨相當屍解，且告以要言。方平冠遠遊冠，朱衣虎頭鞶囊，五色綬，帶劍，黃色少髭，長矩中人也。乘羽車，駕五龍，異色綬帶，前後麾節幡旗，自天而

下。須臾，引見經父兄，因遣之。召麻姑，姑先報被詔，按行蓬萊，今便往，願還來即去。如此兩時，聞麻姑來，先聞人馬聲，從官當半於遠，姑至，經舉家亦見之。是好年，才加笄，於頂上作髻，餘發散垂至腰。衣有文彩，又非錦繡，衣彩曜日，不可名狀，皆世所尾翳。入拜遠，遠為之起立，各進行廚脯行，雲是麟脯。遠去經父母怪私問經，經曰：“王君常在崑崙山，往來羅浮等山。山有上宮室，王君出，惟乘一黃麟，十數侍者。每行，山海神皆奉迎拜謁也。”遠有書與陳尉，真書廊落，大而不正。先是，無人知方平名，遠用此知之。陳存錄王君手書於小箱中也，經後屍解而去。（『太平御覽·道部六』）

〈史料 139〉

『隱文』曰：西玄山下洞台中，有鬱儀結鄰經也。玉屋山清虛中亦有此經也，而不備。惟太上玄宮高上台及蓬萊府北室金柱玉壁刻此，並備。（『太平御覽·道部十五·仙經下』）

〈史料 140〉

『真誥』曰：蓬萊仙公洛廣休治蓬萊山。（『太平御覽·道部十六·理所』）

〈史料 141〉

『真誥』曰：蓬萊山上有九天真宮，蓋大真仙人所居。（『太平御覽·道部十六·理所』）

〈史料 142〉

『列仙傳』曰：安期先生賣藥海邊，時人言千歲翁。秦始皇召見，與語三日夕，賜金璧數千萬。出於阜鄉亭，皆置去，留書，以赤玉舄一量為報，曰：“後千歲，求我蓬萊山下。”始皇即遣使者入海，未至蓬萊山。輒風波而還。（『太平御覽·道部十七·舄』）

〈史料 143〉

『抱朴子』曰：蓬萊高上真書成，青天上皇以傳寧封，佩此真符，橫行江海。一名蓬萊太

玄玉札，一名九流真書，北陵丈人授以馬師皇致龍來。又天帝丈人黃上真書佩之，知吉凶未兆之事。（『太平御覽·道部二十·傳授上』）

〈史料 144〉

『茅君傳』曰：西母攜王君茅盈以詣固衷之宮。固衷，盈二弟也。西母撫背告之曰：“汝道雖成，所聞未足。我有所授汝，乃遣侍女郭密香與上元夫人相聞雲：但不相見四千餘年，天事勞我，致以罕面，可暫來否，當此相待。”上元夫人遣一侍女答曰：“阿環再拜，上問起居。遠隔絳河，擾以官事，遂違顏色，近五千年。仰戀光潤，情係無違。密香至，奉信承降尊於茅固處。聞命之際，即當飾駕，先被太常君敕，使詣希林校定三元之錄，正爾暫往。如是當還，還便束帶，願暫少留。”茅固因問王母，不審上元夫人何真也，曰：“三天真皇之母，上元之高真，統領十方玉女之名籙者也。”及上元夫人來，聞雲中簫鼓聲，龍馬嘶鳴。既至，從者甚眾，皆女子，齊年十六七，容色明逸，多服青綾之衣，光彩奪目。上元年未笄，天姿絕艷，服赤霜之袍，披青錦裘。頭作三角髻，餘發散於腰。戴九晨夜月之冠，鳴六山火藻之佩，曳鳳文琳華大綬，執流黃揮精劍，入室向王母拜。王母坐止，呼之與同坐，北向。上元夫人設廚，王君敕茅盈二弟固衷起，拜稽首而立，命坐復席。上元乃敕侍女出紫錦囊，開綠金之笈，『三元流珠經』，『丹景道精經』，『隱地八術經』，『太極綠景經』，凡四部以傳固衷。西王母敕侍女李方明出丹瓊之函，披雲珠之笈，以玉佩金璫太霄隱書、洞飛二景內真符，以傳司命茅君。上元曰：“阿母隱書之妙，上真內經，天仙所寶，封之金台，佩入太微。動則八景玉輿，靜則宴寢金堂。此文妙矣。阿環太極綠經等，可以致明月黃華，得白日之赤精也。”及西母上元俱去，惟王君獨留經日。於是盈與二弟訣別，而與王君俱去，到赤城玉洞之府，告二弟曰：“吾今去便有局任，不得複數相往來，句曲山是治所也。”漢光武建武七年三月丁巳，遣使者吳倫齎黃金五十斤，置於茅三君廟下，四時祠以太牢。至明帝永平二年，詔丹陽句容茅真卻蓍，使營護修守。時邑人通呼此廟為白鵠廟。句曲之洞宮有五門。石階曲山，以水其門，令得往來上下也。句曲洞天，東通林屋，北通岱宗，西通峨嵋，南通羅浮，皆大道也。其間小徑新路阡陌沙澮，非一處也。漢建安之末，左慈聞

江東有此山，故尋之，齋戒三月而登山，乃得其門，入洞虛造陰宮。二茅君授以神芝三種，慈周旋洞室經年，制度甚肅，歎曰：“不圖天下復有如此之異乎！”至於地中洞天，有三十六所，王屋、委羽、西城、西玄、青城、赤城、羅浮、句曲、林屋、括蒼、崑崙、蓬萊、瀛州、方丈、滄浪、白山、八停之屬也，五嶽及諸名山皆有洞室，或三十里、二十里、十里，岳洞方百里也。句曲山，秦時名為句金壇，以洞天內有金壇百丈，因以致名也。漢靈帝時，敕郡縣彩句曲之金，以充武軍。孫權時又遣宿衛人彩金，常輸官。句曲山每至三月十八日、十二月二日，東卿司命茅君當是日請總真玉君、太虛真人、東海青童君會於句曲之上。好道者欲求神仙，宜先齋戒，俟此日登山陳乞也。茅君即授以要道，得入洞門。（『太平御覽・道部二十・傳授上』）

〈史料 145〉

『列仙傳』曰：負局先生者，吳郡人，莫知姓名，負石磨鏡，局循吳中磨鏡，輒問人得無有疾苦乎。有即出紫丸、赤丸與之服，服藥，病無不差。如此數年，後吳有大疫，先生家至戶到，與藥，活數萬許人。後上吳山絕崖，懸藥與人。欲去時，語人曰：“吾欲還蓬萊山，為汝曹下神水。”崖頭一日有水，色白，從石間流下，服之疾愈。（『太平御覽・方術部五・醫四』）

〈史料 146〉

『談藪』曰：後魏中書侍郎裴敬憲字伯茂。敬憲新構山亭，與賓客集，謂邢子才曰：“山池始就，願為一名。”子才曰：“海中有蓬萊山，仙人之所居。掖墅蓬萊。”裴，聾也。敬憲患耳，故以戲之。憲初不晤，於後覺，忻然謂子才曰：“長忌及戶高則無憲，公但大語，聾亦何嫌！”（『太平御覽・疾病部三・聾』）

〈史料 147〉

『後漢書』曰：『王制』雲：“東方曰夷。”夷者，抵也。言仁而好生萬物，抵地而出，故

天性柔順，易以道禦，至有君子不死之國焉。

又曰：會稽海外有東鯤人，鯤，達奚切。分為二十餘國。又有夷洲，及澶州。傳言秦始皇遣方士徐福，將童男童女數千人，入海求蓬萊神仙不得，徐福畏誅，不敢還，遂止此洲。代代相承，有數万家人。歲時，至會稽市。會稽東冶縣人有入海，行遭風流移至澶洲者。所在絕遠，不可來往。（『太平御覽・四夷部一・東夷一・敘東夷』）

〈史料 148〉

『列子』曰：夏華殷謂湯曰：“渤海之東，不知幾億萬里，有大壑，中有山，一曰岱輿，二曰方壺，三曰員嶠，四曰瀛洲，五曰蓬萊。其上高觀皆金闕。”（『太平御覽・珍寶部九・金中』）

〈史料 149〉

『史記·封禪書』曰：殷得金德，銀山溢。蘇林注曰：溢，出。
又曰：蓬萊、方丈、瀛州，此三神山，黃金、白銀為宮闕。（『太平御覽・珍寶部十一・銀』）

〈史料 150〉

『史記』曰：秦使徐福入海還，偽辭曰：“臣見海中大神，曰：‘汝，秦王之神，薄得觀而不得取！’即從臣往蓬萊山，見芝城宮闕，有使者銅色而龍形，光上照天。”（『太平御覽・珍寶部十二・銅』）

〈史料 151〉

『漢書』曰：武帝太始四年三月，幸不其，如淳曰：其音基。不其，山名，因以為縣。祠神人於交門宮，應劭曰：神人，蓬萊仙人之屬也。晉灼曰：瑯琊縣有交門，漢武帝所造。若有向坐，拜者作交門之歌。（『太平御覽・休徵部一・神』）

〈史料 152〉

『建康實錄』曰：晉方士戴洋，字國流，吳興長城人也。年十二遇病死，五日而蘇。言執麾將士將往蓬萊、崑崙、積石、太室、恆、廬、衡等諸山，既而遣歸。（『太平御覽・妖異部三・重生』）

〈史料 153〉

『續齊諧記』曰：弘農楊寶，字文淵，後漢名士也。年九歲時，至華陰北，見一黃雀，為鷗梟所搏，墜於樹下，為螻蟻絲繭。寶見之，愍然，命左右取之歸，致巾箱中養之，惟食黃花。百餘日，毛羽成，朝去暮還。後忽與群雀俱來，哀鳴繞堂，數日乃去。及夕三更，寶讀書未臥，有黃衣童子向寶拜曰：“我，王母使臣。昔使蓬萊，不慎為鷗梟所搏。君仁愛這俚，實成德濟。今當受使南海，不得奉侍。”極以悲鳴，以白環四枚與寶，曰：“令君子孫潔白，且位登三事，當如此環矣。”於此遂絕。寶生震，震生秉，秉生賜，賜生彪，四世明瀚，為東京盛族。（『太平御覽・羽族部九・黃雀』）

〈史料 154〉

『符子』曰：太公涓釣於隱溪，五十有六而未常得一魚。魯連子聞而觀焉，太公涓踞而屹柯，不餌而釣，仰詠俯吟，暮則釋竿。其膝所處之石皆若臼，其附觸崖若路。魯連曰：“釣所本以在魚，無魚何釣？”太公曰：“不見康王父之釣耶？念蓬萊，釣巨海，摧岸投綸五百年矣，未常得一魚；方吾，猶一朝耳！”（『太平御覽・鱗介部七・魚上』）

〈史料 155〉

江適詩曰：巨鰲戴蓬萊，大鯤運天地。倏忽雲雨興，俯仰三植戚。（『太平御覽・鱗介部十二・海鯢魚』）

〈史料 156〉

『符子』曰：東海有鰲焉，冠蓬萊而浮游於滄海。騰躍而上，則千雲之峰類邁於群岳；沉沒而下，則隱天之丘潛蟠於重川。有蜺蟻聞而悅之，與群蟻相要乎海畔，欲觀鰲焉。月餘日，鰲潛未出，群蟻將反。遇長風激浪，崇濤萬仞，海水沸地，雷震。群蟻曰：“桿將鰲之作也。”數日，風止雷默，海中隱如岳。群蟻曰：“彼之冠山，何異我之戴粒？逍搖封壤之顛，伏乎窟穴也。”（『太平御覽・蟲豸部四・蟻』）

〈史料 157〉

『唐書』曰：司稼卿梁孝仁，高宗時監造蓬萊宮，於諸庭院列種白楊。將軍契苾何力，鐵勒之渠率也，於宮內縱觀，孝仁指白楊雲：“桿木易長，三數年間，宮中可得蔭映。”何力一無所應，但誦古詩：“白楊多悲風，蕭蕭愁殺人！”意謂此是塚墓間木，非宮中所宜種。孝仁遽令拔去，更樹梧桐。（『太平御覽・木部六・楊柳下』）

〈史料 158〉

『西京雜記』曰：上林有文杏材有文彩。蓬萊杏。東海都尉於台獻一株，花瓣五色，六出，雲是仙人所食者。（『太平御覽・果部五・杏』）

〈史料 159〉

『列仙傳』曰：負局先生者，語似燕代間人也。負磨鏡局，循吳帝市中，磨一鏡一錢。因磨輒問主：“得無人疾苦者？”有輒出紫丸藥以與之，得莫不愈。後上吳山絕崖頭，世世懸藥與下人，曰：“吾欲還蓬萊山，與汝曹神水。”崖頭一旦有水，白色，從石間來下，服之，病多愈。（『太平御覽・藥部一・藥』）

〈史料 160〉

『仙人彩芝圖』曰：車馬芝，生於名山擲晷，此堯時七車馬化為之。能得食之，乘雲而行，

上有云氣復之。萬年芝，生於名山擲晷，及蓬萊山。（『太平御覽·藥部三·芝下』）

〈史料 161〉

須臾，引見經父母兄弟，因遣人召麻姑，亦莫知麻姑是何人也。言曰：“王方平敬報，久不到民間，今來在此，想姑能暫來語否。須臾信還，不見其使，但聞信語曰：“麻姑載拜。不相見忽已五百餘年。尊卑有序，拜敬無階。煩信承來在彼，食頃即到。先受命當按行蓬萊。今便暫往。如是當還，還便親覲，願未即去。”如此兩時，聞麻姑來。來時亦先聞人馬聲。既至，從官半於遠也。（『太平廣記·神仙七·王遠』）

〈史料 162〉

麻姑至，蔡經亦舉家見之。是好女子，年可十八九許，於頂上作髻。餘發散垂至腰。衣有文采，又非錦綺，光彩耀目，不可名狀，皆世之所無也。入拜遠，遠為之起立。坐定，各進行廚，皆金盤玉杯無限也。餚饌多是諸花。而香氣達於內外。擘脯而食之，雲：麟脯。麻姑自說雲。接待以來，已見東海三為桑田。向到蓬萊，又水淺於往日會時略半耳，豈將複為陵陸乎。遠歎曰：“聖人皆言海中行複揚塵也。”（『太平廣記·神仙七·王遠』）

〈史料 163〉

馬樞『得道傳』雲：“受蓬萊都水監，弟子數百人。有先得道者，唯王 知、陸逸衡、桓清遠，嗣先生之德焉。”唐天寶元年，追贈金紫光祿大夫太保。梁郡許刻本郡作邵。陵王蕭綸為碑銘焉。出『神仙感遇傳』。明鈔本作出神仙拾遺。（『太平廣記·神仙十五·貞白先生』）

〈史料 164〉

桓闔者。不知何許人也，事華陽陶先生，為執役之士。辛勤十餘年。性常謹默沈靜。奉役之外，無所營為。一旦，有二青童白鶴，自空而下，集隱居庭中。隱居欣然臨軒接之，青童

曰：“太上命求桓先生耳。”隱居默然。心計門人無姓桓者。命求之，乃執役桓君耳。問其所修何道而致此，桓君曰：“修默朝之道積年，親朝太帝九年矣，乃有今日之召。”將升天，陶君欲師之，桓固執謙卑，不獲請。陶君曰：“某行教修道，勤亦至矣，得非有過，而淹延在世乎。願為訪之，他日相告。”於是桓君服天衣，駕白鶴，升天而去。三日，密降陶君之室言曰。君之陰功著矣。所修本草。以虫蟲水蛭輩為藥。功雖及人，而害於物命。以此一紀之後，當解形去世，署蓬萊都水監耳。”言訖乃去。陶君復以草木之藥可代物命者，著別行本草三卷，以贖其過焉。”後果解形得道。出『神仙感遇傳』。明鈔本作出神仙拾遺。（『太平廣記・神仙十五・桓闔』）

〈史料 165〉

俄見一人，戴遠遊冠，衣朱綃，曳朱履，徐出門。一青衣引韋前拜。儀狀偉然，容色芳嫩，細視之，乃張老也。言曰：“人世勞苦，若在火中，身未清涼，愁焰又熾，而無斯須泰時。兄久客寄，何以自娛。賢妹略梳頭，即當奉見。”因揖令坐。未幾，一青衣來曰：“娘子已梳頭畢。”遂引入，見妹於堂前。其堂沉香為梁，玳瑁帖門。碧玉窻。珍珠箔，階砌皆冷滑碧色，不辨其物。其妹服飾之盛，世間未見。略敘寒暄，問尊長而已。意甚鹵莽。有頃進饌，精美芳馨，不可名狀。食訖，館韋於內廳。明日方曙，張老與韋生坐，忽有一青衣，附耳而語。長老笑曰：“宅中有客。安得暮歸。因曰：“小妹暫欲遊蓬萊山，賢妹亦當去，然未暮即歸。兄但憇此。張老揖而入。（『太平廣記・神仙十六・張老』）

〈史料 166〉

有一鸚鵡即飛至曰：“吾乃鳳花台也。近有一篇，君能聽乎。歸舜曰：“平生所好，實契所願。”鳳花台乃曰：“吾昨過蓬萊玉樓，因有一章詩曰：露接朝陽生，海波翻水晶。玉樓瞰寥廓，天地相照明。此時下棲止，投跡依舊楹。顧餘複何忝，日侍群仙行。”歸舜曰：“麗則麗矣，足下師乃誰人。鳳花台曰：“僕在王丹左右。一千餘歲。杜蘭香教我真籙。東方朔授我秘訣。漢武帝求太中大夫，遂在石渠署見揚雄、王褒等賦頌，始曉箴論。王莽之

亂，方得還吳。後為朱然所得，轉遺陸遜，複見機、雲製作，方學綴篇什。機、雲被戮，便至於此，殊不知近日誰為宗匠。”歸舜曰：“薛道衡、江總也。”因誦數篇示之。鳳花台曰：“近代非不靡麗，殊少骨氣。”俄而阿春捧赤玉盤。珍羞萬品。目所不識，甘香裂鼻。飲食訖，忽有二道士自空飛下，顧見歸舜曰。大難得。與鸚鵡相對。君非柳十二乎。君船以風便，索君甚急，何不促回。因投一尺綺曰：“以此掩眼，即去矣。”歸舜從之，忽如身飛，卻墜巴陵，達舟所。舟人欲發，問之，失歸舜已三日矣。後卻至此，泊舟尋訪，不復再見也。出『續玄怪錄』（『太平廣記·神仙十八·柳歸舜』）

〈史料 167〉

如是經行半日，至山趾，有一國城。皆是金銀瑇瑁為宮室城樓，以玉字題雲：“梯仙國”。工人詢於門人曰：“此國何如。門人曰：“此皆諸仙初得仙者，關送此國，修行七十萬日，然後得至諸天，或玉京蓬萊、昆閬姑射。然方得仙宮職位。主籙主印。飛行自在。”工人曰：“既是仙國，何在吾國之下界。門人曰：“吾此國是下界之上仙國也，汝國之上，還有仙國如吾國。亦曰梯仙國。一無所異。”言畢，謂工人曰：“卿可歸矣”。遂卻上山，尋舊路，又令飲白泉數掬。臨至山頂求穴，門人曰：“汝來此雖頃刻，人間已數十年矣，卻出舊穴，應不可矣。待吾奏請通天關鑰匙送卿歸。”工人拜謝。須臾。門人攜金印及玉簡。又引工人別路而上。至一大門，勢侔樓閣，門有數人。俯伏而候。門人示金印，讀玉簡，劃然開門。門人引工人上，才入門，為風雲擁而去。因無所覩。唯聞門人雲：“好去，為吾致意於赤城貞伯。”須臾雲開，已在房州北三十裏孤星山頂洞中。出後，詢陰隱客家，時人雲：“已三四世矣。”開井之由，皆不能知。工人自尋其路，唯見一巨坑，乃崩井之所為也。時貞元七年矣。工人尋覓家人。了不知處。自後不樂人間，遂不食五穀，信足而行。數年後。有人於劍閣鷄冠山側近逢之。後莫知所在。出『博異志』（『太平廣記·神仙二十·陰隱客』）

〈史料 168〉

楊通幽，本名什伍，廣漢什邡人。幼遇道士，教以檄召之術，受三皇天文，役命鬼神，無不立應。驅毒厲。剪氛邪，禳水旱，致風雨，是皆能之。而木訥疎傲。不拘於俗。其術數變異，遠近稱之。玄宗幸蜀，自馬嵬之後，屬念貴妃，往往輟食忘寐。近侍之臣，密令求訪方士，冀少安聖慮。或雲：“楊什伍有考召之法。徵至行朝。上問其事，對曰：“雖天上地下，冥冥之中，鬼神之內，皆可曆而求之。”上大悅，於內置場，以行其術。是夕奏曰：“已於九地之下，鬼神之中，遍加搜訪，不知其所。”上曰：“妃子當不墜於鬼神之伍矣。”二日夜，又奏曰：“九天之上，星辰日月之間，虛空杳冥之際，亦遍尋訪而不知其處。”上悄然不懌曰：“未歸天，復何之矣。炷香冥燭，彌加懇至。三日夜，又奏曰：“於人寰之中，山川嶽瀆祠廟之內，十洲三島江海之間，亦遍求訪，莫知其所。後於東海之上，蓬萊之頂，南宮西廡。有群仙所居，上元女仙太真者，即貴妃也。謂什伍曰：‘我太上侍女，隸上元宮。聖上太陽朱宮真人，偶以宿緣世念，其願頗重，聖上降居於世，我謫於人間，以為侍衛耳。此後一紀，自當相見，願善保聖體，無復意念也。’乃取開元中所賜金釵鈿合各半，玉龜子一，寄以為信，曰：‘聖上見此，自當醒憶矣。’言訖流涕而別。”什伍以此物進之。上潛然良久。乃曰：“師升天入地，通幽達冥，真得道神仙之士也。手筆賜名通幽。賜物千段，金銀各千兩，良田五千畝，紫霞帔、白玉簡，特加禮異。暇日問其所受之道，曰：“臣師乃西城王君青城真人，昔於後城山中，教以召命之術曰：‘可以輔贊太平之君，然後方得飛升之道。’戒以護氣希言，目不妄視，絕聲利，遠囂塵，則可以凌三界，登太清矣。”又問升天入地，何門而往，何所為礙。曰：“得道之人，入火不爇，入水不濡，躡虛如履實，觸實如蹈虛。雖九地之厚，巨海之廣，八極之遠，萬方之大。應念倏忽。何所拘滯乎。九地之厚起二十五字據明鈔本補。所以然者，形與道合。道無不在，毫芒之細。萬物之眾。道皆居之。”上善其對。居數載，乃登後城山，葺靜室於其頂，時還其家。門人言天真累降於靜室。一旦與群真俱去。出『仙傳拾遺』（『太平廣記·神仙二十·楊通幽』）

〈史料 169〉

初玄宗登封太嶽回，問承禎：五嶽何神主之。對曰：嶽者山之巨，能出雲雨，潛儲神仙，國之望者為之；然山林之神也，亦有仙官主之。於是詔五嶽於山頂列置列仙官廟。自承禎始也。又蜀女真謝自然泛海，將詣蓬萊求師，船為風飄，到一山，見道人指言：天臺山司馬承禎，名在丹臺，身居赤城，此真良師也。蓬萊隔弱水三十萬裏，非舟楫可行，非飛仙無以到。自然乃回求承禎受度。後白日上升而去。承禎居山，修行勤苦。年一百餘歲。童顏輕健。若三十許人。有弟子七十餘人。一旦告弟子曰。吾自居玉霄峯。東望蓬萊，常有真靈降駕。今為東海青童君、東華君所召，必須去人間。俄頃氣絕，若蟬蛻然解化矣。弟子葬其衣冠爾。原未註出處。查出『大唐新語』（『太平廣記・神仙二十一・司馬承禎』）

〈史料 170〉

葉法善字道元，本出南陽葉邑，今居處州松陽縣。四代修道，皆以陰功密行及劾召之術救物濟人。母劉，因晝寐，夢流星入口，吞之乃孕，十五月而生。年七歲，溺於江中，三年不還。父母問其故，曰：“青童引我，飲以雲漿，故少留耳。”亦言青童引朝太上，太上頷而留之。弱冠身長九尺，額有二午。性淳和潔白，不茹葷辛。常獨處幽室，或遊林澤，或訪雲泉。自仙府歸還，已有役使之術矣，遂入居卯酉山。其門近山，巨石當路。每環迴為徑以避之。師投符起石，須臾飛去，路乃平坦。眾共驚異。常遊括蒼白馬山，石室內遇三神人，皆錦衣寶冠，謂師曰：“我奉太上命，以密旨告子。子本太極紫微左仙卿，以校錄不勤，謫於人世，速宜立功濟人，佐國功滿，當復舊任。以正一三五之法，令授於子。又勤行助化。宜勉之焉。”言訖而去。自是誅蕩精怪。掃馘兇禍。所在經行，以救人為志。叔祖靖能，頗有神術，高宗時，入直翰林，為國子祭酒。武後監國，南遷而終。初高宗徵師至京。拜上卿，不就，請度為道士。出入禁內。及欲告成中嶽。扈從者多疾。凡嚶呪。病皆愈。二京受道籙者。文武中外男女子弟千餘人。所得金帛，並修宮觀。卹孤貧。無愛惜。久之，辭歸松陽，經過之地，救人無數。蜀川張尉之妻。死而再生。復為夫婦。師識之曰：“屍媚之疾也，不速除之，張死矣。”師投符而化為黑氣焉。相國姚崇已終之女。鍾念彌深。投符起之。錢塘江常有巨蜃。時為人害。淪溺舟楫。行旅苦之。投符江中，使神人斬之。除害殄兇，玄功遐

被，各具本傳。於四海六合，名山洞天，鹹所周曆。師年十五，中毒殆死，見青童曰：“天臺苗君，飛印相救。”於是獲蘇。又師青城山趙元陽，受遁甲。與嵩陽韋善俊傳八史，東入蒙山，神人授書。詣嵩山。神仙授劔。常行涉大水，忽沉波中，謂已溺死，七日復出，衣履不濡，雲：“暫與河伯遊蓬萊。”則天徵至神都，請於諸名嶽投奠龍璧。中宗復位，武三思尚秉國權。師以頻察祲祥。保護中宗相王及玄宗，為三思所忌，竄於南海。廣州人庶，夙仰其名，北向候之。師乘白鹿，自海上而至，止於龍興新觀。遠近禮敬，舍施豐多，盡修觀宇焉。出『集異記』及『仙傳拾遺』（『太平廣記・神仙二十六・葉法善』）

〈史料 171〉

相國李紳，字公垂，常習業於華山，山齋糧盡，徒步出穀，求糧於遠方。迨暮方還，忽暴雨至，避於巨岩之下。雨之所沾若浼焉。既及岩下，見一道士，艤舟於石上。一村童擁楫而立。與之揖。道士笑曰：“公垂在此耶。言語若深交，而素未相識。因問紳曰：“頗知唐若山乎。對曰。常覽國史見若山得道之事。每景仰焉。”道士曰：“餘即若山也。將遊蓬萊，偶值江霧，維舟於此，與公垂曩昔之分，得暫相遇。詎忘之耶。乃攜紳登舟。江霧已霽。山峯如畫。月光皎然。其舟凌空泛泛而行，俄頃已達蓬島。金樓玉堂，森列天表。神仙數人，皆舊友也。將留連之。中有一人曰：“公垂方欲佐國理務，數畢乃還耳。”紳亦務經濟之志，未欲棲止。衆仙復命若山送歸華山。後果入相，連秉旌鉞。去世之後，亦將復登仙品矣。出『仙傳拾遺』（『太平廣記・神仙二十七・唐若山』）

〈史料 172〉

成真人者，不知其名，亦不知所自。唐開元末。有中使自嶺外廻。謁金天廟，奠祝既畢，戲問巫曰：“大王在否。對曰：“不在。”中使訝其所答，乃詰之曰：“大王何往而雲不在。巫曰：“關外三十裏迎成真人耳。”中使遽令人於關候之。有一道士，弊衣負布囊，自關外來。問之姓成，延於傳舍，問以所習，皆不對。以驛騎載之到京，館於私第，密以其事奏焉。玄宗大異之，召入內殿，館於蓬萊院，詔問道術及所修之事，皆拱默不能對，沉真樸

略而已。半歲餘。懇求歸山。既無所訪問，亦聽其所適，自內殿挈布囊徐行而去。見者鹹笑焉。所司掃灑其居，改張幃幕，見壁上題曰：“蜀路南行，燕師北至。本擬白日昇天，且看黑龍飲渭。”其字刮洗愈明。以事上聞。上默然良久，頗亦追思之。其後祿山起燕，聖駕幸蜀，皆如其讖。出『仙傳拾遺』（『太平廣記・神仙三十五・成真人』）

〈史料 173〉

清乃揮手辭謝而入焉。良久及地，其中極暗，仰視天才如手掌。捫四壁，止容兩席許。東南有穴，可俯僂而入。乃棄簣遊焉。初甚狹細，前往則可伸腰。如此約行三十裏，晃朗微明。俄及洞口，山川景象，雲煙草樹，宛非人世。曠望久之。惟東南十數裏，隱映若有居人焉。因徐步詣之，至則陡絕一臺。基級極峻。而南向可以登陟。遂虔誠而上，頗懷恐懼。及至。闚其堂宇甚嚴。中有道士四五人。清於是扣門。俄有青童應門問焉。答曰：“青州染工李清。”青童如詞以報。清聞中堂曰：“李清伊來也。乃令前。清惶怖趨拜。當軒一人遙語曰：“未宜來，何即遽至。”因令遍拜諸賢。其時日已午，忽有白髮翁自門而入，禮謁，啟曰：“蓬萊霞明觀丁尊師新到。眾聖令邀諸真登上清赴會。於是列真偕行，謂清曰：“汝且居此。”臨出顧曰：“慎無開北扉。”清巡視院宇，兼啟東西門，情意飄飄然，自謂永棲真境。因至堂北，見北戶斜掩，偶出顧望。下為青州，宛然在目，離思歸心，良久方已。悔恨思返，諸真則已還矣。其中相謂曰：“令其勿犯北門，竟爾自惑，信知仙界不可妄至也。因與瓶中酒一甌，其色濃白。既而謂曰：“汝可且歸。”清則叩頭求哀，又雲：“無路卻返。眾謂清曰。會當至此，但時限未耳。汝無苦無途，但閉目，足至地則到鄉也。”清不得已，流涕辭行。或相謂曰：“既遣其歸，須令有以為生。”清心恃豪富，訝此語為不知己，一人顧清曰：“汝於堂內閣上，取一軸書去。清既得。謂清曰：“脫歸無倚，可以此書自給。”清遂閉目，覺身如飛鳥，但聞風水之聲相激。須臾履地。開目即青州之南門，其時才申未。城隍阡陌。仿髯如舊。至於屋室樹木，人民服用，已盡變改。獨行盡日，更無一人相識者。即詣故居，朝來之大宅宏門，改張新舊，曾無仿像。出『集異記』（『太平廣記・神仙三十六・李清』）

〈史料 174〉

泌每訪隱選異，採怪木蟠枝，持以隱居，號曰養和，人至今效而為之，乃作『養和篇』，以獻肅宗。泌去三四載，二聖登遐，代宗踐祚，乃詔追至闕，舍於蓬萊殿延喜閣。由給事以上及方鎮除降。降字原闕。據明鈔本補。代宗必令商量。軍國大事，亦皆泌參決。因語及建寧王靈武之功，請加贈太子。代宗感悼久之，雲：“吾弟之功，非先生則世人不知，豈止贈太子也。即勅於彭原迎喪。贈承天皇帝，葬齊陵。引至城門，奏以龍輜不動，代宗自蓬萊院謂曰：“吾弟似欲見先生。宜速往酌祝，兼宣朕意。且吾弟定策大功，追加大號。時人未知，可作一文，以傳不朽，用慰玄魂。”泌曰：“已發引矣。他文不及作，輓歌詞可乎。代宗曰：“可。”即於禦前制之，詞甚淒愴。代宗覽之而泣。命中人馳授挽者。泌至，宣代宗命祝酌，歌此二章。於是龍輜行疾如風，都人觀之，莫不感涕。（『太平廣記・神仙三十八・李泌』）

〈史料 175〉

清河公房建，居於含山郡，性尚奇，好玄元之教。常從道士授六甲符及九章真籙。積二十年。後南遊衡山，遇一道士，風骨明秀，與建語，述上清仙都及蓬萊方丈靈異之事，一一皆若涉曆。建奇之。後旬餘。建自衡山適南海。道士謂建曰：“吾嘗客於南海，迨今十年矣，將有寺官李侯者護其軍。李侯以玉簪遺我。我以簪賜君，君宜寶之。”建得其簪，喜且甚。因而別去。是歲秋，建至南海。嘗一日獨遊開元觀。觀之北軒，有磚塗為真人狀者二焉，其位於東者左玄真人，及視左玄之狀，果衡山所遇道士也，奇而歎者且久。及覩左玄之冠。已亡簪矣。時有觀居道士數輩在焉，建具以事言次，出玉簪示之。道士驚曰：“往歲有寺官李侯。護兵於南海。嘗以二玉簪飾左右真人，迨今且十年。其左玄之簪，亡之十年，今君所獲果是焉。”建奇之，因以玉簪歸道士。出『宣室志』（『太平廣記・神仙四十四・房建』）

〈史料 176〉

玄解將還東海，亟請於帝。未許之。遇宮中刻木作海上三山，絲繪華麗，間以珠玉。帝元日與玄解觀之，帝指蓬萊曰：“若非上仙，朕無由得及是境。”玄解笑曰：“三島咫尺，誰曰難及。臣雖無能，試為陛下一遊，以探物象妍醜。”即踴體於空中，漸覺微小。俄而入於金銀闕內左側。連聲呼之。意不復有所見。帝追思嘆恨，近成羸疹。因號其山為藏真島。每詰旦，於島前焚鳳腦香，以崇禮敬。後旬日，青州奏雲：“玄解乘黃牝馬過海矣。”（『太平廣記·神仙四十七·唐憲宗皇帝』）

〈史料 177〉

唐會昌元年，李師稷中丞為浙東觀察使。有商客遭風飄蕩，不知所止。月餘。至一大山。瑞雲奇花，白鶴異樹。盡非人間所覩。山側有人迎問曰：“安得至此。具言之。令維舟上岸。雲：“須謁天師。”遂引至一處，若大寺觀。通一道明鈔本“道”下有“士”字。入。道士鬚眉悉白。侍衛數十。坐大殿上，與語曰：“汝中國人，茲地有緣方得一到，此蓬萊山也。既至，莫要看否。遣左右引於宮內遊觀。玉臺翠樹，光彩奪目，院宇數十，皆有名號。至一院。扃鑰甚嚴。因窺之。衆花滿庭。堂有衲褥，焚香階下。客問之。答曰：“此是白樂天院，樂天在中國未來耳。”乃潛記之，遂別之歸。旬日至越，具白廉使。李公盡錄以報白公。先是，白公平生唯修上坐業，及覽李公所報，乃自為詩二首，以記其事。及答李浙東雲：“近有人從海上回，海山深處見樓臺。中有仙籬明鈔本“籬”作“龕”。開一室，皆言此待樂天來。”又曰：“吾學空門不學仙，恐君此語是虛傳。海山不是吾歸處，歸即應歸甌率天。”然白公脫屣煙埃，投棄軒冕，與夫昧昧者固不同也，安知非謫仙哉。出『逸史』（『太平廣記·神仙四十八·白樂天』）

〈史料 178〉

夔曰。我當至蓬萊謁大仙伯。明旦蓮花峰上，有彩雲車去，我之乘也。”遂揖而去，茂實忽呻吟。衆驚而問之。茂實給之曰。初腹痛時，忽若有人見召，遂奄然耳，不知其多少時也。”家人曰。取藥既迴。呼之不應，已七日矣，唯心頭尚暖，故未斂也。”明日望之。蓮

花峯上。果有彩雲。遂棄官遊名山。後歸，出井中金與眷屬，再出遊山，後不知所在也。出『續玄怪錄』（『太平廣記・神仙五十三・麒麟客』）

〈史料 179〉

梁母者，盱眙人也，寡居無子，舍逆旅於平原亭。客來投憩，鹹若還家。客還錢多少，未嘗有言。客住經月，亦無所厭。自家衣食之外。所得施諸貧寒。常有少年住經日，舉動異常，臨去曰：“我東海小童也。”母亦不知小童何人也。宋元徽四年丙辰，馬耳山道士徐道盛暫至蒙陰，於蜂城西遇一青牛車，車自行。行雲笈七籤一一五作住。見一童呼為徐道士前，道盛行進，去車三步許止。又見二童子，年並十二三許。齊著黃衣。絳裹頭上髻，容服端整，世所無也。車中人遣一童子傳語曰：“我平原客舍梁母也，今被太上召還，應過蓬萊尋子喬，經太山考召，意欲相見，果得子來。靈轡飄飄。崗險巖崗險巖原作玄綱陰。據『雲笈七籤』改。津驛有限，日程三千。日程三千原作三日程三字。據『雲笈七籤』改。侍對在近，我心憂勞，便當乘煙三清，此三子見送到玄都國。汝為我謝東方諸清信士女，太平在近。十有餘一。好相開度，過此憂危。”舉手謝雲：“太平相見。”馳車騰逝，極目乃沒。道盛還逆旅訪之，正樛母度世日相見也。出『集仙錄』（『太平廣記・女仙四・梁母』）

〈史料 180〉

漢孝桓帝時，神仙王遠，字方平，降於蔡經家。將至一時頃，聞金鼓簫管人馬之聲，及舉家皆見，王方平戴遠遊冠。著朱衣。虎頭顰囊，五色之綬。帶劒。少須，黃色，中形人也。乘羽車，駕五龍，龍各異色，麾節幡旗，前後導從，威儀奕奕，如大將軍。鼓吹皆乘麟，從天而下，懸集於庭。從官皆長丈餘。不從道行。既至，從官皆隱，不知所在，唯見方平，與經父母兄弟相見。獨坐久之，即令人相訪。明鈔本訪下有麻姑二字。經家亦不知麻姑何人也。言曰：“王方平敬報姑，餘久不在人間，今集在此，想姑能暫來語乎。有頃，使者還。不見其使，但聞其語雲：“麻姑再拜。不見忽已五百餘年。尊卑有敘，修敬無階，煩信來，承在彼。登山顛倒。按：本書卷七王遠條。登山顛倒應作食頃即到。而先受命，當按行蓬萊，今

便暫往。如是當還，還便親觀。願來明鈔本來作未。即去。”如此兩時間，麻姑至矣。來時亦先聞人馬簫鼓聲。既至，從官半於方平。麻姑至，蔡經亦舉家見之。是好女子，年十八九許，於頂中作髻。餘發垂至腰。其衣有文章，而非錦綺，光彩耀目，不可名狀。入拜方平，方平為之起立。坐定，召進行廚，皆金盤玉杯，肴膳多是諸花果，而香氣達於內外。擘脯行之，如柏靈。集仙錄四靈作炙。按栢當作貊。貊炙，見幹寶搜神記。雲是麟脯也。麻姑自說雲。接待以來，已見東海三為桑田。向到蓬萊，水又淺於往者會時略半也。豈將復還為陵陸乎。方平笑曰：“聖人皆言海中復揚塵也。”姑欲見蔡經母及婦侄，時弟婦新產數十日，麻姑望見乃知之，曰：“噫。且止勿前。”即求少許米，得米便撒之擲地，視其米，皆成真珠矣。出『神仙傳』（『太平廣記·女仙五·麻姑』）

〈史料 181〉

嬰母者，姓譔氏，字曰嬰，不知何許人也。西晉之時，丹陽郡黃堂觀居焉，潛修至道。時人自童幼逮衰老見之，顏狀無改。衆號為嬰母。因入吳市，見一童子。可年十四五。前拜於母雲：“合為母兒。”母曰：“年少自何而來。拜吾為母，既非其類，不合大道。”童子乃去。月餘。又吳市逢有三歲孩子，悲啼呼叫。倏遇譔母。執母衣裾曰：“我母何來。母哀而收育之，逾於所生。既長，明穎孝敬，異於常人。冠歲以來，風神挺邁，所居常有異雲氣。光景彷彿。時說蓬萊閬苑之事。母異之，謂曰：“吾與汝暫此相因。汝以何為號也。子曰：“昔蒙天真盟授靈章，錫以名品，約為孝道明王。今宜稱而呼之矣。”遂告母修真之訣曰：“每須高處玄臺。疎絕異黨。修閑丘阜，餌順陽和，靜夷玄圃，委鑒前非。無英公子、黃老『玉書』、大洞『真經』、豁落七元。太上隱玄之道可致。晏息以流霞之障，睠眄乎文昌之臺，得此道者，九鳳齊唱，天籟駭虛，竦身禦節，入景浮空，龍車虎旗，遊遍八方矣。母宜寶之。出『墉城集仙錄』『太平廣記·女仙七·譔母』

〈史料 182〉

至於華山雲臺峯。峯上有磐石。已有四女先在彼焉。一人雲姓馬，宋州人；一人姓徐，幽州

人；一人姓郭，荊州人；一人姓夏，青州人。皆其夜成仙，同會於此。旁一小仙曰：‘並舍虛幻，得證真仙，今當定名，宜有真字。’於是馬曰信真，徐曰湛真，郭曰修真，夏曰守真。其時五雲參差。徧覆崖谷。妙樂羅列，間作於前。五人相慶曰：‘同生濁界，並是凡身。一旦倏然。遂與塵隔。今夕何夕，歡會於斯，宜各賦詩，以道其意。’信真詩曰。幾劫澄煩慮。思今身僅成。誓將雲外隱，不向世間存。’湛真詩曰：‘綽約離塵世，從容上太清。雲衣無綻日，鶴駕沒遙程。’修真詩曰：‘華嶽無三尺，東瀛僅一杯。入雲騎彩鳳，歌舞上蓬萊。’守真詩曰：‘共作雲山侶，俱辭世界塵。靜思前日事，拋卻幾年身。’敬真亦詩曰：‘人世徒紛擾，其生似夢華。誰言今夕裡，俛首視雲霞。既而雕盤珍果，名不可知。妙樂鏘鏘。響動崖谷。俄而執節者曰：‘宜往蓬萊，謁大仙伯。’五真曰：‘大仙伯為誰。曰：’茅君也。’妓樂鸞鶴，複前引東去。倏然間已到蓬萊。其宮皆金銀，花木樓殿，皆非人間之製作。大仙伯居金闕玉堂中，侍衛甚嚴。見五真喜曰：‘來何晚耶。飲以玉杯，賜以金簡、鳳文之衣。王華之冠。配居蓬萊華院。四人者出，敬真獨前曰：‘王父年高，無人侍養，請回侍其殘年。王父去世，然後從命，誠不忍得樂而忘王父也。惟仙伯哀之。’仙伯曰：‘汝村一千年方出一仙人，汝當其會，無自墜其道。’因敕四真送至其家，故得還也。’邯問昔何修習，曰：“村婦何以知。但性本虛靜，閒即凝神而坐，不復俗慮得入胸中耳。此性也。非非字原闕，據明鈔本、許本、黃本補。學也。’又問要去可否，曰：“本無道術，何以能去。雲鶴來迎即去。不來亦無術可召。’於是遂謝絕其夫，服黃冠。出『續玄怪錄』『太平廣記·女仙十三·楊敬真』

〈史料 183〉

容曰：“某乃開元中楊貴妃之侍兒也。妃甚愛惜，常令獨舞『霓裳』於繡嶺宮。妃贈我詩曰：“‘羅袖動香香不已，紅蕖嫋嫋秋煙裏。輕雲嶺上乍搖風，嫩柳池邊初拂水。’詩成，明皇吟詠久之，亦有繼和，但不記耳。遂賜雙金扼臂。因此寵倖愈於群輩。此時多遇帝與申天師談道，予獨與貴妃得竊聽，亦數侍天師茶藥，頗獲天師憫之。因閑處，叩頭乞藥。師雲：‘吾不惜，但汝無分，不久處世。如何。我曰：‘朝聞道，夕死可矣。’天師乃與絳雪

丹一粒曰：‘汝但服之，雖死不壞。但能大其棺、廣其穴，含以真玉。疎而有風。使魂不蕩空，魄不沉寂。有物拘制，陶出陰陽，後百年，得遇生人交精之氣，或再生，便為地仙耳。’我沒蘭昌之時，具以白貴妃。貴妃恤之，命中貴人陳玄造受其事。送終之器，皆得如約。今已百年矣。仙師之兆，莫非今宵良會乎。此乃宿分，非偶然耳。”。昭因詰申天師之貌，乃田山叟之魁梧也。昭大驚曰：“山叟即天師明矣。不然，何以委曲使予符曩日之事哉。又問蘭鳳二子。容曰：“亦當時宮人有容者，為九仙媛所忌，毒而死之。藏吾穴側，與之交遊，非一朝一夕耳。”鳳臺請擊席而歌。送昭容酒歌曰。臉花不綻幾含幽，今夕陽春獨換秋。我守孤燈無白日，寒雲隴上更添愁。蘭翹和曰。幽谷啼鶯整羽翰，犀沉玉冷自長歎。月華不忍扃泉戶，露滴松枝一夜寒。”雲容和曰：“韶光不見分成塵，曾餌金丹忽有神。不意薛生攜舊律，獨開幽谷一枝春。”昭亦和曰：“誤入宮垣漏網人，月華靜洗玉階塵。自疑飛到蓬萊頂，瓊豔三枝半夜春。”詩畢，旋聞雞鳴。三人曰：“可歸室矣。”昭持其衣，超然而去。初覺門戶至微，及經闕，亦無所妨。蘭、鳳亦告辭而他往矣。但燈燭熒熒，侍婢凝立。帳幄綺繡。如貴戚家焉。遂同寢處，昭甚慰喜。如此數夕，但不知昏旦。容曰：“吾體已蘇矣，但衣服破故，更得新衣，則可起矣。今有金扼臂，君可持往近縣易衣服。”昭懼不敢去，曰：“恐為州邑所執。”容曰：“無憚，但將我白綃去，有急即蒙首，人無能見矣。”昭然之，遂出三鄉貨之。市其衣服，夜至穴，則容已迎門而笑。引入曰：“但啟櫬，當自起矣。”昭如其言，果見容體已生。及回顧帷帳，但一大穴，多冥器服玩金玉。唯取寶器而出，遂與容同歸金陵幽棲。至今見在，容鬢不衰，豈非俱餌天師之靈藥耳。申師名元也。

出『傳記』『太平廣記・女仙十四・張雲容』

〈史料 184〉

洞庭賈客呂鄉筠常以貨殖販江西明鈔本江西作山海。雜貨，逐什一之利。利外有羨，即施貧親戚，次及貧人。更無餘貯。善吹笛，每遇好山水，無不維舟探討，吹笛而去。嘗於中春月夜，泊於君山側。命罇酒獨飲。飲一杯而吹笛數曲。忽見波上有漁舟而來者，漸近，乃一老父鬢眉皤然，去就異常。鄉筠置笛起立，迎上舟。老父維漁舟於鄉筠舟而上，各問所宜。老

父曰。聞君笛聲嘹亮，曲調非常，我是以來。鄉筠飲之數杯，老父曰。老人少業笛，子可教乎。鄉筠素所耽味。起拜，願為末學。老父遂於懷袖間出笛三管。其一大如合拱；其次大如常人之蓄者；其一絕小如細筆管。鄉筠復拜請老父一吹，老父曰。其大者不可發，次者亦然，其小者為子吹一曲。不知得終否。鄉筠曰。願聞其不可發者。老父曰。其第一者在諸天，對諸上帝，或元君，或上元夫人，合上天之樂而吹之。若於人間吹之，人消地拆，日月無光，五星失次，山嶽崩圯。不暇言其餘也。第二者對諸洞府仙人、蓬萊姑射、昆丘王母、及諸真君等，合仙樂而吹之，若人間吹之，飛沙走石，翔鳥墜地，走獸腦裂，五星內錯，稚幼振死。人民纏路。不暇言餘也。其小者，是老身與朋儕可樂者。庶類雜而聽之，吹的不安。明鈔本安作妨。未知可終曲否。言畢，抽笛吹三聲，湖上風動，波濤沆瀣。魚鼈跳噴。鄉筠及童僕恐聳驚栗。五聲六聲，君山上鳥獸叫噪，月色昏昧。舟楫大恐。老父遂止。引滿數杯，乃吟曰。湘中老人讀黃老。手援紫藟坐翠草。春至不知湘水深，日暮忘卻巴陵道。又飲數杯，謂鄉筠曰。明年社，與君期於此。遂棹漁舟而去，隱隱漸沒於波間。至明年秋，鄉筠十旬於筠山伺之，終不復見也。出『博異志』『太平廣記·樂二·呂鄉筠』

〈史料 185〉

後魏王侯外戚公主。擅“擅”原作“阻”，據明鈔本改。山海之富，居川林之饒。爭修園宅，互相誇競。崇門豐室，阿戶連房。飛館生風。重樓起霧。高臺芳樹，家家而築。花林曲池，園園而有。莫不桃李夏綠。竹栢冬青。而河間王琛最為豪首，常與高陽爭衡。造文栢堂如徽音殿。置玉井金罐，以五色絲為繩。妓女三百人盡皆國色，有婢朝雲善吹簫，能為團扇歌隴上聲。琛為秦州刺史，諸羌外叛，屢討之不降。琛令朝雲假為貧嫗，吹簫而乞。諸羌聞之。悉皆流涕，迭相謂曰。何為棄墳井，在山谷為寇耶。相率歸降。秦民語曰。快馬健兒，不如老嫗吹簫。琛在秦中，多無政績。遣使向西域求名馬，遠至波斯國。得千里馬。號曰追風赤。次有七百里者十餘。皆有名字。以銀為槽，金為環鎖。諸王服其豪富。琛嘗語人雲。晉室石崇，乃是庶姓。猶能雉頭狐腋。畫卵雕薪。況我大魏天王，不為華侈。造迎風館於後園。窗戶之上，列錢青瑣，玉鳳銜鈴。金龍吐旆。素柰朱李，枝條入簷。妓女樓上坐而摘

食。琛嘗會宗室，陳諸寶器。金瓶銀甕百餘口。甌擎盤合稱是。其餘酒器。有水晶鉢。瑪瑙琉璃碗。赤玉卮數十枚。作工奇妙，中土所無，皆從西來。又陳女樂及諸名馬。複引諸王按行庫藏。錦 珠璣。冰羅霧縠。充積其內。琛謂章武王融曰。不恨我不見石崇，恨石崇不見我。融立性貪暴，志欲無厭。見之歎惋，不覺成疾。還家，臥三日不能起。江陽王繼來省疾，諭之曰。卿之財產，應得抗衡，何為羨歎，以至於此。融曰。常謂高陽一人，寶貨多於融。誰知河間，瞻之在前。繼曰。卿欲作袁術之在淮南，不知世間復有劉備也。及爾朱氏亂後，王侯第宅，多題為寺宇。壽丘裏間，列刹相望。祇洹鬱起，寶塔高壯。四月八日，京都市女，多至河間寺。觀其堂廡綺麗，無不歎息。以為蓬萊仙室，亦不是過也。出『伽藍記』

『太平廣記・奢侈一・元琛』

〈史料 186〉

北齊中書侍郎河東裴襲字敬憲，患耳。新構山池，與賓客宴集。謂河間邢子才曰。山池始就，願為一名。子才曰。海中有蓬萊山，仙人之所居。宜名蓬萊。裴襲“襲”原作“襲”，據明鈔本改，下同。也。故以戲之。敬憲初不悟，於後始覺。忻然謂子才曰。長忌及戶，高則無害。公但大明鈔本“大”作“不”。語，襲亦何嫌。出『譚藪』 『太平廣記・談諧三・邢子才』

〈史料 187〉

漢明帝陰貴人，夢食瓜甚美。時燉煌獻異瓜種。名穹隆。父老雲。有道士從蓬萊得此種，食之不饑。出『王子年拾遺記』 『太平廣記・夢一・陰貴人』

〈史料 188〉

今大夫複位，侍者宜遷，付所司准法。遂領就一院，見一人，白須鬢，紫衣，左右十數列侍。拜訖仰視，乃少傅白居易也。遂元和初為翰林小吏，因問曰。少傅何為至此。白怡然曰。侍者憶前事耶。俄如睡覺，神氣頓如舊。諸黃門聞其疾愈。競訪之。是夕，居易薨於洛

中。臨終，謂所親曰。昔自蓬萊。與帝謂武宗也。有閻浮之因。帝於閻浮為麟德之別。言畢而逝。人莫曉也。較其日月，當捐館之時，乃上宴麟德殿也。出『唐年補錄』『太平廣記・神二十一・史遂』

〈史料 189〉

漢明帝陰貴人，夢食瓜，甚美。帝使求諸方國。時有燉煌獻異瓜種。常山獻巨桃核。名穹窿，長三尺而形屈。其味臭如粘。父老雲：“昔道士從蓬萊山得此瓜，雲是空洞靈瓜。四劫一實。東王公、西王母遺種於地，世代遐絕，其實頗存。”又說：“此桃霜下始花，隆冬可熟。”亦雲：“仙人所食，常使植於霜林園。此園皆植寒果。積冰之節。百果方盛。俗為相陵瓜。故霜園之聲訛也。後曰：“王母之桃，王公之瓜，可得而食，五萬歲矣。”安可食乎。後崩，內侍者見鏡奩中有瓜桃之核，視之涕零，疑其非數。出『王子年拾遺記』『太平廣記・草木六・瓜』

〈史料 190〉

漢皇重色思傾國，禦宇多年求不得；楊家有女初長成，養在深閨人不識。天生麗質難自棄，一朝選在君王側。回眸一笑百媚生，六宮粉黛無顏色。春寒賜浴華清池，溫泉水滑洗凝脂，侍兒扶起嬌無力，始是新承恩澤時。雲鬢花顏金步搖，芙蓉帳暖度春宵，春宵苦短日高起，從此君王不早朝。承歡侍宴無閒暇，春從春遊夜專夜。漢宮佳麗三千人，三千寵愛在一身。金屋妝成嬌侍夜，玉樓宴罷醉和春。姊妹弟兄皆列土，可憐光彩生門戶。遂令天下父母心，不重生男重生女。驪宮高處入青雲，仙樂風飄處處聞。緩歌慢舞凝絲竹，盡日君王看不足。漁陽鞞鼓動地來，驚破『霓裳羽衣曲』。九重城闕煙塵生，千乘萬騎西南行。翠華搖搖行複止。西出都門百餘裡。六軍不發無奈何。宛轉蛾眉馬前死。花鈿委地無人收，翠翹金雀玉搔頭。君王掩面救不得，回看血淚相和流。黃埃散漫風蕭索。雲棧縈迴登劍閣。峨眉山下少行人，旌旗無光日色薄。蜀江水碧蜀山青，聖主朝朝暮暮情，行宮見月傷心色，夜雨聞鈴腸斷聲。天旋日轉迴龍馭，到此躊躇不能去。馬嵬坡下泥土中，不見玉顏空死處。君臣相顧盡沾

衣，東望都門信馬歸。歸來池苑皆依舊，太液芙蓉未央柳。芙蓉如面柳如眉，對此如何不淚垂。春風桃李花開夜，秋雨梧桐葉落時。西宮南苑多秋草。落葉滿階紅不掃。梨園弟子白髮新，椒房阿監青娥老。夕殿螢飛思悄然。孤燈挑盡未成眠。遲遲鐘漏初長夜，耿耿星河欲曙天。鴛鴦瓦冷霜華重，翡翠衾寒誰與共。悠悠生死別經年，魂魄不曾來入夢。臨邛道士鴻都客。能以精誠致魂魄。為感君王展轉思。遂令方士殷勤覓。排空馭氣奔如電，升天入地求之遍。上窮碧落下黃泉，兩處茫茫皆不見。忽聞海上有仙山，山在虛無縹緲間。樓殿玲瓏五雲起，其中綽約多仙子。中有一人名太真，雪膚花貌參差是。金闕西廂叩玉扃。轉教小玉報雙成。聞道漢家天子使，九華帳裡夢魂驚。攬衣推枕起徘徊。珠箔銀屏迤邐開。雲鬢半偏新睡覺，花冠不整下堂來。風吹仙袂飄飄舉，猶似『霓裳羽衣舞』。玉容寂寞淚闌幹，梨花一枝春帶雨。含情凝睇謝君王，一別音容兩渺茫。昭陽殿裏恩愛絕，蓬萊宮中日月長。回頭下望人寰處，不見長安見塵霧。空將舊物表深情，鈿合金釵寄將去。釵留一股合一扇，釵劈黃金合分鈿。但令心似金鈿堅，天上人間會相見。臨別殷勤重寄詞，詞中有誓兩心知。七月七日長生殿，夜半無人私語時：“在天願為比翼鳥，在地願為連理枝。”天長地久有時盡，此恨綿綿無絕期。『太平廣記·雜傳記三·長恨傳陳鴻撰』

〈史料 191〉

閼逢敦牂之歲，戎事大舉，有薦瓠裏子宓於外閭者曰：“瓠裏先生實知兵，可將也。”聘至，瓠裏子過鬱離子辭，且請言焉。鬱離子仰天歎曰：“嗟乎悲哉！是舉也患矣，而獨不為先生計哉？”瓠裏子曰：“何謂也？”鬱離子曰：“昔者秦始皇帝東巡，使徐市入海，求三神蓬萊之山。請舶弗予，予之葦筏，辭曰：‘弗任。’秦皇帝使謁者讓之曰：‘人言先生之有道也，寡人聽之，而必求舶也，則不惟人皆可往也，寡人亦能往矣，而焉事先生為哉？’徐市無以應，退而私具舟，載其童男女三千人，宅海島而國焉。秦皇帝留連海濱，待徐市不至，不得三神山而歸，殂於沙邱。今之用事者皆肉食，吾恐先生之請舶而得葦筏也。”既而果不用瓠裏子。『鬱離子·卷上·請舶得葦筏』

〈史料 192〉

孔明促舟前進，果然是好大霧！前人有篇大霧垂江賦曰：大哉長江，西接岷峨，南控三吳，北帶九河。匯百川而入海，歷萬古以揚波。至若龍伯，海若，江妃，水母，長鯨千丈，天蜈九首，鬼怪異類，咸集而有。蓋夫鬼神之所憑依，英雄之所戰守也。時而陰陽既亂，昧爽不分。訝長空之一色，忽大霧之四屯。雖輿薪而莫睹，惟金鼓之可聞。初若溟蒙，才隱南山之豹；漸而充塞，欲迷北海之鯤。然後上接高天，下垂厚地。渺乎蒼茫，浩乎無際。鯨鯢出水而騰波，蛟龍潛淵而吐氣。又如梅霖收溽，春陰釀寒；溟溟濛濛，浩浩漫漫。東失柴桑之岸，南無夏口之山。戢船千艘，俱沈淪於巖壑；漁舟一葉，驚出沒於波瀾。甚則穹昊無光，朝陽失色；返白晝為昏黃，變丹山為水碧。雖大禹之智，不能測其淺深；離婁之明，焉能辨乎咫尺。於是馮夷息浪，屏翳收功；魚鱉遁跡，鳥獸潛踪。隔斷蓬萊之島，暗圍閭闔之宮。恍惚奔騰，如驟雨之將至；紛紜雜沓，若寒雲之欲同。乃復中隱毒蛇，因之而為瘴癘；內藏妖魅，憑之而為禍害。降疾厄於人間，起風塵於塞外。小民遇之失傷，大人觀之感慨。蓋將返元氣於洪荒，混天地為大塊。『三國演義·用奇謀孔明借箭，獻密計黃蓋受刑』

〈史料 193〉

催開坐下獸，手中斧飛來，直取鄭倫。鄭倫手中杵急架相還。二獸相迎，一場大戰。但見：兩陣咚咚發戰鼓，五采旛幢空中舞。三軍吶喊助神威，慣戰兒郎持弓弩。二將齊縱金睛獸，四臂齊舉斧共杵。這一個怒髮如雷烈焰生；那一個自小生來性情鹵。這一個面如鍋底赤須長；那一個臉似紫棗紅霞吐。這一個蓬萊海島斬蛟龍；那一個萬仞山前誅猛虎。這一個崑崙山上拜明師；那一個八卦爐邊參老祖。這一個學成武藝去整江山；那一個秘授道術把乾坤補。自來也見將軍戰，不似今番杵對斧。『封神演義·姬昌解圍進妲己』

〈史料 194〉

話說子牙同異人來到後花園，周圍看了一周，果然好個所在。但見：牆高數仞，門壁清幽。左邊有兩行金線垂楊；右壁有幾株剔牙松樹。牡丹亭對玩花樓，芍藥

圃連鞦韆架。荷花池內，來來往往錦鱗遊；木香篷下，翩翩翻翻蝴蝶戲。正是；小園光景似蓬萊，樂守天年娛晚景。『封神演義·子牙火燒琵琶精』

〈史料 195〉

那日在摘星樓與紂王飲宴，酒至半酣，妲己曰：“妾有一圖畫，獻與陛下一觀。”王曰：“取來朕看。”妲己命官人將畫叉挑著。紂王曰：“此畫又非翎毛，又非走獸，又非山景，又非人物。”上畫一台，高四丈九尺，殿閣巍峨，瓊樓玉宇，瑤瑤砌就欄杆，明珠妝成梁棟，夜現光華，照耀瑞彩，名曰：“鹿台。”妲己奏曰：“陛下萬乘至尊，貴為天子，富有四海，若不造此台，不足以壯觀瞻。此台真是瑤池玉闕，閬苑蓬萊。陛下早晚宴於台上，自有仙人、仙女下降。陛下得與真仙遨遊，延年益壽，祿算無窮。陛下與妾，共叨福庇，永享人間富貴也。”王曰：“此台工程浩大，命何官督造？”妲己奏曰：“此工須得才藝精巧、聰明睿智、深識陰陽、洞曉生剋，以妾觀之，非下大夫姜尚不可。”紂王聞言，即傳旨：“宣下大夫姜尚。”使臣往比干府召姜尚。此幹慌忙接旨。使臣曰：“旨意乃宣下大夫姜尚。”子牙即忙接旨，謝恩曰：“天使大人，可先到午門，卑職就至。”『封神演義·蘇妲己置造叢盆』

〈史料 196〉

時當三春天氣，景物韶華，御園牡丹盛開。傳旨：“同百官往禦花園賞牡丹，以繼君臣同樂，效虞廷賡歌喜起之盛事。”百官領旨，隨駕進園。正是：天上四時春作首，人間最富帝王家。怎見得禦花園的好處，但見：彷彿蓬萊仙境，依希天上仙圃：諸般花木結成攢，疊石琳瑯妝就景。桃紅李白芬芳，綠柳青蘿搖曳。金門外幾株君子竹，玉戶下兩行大夫松。紫巍巍錦堂畫棟，碧沉沉彩閣雕簷。蹴球場斜通桂院，鞦韆架遠離花篷。牡丹亭嬪妃來往，芍藥院彩女閒遊。金橋流綠水，海棠醉輕風。磨磚砌就蕭牆，白石鋪成路徑。紫街兩道，現出二龍戲珠；闌干左右，雕成朝陽丹鳳。翡翠亭萬道金光，禦書閣十層瑞彩。祥雲映日，顯帝王之榮華；瑞氣迎眸，見皇家之極貴。鳳尾竹百鳥來朝，龍爪花五云相罩。千紅萬紫映樓台，

走獸飛禽鳴內院。八哥說話，紂王喜笑欲狂；鸚鵡高歌，天子歡容鼓掌。碧池內金魚躍水，粉牆內鶴鹿同春。芭蕉影動逞風威，逼射香為百花主。珊瑚樹高高下下，神仙洞曲曲灣灣。玩月台層層疊疊，惜花徑繞繞迢迢。水閣下鷗鳴和暢，涼亭上琴韻清幽。夜合花開，深院奇香不散；木蘭花放，滿園清味難消。名花萬色，丹青難畫難描；樓閣重重，妙手能工焉仿。御園中果然異景，皇宮內真是繁華。花間翻蝶翅，禁院隱蜂衙。亭簷飛紫燕，池閣聽鳴蛙。春鳥啼百舌，反哺是慈烏。正是：御園如錦繡，何用說仙家。藍靛染成千塊玉，碧紗籠罩萬堆霞。『封神演義·子牙兵伐崇侯虎』

〈史料 197〉

話說武成王展放鋼槍，使得性發，似一條銀蟒裹住餘化。只殺的他馬仰人翻。餘化掩一戟就走。飛虎趕來。追至兩肘之地，餘化掛下畫戟，揭起戰袍，囊中取出一旛，名曰：“戮魂旛。”——此物是蓬萊島一氣仙人傳授，乃左道傍門之物。——望空中一舉，數道黑氣，把飛虎罩住，平空拎去了。望轅門摔下，眾士卒將武成王拏了。餘化掌得勝鼓回府。旗門小校飛報守將韓榮曰：“餘將軍今日已捉反臣黃飛虎聽令。”韓榮傳令：“推來。”眾士卒將飛虎推至簷前。飛虎立而不跪。榮曰：“朝廷何事虧你，一旦造反？”飛虎笑曰：“似足下坐守關隘，自謂貴職，不過狐假虎威，借天子之威福以彈壓此一方耳。豈知朝政得失，禍亂之由，君臣乖違之故？我今既被你所獲，無非一死而已，何必多言！”韓榮曰：“吾既守此關隘，擒拏叛逆，不過盡吾職守，吾亦不與你辯。且送下囹圄監候，餘黨盡獲起解。”『封神演義·黃飛虎泗水大戰』

〈史料 198〉

話說子牙捧“封神榜”，駕土遁往東海來。正行之際，飄飄的落在一座山上。那山玲瓏剔透，古怪崎嶇；峰高嶺峻，雲霧相連，近於海島。有詩為證：海島峰高起怪雲，岸傍檜柏翠氤氳，巒頭風吼如猛虎，拍浪穿梭似破軍。異草奇花香馥馥，青松翠竹色紛紛。靈芝結就清靈地，真是蓬萊回不群。『封神演義·姜子牙一上崑崙』

〈史料 199〉

且說趙公明喚門徒陳九公、姚少司：“隨我往西岐去。”兩個門徒領命。公明打點起身，喚童兒：“好生看守洞府，吾去就來。”帶兩個門人，借土遁往西岐。正行之間，忽然下來，是一座高山。正是：異景奇花觀不盡，分明生就小蓬萊。『封神演義·廣成子破金光陣』

〈史料 200〉

燃燈笑容問曰：“道友是那座名山？何處洞府？”道人曰：“貧道閒遊五嶽，悶戲四海，吾乃野人也。吾有歌為證，歌曰：貧道乃是崑崙客，石橋南畔有舊宅。修行得道混元初，才了長生知順逆。休誇爐內紫金丹，須知火裡焚玉液。跨青鸞，騎白鶴，不去蟠桃殮壽樂，不去玄都拜老君，不去玉虛門上諾。三山五嶽任我遊，海島蓬萊隨意樂。人人稱我為仙癖，腹內盈虛自有情。陸壓散人親到此，西岐要伏趙公明。『封神演義·陸壓獻計射公明』

〈史料 201〉

且不說張紹困住武王，只說申公豹跨虎往三仙島來報信與雲霄娘娘姐妹三人。及至洞門，光景與別處大不相同。怎見得：煙霞裊裊，松柏森森。煙霞裊裊瑞盈門，松柏森森青繞戶。橋踏枯槎木，峰巔繞薜蘿，鳥銜紅蕊來雲壑，鹿踐芳叢上石苔。那門前時催花發，風送香浮，臨堤綠柳轉黃鸝，傍岸夭桃翻粉蝶。雖然別是洞天景，勝似蓬萊閬苑佳。『封神演義·武王失陷紅沙陣』

〈史料 202〉

話說楊戩借土遁往夾龍山來，正駕遁光，風聲霧色，不覺飄飄蕩蕩落將下來，乃是一座好山。但見：

山頂嵯峨摩斗柄，樹梢彷彿接雲霄。青煙堆裡，時聞谷口猿啼；亂翠陰中，每聽松間鶴唳。嘯風山魅，立溪邊戲弄樵夫；成器狐狸，坐崖畔驚張獵戶。八面崔嵬，四圍險峻。古怪喬松

盤翠嶺，槎斫老樹掛藤蘿。綠水清流，陣陣異香忻馥馥；巔峰彩色，飄飄隱現白雲飛。時見大蟲來往，每聞山鳥聲鳴。麀鹿成群，穿荊棘往來跳躍；玄猿出入，盤溪澗摘果攀桃。佇立草坡一望，並無人走；行來深凹，俱是採藥仙童。不是凡塵行樂地，賽過蓬萊第一峰。『封神演義·土行孫歸伏西岐』

〈史料 203〉

話言張山失機進營，臉上著傷，心上甚是急躁，切齒深恨。忽報：“營外有一道人求見。”張山傳令：“請來。”只見一道人，頭挽雙髻，背縛一口寶劍，飄然而至中軍，打稽首。張山欠身答禮，尊帳中坐下。道人見張山臉上青腫，問曰：“張將軍面上為何著傷？”張山曰：“昨日見陣，偶被女將暗算。”道人忙取藥餌敷搽，即時全癒。張山忙問：“老師從何處而來？”道人曰：“吾從蓬萊島而至。貧道乃羽翼仙也，特為將軍來助一臂之力。”張山感謝道人。次日，早至城下，請子牙答話。報馬報入相府：“城外有一道人請戰。”子牙曰：“原該有三十六路征伐西岐，此來已是三十二路，還有四路未曾來至，我少不得要出去。”忙傳令：“排五方隊伍。”一聲炮響，齊出城來。羽翼仙抬頭觀看，只見兩扇門開，紛紛繞繞，俱是穿紅著綠狼虎將，攢攢簇簇，盡是敢勇當先驍騎兵。哪吒對黃天化；金吒對木吒；韋護對雷震子；楊戩與眾門人左右排列保護；中軍武成王壓陣；子牙坐四不相，走出陣前。見對面一道者，生的形容古怪，尖嘴縮腮，頭挽雙髻，徐徐而來。怎見得，有讚為證：頭挽雙髻，體貌輕揚。皂袍麻履，形異尋常。嘴如鷹鷂，眼露凶光。葫蘆背上，劍佩身藏。蓬萊怪物，得道無疆。飛騰萬里，時歇滄浪。名為金翅，綽號禽王。『封神演義·張山李錦伐西岐』

〈史料 204〉

話說子牙拱手言曰：“道友請了！”羽翼仙曰：“請了。”子牙曰：“道友高姓何名？今日會尚有何事吩咐？”羽翼仙答曰：“貧道乃蓬萊島羽翼仙是也。姜子牙，我且問你，你莫非是崑崙門下元始徒弟，有何能，對人罵我，欲拔吾翎毛，抽吾筋骨？我與你無涉，你如何

這等欺人？”子牙欠身曰：“道友不可錯來怪人。我與道友並未曾會過幾次，我知道友根底？必有人搬唆，說有甚失禮得罪之處。我與道友未有半面之交，此語從何而來？道友請自三思。”羽翼仙聽得此話，低頭暗思：“此言大是有理。”乃謂子牙曰：“你話雖有理，只是此語未必無自而來。但說過，你從今百事斟酌，毋得再是如此造次，我與你不得乾休。去罷！”『封神演義·張山李錦伐西岐』

〈史料 205〉

且說韓榮兵敗進關，一面具表往朝歌告急，一面設計守關。正在緊急之時，忽報：“七首將軍餘化等令。”韓榮聽得餘化來至，大喜，忙傳令：“令來。”餘化至殿上行禮，韓榮曰：“自從將軍戰敗去後，此關反被黃飛虎走出去了，不覺數載；豈意他養成氣力，今反夥同那姜尚，三路分兵，取了佳夢關、青龍關，盡為周有。昨日會兵，不能取勝，如之奈何？”餘化曰：“末將被哪吒打傷，敗回蓬萊山，見我師尊，燒煉一件寶物，可以復我前仇。縱周家有千萬軍將，只叫他片甲無存。”韓榮大喜，治酒管待。『封神演義·哼哈二將顯神通』

〈史料 206〉

楊戩借土遁往玉泉山來，到了金霞洞，進洞見師父，拜罷，玉鼎真人問曰：“楊戩，你此來有甚麼話說？”楊戩對曰：“弟子同師叔進兵汜水關，與守關將餘化對敵。彼有一刀，不知何毒，起先雷震子被他傷了一刀，只是寒顫，不能做聲；弟子也被他傷了一刀，幸賴師父玄功，不曾重傷，然不知果是何毒物。”玉鼎真人忙令楊戩將刀痕來看，真人見此刀刃，便曰：“此乃是化血刀所傷。但此刀傷了，見血即死。幸雷震子傷的兩枚仙杏，你又有玄功，故爾如此；不然，皆不可活。”楊戩聽得，不覺大驚，忙問曰：“似此將何術解救？”真人曰：“此毒連我也不能解。此刀乃是蓬萊島一氣仙餘元之物。當其修煉時，此刀在爐中，有三粒神丹同煉的。要解此毒，非此丹藥，不能得濟。”真人沉思良久，乃曰：“此事非你不可。”附耳：“……如此如此方。”楊戩大喜，領了師父之言，離了玉泉山往蓬萊島而來。正是：真人道術非凡品，咫尺蓬萊見大功。『封神演義·土行孫盜騎陷身』

〈史料 207〉

話說楊戩借土遁往蓬萊島而來，前至東海。好個海島，異景奇花，觀之不盡。怎見得海水平波，山崖錦砌，正所謂蓬萊景緻與天闕無差。怎見得好山，有讚為證：

勢鎮東南，源流四海。汪洋潮湧作波濤，滂渤山根成碧闕。蜃樓結彩，化為人世奇觀；蛟孽興風，又是滄溟幻化。丹山碧樹非凡，玉宇瓊宮天外。麟鳳優遊，自然仙境靈胎；鸞鶴翱翔，豈是人間俗骨。琪花四季吐精英，瑤草千年呈瑞氣。且慢說青松翠柏常春；又道是仙桃仙果時有。修竹拂雲留夜月，藤蘿映日舞清風。一溪瀑布時風雪，四面丹崖若列星。正是：百川滄注擎天柱，萬劫無移大地根。『封神演義·土行孫盜騎陷身』

〈史料 208〉

話說楊戩來至蓬萊山，看罷蓬萊景緻，仗八九元功，將身變成七首將軍餘化，迳進蓬萊島來。見了一氣仙餘元，倒身下拜。餘元見餘化到此，乃問曰：“你來做甚麼？”餘化曰：“弟子奉師父之命，去汜水關協同韓總兵把守關隘，不意姜尚兵來，弟子見頭一陣，刀傷了哪吒，第二陣傷了雷震子，第三陣恰來了姜子牙師侄楊戩，弟子用刀去傷他，被他一指，反把刀指回來，將弟子傷了肩臂，望老師慈悲救援。”一氣仙餘元曰：“有這等事？他有何能，取指回我的寶刀？但當時煉此寶，在爐中分龍虎，定陰陽，同煉了三粒丹藥，我如今將此丹留在此間也無用，你不若將此丹藥取了去，以備不虞。”餘元隨將丹遞與餘化。餘化叩頭，“謝老師天恩。”忙出洞來，回過營。不表。有詩單贊楊戩玄功變化之妙：

悟到功成道始精，玄中玄妙有無生。蓬萊枉秘通靈藥，汜水徒勞化血兵。計就騰挪稱幻聖，裝成奇巧盜英明。多因福助周文武，一任奇謀若浪萍。『封神演義·土行孫盜騎陷身』

〈史料 209〉

道人進帥府，韓榮迎接餘元。只見他生得面如藍靛，赤髮獠牙，身高一丈七八，凜凜威風，二目凶光冒出。韓榮降階而迎，口稱：“老師。”請上銀安殿。”韓榮下拜，問曰：“老

師是那座名山？何處洞府？”一氣仙餘元曰：“楊戩欺吾太甚，盜丹殺我弟子餘化。貧道是蓬萊島一氣仙餘元是也；今特下山，以報此仇。”韓榮聞說大喜，治酒管待。次日，餘元上了五云駝，出關至週營，坐名要子牙答話。報馬報入中軍：“汜水關有一道人請元帥答話。”子牙傳令：“擺隊伍出營。”左右分五嶽門人，一騎當先。只見一位道人，生的十分兇惡。怎見得：魚尾冠，金嵌成；大紅服，雲暗生。面如藍靛獠牙冒，赤髮紅須古怪形。絲條飄火焰，麻鞋若水晶。蓬萊島內修仙體，自在逍遙得至清。位在監齋成神道，一氣仙名舊有聲。『封神演義·土行孫盜騎陷身』

〈史料 210〉

話說子牙至軍前問曰：“道者請了。”餘元道：“姜子牙，你叫出楊戩來見我。”子牙曰：“楊戩催糧去了，不在行營。道者，你既在蓬萊島，難道不知天意。今成湯傳位六百餘年，至紂王無道，暴棄天命，肆行凶惡，罪惡貫盈，天怒人怨，天下叛之。我周應天順人，克修天道，天下歸周。今奉天之罰，以觀政於商，爾何得阻逆天吏，自取滅亡哉！道者，你不觀餘化諸人皆是此例，他縱有道術，豈能扭轉天命耶！”餘元大怒曰：“總是你這一番妖言惑眾！若不殺你，不足以絕禍根！”催開五云駝，仗寶劍直取子牙。子牙手中劍赴面交還。『封神演義·土行孫盜騎陷身』

〈史料 211〉

話說餘元大呼曰：“那一位師兄，來救我之殘喘！”水火童兒見紫芝崖下一道者，青面紅發，巨口獠牙，困在那裡，童兒問曰：“你何人，今受此厄？”餘元曰：“我乃是金靈聖母門下，蓬萊島一氣仙餘元是也；今被姜子牙，將我沉於北海，幸天不絕我，得借水遁，方能到得此間。望師兄與我通報一聲。”水火童兒迺來見金靈聖母備言餘元一事。『封神演義·土行孫盜騎陷身』

〈史料 212〉

且說金吒、木吒別了子牙，兄弟二人在路商議。金吒曰：“我二人奉姜元帥將令來救東伯侯姜文煥進關，若與竇榮大戰，恐不利也。我和你且假扮道者，詐進遊魂關反去協助竇榮，於中用事，使彼不疑；然後裡應外合，一陣成功，何為不美。”木吒曰：“長兄言得甚善。”二人分付使命：“領人馬先去報知姜文煥，我弟兄二人隨後就來。”使命領人馬去訖。金、木二吒隨借土遁，落在關內，迺至帥府前，金吒曰：“門上的，傳與你元帥得知，海外有煉氣士求見。”門官不敢隱諱，急至殿前啟曰：“府外有二道者，口稱海外之士，要見老爺。”竇榮聽說，傳令：“請來。”二人迺至簷前，打稽首曰：“老將軍，貧道稽首了。”竇榮曰：“道者請了。今道者此來，有何見諭？”金吒曰：“貧道二人乃東海蓬萊島煉氣散人孫德、徐仁是也。方才我兄弟偶爾閒遊湖海，從此經過，因見姜文煥欲進此關，往孟津會合天下諸侯，以伐當今天子；此是姜尚大逆不道，以惶惑之言挑釁天下諸侯，致生民塗炭，海宇騰沸。此天下之叛臣，人人得而誅之者也。我弟兄昨觀乾象，湯氣正旺，姜尚等徒苦生靈耳。吾弟兄願出一臂之力，助將軍先擒姜文煥，解往朝歌；然後以得勝之兵，掩諸侯之後，出其不意，彼前後受敵，一乃成擒耳。正所謂‘迅雷不及掩耳’，此誠不世之功也。但貧道出家之人，本不當以兵戈為事，因偶然不平，故向將軍道之，幸毋以方外術士之言見諒可也。乞將軍思之。”竇榮聽罷，沉吟不語。『封神演義·金吒智取遊魂關』

〈史料 213〉

轉過尖峰，抹過峻嶺，又見那壁陡崖前，聳出一座洞府。但見那：

煙霞渺渺，松柏森森。煙霞渺渺採盈門，松柏森森青繞戶。橋踏枯槎木，峰巔繞薜蘿。鳥銜紅蕊來雲壑，鹿踐芳叢上石台。那門前時催花發，風送花香。臨堤綠柳轉黃鸝，傍岸夭桃翻粉蝶。雖然曠野不堪誇，卻賽蓬萊山下景。『西遊記·孫行者大鬧黑風山 觀世音收伏熊羆怪』

〈史料 214〉

那老妖與大聖鬥經三十回合，不分勝敗。這行者要見功績，使一個“身外身”的手段：把

毫毛揪下一把，用口嚼得 粉碎，望上一噴，叫聲：“變！”變有百十個行者，都是一樣打扮，各執一根鐵棒，把那怪圍在空中。那怪害怕，也使一般本事：急回頭，望著巽地上，把口張了三張，呼的一口氣吹將出去，忽然間，一陣黃風，從空刮起。好風，真個利害：

冷冷颼颼天地變，無影無形黃沙旋。

穿林折嶺倒松梅，播土揚塵崩嶺站。

黃河浪潑徹底渾，湘江水湧翻波轉。

碧天振動鬥牛宮，爭些刮倒森羅殿。

五百羅漢鬧喧天，八大金剛齊嚷亂。

文殊走了青毛獅，普賢白象難尋見。

真武龜蛇失了群，梓潼驛子飄其轡。

行商喊叫告蒼天，稍公拜許諸般願。

煙波性命浪中流，名利殘生隨水辦。

仙山洞府黑攸攸，海島蓬萊昏暗暗。

老君難顧煉丹爐，壽星收了龍鬚扇。

王母正去赴蟠桃，一風吹亂裙腰釧。

二郎迷失灌州城，哪吒難取匣中劍。

天王不見手心塔，魯班吊了金頭鑽。

雷音寶闕倒三層，趙州石橋崩兩斷。

一輪紅日盪無光，滿天星斗皆昏亂。

南山鳥往北山飛，東湖水向西湖漫。

雌雄拆對不相呼，子母分離難叫喚。

龍王遍海找夜叉，雷公到處尋閃電。

十代閻王覓判官，地府牛頭追馬面。

這風吹倒普陀山，捲起觀音經一卷。

白蓮花卸海邊飛，吹倒菩薩十二院。

盤古至今曾見風，不似這風來不善。

唵喇喇，乾坤險不炸崩開，萬里江山都是顫。『西遊記・護法設莊留大聖 須彌靈吉定風魔』

〈史料 215〉

行者遂領師父上了大路。行夠多時，忽見有高山擋路，三藏勒馬停鞭道：“徒弟，前面一山，必須仔細，恐有妖魔作耗，侵害吾黨。”行者道：“馬前但有吾等三人，怕甚妖魔？”

因此，長老安心前進。只見那座山，真是好山：

高山峻極，大勢崢嶸。根接崑崙脈，頂摩霄漢中。白鶴每來棲檜柏，玄猿時復掛藤蘿。日映晴林，疊疊千條紅霧繞；風生陰壑，飄飄萬道彩雲飛。幽鳥亂啼青竹里，錦雞齊鬥野花間。

只見那千年峰、五福峰、芙蓉峰，巍巍凜凜放毫光；萬歲石、虎牙石、三天石，突突磷磷生瑞氣。崖前草秀，嶺上梅香。荊棘密森森，芝蘭清淡淡。深林鷹鳳聚千禽，古洞麒麟轄萬獸。澗水有情，曲曲灣灣多繞顧；峰巒不斷，重重疊疊自周回。又見那綠的槐、斑的竹、青的松，依依千載鬥穠華；白的李、紅的桃、翠的柳，灼灼三春爭艷麗。龍吟虎嘯，鶴舞猿啼。麋鹿從花出，青鸞對日鳴。乃是仙山真福地，蓬萊閬苑只如然。又見些花開花謝山頭景，雲去雲來嶺上峰。『西遊記・萬壽山大仙留故友 五莊觀行者竊人參』

〈史料 216〉

卻說唐僧四眾在山遊玩，忽擡頭，見那松篁一簇，樓閣數層。唐僧道：“悟空，你看那裡是甚麼去處？”行者看了道：“那所在不是觀宇，定是寺院。我們走動些，到那廂方知端的。”不一時，來於門首觀看，見那：松坡冷淡，竹徑清幽。往來白鶴送浮雲，上下猿猴時獻果。那門前池寬樹影長，石裂苔花破。宮殿森羅紫極高，樓台縹緲丹霞墮。真個是福地靈區，蓬萊雲洞。清虛人事少，寂靜道心生。青鳥每傳王母信，紫鸞常寄老君經。看不盡那巍巍道德之風，果然漠漠神仙之宅。『西遊記・萬壽山大仙留故友 五莊觀行者竊人參』

〈史料 217〉

好猴王，急縱筋斗雲，別了五莊觀，徑上東洋大海。在半空中，快如掣電，疾如流星，早到蓬萊仙境。按雲頭，往下仔細觀看，真個好去處。有詩為證。詩曰：

大地仙鄉列聖曹，蓬萊分合鎮波濤。

瑤台影蘸天心冷，巨闕光浮海面高。

五色煙霞含玉籟，九霄星月射金鰲。

西池王母常來此，奉祝三仙幾次桃。『西遊記・孫悟空三島求方 觀世音甘泉活樹』

〈史料 218〉

那行者看不盡仙景，徑入蓬萊。正然走處，見白雲洞外，松陰之下，有三個老兒圍碁，觀局者是壽星，對局者是福星、祿星。行者上前叫道：“老弟們，作揖了。”那三星見了，拂退碁枰，回禮道：“大聖何來？”行者道：“特來尋你們耍子。”壽星道：“我聞大聖棄道從釋，脫性命保護唐僧往西天取經，逐日奔波山路，那些兒得閒，卻來耍子？”行者道：“實不瞞列位說，老孫因往西方，行在半路，有些兒阻滯，特來小事欲幹，不知肯否？”福星道：“是甚地方？因何阻滯？乞為明示，吾好裁處。”行者道：“因路過萬壽山五莊觀有阻。”三老驚訝道：“五莊觀是鎮元大仙的仙宮，你莫不是把他人參果偷吃了？”行者笑道：“偷吃了能值甚麼？”三老道：“你這猴子，不知好歹。那果子聞一聞，活三百六十歲。吃一個，活四萬七千年。叫做萬壽草還丹。我們的道，不及他多矣。他得之甚易，就可與天齊壽；我們還要養精、煉氣、存神，調和龍虎、捉坎填離，不知費多夫。你怎麼說他的能值甚緊？天下只有此種靈根。”『西遊記・孫悟空三島求方 觀世音甘泉活樹』

〈史料 219〉

那三星以晚輩之禮見了大仙，方才敘坐。坐定，祿星道：“我們一向久闊尊顏。有失恭敬，今因孫大聖攪擾仙山，特來相見。”大仙道：“孫行者到蓬萊去的？”壽星道：“是，因為傷了大仙的丹樹，他來我處求方醫治。我輩無方，他又到別處求訪，但恐違了聖僧三日之

限，要念緊箍兒咒。我輩一來奉拜，二來討個寬限。”三藏聞言，連聲應道：“不敢念，不敢念。”『西遊記・孫悟空三島求方 觀世音甘泉活樹』

〈史料 220〉

且不說八戒打諢亂纏。卻表行者縱祥雲離了蓬萊，又早到方丈仙山，這山真好去處。有詩為證。詩曰：

方丈巍峨別是天，太元宮府會神仙。

紫臺光照三清路，花木香浮五色煙。

金鳳自多盤蕊闕，玉膏誰逼灌芝田。

碧桃紫李新成熟，又換仙人信万年。『西遊記・孫悟空三島求方 觀世音甘泉活樹』

〈史料 221〉

此時菩薩與三老各吃了一個，唐僧始知是仙家寶貝，也吃了一個，悟空三人亦各吃一個，鎮元子陪了一個，本觀仙眾分吃了一個。行者才謝了菩薩回上普陀岩，送三星徑轉蓬萊島。鎮元子卻又安排蔬酒，與行者結為兄弟。這才是不打不成相識，兩家合了一家。師徒四眾，喜喜歡歡，天晚歇了。那長老才是：

有緣吃得草還丹，長壽苦捱妖怪難。『西遊記・孫悟空三島求方 觀世音甘泉活樹』

〈史料 222〉

噫！長老一時晦氣到了。你看他拽開步，竟至塔邊。但見那：

石崖高萬丈，山大接青霄。根連地厚，峰插天高。兩邊雜樹數千棵，前後藤纏百餘裡。花映草梢風有影，水流雲竇月無根。倒木橫擔深澗，枯藤結掛光峰。石橋下，流滾滾清泉；台座上，長明明白粉。遠觀一似三島天堂，近看有如蓬萊勝境。香松紫竹繞山溪，鴉鵲猿猴穿峻嶺。洞門外，有一來一往的走獸成行；樹林裡，有或出或入的飛禽作隊。青青香草秀，艷艷野花開。這所在分明是惡境，那長老晦氣撞將來。『西遊記・花果山群妖聚義 黑松林三藏

逢魔』

〈史料 223〉

二人攜手相攙，概眾小妖隨後，上那花果山極巔之處。好山，自是那大聖回家，這幾日，收拾得複舊如新。但見那：

青如削翠，高似摩云。周圍有虎踞龍蟠，四面多猿啼鶴唳。朝出雲封山頂，暮觀日掛林間。流水潺潺鳴玉佩，澗泉滴滴奏瑤琴。山前有崖峰峭壁，山後有花木穠華。上連玉女洗頭盆，下接天河分派水。乾坤結秀賽蓬萊，清濁育成真洞府。丹青妙筆劃時難，仙子天機描不就。玲瓏怪石石玲瓏，玲瓏結彩嶺頭峰。日影動，千條紫艷；瑞氣搖，萬道紅霞。洞天福地人間有，遍山新樹與新花。『西遊記・邪魔侵正法 意馬憶心猿』

〈史料 224〉

不多時，那兩個小妖到了。行者將金箍棒伸開，那妖不曾防備，絆著腳，撲的一跌。爬起來，才看見行者，口裡嚷道：“憊懶，憊懶！若不是我大王敬重你這行人，就和你比較起來。”行者陪笑道：“比較甚麼？道人見道人，都是一家人。”那怪道：“你怎麼睡在這裡絆我一跌？”行者道：“小道童見我這老道人，要跌一跌兒做見面錢。”那妖道：“我大王見面錢只要幾兩銀子，你怎麼跌一跌兒做見面錢？你別是一鄉風，決不是我這里道士。”行者道：“我當真不是，我是蓬萊山來的。”那妖道：“蓬萊山是海島神仙境界。”行者道：“我不是神仙，誰是神仙？”那妖卻回嗔作喜，上前道：“老神仙，老神仙，我等肉眼凡胎，不能識認，言語衝撞，莫怪，莫怪。”行者道：“我不怪你。常言道：‘仙體不踏凡地。’你怎知之？我今日到你山上，要度一個成仙了道的好人。那個肯跟我去？”精細鬼道：“師父，我跟你去。”伶俐蟲：“師父，我跟你去。”『西遊記・外道迷真性 元神助本心』

〈史料 225〉

他嚶的一聲飛下去，跟定那怪。不一時，到了洞裡。只見那兩個魔頭坐在那裡飲酒，小妖朝上跪下。行者就釘在那門櫃上，側耳聽著。小妖道：“大王。”二老魔即停杯道：“你們來了？”小妖道：“來了。”又問：“拿著孫行者否？”小妖叩頭，不敢聲言。老魔又問，又不敢應，只是叩頭。問之再三，小妖俯伏在地：“赦小的萬千死罪，赦小的萬千死罪。我等執著寶貝，走到半山之中，忽遇著蓬萊山一個神仙。他問我們那裡去，我們答道：‘拿孫行者去。’那神仙聽見說孫行者，他也惱他，要與我們幫工。是我們不曾叫他幫工，卻將拿寶貝裝人的情由，與他說了。那神仙也有個葫蘆，善能裝天。我們也是妄想之心，養家之意：他的裝天，我的裝人，與他換了罷。原說葫蘆換葫蘆，伶俐蟲又貼他個淨瓶。誰想他仙家之物，近不得凡人之手。正試演處，就連人都不見了。萬望饒小的們死罪。”『西遊記·魔王巧算困心猿 大聖騰那騙寶貝』

〈史料 226〉

那八戒那管好歹，放開肚子，只情吃起。也不管甚麼玉屑、米飯、蒸餅、糖糕、蘑菇、香蕈、筍芽，木耳、黃花菜、石花菜、紫菜、蔓菁、芋頭、蘿菔、山藥、黃精，一骨辣噏了個罄盡。喝了五七杯酒。口裡嚷道：“看添換來，拿大觥來，再吃幾觥，各人幹事去。”沙僧問道：“好筵席不吃，還要幹甚事？”呆子笑道：“古人云：‘造弓的造弓，造箭的造箭。’我們如今招的招，嫁的嫁，取經的還去取經，走路的還去走路，莫只管貪杯誤事。快早兒打發關文。正是將軍不下馬，各自奔前程。”女王聞說，即命取大杯來。近侍官連忙取幾個鸚鵡杯、鸕鶿杓、金叵羅、銀鑿落、玻璃盞、水晶盆、蓬萊碗、琥珀鍾，滿斟玉液，連注瓊漿，果然都各飲一巡。『西遊記·法性西來逢女國 心猿定計脫煙花』

〈史料 227〉

沙僧一駕雲離了東海，行經一晝夜，到了南海。正行時，早見落伽山不遠。急至前，低停雲霧觀看，好去處！果然是包乾之輿，括坤之區。會百川而浴日滔星，歸眾流而生風漾月。潮發騰凌大鯤化，波翻浩蕩

巨鰲遊。水通西北海，浪合正東洋。四海相連同地脈，仙方洲島各仙宮。休言滿地蓬萊，且看普陀雲洞。好景緻！山頭霞彩壯元精，岩下祥風漾月晶。紫竹林中飛孔雀，綠楊枝上語靈鸚。琪花瑤草年年秀，寶樹金蓮歲歲生。白鶴幾番朝頂上，素鸞數次到山亭。游魚也解修真性，躍浪穿波聽講經。『西遊記・真行者落伽山訴苦 假猴王水簾洞謄文』

〈史料 228〉

唐僧與他攜手相攙，同入園內，擡頭觀看，其實好個去處。但見那：

縈迴曲迳，紛紛盡點蒼苔；窈窕綺窗，處處暗籠繡箔。微風初動，輕飄飄展開蜀錦吳綾；細雨才收，嬌滴滴露出冰肌玉質。日灼鮮杏，紅如仙子曬霓裳；月映芭蕉，青似太真搖羽扇。粉牆四面，萬株楊柳轉黃鸝；閒館周圍，滿院海棠飛粉蝶。更看那凝香閣、青蛾閣、解酲閣、相思閣，層層卷映，朱簾上鉤控須，又見那養酸亭、披素亭、畫眉亭、四雨亭，個個崢嶸，華扁上字書鳥篆。看那浴鶴池、洗觴池、怡月池、濯纓池，青萍綠藻耀金鱗；又有墨花軒、異箱軒、適趣軒、慕雲軒，玉斗瓊卮浮綠蟻。池亭上下，有太湖石、紫英石、鸚落石、錦川石，青青栽著虎鬚蒲；軒閣東西，有木假山、翠屏山、嘯風山、玉芝山，處處叢生鳳尾竹。茶架、薔薇架，近著鞦韆架，渾如錦帳羅幃；松柏亭、辛夷亭，對著木香亭，卻似碧城繡幕。芍藥欄，牡丹叢，朱朱紫紫鬥穠華；夜合台，茉莉檻，歲歲年年生嫵媚。涓涓滴露紫含笑，堪畫堪描；艷艷燒空紅佛桑，宜題宜賦。論景緻，休誇閬苑蓬萊；較芳菲，不數姚黃魏紫。若到三春閒鬥草，園中只少玉瓊花。『西遊記・姹女求陽 元神護道』

〈史料 229〉

少頃雨止，天外殘虹，西邊透出日色來。得多少：微雨過碧磯之潤，晚風涼落院之清。只見後邊小玉來請玉樓。玉樓道：“大姐姐叫，有幾朵珠花沒穿了，我去罷，惹的他怪。”李瓶兒道：“咱兩個一答兒裡去，奴也要看姐姐穿珠花哩。”西門慶道：“等我送你們一送。”於是取過月琴來，教玉樓彈著，西門慶排手，眾人齊唱：

【梁州序】向晚來雨過南軒，見池面紅妝零亂。漸輕雷隱隱，雨收雲散。但聞荷香十里，新

月一鉤，此佳景無限。蘭湯初浴罷，晚妝殘。深院黃昏懶去眠。（合）金縷唱，碧筒勸，向冰山雪檻排佳宴。清世界，幾人見？

又：柳陰中忽噪新蟬，見流螢飛來庭院。聽菱歌何處？畫船歸晚。只見玉繩低度，朱戶無聲，此景猶堪羨。起來攜素手，整雲鬟。月照紗廚人未眠。（合前）

【節節高】漣漪戲彩鴛，綠荷翻。清香瀉下瓊珠濺。香風扇，芳草邊，閒亭畔，坐來不覺神清健。蓬萊閬苑何足羨！（合）只恐西風又驚秋，暗中不覺流年換。『金瓶梅·李瓶兒私語翡翠軒 潘金蓮醉鬧葡萄架』

〈史料 230〉

須臾至山門前下馬，睜眼觀看，果然好座廟宇。但見：

青松鬱鬱，翠柏森森。金釘朱戶，玉橋低影軒官；碧瓦雕簷，繡幕高懸寶檻。七間大殿，中懸敕額金書；兩廡長廊，彩畫天神帥將。三天門外，離婁與師曠猙獰，左右階前，白虎與青龍猛勇。八寶殿前，侍立是長生玉女，九龍床上，坐著個不壞金身。金鐘撞處，三千世界盡皈依；玉磬鳴時，萬象森羅皆拱極。朝天閣上，天風吹下步虛聲；演法壇中，夜月常聞仙佩響。自此便為真紫府，更於何處覓蓬萊？『金瓶梅·寄法名官哥穿道服 散生日敬濟拜冤家』

〈史料 231〉

西門慶見三人去了多時，便乘轎出門，迤邐漸近。舉頭一看，但見：

千樹濃陰，一灣流水。粉牆藏不謝之花，華屋掩長春之景。武陵桃放，漁人何處識迷津？庾嶺梅開，詞客此中尋好句。端的是天上蓬萊，人間閬苑。『金瓶梅·應伯爵隔花戲金釧 任醫官垂帳診瓶兒』

〈史料 232〉

神方得自蓬萊監，脈訣傳從少室君。凡為采芝騎白鶴，時緣度世訪豪門。『金瓶梅·應伯爵

隔花戲金釧 任醫官垂帳診瓶兒』

〈史料 233〉

不一時，只見西門慶領了那潘道士進來。怎生形相？但見：頭戴雲霞五嶽冠，身穿皂布短褐袍，腰繫雜色彩絲條，背插橫紋古銅劍。兩隻腳穿雙耳麻鞋，手執五明降鬼扇。八字眉，兩個杏子眼；四方口，一道落腮鬚。威儀凜凜，相貌堂堂。若非霞外雲遊客，定是蓬萊玉府人。

『金瓶梅·潘道士法遣黃巾士 西門慶大哭李瓶兒』

〈史料 234〉

詞曰：香煙裊，羅幃錦帳風光好。風光好，金釵斜亸，鳳顛鸞倒。恍疑身在蓬萊島，邂逅相逢緣不小。緣不小，最開懷處，蛾眉淡掃。『金瓶梅·招宣府初調林太太 麗春院驚走王三官』

〈史料 235〉

一晚題過。到次日，起五更與何千戶一行人跟隨進朝。先到待漏院伺候，等的開了東華門進入。但見：

星斗依稀禁漏殘，禁中環佩響珊珊。欲知今日天顏喜，遙睹蓬萊紫氣蟠。『金瓶梅·李瓶兒何家託夢 提刑官引奏朝儀』

〈史料 236〉

話休饒舌。一路無詞，行了數日，到了泰安州，望見泰山，端的是天下第一名山，根盤地腳，頂接天心，居齊魯之邦，有岩岩之氣象。吳大舅見天晚，投在客店歇宿一宵。次日早起上山，望岱嶽廟來。那岱岳庫就在山前，乃累朝祀典，歷代封禪，為第一廟貌也。但見：

廟居岱岳，山鎮乾坤，為山岳之尊，乃萬福之領袖。

山頭倚檻，直望弱水蓬萊；絕頂攀松，都是濃雲薄霧。

樓台森聳，金鳥展翅飛來；殿宇棱層，玉兔騰身走到。

雕樑畫棟，碧瓦朱簷，鳳扉亮榻映黃紗，龜背繡簾垂錦帶。

遙觀聖像，九獵舞舜目堯眉；近觀神顏，袞龍袍湯肩禹背。

御香不斷，天神飛馬報丹書；祭祀依時，老幼望風祈護福。

嘉寧殿祥雲香靄，正陽門瑞氣盤旋。

正是：萬民朝拜碧霞宮，四海皈依神聖帝。『金瓶梅·吳月娘大鬧碧霞宮 曾靜師化緣雪澗洞』

〈史料 237〉

職掌圖籍濫蓬萊。——劉憲『景龍四年正月五日移仗蓬萊宮禦大明殿會吐蕃騎馬之戲因重爲柏梁體聯句』『全唐詩·卷二·十月誕辰內殿宴群臣效柏梁體聯句』 李顯著

〈史料 238〉

雨滌前山淨，風吹去路開。翠屏夾流水，何必羨蓬萊。『全唐詩·卷九·題金華宮』 徐氏著

〈史料 239〉

欲向人間種桃實，先從海底覓蓬萊。蓬萊可求不可上，孤舟縹緲知何往。黃金作盤銅作莖，晴天白露掌中擎。『全唐詩·卷二十·相和歌辭：蛾眉怨』 王翰著

〈史料 240〉

閭闔春風起，蓬萊雪水消。相將折楊柳，爭取最長條。『全唐詩·卷二十三·琴曲歌辭：蔡氏五弄：游春辭三首』 令狐楚著

〈史料 241〉

首夏別京輔，杪秋滯三河。沉沉蓬萊閣，日夕鄉思多。『全唐詩·卷三十一·暮秋言懷』
魏徵著

〈史料 242〉

高臺通散騎，復道駕蓬萊。思君贈桃李，於此冀瓊瑰。『全唐詩·卷三十四·中書寓直詠雨
簡褚起居上官學士』 楊師道著

〈史料 243〉

聞道上之回，詔蹕下蓬萊。中樞移北斗，左轄去南台。『全唐詩·卷四十二·贈許左丞從駕
萬年宮』 盧照鄰著

〈史料 244〉

太液天為水，蓬萊雪作山。今朝上林樹，無處不堪攀。『全唐詩·卷四十六·奉和人日清暉
閣宴群臣遇雪應制』 宗楚客著

〈史料 245〉

方士燒丹液，真人泛玉杯。還如問桃水，更似得蓬萊。『全唐詩·卷五十·和劉侍郎入隆唐
觀』 楊炯著

〈史料 246〉

蓬萊闕下長相憶，桐柏山頭去不歸。『全唐詩·卷五十三·送司馬道士遊天台』 宋之問著

〈史料 247〉

帝坐蓬萊殿，恩追社稷臣。長安遙向日，宗伯正乘春。『全唐詩·卷六十二·蓬萊三殿侍宴』

奉敕詠終南山應制・泛舟送鄭卿入京』 杜審言著

〈史料 248〉

主家別墅帝城隈，無勞海上覓蓬萊。逕石懸流平地起，
危樓曲閣半天開。庭莎作薦舞行出，浦樹相將歌棹回。『全唐詩・卷七十一・奉和幸安樂公
主山莊應制』 劉憲著

〈史料 249〉

『全唐詩・卷七十九・蓬萊鎮』 駱賓王著

〈史料 250〉

洛陽陌上多離別，蓬萊山下足波潮。『全唐詩・卷八十・送道士入天台』 薛曜著

〈史料 251〉

蓬萊久蕪沒，金石徒精堅。良寶委短褐，閒琴獨嬋娟。『全唐詩・卷八十三・贈趙六貞固二
首』 陳子昂著

〈史料 252〉

觀魚樂何在，聽鳥情都歇。星漢流不停，蓬萊去難越。『全唐詩・卷八十六・相州山池作』
張說著

〈史料 253〉

香隨龍節下，雲逐鳳簫飛。暫住蓬萊戲，千年始一歸。『全唐詩・卷八十七・道家四首奉敕
撰』 張說著

〈史料 254〉

無勞海上尋仙客，即此蓬萊在帝京。『全唐詩·卷九十三·興慶池侍宴應制』 馬懷素著

〈史料 255〉

聞有玄都客，成仙不易祈。蓬萊向清淺，桃杏欲芳菲。『全唐詩·卷九十七·哭道士劉無得』 沈佺期著

〈史料 256〉

蒐奇大壑東，竦望成山北。方術徒相誤，蓬萊安可得。『全唐詩·卷一百零一·海上作』 宋務光著

〈史料 257〉

雲物中京曉，天人外館開。飛橋象河漢，懸榜學蓬萊。『全唐詩·卷一百零三·安樂公主移入新宅侍宴應制同用開字』 趙彥昭著

〈史料 258〉

『全唐詩·卷一百一十五·奉和聖制從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制』 李愔著

〈史料 259〉

兩宮齋祭近登臨，雨雪紛紛天晝陰。只為經寒無瑞色，
頓教正月滿春林。蓬萊北上旌門暗，花萼南歸馬跡深。『全唐詩·卷一百二十四·奉和喜雪應制』 徐安貞著

〈史料 260〉

『全唐詩·卷一百二十八·奉和聖制從蓬萊向興慶閣道中留春雨中春望之作應制』 王維

著

〈史料 261〉

夫子大名下，家無鍾石儲。惜哉湖海上，曾校蓬萊書。『全唐詩·卷一百三十二·送綦毋三謁房給事』 李頎著

〈史料 262〉

舉世皆親丞相閣，我心獨愛伊川水。脫略勢利猶埃塵，
嘯傲時人而已矣。新詩數歲即文雄，上書昔召蓬萊宮。『全唐詩·卷一百三十三·送劉四赴夏縣』 李頎著

〈史料 263〉

上在蓬萊宮，莫若居華清。朝朝禮玄閣，日日聞體輕。
上出蓬萊時，六龍儼齊首。長道舒羽儀，彤雲映前後。『全唐詩·卷一百三十六·述華清宮五首』 儲光羲著

〈史料 264〉

寂寞掩圭華，夢寐遊蓬萊。琪樹遠亭亭，玉堂雲中開。『雜詩二首』 儲光羲著

〈史料 265〉

坐對三花枝，行隨五云陰。天長崑崙小，日久蓬萊深。『全唐詩·卷一百三十七·升天行貽盧六健』 儲光羲著

〈史料 266〉

魚鱉樂仁政，浮沉亦至哉。小山宜大隱，要自望蓬萊。『安宜園林獻高使君』 儲光羲著

〈史料 267〉

天靜終南高，俯映江水明。有若蓬萊下，淺深見澄瀛。『全唐詩·卷一百三十八·同諸公秋
霽曲江俯見南山』 儲光羲著

〈史料 268〉

沉沉閶闔起，殷殷蓬萊曙。旌戟儼成行，雞人傳發煦。『貽王侍御出台掾丹陽』 儲光羲著

〈史料 269〉

皇州月初曉，處處鼓鐘喧。樹出蓬萊殿，城開閶闔門。『全唐詩·卷一百三十九·京口留別
徐大補闕趙二零陵』 儲光羲著

〈史料 270〉

欲向人間種桃實，先從海底覓蓬萊。蓬萊可求不可上，
孤舟縹緲知何往。黃金作盤銅作莖，青天白露掌中擎。『全唐詩·卷一百五十六·古蛾眉
怨』 王翰著

〈史料 271〉

長材成磊落，短翮強翩翾。徒仰蓬萊地，何階不讓緣。
『奉和聖制送張說上集賢學士賜宴，得筵字』 王翰著

〈史料 272〉

翰墨緣情制，高深以意裁。滄洲趣不遠，何必問蓬萊。
『全唐詩·卷一百六十·韓大使東齋會岳上人、諸學士』 孟浩然著

〈史料 273〉

額鼻象五嶽，揚波噴雲雷。髻鬣蔽青天，何由睹蓬萊。
乃知蓬萊水，復作清淺流。青門種瓜人，舊日東陵侯。
名利徒煎熬，安得閒餘步。終留赤玉舄，東上蓬萊路。
但識金馬門，誰知蓬萊山。白首死羅綺，笑歌無時間。『全唐詩·卷一百六十一·古風』
李白著

〈史料 274〉

是時君王在鎬京，五云垂暉耀紫清。仗出金宮隨日轉，
天回玉輦繞花行。始向蓬萊看舞鶴，還過茝石聽新鶯。『全唐詩·卷一百六十六·侍從宜春
苑奉詔賦龍池柳色初青聽新鶯百轉歌』 李白著

〈史料 275〉

九重出入生光輝，東來蓬萊復西歸。玉漿倘惠故人飲，騎二茅龍上天飛。『西嶽雲台歌，送
丹丘子』 李白著

〈史料 276〉

巨鰲莫戴三山去，我欲蓬萊頂上行。『全唐詩·卷一百六十七·懷仙歌』 李白著

〈史料 277〉

海水不滿眼，觀濤難稱心。即知蓬萊石，卻是巨鰲簪。『全唐詩·卷一百七十六·送紀秀才
遊越』 李白著

〈史料 278〉

長風萬里送秋雁，對此可以酣高樓。蓬萊文章建安骨，

中間小謝又清發。俱懷逸興壯思飛，欲上青天覽日月。

『全唐詩·卷一百七十七·宣州謝朓樓餞別校書叔雲』 李白著

〈史料 279〉

當代不樂飲，虛名安用哉。蟹螯即金液，糟丘是蓬萊。『全唐詩·卷一百八十二·月下獨酌四首』 李白著

〈史料 280〉

朝入天苑中，謁帝蓬萊宮。青山映輦道，碧樹搖蒼空。『全唐詩·卷一百八十三·效古二首』 李白著

〈史料 281〉

傳聞海水上，乃有蓬萊山。玉樹生綠葉，靈仙每登攀。『全唐詩·卷一百八十四·雜詩』 李白著

〈史料 282〉

共愛朝來何處雪，蓬萊宮裡拂松枝。『全唐詩·卷一百八十七·雪夜下朝，呈省中一絕』 韋應物著

〈史料 283〉

不隨鴛鴦朝天去，遙想蓬萊臺閣重。『全唐詩·卷一百八十九·送倉部蕭員外院長存』 韋應物著

〈史料 284〉

絳樹無花葉，非石亦非瓊。世人何處得，蓬萊石上生。『全唐詩·卷一百九十三·詠珊瑚』

韋應物著

〈史料 285〉

漢篋亡書已暗傳，嵩丘遺簡還能識。朝朝待詔青鎖闥，
中有萬年之樹蓬萊池。世人仰望棲此地，
生獨徘徊意何為。故山可往薇可採，一自人間星歲改。『全唐詩·卷一百九十五·送褚校書
歸舊山歌』 韋應物著

〈史料 286〉

月肅風淒古堂淨，精芒切切如有聲。何不跨蓬萊，
斬長鯨。世人所好殊遼闊，千金買鉛徒一割。『寇季膺古刀歌』 韋應物著

〈史料 287〉

憶昨蓬萊宮，新授刺史符。明主仍賜衣，價直千萬餘。『全唐詩·卷一百九十八·酬成少尹
駱谷行見呈』 岑參著

〈史料 288〉

自從得向蓬萊裡，出入金輿乘玉趾。梧桐樹上春鴉鳴，
曉伴君王猶未起。莫道君恩長不休，婕妤團扇苦悲秋。『全唐詩·卷二百零六·古興』 李
嘉佑著

〈史料 289〉

蓬萊對去歸常晚，叢竹閒飛滿夕陽。『全唐詩·卷二百零七·訪韓司空不遇』 李嘉佑著

〈史料 290〉

春雨灑，春雨灑，周南一望堪淚下。蓬萊殿中寢胡人，

鵲樓前放胡馬。聞君欲行西入秦，君行不用過天津。『全唐詩·卷二百一十五·洛陽道』

馮著著

〈史料 291〉

蓬萊織女回雲車，指點虛無是征路。自是君身有仙骨，

世人那得知其故。惜君只欲苦死留，富貴何如草頭露。『全唐詩·卷二百一十六·送孔巢父

謝病歸游江東，兼呈李白』 杜甫著

〈史料 292〉

內懼非道流，幽人見瑕疵。洪濤隱語笑，鼓枻蓬萊池。『全唐詩·卷二百一十八·幽人』

杜甫著

〈史料 293〉

嘗聞蓬萊殿，羅列瀟湘姿。此物歲不稔，玉食失光輝。『全唐詩·卷二百一十九·病橘』

杜甫著

〈史料 294〉

蓬萊殿前諸主將，才如伏波不得驕。『全唐詩·卷二百二十·自平』 杜甫著

〈史料 295〉

男兒生無所成頭皓白，牙齒欲落真可惜。憶獻三賦蓬萊宮，

自怪一日聲輝赫。集賢學士如堵牆，觀我落筆中書堂。『莫相疑行』 杜甫著

〈史料 296〉

吳門轉粟帛，泛海陵蓬萊。肉食三十萬，獵射起黃埃。『全唐詩·卷二百二十二·昔遊』

杜甫著

〈史料 297〉

天門日射黃金榜，春殿晴曛赤羽旗。宮草微微承委佩，
爐煙細細駐游絲。雲近蓬萊常好色，雪殘鳩鵲亦多時。『全唐詩·卷二百二十五·宣政殿退
朝晚出左掖』 杜甫著

〈史料 298〉

照秦通警急，過隴自艱難。聞道蓬萊殿，千門立馬看。『夕烽』 杜甫著

〈史料 299〉

殷復前王道，週遷舊國容。蓬萊足雲氣，應合總從龍。『全唐詩·卷二百二十八·傷春五
首』 杜甫著

〈史料 300〉

厭就成都卜，休為吏部眠。蓬萊如可到，衰白問群仙。『遊子』 杜甫著

〈史料 301〉

蓬萊宮闕對南山，承露金莖霄漢間。西望瑤池降王母，
東來紫氣滿函關。雲移雉尾開宮扇，日繞龍鱗識聖顏。『全唐詩·卷二百三十·秋興八首』

杜甫著

〈史料 302〉

羽翼商山起，蓬萊漢閣連。管甯紗帽淨，江令錦袍鮮。『秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百

韻』 杜甫著

〈史料 303〉

宿昔青門裡，蓬萊仗數移。花嬌迎雜樹，龍喜出平池。『宿昔』 杜甫著

〈史料 304〉

鼎湖龍去遠，銀海雁飛深。萬歲蓬萊日，長懸舊羽林。『全唐詩·卷二百三十·驪山』 杜甫著

〈史料 305〉

暫阻蓬萊閣，終為江海人。揮金應物理，拖玉豈吾身。『全唐詩·卷二百三十一·秋日寄題鄭監湖上亭三首』 杜甫著

〈史料 306〉

平生霞外期，宿昔共行藏。豈無蓬萊樹，歲晏空蒼蒼。『全唐詩·卷二百三十五·閒居秋懷，寄陽翟陸贊府、封丘高少府』 賈至著

〈史料 307〉

蓬萊紫氣溫如玉，唯予知爾陽春曲，別來幾日芳蓀綠。『全唐詩·卷二百三十六·山中寄時校書』 錢起著

〈史料 308〉

蓬萊時入夢，知子憶貧交。『全唐詩·卷二百三十八·東皋早春寄郎四校書』 錢起著

〈史料 309〉

飛棹轉年谷，利人勝歲豐。言歸漢陽路，拜手蓬萊宮。『送襄陽盧判官奏開河事』 錢起
著

〈史料 310〉

蕙葉青青花亂開，少年趨府下蓬萊。甘泉未獻揚雄賦，吏道何勞賈誼才。徵陌獨愁飛蓋遠，離筵只惜暝鐘催。『全唐詩·卷二百三十九·送嚴維尉河南』 錢起著

〈史料 311〉

春風不肯停仙馭，卻向蓬萊看杏花。『全唐詩·卷二百四十二·上清詞』 張繼著

〈史料 312〉

蓬萊闕下是天家，上路新回白鼻騮。急管晝催平樂酒，春衣夜宿杜陵花。『全唐詩·卷二百四十五·贈張千牛』 韓翃著

〈史料 313〉

白日自中吐，扶桑如可捫。超遙蓬萊峰，想像金台存。『全唐詩·卷二百四十六·觀海』
獨孤及著

〈史料 314〉

『全唐詩·卷二百四十七·東平蓬萊驛夜宴平盧楊判官醉後贈別姚太守置酒留宴』 獨孤及著

〈史料 315〉

近而知其遠，少見今白首。遙信蓬萊宮，不死世世有。『全唐詩·卷二百五十九·滑中贈崔高士瑾』 王季友著

〈史料 316〉

莊周萬物外，范蠡五湖間。人傳訪道滄海上，丁令王喬每往還。蓬萊徑是曾到來，方丈豈唯方一丈。『全唐詩·卷二百六十一·寄李白』 任華著

〈史料 317〉

魑魅曾為伍，蓬萊近拜郎。臣心瞻北闕，家事在南荒。『全唐詩·卷二百六十三·送李秘書往儋州』 嚴維著

〈史料 318〉

內官先向蓬萊殿，金合開香瀉禦爐。『全唐詩·卷二百六十七·宮詞五首』 顧況著

〈史料 319〉

居人相顧非人間，如到日宮經月窟。信知靈境長有靈，住者不得無仙骨。三神山上蓬萊宮，徒有丹青人未逢。『全唐詩·卷二百七十一·金山行』 寶庠著

〈史料 320〉

一枝持贈朝天人，願比蓬萊殿前雪。『全唐詩·卷二百七十二·吳興送梁補闕歸朝賦得荻花』 朱長文著

〈史料 321〉

已啟蓬萊殿，初朝鴛鴦群。虛心方應物，大扣欲干雲。『全唐詩·卷二百七十三·曉聞長樂鐘聲』 戴叔倫著

〈史料 322〉

三獻蓬萊始一嘗，日調金鼎閱芳香。『全唐詩·卷二百七十九·新茶詠寄上西川相公二十三

舅大夫二十舅』 盧綸著

〈史料 323〉

金甲銀旌盡已回，蒼茫羅袖隔風埃。濃香猶自隨鸞輅，恨魄無由離馬嵬。南內真人悲帳殿，東溟方士問蓬萊。『全唐詩·卷二百八十三·過馬嵬二首』 李益著

〈史料 324〉

東嶺啼猿三四聲，捲簾一望心堪碎。蓬萊有梯不可躡，向海回頭淚盈睫。且聞童子是蒼蠅，誰謂莊生異蝴蝶。『全唐詩·卷二百八十四·雜歌呈鄭錫司空文明』 李端著

〈史料 325〉

碧峰天柱下，鼓角鎮南軍。管記催飛檄，蓬萊輟校文。『全唐詩·卷二百九十二·送崔校書赴梓幕』 司空曙著

〈史料 326〉 帝居在蓬萊，肅肅鐘漏清。將軍領羽林，持戟巡宮城。『全唐詩·卷二百九十七·元日早朝』 王建著

〈史料 327〉

桐柏水西賊星落，梟雛夜飛林木惡。相國刻日波濤清，當朝自請東南征。舍人為賓侍郎副，曉覺蓬萊欠佩聲。『全唐詩·卷二百九十八·東征行』 王建著

〈史料 328〉 上陽宮到蓬萊殿，行宮岩岩遙相見。向前天子行幸多，馬蹄車轍山川遍。當時州縣每年修，皆留內人看玉案。『行宮詞』 王建著

〈史料 329〉

自執金吾長上直，蓬萊宮裡夜巡更。『全唐詩·卷三百·贈田將軍』 王建著

〈史料 330〉

發願蓬萊見王母，卻歸人世施仙方。『送宮人入道』 王建著

〈史料 331〉

蓬萊春雪曉猶殘，點地成花繞百官。已傍祥鸞迷殿角，還穿瑞草入袍欄。無多白玉階前濕，
積漸青松葉上乾。『和少府崔卿微雪早朝』 王建著

〈史料 332〉

多在蓬萊少在家，越緋衫上有紅霞。『全唐詩·卷三百零一·贈人二首』 王建著

〈史料 333〉

蓬萊正殿壓金鰲，紅日初生碧海濤。『全唐詩·卷三百零二·宮詞一百首』 王建著

〈史料 334〉

鐘聲清禁才應徹，漏報仙闈儼已開。雙闕薄煙籠菡萏，
九成初日照蓬萊。朝時但向丹墀拜，仗下方從碧殿回。『全唐詩·卷三百三十三·早朝』
楊巨源著

〈史料 335〉

蓬萊仙監客曹郎，曾枉高車客大樑。見擁旌旄治軍旅，知親筆硯事文章。愁看柳色懸離恨，
憶遞花枝助酒狂。『全唐詩·卷三百三十四·節度宣武酬樂天夢得』 令狐楚著

〈史料 336〉

閭闔春風起，蓬萊雪水消。相將折楊柳，爭取最長條。『春遊曲三首』 令狐楚著

〈史料 337〉

蓬萊殿後花如錦，紫閣階前雪未銷。『全唐詩·卷三百四十六·漢苑行』 王涯著

〈史料 338〉

蓬萊羽客如相訪，不是偷桃一小兒。『全唐詩·卷三百五十二·摘櫻桃贈元居士，時在望仙亭南樓與朱道士同處』 柳宗元著

〈史料 339〉

昔為瑤池侶，飛舞集蓬萊。今作江漢別，風雪一徘徊。『全唐詩·卷三百六十四·答表臣贈別二首』 劉禹錫著

〈史料 340〉

飛泉天台狀，峭石蓬萊姿。潺湲與青翠，咫尺當幽奇。『全唐詩·卷三百六十六·和張相公太原亭懷古詩』 胡證著

〈史料 341〉

豈不貴鐘鼎，至懷在希夷。唯當蓬萊閣，靈鳳復來儀。『和太原山亭懷古詩』 張賈著

〈史料 342〉

一直亦有巧，不肯至蓬萊。一直不知疲，唯聞至省台。『全唐詩·卷三百七十五·秋懷』 孟郊著

〈史料 343〉

花發我未識，玉生忽叢攢。蓬萊浮蕩漾，非道相從難。『全唐詩·卷三百七十八·送無懷道士遊富春山水』 孟郊著

〈史料 344〉

漢皇欲作飛仙子，年年採藥東海裡。蓬萊無路海無邊，方士舟中相枕死。招搖在天回白日，甘泉玉樹無仙實。『全唐詩·卷三百八十二·求仙行』 張籍著

〈史料 345〉

彈箏峽東有胡塵，天子擇日拜將軍。蓬萊殿前賜六纛，還領禁兵為部曲。當朝受詔不辭家，夜向咸陽原上宿。『將軍行』 張籍著

〈史料 346〉

七碗吃不得也，唯覺兩腋習習清風生。蓬萊山，在何處。『全唐詩·卷三百八十八·走筆謝孟諫議寄新茶』 盧仝著

〈史料 347〉

我是玉皇香案吏，謫居猶得住蓬萊。『全唐詩·卷四百一十七·以州宅誇於樂天』 元稹著

〈史料 348〉

有鳥有鳥毛似鶴，行步雖遲性靈惡。主人但見閒慢容，行佔蓬萊最高閣。弱羽長憂俊鶻拳，疽腸暗著鵝雛啄。『全唐詩·卷四百二十·有鳥二十章』 元稹著

〈史料 349〉

秦皇漢武信此語，方士年年採藥去。蓬萊今古但聞名，煙水茫茫無覓處。海漫漫，風浩浩，眼穿不見蓬萊島。不見蓬萊不敢歸，童男艸女舟中老。徐福文成多誑誕，上元太一虛祈禱。

君看驪山頂上茂陵頭，畢竟悲風吹蔓草。『全唐詩·卷四百二十六·海漫漫一戒求仙也』

白居易著

〈史料 350〉

鏡成將獻蓬萊宮，揚州長吏手自封。人間臣妾不合照，背有九五飛天龍。人人呼為天子鏡，

我有一言聞太宗。『全唐詩·卷四百二十七·百煉鏡一辨皇王鑑也』 白居易著

〈史料 351〉

君同鸞鳳棲荊棘，猶著青袍作選人。惆悵知賢不能薦，徒為出入蓬萊殿。月慚諫紙二百張，

歲愧俸錢三十萬。『全唐詩·卷四百三十五·醉後走筆酬劉五主簿長句之贈兼簡張大賈二十

四先輩昆季』 白居易著

〈史料 352〉

昭陽殿里恩愛絕，蓬萊宮中日月長。回頭下望人寰處，不見長安見塵霧。唯將舊物表深情，

鈿合金釵寄將去。『長恨歌』 白居易著

〈史料 353〉

莫羨蓬萊鸞鶴侶，道成羽翼自生身。『全唐詩·卷四百三十六·酬趙秀才贈新登科諸先輩』

白居易著

〈史料 354〉

到岸請君回首望，蓬萊宮在海中央。『全唐詩·卷四百四十三·西湖晚歸，回望孤山寺，贈

諸客』 白居易著

〈史料 355〉

吳興卑小君應屈，為是蓬萊最後仙。『全唐詩·卷四百四十六·得湖州崔十八使君書喜與杭
越鄰郡因成長句代賀兼寄微之』 白居易著

〈史料 356〉

美人在浚都，旌旗繞樓台。雖非滄溟阻，難見如蓬萊。

『全唐詩·卷四百五十九·立秋夕涼風忽至炎暑稍消即事詠懷寄汴州節度使李二十尚書』

白居易著

〈史料 357〉

羽衣縹緲拂塵囂，悵別河梁贈柳條。閨苑雲深孤鶴迴，蓬萊天近一身遙。香浮寶輦仙風潤，
花落瑤壇絳雨消。『全唐詩·卷四百六十七·送羽衣之京』 牟融著

〈史料 358〉

采芝卻到蓬萊上，花里猶殘碧玉鐘。『全唐詩·卷四百六十八·贈成煉師四首』 劉言史著

〈史料 359〉

鴻雁衝飈去不盡，寒聲晚下天泉池。顧我蓬萊靜無事，玉版寶書藏眾瑞。青編盡以汲冢來，
科鬥皆從魯室至。『全唐詩·卷四百七十五·雨中自秘書省訪王三侍御知早入朝便入集賢侍
御任集賢校書及升柏台又與秘閣相對同院張學士亦餘特厚故以詩贈之』 李德裕著

〈史料 360〉

龍伯釣鼇時，蓬萊一峰坼。飛來碧海畔，遂與三山隔。『重憶山居六首：羅浮山』 李德裕
著

〈史料 361〉

山上搗來採新茗，新花亂發前山頂。瓊英動搖鐘乳碧，叢叢高下隨崖嶺。未必蓬萊有仙藥，
能向鼎中云漠漠。『全唐詩·卷四百七十七·春山三朅來』 李涉著

〈史料 362〉

憶昨天台尋石梁，赤城枕下看扶桑。金烏欲上海如血，翠色一點蓬萊光。安期先生不可見，
蓬萊目極滄海長。『寄河陽從事楊潛』 李涉著

〈史料 363〉

宮鶯報曉瑞煙開，三島靈禽拂水回。橋轉彩虹當綺殿，艦浮花鷁近蓬萊。草承香輦王孫長，
桃艷仙顏阿母栽。『全唐詩·卷四百八十·憶春日太液池亭候對』 李紳著

〈史料 364〉

海邊佳樹生奇彩，知是仙山取得栽。瓊蕊籍中聞閬苑，紫芝圖上見蓬萊。淺深芳萼通宵換，
委積紅英報曉開。『全唐詩·卷四百八十一·新樓詩二十首：海棠』 李紳著

〈史料 365〉

為問蓬萊近消息，海波平靜好東遊。『全唐詩·卷四百八十六·得儲道士書』 鮑溶著

〈史料 366〉

自從青鳥不堪使，更得蓬萊消息無。『全唐詩·卷四百八十七·望麻姑山』 鮑溶著

〈史料 367〉

一朵蓬萊在世間，梵王宮闕翠雲間。『望江中金山寺』 鮑溶著

〈史料 368〉

驂騑一百三十蹄，踏破蓬萊五云地。物經千載出塵埃，從此便為天下瑞。『全唐詩·卷四百九十·及第謠』 週匡物著

〈史料 369〉

笑看斥鷃飛翔去，樂處蓬萊便有春。『全唐詩·卷四百九十二·潭州獨步』 殷堯藩著

〈史料 370〉

南山雪色徹皇州，鐘鼓聲交曉氣浮。鴛鴦簪裾上龍尾，蓬萊宮殿壓鰲頭。夕郎夜直吟仙掖，天樂和聲下禁樓。『全唐詩·卷五百零一·和盧給事酬裴員外』 姚合著

〈史料 371〉

金甲雲旗盡日回，倉皇羅袖滿塵埃。濃香猶自飄鑾輅，恨魄無因離馬嵬。南內宮人悲帳殿，東溟方士問蓬萊。『全唐詩·卷五百一十九·過馬嵬山』 李遠著

〈史料 372〉

蓬萊頂上幹海水，水盡到底看海空。月於何處去，日於何處來？跳丸相趁走不住，堯舜禹湯文武周孔皆為灰。酌此一杯酒，與君狂且歌。『全唐詩·卷五百二十·池州送孟遲先輩』 杜牧著

〈史料 373〉

曾向蓬萊宮裡行，北軒闌檻最留情。孤高堪弄桓伊笛，縹緲宜聞子晉笙。天接海門秋水色，煙籠隋苑暮鐘聲。『全唐詩·卷五百二十三·寄題甘露寺北軒』 杜牧著

〈史料 374〉

今來海上升高望，不到蓬萊不是仙。『全唐詩·卷五百二十四·偶題』 杜牧著

〈史料 375〉

稚榻蓬萊掩，膺舟輦洛停。馬群先去害，民籍更添丁。『全唐詩·卷五百二十六·分司東都
寓居履道叨承川尹劉侍郎大夫恩知上四十韻』 杜牧著

〈史料 376〉

就學多新客，登朝盡故人。蓬萊自有路，莫羨武陵春。『全唐詩·卷五百三十一·寄殷堯
藩』 許渾著

〈史料 377〉

蓬萊每望平安火，應奏班超定遠功。『全唐詩·卷五百三十六·獻鄜坊丘常侍』 許渾著

〈史料 378〉

初夢龍宮寶焰然，瑞霞明麗滿晴天。旋成醉倚蓬萊樹，有個仙人拍我肩。少頃遠聞吹細管，
聞聲不見隔飛煙。『全唐詩·卷五百三十九·七月二十八日夜與王鄭二秀才聽雨後夢作』
李商隱著

〈史料 379〉

自從戎馬生河雒，深鎖蓬萊一百年。
『全唐詩·卷五百四十八·金城宮』 薛逢著

〈史料 380〉

西蜀波湍盡，東溟日月開。如登最高處，應得見蓬萊。『全唐詩·卷五百五十一·題甘露
寺』 盧肇著

〈史料 381〉

他年免似驪山鬼，信有蓬萊不可尋。『全唐詩·卷五百六十二·感寓』 劉威著

〈史料 382〉

羅公如意奪顏色，三藏袈裟成散絲。蓬萊池上望秋月，無雲萬里懸清輝。上皇夜半月中去，三十六宮愁不歸。『全唐詩·卷五百六十七·津陽門詩』 鄭嵎著

〈史料 383〉

江上青蓮宮，人間蓬萊島。煙霞與波浪，隱映樓台好。『全唐詩·卷五百六十八·法華微上人盛話金山境勝，舊遊在目，吟成此篇』 李群玉著

〈史料 384〉

皓曜迷鯨目，晶熒失蚌胎。宵分憑檻望，應合見蓬萊。『全唐詩·卷五百六十九·中秋越台看月』 李群玉著

〈史料 385〉

蓬萊才子即蕭郎，彩服青書卜鳳凰。玉佩定催紅粉色，錦衾應惹翠雲香。馬穿暮雨荊山遠，人宿寒燈郢夢長。『送蕭十二校書赴郢州婚姻』 李群玉著

〈史料 386〉

春山杳杳日遲遲，路入雲峰白犬隨。兩卷素書留貰酒，一柯樵斧坐看棋。蓬萊道士飛霞履，清遠仙人寄好詩。『送隱者歸羅浮』 李群玉著

〈史料 387〉

借問蓬萊水，誰逢清淺年。傷心雲夢澤，歲歲作桑田。『全唐詩·卷五百七十·洞庭干二

首』 李群玉著

〈史料 388〉

珠翠香銷鴛瓦墮，神仙曾向此中游。青樓月色桂花冷，碧落簫聲雲葉愁。杳杳蓬萊人不見，蒼蒼苔蘚路空留。『全唐詩·卷五百八十六·題秦女樓』 劉滄著

〈史料 389〉

沐發清齋宿洞宮，桂花松韻滿岩風。紫霞曉色秋山霽，碧落寒光霜月空。華表鶴聲天外迴，蓬萊仙界海門通。『宿題天壇觀』 劉滄著

〈史料 390〉

滿庭芳草坐成恨，迢遞蓬萊入夢頻。『代友人悼姬』 劉滄著

〈史料 391〉

待看春榜來江外，名佔蓬萊第幾仙。『全唐詩·卷五百八十九·即席送許□之曹南省兄』 李頻著

〈史料 392〉

雉扇合蓬萊，朝車回紫陌。重門集嘶馬，言宴金張宅。『全唐詩·卷五百九十九·古宴曲』 於濇著

〈史料 393〉

超騎明月蜎，復弄華星蕊。卻下蓬萊巔，重窺清淺水。『全唐詩·卷六百一十八·奉和襲美太湖詩二十首：縹緲峰』 陸龜蒙著

〈史料 394〉

蓬萊有路教人到，應亦年年稅紫芝。『全唐詩·卷六百二十九·新沙』 陸龜蒙著

〈史料 395〉

東遊借得琴高鯉，騎入蓬萊清淺中。『高道士』 陸龜蒙著

〈史料 396〉

瓊蘇玉鹽爛漫煮，咽入丹田續靈液。會待功成插翅飛，蓬萊頂上尋仙客。『全唐詩·卷六百三十七·苔歌』 顧云著

〈史料 397〉

淨掃蓬萊山下路，略邀王母話長生。怪得蓬萊山水下，半成沙土半成塵。青龍舉步行千里，休道蓬萊歸路長。金鰲頭上蓬萊殿，唯有人間煉骨人。『全唐詩·卷六百四十一·小遊仙詩九十八首』 曹唐著

〈史料 398〉

自是祖龍先下世，不關無路到蓬萊。『全唐詩·卷六百四十七·詠史詩：東海』 胡曾著

〈史料 399〉

欲識蓬萊今便是，更於何處學忘機。『全唐詩·卷六百七十三·桐柏觀』 周朴著

〈史料 400〉

初疑崑崙下，夭矯龍銜燭。亦似蓬萊巔，金銀台疊蹙。『全唐詩·卷六百八十五·綿竹山四十韻』 吳融著

〈史料 401〉

蓬萊若探人間事，一日還應兩度知。『潮』 吳融著

〈史料 402〉

辭無圭組隱無才，門向潮頭過處開。幾度黃昏逢罔象，有時紅旭見蓬萊。磧連荒戍頻頻火，
天絕纖雲往往雷。『全唐詩·卷六百八十七·海上秋懷』 吳融著

〈史料 403〉

九華山叟驚凡骨，同到蓬萊豈偶然。『全唐詩·卷六百九十二·依韻次同年張曙先輩見寄之
什』 杜荀鶴著

〈史料 404〉

蓬萊宮闕曉光勻，紅案昇麻降紫宸。鸞奏八音諧律呂，鳳銜五色顯絲綸。蕭何相印鈞衡重，
韓信齋壇雨露新。『全唐詩·卷七百零三·天佑元年以右拾遺使冊閩王而作』 翁承贊著

〈史料 405〉

誰不相逢話息機，九重城裡自依依。蓬萊水淺有人說，商洛山高無客歸。數只珍禽寒月在
，千株古木熱時稀。『全唐詩·卷七百零五·商山贈隱者』 黃滔著

〈史料 406〉

詩中日月酒中仙，平地雄飛上九天。身謫蓬萊金籍外，寶裝方丈玉堂前。虎靴醉索將軍脫，
鴻筆悲無令子傳。『全唐詩·卷七百零七·經李翰林墓』 殷文圭著

〈史料 407〉

從此幾遷為計相，蓬萊三刻奏東巡。『全唐詩·卷七百二十三·贈長安畢郎中』 李洞著

〈史料 408〉

知到蓬萊難再訪，問何方法得長生。『全唐詩·卷七百二十四·贈王山人』 唐求著

〈史料 409〉

伏奏違金闕，駢驂去玉津。蓬萊鄉路遠，若木故園林。『全唐詩·卷七百三十二·銜命還國作』 朝衡著

〈史料 410〉

山濤謔細君，吾豈厭蓬萊。明發又驅馬，客思一裴回。『全唐詩·卷七百四十五·宿島徑夷山舍』 陳陶著

〈史料 411〉

散花童子鶴衣短，投壺姹女蛾眉長。彤庭侍宴瑤池席，老兔春高桂宮白。蓬萊下國賜分圭，阿母金桃容小摘。『飛龍引』 陳陶著

〈史料 412〉

秦作東海橋，中州鬼辛苦。縱得跨蓬萊，群仙亦飛去。『全唐詩·卷七百四十六·續古二十九首』 陳陶著

〈史料 413〉

帝燭熒煌下九天，蓬萊宮曉玉爐煙。『朝元引四首』 陳陶著

〈史料 414〉

自領蓬萊都水監，只憂滄海變成塵。『全唐詩·卷七百六十一·大遊仙詩』 歐陽炯著

〈史料 415〉

盡日會稽山色裡，蓬萊清淺水仙家。『全唐詩·卷七百八十六·絕句』 無名氏著

〈史料 416〉

山閣蓬萊客，儲宮羽翼師。每優陪麗句，何暇覲英姿。 一王起『全唐詩·卷七百九十·喜晴聯句』 白居易著

〈史料 417〉

展得綠波寬似海，水心樓殿勝蓬萊。『全唐詩·卷七百九十八·宮詞』 花蕊夫人著

〈史料 418〉

煙霞迤邐接蓬萊，宮殿參差曉日開。『全唐詩·卷八百零一·會仙詩』 葛鵲兒著

〈史料 419〉

白鶴銜苦桃，千里作一息。欲往蓬萊山，將此充糧食。白髮會應生，紅顏豈長保。但看北邙山，個是蓬萊島。『全唐詩·卷八百零六·詩三百三首』 寒山著

〈史料 420〉

皓耀迷鯨口，晶熒失蚌胎。宵分憑欄望，應合見蓬萊。『全唐詩·卷八百一十四·中秋台看月』 無可著

〈史料 421〉

色濃春草在，峰起夏雲歸。不是蓬萊島，如何人去稀。『全唐詩·卷八百二十·夏日同崔使君論登城樓賦得遠山』 皎然著

〈史料 422〉

河間姹女直千金，紫陽夫人服不死。吾於此道復何如，昨朝新得蓬萊書。『全唐詩·卷八百二十一·買藥歌送楊山人』 皎然著

〈史料 423〉

高若太空露雲物，片白激青皆彷彿。仙鶴閒從淨碧飛，巨鰲頭戴蓬萊出。前輩歌詩惟翰林，神仙老格何高深。『全唐詩·卷八百二十三·贈李粲秀才』 僧鸞著

〈史料 424〉

海中紫霧蓬萊島，安期子喬去何早。遊戲多騎白騏驎，鬚髮如銀未曾老。亦留仙訣在人間，嚙鏃終言藥非道。『全唐詩·卷八百二十六·了仙謠』 貫休著

〈史料 425〉

寶輦千官捧，宮花九色開。何時重一見，為我話蓬萊。『全唐詩·卷八百三十四·寄翰林陸學士』 貫休著

〈史料 426〉

清晨醉起臨春台，吳綾蜀錦胸襟開。狂多兩手掀蓬萊，珊瑚掇盡空土堆。『全唐詩·卷八百四十七·讀李賀歌集』 齊己著

〈史料 427〉

三五仙子乘龍車，堂前碾爛蟠桃花。回頭卻顧蓬萊頂，一點濃嵐在深井。『升天行』 齊己著

〈史料 428〉

天鑒諒難誣，神理不可諉。安期返蓬萊，王母還崑崙。『全唐詩·卷八百五十三·覽古十四首』 吳筠著

〈史料 429〉

雲生蓬萊島，日出扶桑枝。萬里混一色，焉能分兩儀。『全唐詩·卷八百五十三·登北固山望海』 吳筠著

〈史料 430〉

碧潭深處一真人，貌似桃花體似銀。鬢髮未斑緣有術，紅顏不老為通神。蓬萊要去如今去，架上黃衣化作雲。他時若赴蓬萊洞，知我仙家有姓名。火種丹田金自生，重重樓閣自分明。三千功行百旬見，萬里蓬萊一日程。羽化自應無鬼錄，玉都長是有仙名。莫怪愛吟天上詩，蓋緣吟得世間稀。慣餐玉帝宮中飯，曾著蓬萊洞裡衣。馬踏日輪紅露卷，鳳銜月角擘雲飛。欲陪仙侶得身輕，飛過蓬萊徹上清。朱頂鶴來雲外接，紫鱗魚向海中迎。姮娥月桂花先吐，王母仙桃子漸成。割斷繁華掉卻榮，便從初得是長生。曾於錦水為蟬蛻，又向蓬萊別姓名。三住住來無否泰，一塵塵在世人情。蓬萊不是凡人處，只怕愚人洩世機。來年定赴蓬萊會，騎個生獰九色龍。『全唐詩·卷八百五十七·七言』 呂岩著

〈史料 431〉

暫別蓬萊海上游，偶逢太守問根由。身居北斗星杓下，劍掛南宮月角頭。道我醉來真個醉，不知愁是怎生愁。『真人行巴陵市太守怒其不避使案吏具其罪真人…詩曰』 呂岩著

〈史料 432〉

偶乘青帝出蓬萊，劍戟崢嶸遍九垓。『全唐詩·卷八百五十八·紹興道會』 呂岩著

〈史料 433〉

三千里外無家客，七百年來雲水身。行滿蓬萊為別館，道成瓦礫盡黃金。待賓榼裡常存酒，
化藥爐中別有春。『答僧見』 呂岩著

〈史料 434〉

群生莫相輕，已是蓬萊客。『全唐詩·卷八百五十九·又記』 呂岩著

〈史料 435〉

我來謁見不得見，謁心耿耿生埃塵。歸去也，波浩渺，路入蓬萊山杳杳。相思一上石樓時，
雪晴海闊千峰曉。『題四明金鵝寺壁』 呂岩著

〈史料 436〉

時人不達花中理，一訣天機直萬金。謝天地，感虛空，得遇仙師是祖宗。附耳低言玄妙旨，
提上蓬萊第一峰。日精才現月華凝，二八相交在壬丙。龍汞結，虎鉛成，咫尺蓬萊只一程。
坤鉛幹汞金丹祖，龍鉛虎汞最通靈。萬劫塵沙道不成，七竅眼睛皆迸血。貧窮子，發誓切，
待把凡流盡提接。同越蓬萊仙會中，凡景煎熬無了歇。『敲爻歌』 呂岩著

〈史料 437〉

自言住處連滄海，別是蓬萊第一峰。『全唐詩·卷八百六十·題長安酒肆壁三絕句』 鍾離
權著

〈史料 438〉

九九道至成真日，三界四府朝元節。氣翱翔兮神烜赫，蓬萊便是吾家宅。群仙會飲天樂喧，
雙童引入昇玄客。『贈呂洞賓』 鍾離權著

〈史料 439〉

蓬萊通道無多路，只在譚生拄杖前。『全唐詩·卷八百六十一·大言詩』 譚峭著

〈史料 440〉

蓬萊隔海雖難到，直上三清卻不遙。『全唐詩·卷八百六十一·自吟』 徐釣者著

〈史料 441〉

自疑飛到蓬萊頂，瓊艷三枝半夜春。『全唐詩·卷八百六十三·與薛昭合婚詩』 張雲容著

〈史料 442〉

華嶽無三尺，東瀛僅一杯。入雲騎彩鳳，歌舞上蓬萊。『會真詩』 雲台峰女仙著

〈史料 443〉

馬嵬不是無情地，自遇蓬萊睡覺時。『太真』 蜀宮群仙著

〈史料 444〉

寶車輾駐彩雲開，誤到蓬萊頂上來。『全唐詩·卷八百六十四·與何光遠贈答詩』 何光遠著

〈史料 445〉

蓬萊島邊採珠客，西望人寰星漢隔。千重疊浪聳雲高，『全唐詩·卷八百八十三·六嘆』
李涉著

〈史料 446〉

蓬萊院閉天台女，畫堂晝寢無人語。拋枕翠雲光，繡衣聞異香。『全唐詩·卷八百八十九·

菩薩蠻』 李煜著

〈史料 447〉

步虛聲縹緲，想像思徘徊。曉天歸去路，指蓬萊。『全唐詩·卷八百九十六·女冠子』 李珣著

〈史料 448〉

當時，自飲刀圭，又誰信無中就養兒。辨水源清濁，木金間隔。不因師指，此事難知。道要玄微，天機深遠，下手忙修猶太遲。蓬萊路，待三千行滿，獨步雲歸。『全唐詩·卷九百·沁園春』 呂岩著

〈史料 449〉

知蓬萊自有，神仙伴侶。同攜手，朝天去。『水龍吟』 呂岩著

〈史料 450〉

蓬萊願應仙舉，誰知會合仙賓。遙想望，吹笙玉殿，奏舞鸞裊。風馭雲輶不散，碧桃紫奈長新。願逢一粒，九霞光裡，相繼朝真。『雨中花』 呂岩著

〈史料 451〉

丘：〔古文〕垚『廣韻』去鳩切『集韻』『韻會』祛尤切『正韻』驅尤切， 音蚯。阜也，高也。四方高，中央下曰丘。『爾雅·釋丘』非人爲之曰丘。又前高後下曰旄丘。『博雅』小陵曰丘。又『周禮·春官·大司樂』凡樂，冬日至，於地上之圜丘而奏之。夏日至，於澤中之方丘而奏之。『疏』土之高者曰丘。因高以事天，故於地上。因下以事地，故於澤中。又地名。帝丘，本顓頊之墟，今澶州濮陽縣。又營丘，商丘，楚丘，靈丘，葵丘，咸

丘，虎丘，皆地名。又三丘。『張衡·思玄賦』過少昊之窮野兮，問三丘乎句芒。『注』蓬萊，方丈，方壺，三者皆羣仙所居。又『前漢·法志』四井爲邑，四邑爲丘。丘，十六井也。又『春秋·成元年』作丘甲。『胡傳』益兵也，卽丘出一甲，則一甸之中，共百人爲兵矣。又聚也。『孔安國·尚書序』九州之志，謂之九丘。言九州所有，皆聚此書也。又崇丘，亡詩篇名。言萬物得極其高大也。又大也。『前漢·楚元王傳』高祖微時，嘗與賓客過其丘嫂食。『注』長嫂之稱。又空也。『前漢·息夫躬傳』寄居丘亭。又丘里。『莊子·則陽篇』少知問太公調曰：何謂丘里之言。曰：丘里者，合十姓百名，以爲風俗也。又比丘。『魏書·釋老傳』桑門爲息心，比丘爲行乞。又姓。又左丘，龍丘，咸丘，虞丘，梁丘，母丘，陶丘，浮丘，麥丘，水丘，吾丘，皆複姓。又『韻補』葉祛其切，音欺。『詩·衛風』送子涉淇，至於頓丘。葉下媒期。『小雅』楊園之道，猗於畝丘。葉下詩之。『左傳·僖十五年』史蘇占之曰：不利行師，敗於宗丘。葉上姬旗。又葉苦高切，音尻。『楚辭·九懷』玄鳥兮辭歸，飛翔兮靈丘。望溪兮蓊鬱，熊羆兮咆。又葉丘於切，音區。『琳·大荒賦』過不死之靈域兮，仍羽人之丹丘。惟民生之每每兮，佇盤桓以躊躇。古丘區聲通。『顏師古曰』古語丘區二字音不別，今讀則異。互見匚部區字注。『集韻』本作𡵓，亦作𡵓。『康熙字典·一部·四』

〈史料 452〉

壺：〔古文〕𣪠『廣韻』戶吳切『集韻』『韻會』『正韻』洪孤切，音胡。夏商曰尊彝，週制用壺，有方圓之異。『儀禮·燕禮』卿大夫用方，直方爲義也。士旅食用圓，順命爲宜也。『左傳·昭十五年』晉荀躒如周葬後，除喪以文伯宴，樽以魯壺。又官名。『周禮·夏官』挈壺氏掌挈壺以令軍井，凡軍事，懸壺以序聚。又『禮·投壺注』諸侯卿大夫士皆用之。又唾壺。『晉書·王敦傳』敦酒後輒詠魏武樂府，以如意擊唾壺爲節。又壺蘆，瓜屬，俗作葫。『詩·豳風』八月斷壺。『鶡冠子·學問篇』一壺千金。又地名。壺關，在上黨，古黎侯國。『前漢·武五子傳』壺關三老茂上書。又壺頭，在崇陽縣北。『後漢·馬援傳』援徵五溪蠻，至下嶠，卒於壺頭，卽此。『禮·檀弓』戰於臺駘。

『注』台當作壺。又山名。壺口山，在河東猗氏。『書·禹貢』既載壺口。又三壺。『王子年·拾遺記』東海中三山，一方壺，則方丈也，二蓬壺，則蓬萊也，三瀛壺，則瀛州也。又姓。晉大夫采邑，因爲氏，見『統譜』。又壺丘，複姓。又葉呼古切，音虎。『宋玉·招魂』幸而得脫，其外曠字些。赤蟻若象，元蠡若壺些。又葉羊洳切，音預。『魏·邯鄲淳·投壺賦』敬不可久，禮成於，乃設大射，否則投壺。『說文』昆吾園器也。『徐曰』昆吾，紂臣，作瓦器。『康熙字典·土部·八』

〈史料 453〉

殊：『唐韻』市朱切『集韻』『韻會』慵朱切『正韻』尚朱切，音殳。『說文』死也。漢令曰：蠻夷長有罪，當殊之。『莊子·在宥篇』殊死者相望也。『注』廣雅曰：殊，斷也。司馬雲決也。一曰誅也。『字林』雲死也。『前漢·宣帝詔』赦殊死以下。又絕也。『前漢·宣帝詔』骨肉之親，粲而不殊。『師古注』粲，明也。殊，絕也。明於仁恩，不離絕也。『前漢·韓信傳』軍皆殊死戰。『師古注』殊，絕也。謂決意必死。又斷絕也。『左傳·昭二十三年』斷其後之木而弗殊。又傷而未絕也。『史記·蘇秦傳』齊大夫與蘇秦爭寵，使人刺蘇秦，不死，殊而走。又別也，異也。『易·繫辭』天下同歸而殊塗。『禮·大傳』殊號，異器械。又過也。『後漢·梁竦傳』母氏年殊七十。『注』殊，猶過也。又語詞。『詩·魏風』殊異乎公路。又殊庭，蓬萊仙人庭也。『前漢·郊祀志』將以望祀蓬萊之屬，幾至殊庭。又葉時流切，音酬。『陳琳詩』沈淪眾庶間，與世無有殊。紆鬱懷傷結，舒展有何由。『康熙字典·歹部·六』

〈史料 454〉

沸：『唐韻』『集韻』『韻會』『正韻』方味切，音芾。涪也。『詩·大雅』如沸如羹。又水名。『王子年·拾遺記』蓬萊山有沸水，飲者千歲。又井名，潭名。『水經註』曲阿季子廟前井及潭常沸，故名井曰沸井，潭曰沸潭。『謝惠連·雪賦』沸潭無湧，炎風不興。又『集韻』『正韻』敷勿切『韻會』分勿切，音拂。灑也。又鬻沸，泉出貌。

『詩·小雅』濤沸檻泉。又『正韻』滂佩切，音配。波湧貌。『司馬相如·子虛賦』水蟲駭波鴻沸。又怒貌。『司馬相如·上林賦』沸乎暴怒。又與潰同。沸渭，不安貌。『王褒·洞簫賦』若雷霆輶輶，佚豫以沸渭。『注』沸或爲潰，扶味切。『集韻』或作𩇛。『康熙字典·水部·五』

考證：〔『司馬相如·子虛賦』水蟲駭波鴻沸。〕謹照原文駭改駭。

〈史料 455〉

瀛：『唐韻』以成切『集韻』怡成切『正韻』餘輕切，音盈。海也。『史記·孟子荀卿傳』乃有大瀛海環其外。又『楚辭·招魂』倚沼畦瀛兮遙望博。『注』楚人名澤中曰瀛。又山名。『廣輿記』瀛山，在重慶府城南。又瀛洲，神山名。『史記·始皇本紀』海中有三神山，名曰蓬萊，方丈，瀛洲。又州名。『韻會』漢河間王國。後魏立瀛州，以瀛海名。宋河間府。『康熙字典·水部·十六』

〈史料 456〉

簞：『廣韻』『集韻』『正韻』古旱切，音幹。小竹也。『張衡·南都賦』其竹則筱簞箠。『李善注』簞，小竹也。『拾遺記』蓬萊有浮筠之簞，葉青莖紫，子大如珠，有青鸞集其上，風至葉條翻起，聲如鐘磬。又『篇海』箭簞。『列子·湯問篇』燕角之弧，朔蓬之簞。『山海經』休與之山有草焉，狀如箸，赤葉而叢生，名曰夙條，可以爲簞。『陳琳·武庫賦』矢則焦銅、毒鐵、簞鏃、鳴鏃。又『廣東新語』薏苡，一名簞珠。又『類篇』居案切。箭羽。『廣韻』同筈。『康熙字典·竹部·十三』

考證：〔『列子·殷湯篇』燕角之弧，朔蓬之簞。〕謹照原書改湯問篇。

〈史料 457〉

萊：『唐韻』洛哀切『正韻』郎才切，音來。『說文』蔓華也。『玉篇』藜草也。『詩·小雅』北山有萊。『疏』萊，草名。其葉可食。又『周禮·地官·縣師』辨其夫家人

民田萊之數。『注』萊，休不耕者。郊內謂之易，郊外謂之萊。又『周禮·地官·山虞』若大田獵，則萊山田之野。『注』萊，除其草萊也。『詩·小雅』田卒污萊。『注』萊，草穢。又地名。『書·禹貢』萊夷作牧。『齊語』通齊國之魚鹽於東萊。『注』東萊，齊東萊夷也。又山名。『山海經』萊山，其木多檀楮。又姓。『孟子』苦伊尹、萊朱。『趙岐注』萊朱，湯賢臣仲虺是也。『左傳·文二年』萊駒爲右。又『韻補』音黎。『郭璞·遊仙詩』朱門何足榮，未若托蓬萊。臨泉揖清波，陵岡掇丹萸。又『廣韻』落代切，音賴。義同。『爾雅』作厘。『康熙字典·草部·八』

〈史料 458〉

渚：『廣韻』章與切『集韻』『韻會』掌與切，音煮。『爾雅·釋水』小洲曰渚，小渚曰沚。『越語』鼃黽之與同渚。『楚辭·九章』朝發枉渚兮，夕宿辰陽。『司馬相如·子虛賦』且齊東渚巨海。『注』東有大海之渚。『揚雄·反離騷』鳳凰翔於蓬渚。『注』蓬萊之渚，在海中。又丘名。『爾雅·釋丘』如渚者，渚丘。又『唐韻』當古切『集韻』董五切，音賭。『說文』水中高者也。又『集韻』同堵。垣也。詳土部堵字注。又『集韻』同都切，音徒。本作鄱。詳邑部鄱字注。

考證：〔『爾雅·釋邱』如渚者，渚邱。〕謹照原文如渚改如渚。『康熙字典·阜部·九』

〈史料 459〉

雲：『唐韻』『集韻』王分切『韻會』『正韻』於分切，音雲。『說文』山川氣也。從雨雲，象雲迴轉形。『廣韻』河圖曰：云者，天地之本。『元命包』陰陽聚爲雲。『易·乾卦』雲行雨施。又『詩·大雅』倬彼雲漢。『傳』雲漢，天河也。又『爾雅·釋親』仍孫之子爲雲孫。『注』言輕遠如浮雲。又『周禮·春官·大司樂』舞雲門大卷。『注』週所存六代之樂，黃帝曰雲門大卷。又『史記·黃帝紀』官名，皆以雲命爲雲師。又澤名。『書·禹貢』雲土夢作。又『左傳·定四年』楚子涉睢濟江，入於雲中。『爾雅·釋

地』楚有云夢。『疏』此澤跨江南北，亦得單稱雲，單稱夢。『司馬相如·子虛賦』雲夢者，方九百里。又『拾遺記』蓬萊山，亦名云來。又郡縣名。『前漢·地理志』琅邪郡雲縣。又云中郡。又姓。『正字通』縉雲氏之後。唐云洪嗣。明雲衢，雲岫。又葉於員切。『琳·馬瑙勒賦』初傷勿用，俟慶雲兮。君子窮達，亦時然兮。『說文』通作雲。『康熙字典·雨部·四』

〈史料 460〉

鰲：『唐韻』五牢切『集韻』『韻會』『正韻』牛刀切，音敖。『說文』海中大鰲也。『玉篇』傳曰：有神靈之鰲，背負蓬萊之山，在海中。『史記·三皇本紀』女媧氏斷鰲足，以立四極。俗作鰲，非是。『康熙字典·黽部·十』

〈史料 461〉

齟：『唐韻』魚舉切『集韻』偶舉切『韻會』語許切『正韻』偶許切，音語。『說文』齒不相值也。『字彙』一前一卻，齟齬不相值。『揚子·太玄經』其志齟齬。又『廣韻』語居切『集韻』『正韻』牛居切『韻會』魚居切，音魚。又『廣韻』五乎切『集韻』『正韻』訛胡切，音吾。義同。又葉牛何切，音俄。岳齟，山勢也。『張衡·西京賦』列瀛洲與方丈，夾蓬萊而駢羅。上林岑與壘嶽，下嶄岩以岳齟。『康熙字典·齒部·七』

〈史料 462〉

次日，蘧公孫上廳謝親，設席飲酒。席終，歸到新房裡，重新擺酒，夫妻舉案齊眉。此時魯小姐卸了濃裝，換幾件雅淡衣服。蘧公孫舉眼細看，真有沉魚落雁之容，閉月羞花之貌。三四個丫鬟養娘，輪流侍奉。又有兩個貼身侍女——一個叫做采蘋，一個叫做雙紅，都是嫵娜輕盈，十分顏色。此時蘧公孫恍如身遊閬苑蓬萊，巫山洛浦。只因這一番，有分教：閨閣繼家聲，有若名師之教；草茅隱賢士，又招好客之踪。畢竟後事如何，且聽下回分解。『儒林外史·魯翰林憐才擇婿 蘧公孫富室招親』

〈史料 463〉

說著，大家出來。走不多遠，則見崇閣巍峨，層樓高起，面面琳宮合抱，迢迢復道縈紆。青松拂簷，玉蘭繞砌。金輝獸面，彩煥螭頭。賈政道：“這是正殿了。只是太富麗了些。”眾人都道：“要如此方是。雖然貴妃崇尚節儉，然今日之尊，禮儀如此，不為過也。”一面說，一面走，只見正面現出一座玉石牌坊，上面龍蟠螭護，玲瓏鑿就。賈政道：“此處書以何文？”眾人道：“必是‘蓬萊仙境’方妙。”賈政搖頭不語。『紅樓夢·大觀園試才題對額 榮國府歸省慶元宵』

〈史料 464〉

探春

秀水明山抱復回，風流文采勝蓬萊。綠裁歌扇迷芳草，紅襯湘裙舞落梅。

珠玉自應傳盛世，神仙何幸下瑤台。名園一自邀遊賞，未許凡人到此來。『紅樓夢·皇恩重元妃省父母 天倫樂寶玉呈才藻』

〈史料 465〉

忽聽見空中隱隱有木魚聲，念了一句“南無解冤解結菩薩！有那人口不利，家宅不安，中邪祟，逢凶險的，找我們醫治。”賈母王夫人都聽見了，便命人向街上找尋去。原來是一個癩和尚同一個跛道士。那和尚是怎的模樣？但見：

鼻如懸膽兩眉長，目似明星有寶光。破衲芒鞋無住跡，腌臢更有一頭瘡。那道人是如何模樣？看他時：

一足高來一足低，渾身帶水又拖泥。相逢若問家何處，卻在蓬萊弱水西。『紅樓夢·魘魔法叔嫂逢五鬼 通靈玉蒙蔽遇雙真』

〈史料 466〉

湘雲聽了，便拿了一支銅火箸擊著手爐，笑道：“我擊了，若鼓絕不成，又要罰的。”寶玉笑道：“我已有了。”黛玉提起筆來，笑道：“你念，我寫。”湘雲便擊了一下，笑道：“一鼓絕。”寶玉笑道：“有了，你寫罷。”眾人聽他念道：“酒未開罇句未裁，”黛玉寫了，搖頭笑道：“起的平平。”湘雲又道：“快著！”寶玉笑道：“尋春問臘到蓬萊。”黛玉湘雲都點頭笑道：“有些意思了。”寶玉又道：“不求大士瓶中露，為乞嬌娥檻外梅。”黛玉寫了，搖頭說：“小巧而已。”湘雲將手又敲了一下。寶玉笑道：

入世冷挑紅雪去，離塵香割紫雲來。槎丫誰惜詩肩瘦？衣上猶沾佛院苔。『紅樓夢·蘆雪庭爭聯即景詩 暖香塢雅制春燈謎』

〈史料 467〉

「廢帝之德庸，既乃刑之於羽之郊，」（左傳襄二十五年，杜注云：“庸，用也。”『書·堯典』、『孟子·萬章』篇、『史記·五帝本紀』，並云：“殛鯀於羽山。”晉語韋注云：“殛，放而殺也。”『楚辭·天問』雲：“永遏在羽山，夫何三年不施？”王註雲：“言堯長放鯀於羽山，絕在不毛之地，三年不捨其罪也。”案：此刑亦謂放，故下云：“乃熱照無有及也。”『山海經』雲：“殺鯀於羽郊”，亦謂鯀放而死也。畢雲：“郭璞注山海經云：‘今東海祝其縣西南有羽山。’案：在今山東蓬萊縣。”詒讓案：史記正義引括地志雲：“羽山在沂州臨沂縣。”）『墨子閑詁·卷二·尚賢中』

考證：〔『列子·殷湯篇』燕角之弧，朔蓬之箛。〕謹照原書改湯問篇。

2. 庭園における「蓬萊」配置に関する史料

〈史料 1001〉

江、河、淮、濟為四瀆。四瀆者，發源注海者也。『爾雅·釋水』（辭書）（戦国-漢）

〈史料 1002〉

“东为江，北为济，西为河，南为淮，四瀆已修，万民乃有居。”『史记·殷本纪』（史

書)(紀元前 104 年-紀元前 118 年)

〈史料 1003〉

三十一年十二月，更名臘曰“嘉平”。賜黔首裡六石米，二羊。始皇為微行咸陽，與武士四人俱，夜出逢盜蘭池，見窘，武士擊殺盜，關中大索二十日。米石千六百。『史記・本紀・秦始皇本紀』

〈史料 1004〉

二十七年，“作信宮渭南，已更命信宮為極廟，像天極。”三十四年，“始皇置酒咸陽宮，博士七十人前為壽。”『史記・本紀・秦始皇本紀』

〈史料 1005〉

始皇帝三十五年，以咸陽人多，先王之宮庭小，曰：吾聞周文於都豐，武王都鎬，豐，鎬之間，帝王之都也。乃營朝宮於渭南上林苑中。『史記・本紀・秦始皇本紀』

〈史料 1006〉

及元狩元年，博望侯張騫使大夏來，言居大夏時見蜀布、邛竹、杖，使問所從來，曰“從東南身毒國，可數千里，得蜀賈人市”。或聞邛西可二千里有身毒國。騫因盛言大夏在漢西南，慕中國，患匈奴隔其道，誠通蜀，身毒國道便近，有利無害。於是天子乃令王然于、柏始昌、呂越人等，使間出西夷西，指求身毒國。至滇，滇王嘗羌乃留，為求道西十余輩。岁余，皆閉昆明，莫能通身毒國。

滇王與漢使者言曰：“漢孰與我大？”及夜郎侯亦然。以道不通故，各自以為一州主，不知漢廣大。使者還，因盛言滇大國，足事親附。天子注意焉。『史記・西南夷列傳』

〈史料 1007〉

天子祭天地，諸侯祭社稷，大夫祭五祀。天子祭天下名山大川：五嶽視三公，四瀆視諸侯。諸侯祭名山大川之在其地者。天子諸侯祭因國之在其地而無主後者。『礼記·王制』（儒家書籍）（漢代建初 7 年（80 年））

〈史料 1008〉

始皇引渭水為池，東西二百里，南北二十里，築土為蓬萊，刻石為鯨，長二百丈。『三秦記』（地理書籍）（漢代）

〈史料 1009〉

三壺，則海中三山也。一曰方壺，則方丈也；二曰蓬壺，則蓬萊也；三曰瀛壺，則瀛洲也。形如壺器。此三山上廣、中狹、下方，皆如工製，猶華山之似削成。『王子年·拾遺記·高辛』（中國神話志怪小說）（東晉（317 年—420 年））

〈史料 1010〉

武帝信仙道，取少君欒大妄誕之語，多起樓觀，故池中立三山，以像蓬萊，瀛洲，方丈。『三輔黃圖』（地方志）（南北朝（420 年—589 年）前）

〈史料 1011〉

咸陽北至九嶼甘泉，南至鄠、杜，東至河，西至汧、渭之交，東西八百里，南北四百里，離宮別館，相望聯屬。木衣綈繡，土被朱紫，宮人不移，樂不改懸，窮年忘歸，猶不能遍。『三輔黃圖』

〈史料 1012〉

『關輔古語』曰：昆明池中有二石人，立牽牛、織女於池之東西，以像天河。『三輔黃圖·池沼』

〈史料 1013〉

谷水又东，枝分南入华林园，历疏圃南，圃中有古玉井，井悉以珉玉为之，以缁石为口，工作精密，犹不变古，璨焉如新。又迳瑶华宫南，历景阳山北，山有都亭，堂上结方湖，湖中起御坐石也。御坐前建蓬莱山，曲池接筵，飞沼拂席，南面射侯，夹席武峙，背山堂上，则石路崎嶇，岩嶂峻险，云台风观，纓峦带阜，游观者升降阿阁，出入虹陛，望之状鳧没鸾举矣。其中引水飞泉，倾澜瀑布，或枉渚声溜，潺潺不断，竹柏荫于层石，绣薄丛于泉侧，微飏暂拂，则芳溢于六空，寔为神居矣。其水东注天渊池，池中有魏文帝九华台，殿基悉是洛中故碑累之，今造钓台于其上。『水经注·卷十六·穀水』（地理書籍）（作者は北魏後期の酈道元（472 年-527 年））

〈史料 1014〉

華林園中有大海，即魏天淵池，池中猶有文帝九華台。高祖於台上造清涼殿，世宗在海內作蓬萊山，山上有仙人館，上有釣魚殿，並作虹霓閣，乘虛來往。『洛陽伽藍記·城内』（仏教書籍）（東魏武定 5 年(547 年)）

〈史料 1015〉

时造玄武湖，上欲于湖中立方丈、蓬萊、瀛洲三神山，尚之固諫，乃止。『晋書·何尚之傳』（史書）（作者は唐の初期の房玄齡）

〈史料 1016〉

东井南垣之东四星曰四渎，江、河、淮、济之精也。『晋書·天文志』

〈史料 1017〉

後漢班叔皮『覽海賦』

余有事於淮浦，覽滄海之茫茫，悟仲尼之乘桴，聊從容而遂行，馳鴻濶以縹鸞，翼飛風而回翔，顧百川之分流，煥爛漫以成章，風波薄其裔裔，邈浩浩以湯湯，指日月以為表，索方瀛與壺梁，曜金璆以為闕，次玉石而為堂，萸芝列於階路，涌醴漸於中唐，朱紫彩爛，明珠夜光，松喬坐於東序，王母處於西箱，命韓眾與歧伯，講神篇而校靈章，原結旅而自託，因離世而高游，聘飛龍之驂駕，歷八極而回周，遂竦節而響應，忽輕舉以神浮，遵霓霧之掩蕩，登云塗以凌厲，乘虛風而體景，超太清以增逝，麾天閭以啟路，辟閭闔而望余，通王謁於紫宮，拜太一而受符。『芸文類聚·卷八·水部上』（類書）（唐代·624年）

〈史料 1018〉

興慶宮在皇城之東南，東距外郭城東垣。宮之西曰興慶門，其內曰興慶殿；次南曰金明門，門內之北曰大同門，其內曰大同殿。宮之南曰通陽門，北入曰明光門，其內曰龍堂。通陽之西曰花萼樓，東曰明義門，其內曰長慶殿。宮之北曰躍龍門，其內左曰芳苑門，右曰麗苑門。南走龍池，曰瀛洲門，門內曰南薰殿。瀛洲之左曰仙雲門，北曰新射殿。『唐六典·卷七·尚書工部』（政書）（唐·開元 26 年(738)）

〈史料 1019〉

蘭池陂，即秦之蘭池也，在縣東二十五里。初，始皇引渭水為池，東西二百里，南北二十里，築為蓬萊山，刻石為鯨魚，長二百丈。『元和郡縣圖志』（地理志）（唐憲宗元和 8 年(813)）

〈史料 1020〉

又嘗於宮中置長湯屋數十間。環迴甃以文石。為銀鏤漆船及白香木船，置於其中。至於楫櫓，皆飾以珠玉。又於湯中，壘瑟瑟及沉香為山，以狀瀛洲方丈。『太平廣記·奢侈一·玄宗』（物語）（宋·977-978）

〈史料 1021〉

『明皇雜錄』曰：上於華清宮置長湯數十間屋。又為銀鏤漆船，至於楫棹皆飾以珠玉。又於湯中壘瑟瑟及沉香為山，以狀瀛洲、方丈。『太平御覽・珍寶部七・瑟瑟』（類書）（宋・977-983）

〈史料 1022〉

乃闢地週二百里為西苑，役民力常百萬。苑內為十六院，聚巧石為山，鑿池為五湖四海。... 又鑿北海，周環四十里。中有三山，效蓬萊、方丈、瀛洲，上皆臺榭迴廊。水深數丈，開溝通五湖四海。『海山記』（伝説小説）（北宋（960-1127 年））

〈史料 1023〉

『閣本太極宮圖』：太極宮中凡有三海池、東海池在玄武門內之東、近凝雲閣。北海池在玄武門內之西。又南有南海池、近咸池殿。『資治通鑑卷一百九十一』（史書）（北宋司馬光（1019 年－1086 年））

〈史料 1024〉

貞觀八年十月。營永安宮。至九年正月。改名大明宮。以備太上皇清暑。公卿百僚。爭以私財助役。至龍朔二年。高宗染風痺。以宮內湫濕。乃修舊大明宮。改名蓬萊宮。北據高原。南望爽塏。六月七日。制蓬萊宮諸門殿亭等名。『唐會要・卷三十』（史書）（北宋）

〈史料 1025〉

太宗初，於其地營永安宮以備太上皇清暑，... 九年正月，改名大明宮。... 龍朔二年，高宗染風痺，惡太極宮卑下，故新脩大明宮，改名蓬萊，取殿後蓬萊池為名也。『雍錄』（遊記）（作者は南宋の程大昌（1123 年－1195 年））

〈史料 1026〉

李紳『憶春日太液池東亭侯對』：「宮鶯曉報瑞煙開，三島靈禽拂水回」『唐詩紀事』の卷39(詩歌集)(南宋(1127－1279年))

〈史料 1027〉

梁武帝於景陽山東嶺起通天觀，觀前起重閣，閣上曰重雲殿，下曰光嚴殿。殿當街起二樓，左曰朝日，右曰夕月，階道繞樓九轉，極其巧麗。『六朝事迹編類引宮苑記』(雜記)(南宋紹興30年(1160))

〈史料 1028〉

至元四年正月，城京師，以為天下本。右擁太行，左注滄海，撫中原，正南面，枕居庸，奠朔方，峙萬歲山。浚太液池，派玉泉，通金水，縈畿帶甸，負山引河，壯哉帝居！擇此天府。城方六十里，里二百四十步，分十一門。

...

萬壽山在大內西北太液池之陽，金人名瓊花島，中統三年修膳之，至元八年賜今名，其山皆疊玲瓏石為之，峰巒隱映，松檜隆鬱，秀若天成。引金水河至其後，轉機運糾，汲水至山頂，出石龍口，注方池，伏流至仁智殿後。有石刻蟠龍，昂首噴水仰出，然後由東西流入於太液池。山前有白玉石橋，長二百餘尺。直儀天殿後，橋之北有玲瓏石，擁木門五，門皆為石色。內有隙地，對立日月石。西有石棋枰，又有石坐床。左右皆有登山之徑，縈紆萬石中，洞府出入，宛轉相迷。至一殿一亭，各擅一景之妙。山之東有石橋，長七十六尺，闊四十一尺半。為石渠以載金水，而流於山後以汲於山頂也。又東，為靈圃，奇獸珍禽在焉。廣寒殿在山頂，七間，東西一百二十尺，深六十二尺，高五十尺，重阿藻井，文石?地，四面瑣窗，板密其裏，遍綴金紅雲，而蟠龍矯蹇於丹楹之上。中有小玉殿，內設金嵌玉龍禦榻，左右列從臣坐床。前架黑玉酒甕一。玉有白章，隨其形刻為魚獸出沒於波濤之狀。其大可貯酒三十餘石。又有玉假山一峰，玉響鐵一懸。殿之後有小石筍二，內出石龍首，以?巽所引

金水。西北有廟堂一間。仁智殿在山之半，三間，高三十尺。金露亭在廣寒殿東，其製圓，九柱，高二十四尺，尖頂上置琉璃珠，亭後有銅幡竿。玉虹亭在廣寒殿西，制度同金露。方亭在荷葉殿後，高三十尺，重屋八面，重屋無梯，自金露亭前復道登焉，又曰線珠亭。瀛洲亭在溫石浴室後，制度同方。玉虹亭前仍有登重屋復道，亦曰線珠亭。荷葉殿在方前，仁智西北，三間高三十尺，方頂，中置琉璃珠。溫石浴室在瀛洲前、仁智西北，三間，高二十三尺，方頂，中置塗金寶瓶。圓亭，又曰胭粉亭。在荷葉稍西，蓋后妃添妝之所也，八面。介福殿在仁智東差北，三間，東西四十一尺，高二十五尺。延和殿在仁智西北，制度如介福。馬_ノ重室在介福前，三間。牧人之室在延和前，三間。庖室在焉馬前。東浴室更衣殿在山東平地，三間，兩夾。

太液池在大內西，週回若干裡，植芙蓉。儀天殿在池中圓抵上，當萬壽山，十一楹，高三十五尺，圍七十尺，重簷，圓蓋頂，圓台址，_ノ以文石，藉以花茵，中設禦榻，週闢瑣窗。東西門各一間，西北廟堂一間，台西向，列_ノ磚龕，以居宿衛之士。東為木橋，長一百廿尺，闊廿二尺通大內之夾垣。西為木吊橋，長四百七十尺，闊如東橋。中闕之，立柱，架梁於二舟，以當其空。至車駕行幸上都，留守官則移舟斷橋，以禁往來。是橋通興聖宮前之夾垣。後有白玉石橋，乃萬壽山之道也。

犀山台在儀天殿前水中，上植木芍藥。隆福宮西御苑在隆福宮西，先后妃多居焉。香殿在石假山上，三間，兩夾二間，柱廊三間，龜頭屋三間，丹楹瑣窗，間金藻繪，玉石礎，琉璃瓦。殿後有石台，山後闢紅門，門外有侍女之室二所，皆南向並列。又後直紅門，並立紅門三。三門之外，有太子幹耳朵荷葉殿二。在香殿左右，各三間，圓殿在山前。圓頂上置塗金寶珠，重簷。後有流杯池，池東西流水圓亭二，圓殿有廡以連之。歇山殿在圓殿前，五間，柱廊二，各三間。東西亭二，在歇山後左右，十字脊。東西水心亭在歇山殿池中，直東西亭之南，九柱重簷。亭之後各有侍女房三所，所為三間。東房西向，西房東向。前闢紅門三，門內立石以屏內外，外築四垣以周之。池引金水注焉。棕毛殿在假山東偏，三間，後_ノ頂殿三間。前啟紅門，立垣以區分之。儀鸞局在三紅門外西南隅，正屋三間，東西屋三間，前開一門。『南村輟耕錄 卷二十一』（元代歴史についての筆記）（作者は元末明初の陶宗儀

(1329 年～約 1412 年)

〈史料 1029〉

萬歲山艮嶽。政和七年，始於上清寶篆宮之東作萬歲山。山週十餘里，其最高一峰九十步，上有亭曰介，分東、西二嶺，直接南山。山之東有萼綠華堂，有書館、八仙館、紫石岩、棲真嶺、覽秀軒、龍吟堂。山之南則壽山兩峰並峙，有雁池、嘯嘯亭，北直絳霄樓。山之西有藥寮，有西莊，有巢雲亭，有白龍汭、濯龍峽，蟠秀、練光、跨雲亭，羅漢岩。又西有萬松嶺，半嶺有樓曰倚翠，上下設兩關，關下有平地，鑿大方沼，中作兩洲：東為蘆渚，亭曰浮陽。西為梅渚，亭曰雪浪。西流為鳳池，東出為雁池，中分二館，東曰流碧，西曰環山，有閣曰巢鳳，堂曰三秀，東池後有揮雪廳。復由嶺道上至介亭，亭左復有亭曰極目，曰蕭森，右復有亭曰麗雲、半山。北俯景龍江，引江之上流注山間。西行為漱瓊軒，又行石間為煉丹、凝觀、圓山亭，下視江際，見高陽酒肆及清澗閣。北岸有勝筠庵、躡雲台、蕭閒館、飛岑亭。支流別為山莊，為回溪。又於南山之外為小山，橫亘二里，曰芙蓉城，窮極巧妙。而景龍江外，則諸館舍尤精。其北又因瑤華宮火，取其地作大池，名曰曲江，池中有堂曰蓬壺，東盡封丘門而止。其西則自天波門橋引水直西，殆半里，江乃折南，又折北。折南者過閶闔門，為複道，通茂德帝姬宅。折北者四五里，屬之龍德宮。宣和四年，徽宗自為《艮嶽記》，以為山在國之艮，故名艮嶽。蔡條謂初名鳳凰山，後神降，其詩有“艮嶽排空霄”，因改名艮嶽。宣和六年，詔以金芝產於艮嶽之萬壽峰，又改名壽岳。蔡條謂南山成，又改名壽岳。岳之正門名曰陽華，故亦號陽華宮。自政和訖靖康，積累十餘年，四方花竹奇石，悉聚於斯，樓台亭館，雖略如前所記，而月增日益，殆不可以數計。宣和五年，朱勉於太湖取石，高廣數丈，載以大舟，挽以千夫，鑿河斷橋，毀堰拆閘，數月乃至，賜號“昭功敷慶神運石”，是年，初得燕地故也。勉緣此授節度使。大抵群閹興築不肯已。徽宗晚歲，患苑囿之眾，國力不能支，數有厭惡語，由是得稍止。及金人再至，圍城日久，欽宗命取山禽水鳥十餘萬。盡投之汴河，聽其所之。拆屋為新，鑿石為炮，伐竹為篋籬。又取大鹿數百千頭殺之，以啖衛士云。『宋史·誌第三十八·地理一』(史書)(元末至正 3 年(1343 年))

〈史料 1030〉

张昱《辇下曲》：「直教海子望蓬莱，青雀传言日几回。为造龙舟载天姆，院家催造画图来。」

案：元太液池在大内之西，即今三海之地也。蒙古人称湖曰海子。萧洵『故宫遗录』曰：「海（湖）广可五六里，驾飞桥于海中，西渡半起瀛洲圆殿，绕为石城，散作洲岛。」故海中央为仪天殿，如海中岛也。『元宮詞百章箋注』（詩歌集）（作者は明代の朱有炖（1379-1439））（『故宫遗录』は元代故宮制度に関する書籍、成立時代は明代初期）

〈史料 1031〉

元之儀天殿，即明清之承光殿，惟今非在水中央，東與陸連耳。團城當即『輟耕錄』之圓坻，為元宮苑惟一可辨認之地，元代大宴時盛酒湏之大玉甕今貯於此。『元宮詞百章箋注』

〈史料 1032〉

【瓊華島】

（在太液池中，從承光殿北度梁至島，有岩洞窈窕，磴道紆折，皆疊石為之。其巔古殿結構，翔起週回，綺牖玉檻，重階而上，榜曰廣寒之殿。相傳遼太后梳妝台，今欄檻殘壞，內金刻雲物猶彌覆檼棟間。下布以文石，傍一榻，亦前朝物。殿前舊有四亭，曰瀛洲、方壺、玉虹、金露，今惟遺址耳。詳見『輟耕錄』。）

碧池懸帝闕，瓊島入仙家。

洞口流雲氣，星濤湧日華。

桃源虛歲月，蓬海復塵沙。

繡殿遊天女，燕支映夕霞。

『列朝詩集・丙集第十六』（詩歌集）（作者は清代の钱谦益（1582 年-1664 年））

〈史料 1033〉

秦始皇都長安，引渭水為池，築為蓬，瀛，刻石為鯨，長二百丈，蓬盜處也。『歷代宅京記・関中一』引『秦記』（都城史籍）（作者は清代の顧炎武（1613-1682））

〈史料 1034〉

苑中封土堆築為五座山，象徵五嶽。五岳之間，引來漳河之水分流四瀆為四海，東海，南海，西海，北海，彙為大池，又叫做大海。『歷代宅京記卷十二 鄴下』

〈史料 1035〉

清漪園【在 圓明園西萬壽山乾隆十六年開濬西湖】『大清一統志 1』（中国清朝官修地理总志 清康熙 25 年から道光 22 年まで，前後 3 部編集された）

〈史料 1036〉

蓬萊池在唐東內禁苑中。憲宗嘗畋遊於此。《志》雲：池在蓬萊殿北，亦名太液池。池中有蓬萊山，自蓬萊池西出玄武門，入重元門，即苑中也。重元蓋苑之南門，對宮門玄武門。又有魚藻池，亦在東苑內。唐穆宗時，嘗發神策軍濬之。其相近者又有凝碧池。『讀史方輿紀要 卷五十三 陝西二』（歴史と地理書籍）（清代康熙 31 年（1692））

〈史料 1037〉

亭在全湖中心，舊有湖心寺，寺外三塔，明孝宗時，寺與塔俱毀。『西湖志・卷九』（地理志）（清代雍正初年）

〈史料 1038〉

蓬島瑤臺：福海中作大小三島，仿李思訓畫意，為仙山樓閣之狀。峩峩亭亭，望之若金堂五所，玉樓十二也。真妄一如，小大一如，能知此是三壺方丈，便可半升鑪內煮江山。

名葩綽約草葳蕤，隱映仙家白玉墀。天上畫圖懸日月，水中樓閣浸琉璃。

鷺拳淨沼波翻雪，燕賀新巢棟有芝。海外方蓬原宇內，祖龍鞭石競奚爲。『御製詩集・初集・卷二十二』（詩歌集）（作者は乾隆皇帝、（乾隆 14 年、1749 年））

〈史料 1039〉

萬曆三十五年，錢塘令聶心湯請於水利道王道顯，用蘇公法捲取葑泥，繞灘築埂，成湖中之湖，以為放生之所，又於舊寺基建德生堂。三十九年，令楊萬里繼築外埂，至四十八年而規制盡善，遂以德生堂增葺為寺，復舊湖心寺額。池外造小石塔三座，謂之三潭。『湖山便覽・卷三』（観光ガイドブック）（作者は清代の翟灝（？～1788）と翟瀚）

〈史料 1040〉

明“萬曆四年按察僉事徐廷禔重建，額曰‘太虛一點’，司禮監孫隆疊石四周，廣其址，建喜清閣，但統稱曰‘湖心亭’。國朝重加葺治，左右翼以雕闌，上為層樓……。”『湖山便覽・卷三』

〈史料 1041〉

清漪園在圓明園西萬壽山之麓本名甕山乾隆十六年恭逢聖母皇太后六旬萬壽建大報恩延壽寺於山之陽命名萬壽山並疏導玉泉諸派匯於西湖易名曰昆明湖

昆明湖東西為長堤西堤之外為西湖其西南為養水湖

『欽定日下舊聞考・八』（北京史志書籍）（清代乾隆 38 年（1773 年）から乾隆 47 年（1782 年）完成）

〈史料 1042〉

蓬萊洲今為蓬島瑤臺、乃乾隆九年、皇上恭依避暑山莊三十六景四字題額之例更。『欽定日下舊聞考・卷八十』

〈史料 1043〉

蓬島瑤臺在福海中央、門三楹、南嚮正殿七楹、殿前東為暢襟樓、西為神洲三島。東偏為隨安室、西偏為日日平安報好音。由蓬島瑤臺東南度橋為東島、有亭為瀛海仙山。西北度橋為北島、正宇三楹。

蓬島瑤臺,四十景之一、舊名蓬萊洲、後易今名。額為皇上御書、門額曰鏡中閣、與暢襟樓、隨安室額皆御書。神洲三島日日平安報好音、瀛海仙山諸額皆世宗御書。『欽定日下舊聞考・卷八十二』

〈史料 1044〉

昆明池三百二十五頃,池中有豫章台及石鯨,刻石為鯨魚,長三丈。『三輔故事』(都城史籍)(作者是清代的張澍(1776-1847))

〈史料 1045〉

在苑內、造山為海周十餘里。水深數丈、中有方丈、蓬萊、瀛洲諸山、相去各三百步。山高水出百餘尺、上有通真觀、集靈臺、總仙宮分在諸山、別有浮橋水殿汜濫往來。『河南志・卷三』(地理志)(作者是清代的徐松(1781-1848))

〈史料 1046〉

夾水為堤。逶迤曲折。徑分三枝。列大小洲三。形若芝英。若云煙。復若如意。有二橋通舟楫。『永憲錄』(史料筆記)(成立は雍正6年(1728)以後)

〈史料 1047〉

乾隆十五年,甕山命名萬壽山,建行宮,改金海為昆明湖。明年更名清漪園。光緒十四年更名頤和園。『清史稿・志九十三』(史書)(1914年-1927年)

〈史料 1048〉

蓬島瑤台，在福海中央殿前，東為暢襟樓，西為神洲二島，東偏為隨安室，西偏為日月平安報好音。東南渡橋為東島，有亭為瀛海仙山，西北度橋為北島、接秀山房。『清稗類鈔·宮苑類』（清代見聞集）（中華民國 6 年（1917））

〈史料 1050〉

陶潛『桃源記』曰：晉太康中，武陵人捕魚，從溪而行，忘路遠近。忽逢桃花林，夾岸芳華鮮美，落英繽紛。林盡得山，山下有一小口，初極狹，行四五步，豁然開朗。屋宇連接，雞犬相聞，男女衣著，悉如外人。見漁父驚，為設酒食。雲先世避秦難，率妻子來此，遂與外隔。問今是何代，不知有漢、魏、晉。既出，白太守，遣人隨往尋之，迷不復得。『太平御覽·卷 663·道部·五·地仙』

〈史料 1051〉

天台山者，蓋山岳之神秀者也。涉海則有方丈、蓬萊，登陸則有四明、天台，皆元聖之所遊化，靈仙之所窟宅。夫其峻極之狀，嘉祥之美，窮山海之富，盡人神之壯麗矣。所以不列於五嶽，闕載於常典者，豈不以所立冥奧，其路幽迴，或倒景於重溟，或匿峰於千嶺。始經魑魅之塗，卒踐無人之境。舉世罕能登陟，王者莫由禋祀。故事絕於常篇，名標於奇紀，然圖像之興，豈虛也哉。非夫遺世玩道，絕粒茹芝者，烏能輕舉而宅之。非夫遠寄冥搜，篤信通神者，何肯遙想而存之。餘所以馳神運思，晝詠宵興，俛仰之間，若已再升者也。方解纓絡，永托茲嶺。不任吟想之至，聊奮藻以散懷。

太虛遼廓而無閼運自然之妙，有融而為川瀆，結而為山阜，嗟台岳之所奇挺，實神明之所扶持。蔭牛宿以曜峰，托靈越以正基，結根彌於華岱。直指高於九疑，應配天於唐典。齊峻極於周詩，邈彼絕域，幽邃窈窕。近智者，以習見而不之。之者，以路絕而莫曉。哂夏蟲之疑冰，整輕翮而思矯。理無隱而不彰，啟二奇以示兆。赤城霞起以建標，瀑布飛流以界

道，睹靈驗而遂徂忽。乎吾之將行，仍羽人於丹丘，尋不死之福庭，苟台嶺之可攀，亦何羨於層城，釋域中之常戀，暢超然之高情，被毛褐之森森，振金策之鈴鈴。披荒榛之蒙龍，陟峭嶠之崢嶸。濟檣溪而直進落五界，而迅徵跨穹窿之懸，磴臨萬丈之絕冥，踐莓苔之滑石，搏壁立之翠屏，攬樛木之長蘿，援葛藟之飛莖，雖一冒於垂堂，乃永存乎。長生必契誠於幽，昧履重險而逾平。既克於九折路，威夷而修通，恣心目之寥朗，任緩步之從容，藉萋萋之纖，草蔭落落之長松，覲翔鸞之裔裔，聽鳴鳳之嚶嚶，過靈溪而一濯疏。煩想於心胸，盪遺塵於旋流發五蓋之遊，蒙追羲農之絕軌。躡二老之元踪陟，降信宿迄於仙都。雙闕雲竦以夾路，瓊台中天而懸，居朱閣玲瓏於林間，玉堂陰映於高隅。彤雲斐亶以翼樞，皦月炯晃於綺疏。八桂森挺以凌霜，五芝含秀而晨敷。惠風佇芳於陽林，醴泉湧溜於陰渠。建木滅景於千尋琪樹，璀璨而垂珠。王喬控鶴以冲天，應真飛錫以躡虛。騁神變之，揮霍忽出，有而入無，於是遊覽，既週體靜心閒，害馬已去，世事都捐投刃，皆虛。目牛無全，凝思幽岩，朗詠長川爾。乃羲和亭，午遊氣高騫法鼓，琅琅以振響，眾香馥馥以揚煙。肆覲天宗爰集，通仙挹以元玉之膏漱，以華池之泉，散以像外之說，暢以無生之篇，悟遣有之不盡覺涉。無之有間泯，色空以合跡。忽即有而得元釋二名之。同出消一，無於三幡，恣語樂以終日；等寂默於不言，渾萬像以冥觀兀同體於自然。『欽定古今圖書集成·方輿彙編·山川典·第123卷』「遊天台山賦」晋代の孫綽

〈史料 1052〉

下落金庭洞天，乃分探之。始走至，至則為桐柏宮，九峰環裹，三井元湛址，如仰盂有平田數十頃，乃司馬承禎修鍊地。按『真誥』記吳有勾曲之金陵，越有桐柏之金庭，三災不生，洪波不登，是宮，肇於周，靈於晉，盛於唐，抃於梁宋。其為瑤池蕊室，玉宇丹台，白鹿青禽，靈芝瑞草者，不可勝紀。『欽定古今圖書集成·方輿彙編·山川典·第123卷』
「天台山記」王思任

〈史料 1053〉

費長房者，汝南人也。曾為市掾。市中有老翁賣藥，懸一壺於肆頭，及市罷，輒跳入壺中。市人莫之見，唯長房於樓上睹之，異焉，因往再拜奉酒脯。翁知長房之意其神也，謂之曰：“子明日可更來。”長房旦日復詣翁，翁乃與俱入壺中。唯見玉堂嚴麗，旨酒甘肴盈衍其中，共飲畢而出。翁約不聽與人言之。後乃就樓上候長房曰：“我神仙之人，以過見責，今事畢當去，子寧能相隨乎？樓下有少酒，與卿為別。”長房使人取之，不能勝，又令十人扛之，猶不舉。翁聞，笑而下樓，以一指提之而上。視器如一昇許，而二人飲之終日不盡。

長房遂欲求道，而顧家人為憂。翁乃斷一青竹，度與長房身齊，使懸之舍後。家人見之，即長房形也，以為縊死，大小驚號，遂殯葬之。長房立其傍，而莫之見也。於是遂隨從入深山，踐荊棘於群虎之中。留使獨處，長房不恐。又臥於空室，以朽索懸萬斤石於心上，眾蛇競來齧索且斷，長房亦不移。翁還，撫之曰：“子可教也。”複使食糞，糞中有三蟲，臭穢特甚，長房意惡之。翁曰：“子幾得道，恨於此不成，如何！”

長房辭歸，翁與一竹杖，曰：“騎此任所之，則自至矣。既至，可以杖投葛陂中也。”又為作一符，曰：“以此主地上鬼神。”長房乘杖，須臾來歸，自謂去家適經旬日，而已十餘年矣。即以杖投陂，顧視則龍也。家人謂其久死，不信之。長房曰：“往日所葬，但竹杖耳。”乃發塚剖棺，杖猶存焉。遂能醫療眾病，鞭笞百鬼，及驅使社公。或在它坐，獨自恚怒，人問其故，曰：“吾責鬼魅之犯法者耳。”

汝南歲歲常有魅，偽作太守章服，詣府門椎鼓者，郡中患之。時魅適來，而逢長房謁府君，惶懼不得退，便前解衣冠，叩頭乞活。長房呵之雲：“便於中庭正汝故形！”即成老鰲，大如車輪，頸長一丈。長房複令就太守服罪，付其一割，以敕葛陂君。魅叩頭流涕，持割植於陂邊，以頸繞之而死。

後東海君來見葛陂君，因淫其夫人，於是長房劾系之三年，而東海大旱。長房至海上，見其人請雨，乃謂之曰：“東海君有罪，吾前系於葛陂，今方出之，使作雨也。”於是雨立注。

長房曾與人共行，見一書生黃巾被裘，無鞍騎馬，下而叩頭。長房曰：“還它馬，赦汝死罪。”人問其故，長房曰：“此狸也，盜社公馬耳。”又嘗坐客，而使至宛市鮓，須臾還，

乃飯。或一日之閑，人見其在千里之外者數處焉。

後失其符，為眾鬼所殺。『後漢書・列傳・方術列傳下』

図版一覧

表	5
表 1 「蓬萊」の史料についての統計	5
表 2 「蓬萊」の段階表	5
表 3 「蓬萊」仙島の表現に関する用語統計	6
表 4 「瀛洲」の史料についての統計	7
表 5 「方丈」の史料についての統計	8
表 6 「方壺」の史料についての統計	8
表 7 「蓬萊」の段階と皇室庭園の関係	9
図	10
図 1 神仙思想の発展図	10
図 2 秦咸陽主な宮苑分布図	11
図 3 周秦漢唐都城変遷図	12
図 4 西漢長安主な宮苑分布図	13
図 5 西漢建章宮平面図	14
図 6 上林苑昆明池平面図	15
図 7 曹魏時代鄴城平面図	16
図 8 北齊鄴城平面図	16
図 9 北魏洛陽平面図	17
図 10 東晋、南朝建康平面図	18
図 11 唐洛陽平面図	19
図 12 唐長安平面図	20
図 13 唐代太極宮平面図	21
図 14 唐長安禁苑平面図	22
図 15 唐代長安大明宮平面復元図	23

図 16	太液池の發掘調査位置図.....	24
図 17	唐長安興慶宮平面想像図.....	25
図 18	唐長安近郊平面図.....	26
図 19	唐華清宮宮廷区平面想像図.....	27
図 20	北宋東京平面図.....	28
図 21	艮岳平面想像図.....	29
図 22	南宋臨安宮苑分部図.....	30
図 23	金中都と大寧宮の位置図.....	31
図 24	元代大都平面図.....	32
図 25	元大都太液池示意图.....	33
図 26	元代万歲山示意图.....	34
図 27	明北京西苑と大内御苑の平面図.....	35
図 28	清代乾隆時期の北京西苑平面図.....	36
図 29	清代乾隆時期の瓊華島平面図.....	37
図 30	康熙時期北京北西郊外の離宮御苑分部図.....	38
図 31	清代雍正時期の圓明園平面図.....	39
図 32	清代乾隆時期の圓明園平面図.....	40
図 33	圓明園蓬島瑶臺.....	41
図 34	圓明園蓬島瑶臺.....	42
図 35	李思訓 山水樓閣.....	43
図 36	清漪園平面図.....	44
図 37	頤和園平面図.....	45
図 38	清漪園と杭州西湖の比較.....	46
図 39	飛鳥諸宮変遷図.....	47
図 40	奈良時代前半の平城宮.....	48

図 41	第一期の園池平面図.....	49
図 42	第二期園池の平面図.....	50
図 43	第三期園池の平面図.....	51
図 44	東院庭園復元整備平面図.....	52
図 45	平等院鳳凰堂本尊後壁浄土変相中にみえる宝楼閣.....	53
図 46	平安京朝堂院図.....	54
図 47	寝殿造の構造.....	55
図 48	神泉苑復原図.....	55
図 49	冷然院第 3 期復原図.....	56
図 50	堀河天皇里内裏時代の閑院第推定復原図.....	57
写真	58
写真 1 と 2	今北京北海公園における元万寿山の小玉殿の黒玉酒甕.....	58
写真 3 と 4	如意.....	59
写真 5	酒船石.....	60
写真 6	亀形石槽の案内文.....	61
写真 7	亀形石槽.....	61
写真 8	亀形石槽.....	62
写真 9	須弥山石.....	63
写真 10	中山靖王墓出土の博山炉.....	64
写真 11	百済金銅大香炉.....	65
写真 12	凤鸟衔环铜熏炉.....	66
写真 13	第二期園池の航空写真.....	67
写真 14	第二期の池底と護岸の石敷きの様子.....	67
写真 15	第二期西南隅の蛇行溝.....	68
写真 16	第三期園池南西部の州浜の状況.....	69

写真 17	第三期北側築山の石組.....	69
写真 18	第三期北側築山の石組.....	70
写真 19	復元された東院庭園.....	71
写真 20	仮山（正倉院宝物）	72
写真 21	復元整備後の築山立石組.....	72

表

表 1 「蓬莱」の史料についての統計

別紙

表 2 「蓬莱」の段階表

段階	時期	時代	「神話蓬莱」	「道教蓬莱」	一般的な仙境	民間信仰
第一段階 (第 1 時期)	発生期	上古時代(約紀元前 3000 年-約紀元前 2070 年)から	記録がないが、既にあると推測			
		戦国時代(紀元前 453 年-紀元前 221 年)まで	文献記載に出現する			
第二段階 (第 2 時期)	盛期	戦国時代(紀元前 453 年-紀元前 221 年)から 東漢末期道教出現する前(126 年)まで	文献の記載が多くなり、皇帝の求仙活動と関係ある			
第三段階 (第 3、4、5 時期)	派生Ⅰ期 (「道教蓬莱」の萌芽期)	東漢末期道教出現する時(126 年-144 年)から、六朝(222 年-589 年)『十洲記』完成まで	多少変化されている	道教典籍に出現しているが、概念は曖昧である		
	派生Ⅱ期 (「道教蓬莱」の成立期)	六朝(222 年-589 年)『十洲記』完成から、隋代の初め(581 年)まで		「蓬莱」の道教仙境体系における位置付けが明らかになる		
	派生Ⅲ期 (「道教蓬莱」の発展期)	隋代の初め(581 年)から 宋代の終わり(1279 年)まで		「道教蓬莱」として発展する	出現	
第四段階	多元期	元代の始め(1271 年)から		応用	応用	出現
		清代の終わり(1912 年)まで				

表3 「蓬莱」仙島の表現に関する用語統計

「蓬莱」仙島の表現に関する用語	「蓬莱」の別称	出現数
蓬瀛（昆閼）		87
	蓬壺	60
	蓬山（瀛島）	38
	蓬島	28
	蓬海	8
	蓬丘	7
	蓬閼	3
蓬仙		3
	蓬碣	2
	方蓬	2
	蓬洲	2
蓬峦仙仗		1
鳳皇翔于蓬階兮	蓬階	1
蓬客		1
甲觀齋蓬行		1
	蓬閼仙宮	1
	蓬岫	1
	蓬渚	1

表 4 「瀛洲」の史料についての統計

文献	年代	東海三つ (五つ) 仙島中の 一つ	東海十洲 中の一つ	道教に 関する 神山	庭園中の配 置	唐代士人榮譽をも らって、仙境瀛洲 に至るように
列子	戦国 紀元前 475 年－紀元前 221 年	1				
史記	西漢 紀元前 109 年－紀元前 91 年	2			2	
漢書	新－東漢 紀元 36 年－紀元 111 年	1			1	
後漢書	南北朝 紀元 420 年－紀元 445 年	1			1	
抱朴子	晋 紀元 300 年 －紀元 343 年	1				
神仙伝		1				
三国志	西晋 紀元 265 年－紀元 300 年	1				
芸文類聚	唐 紀元 624 年	10			2	
通典	唐 紀元 801 年	1				
西遊記	明 紀元 1520 年 －紀元 1580 年	8				
太平御覧	北宋 紀元 977 年－紀元 984 年	14			5	
太平广記		1	1			
玄怪録	唐	1			2	
全唐詩	清 紀元 1705 年	42		8	3	2
康熙字典	清 紀元 1710 年 －紀元 1716 年	2			1	
総計		87	1	8	17	2

表 5 「方丈」の史料についての統計

別紙

表 6 「方壺」の史料についての統計

文献	年代	方の壺	東海三つ（五つ） 仙島中の一つ	庭園中の配置
列子	戦国 紀元前 475 年 －紀元前 221 年		1	
後漢書	南北朝 紀元 420 年 －紀元 445 年			1
儀礼	戦国 紀元前 475 年 －紀元前 221 年	2		
太平御覧	北宋 紀元 977 年－ 紀元 984 年	1	4	
全唐詩	清 紀元 1705 年		8	
康熙字典	清 紀元 1710 年－ 紀元 1716 年		2	

表7 「蓬莱」の段階と皇室庭園の関係

段階	時期	時代	「神話蓬 萊」	「道教蓬 萊」	一般 的な 仙境	民間 信仰	庭園 の時 代	「蓬萊」を配置し た庭園
第一段階 (第 1 時 期)	発生期	上古時代(約紀 元前 3000 年- 約紀元前 2070 年)から 戦国時代(紀元 前 453 年-紀元 前 221 年)まで	記録がないが、既 にあると推測					
			文献記載 に出現す る					
第二段階 (第 2 時 期)	盛期	戦国時代(紀元 前 453 年-紀元 前 221 年)から 東漢末期道教 出現する前 (126 年)まで	文献の記 載が多く なり、皇 帝の求仙 活動と関 係ある				秦	蘭池宮
							西漢	長安上林苑建章 宮
第三段階 (第 3、 4、5 時期)	派生Ⅰ期 (「道教 蓬萊」の 萌芽期)	東漢末期道教 出現する時 (126 年-144 年)から、六 朝(222 年- 589 年)『十洲 記』完成まで	多少変化 されてい る	道教典籍に 出現してい るが、概念 は曖昧であ る	出現			
	派生Ⅱ期 (「道教 蓬萊」の 成立期)	六朝(222 年- 589 年)『十洲 記』完成か ら、隋代の初 め(581 年)まで		「蓬萊」の 道教仙境体 系における 位置付けが 明らかにな る			北魏	洛陽華林園
				南朝			建康華林園	
	派生Ⅲ期 (「道教 蓬萊」の 発展期)	隋代の初め (581 年)から 宋代の終わり (1279 年)ま で		「道教蓬 萊」として 発展する			隋代	洛陽西苑
							唐代	長安大明宮
							北宋	東京艮岳
	第四段階	多元期		元代の始め (1271 年)か ら 清代の終わり (1912 年)ま で			応用	応用
明代			西苑(不明)					
			清代		西苑(不明)			
			清代		避暑山莊(不明)			
			清代		圓明園			
			清代		清漪園(不明)			

図

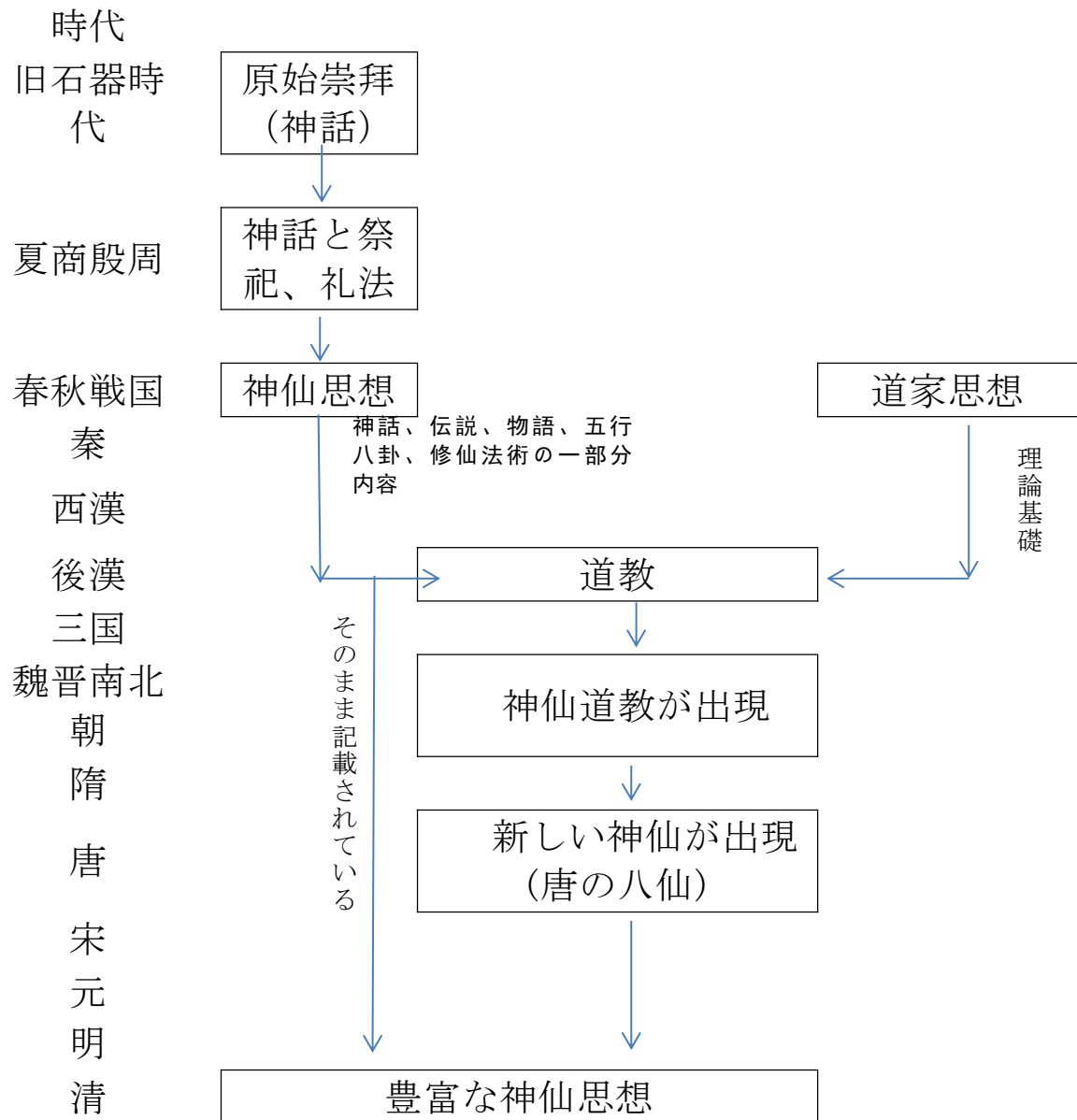


図1 神仙思想の発展図

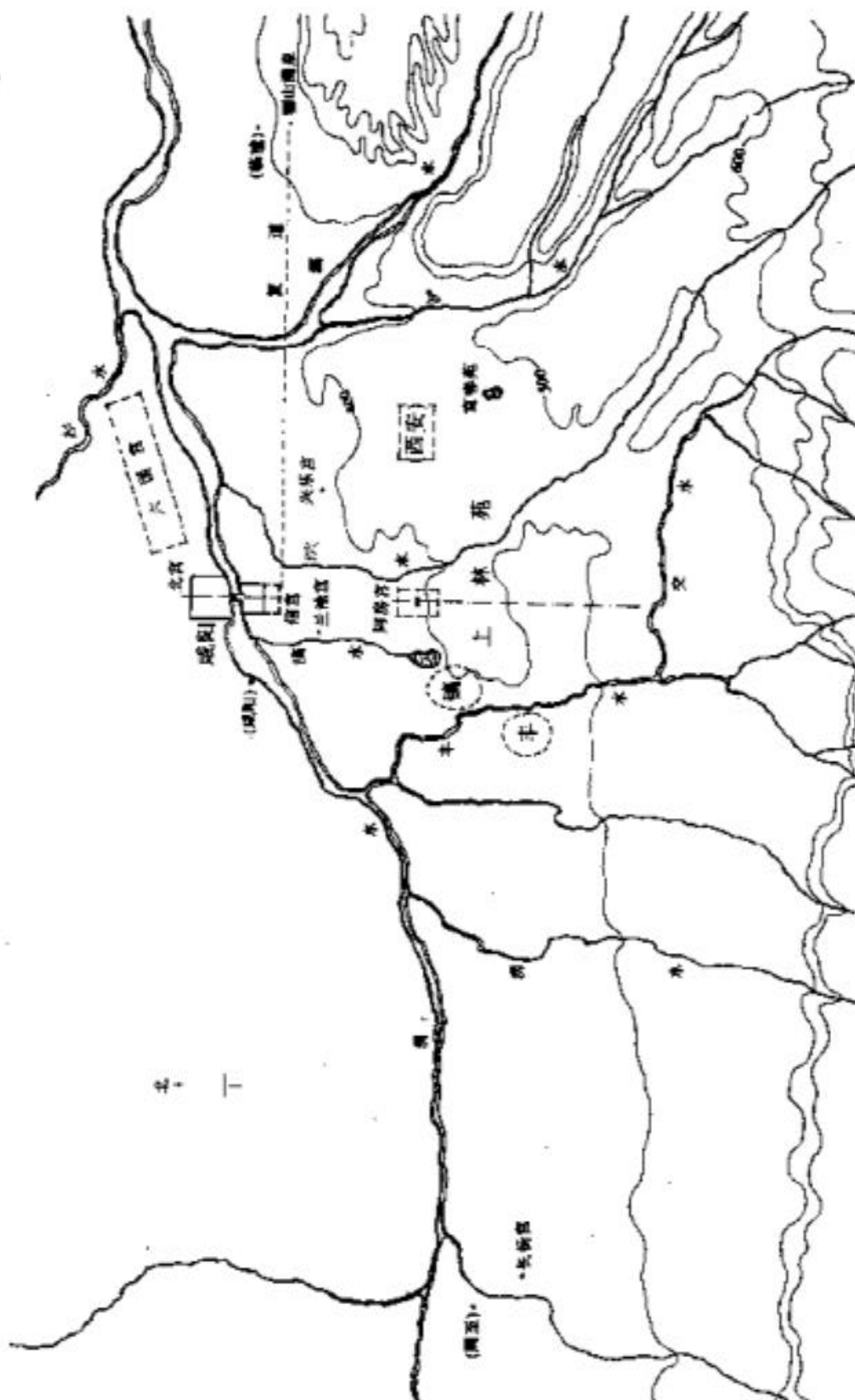


図2 秦咸陽主な宮苑分布図

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年.p26

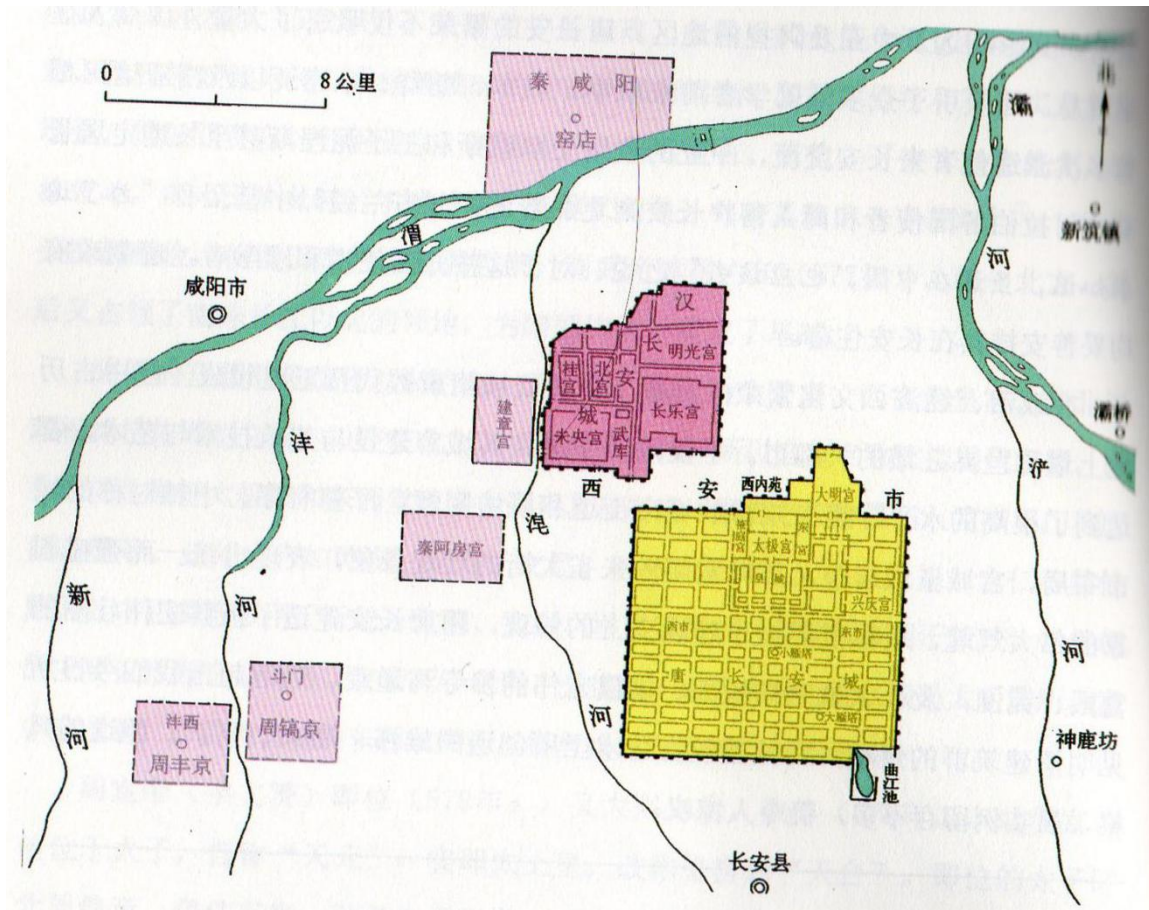


图3 周秦汉唐都城变迁图

史念海『西安历史地图集』西安地图出版社.1996年.



图4 西漢長安主な宮苑分布図

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年.p27

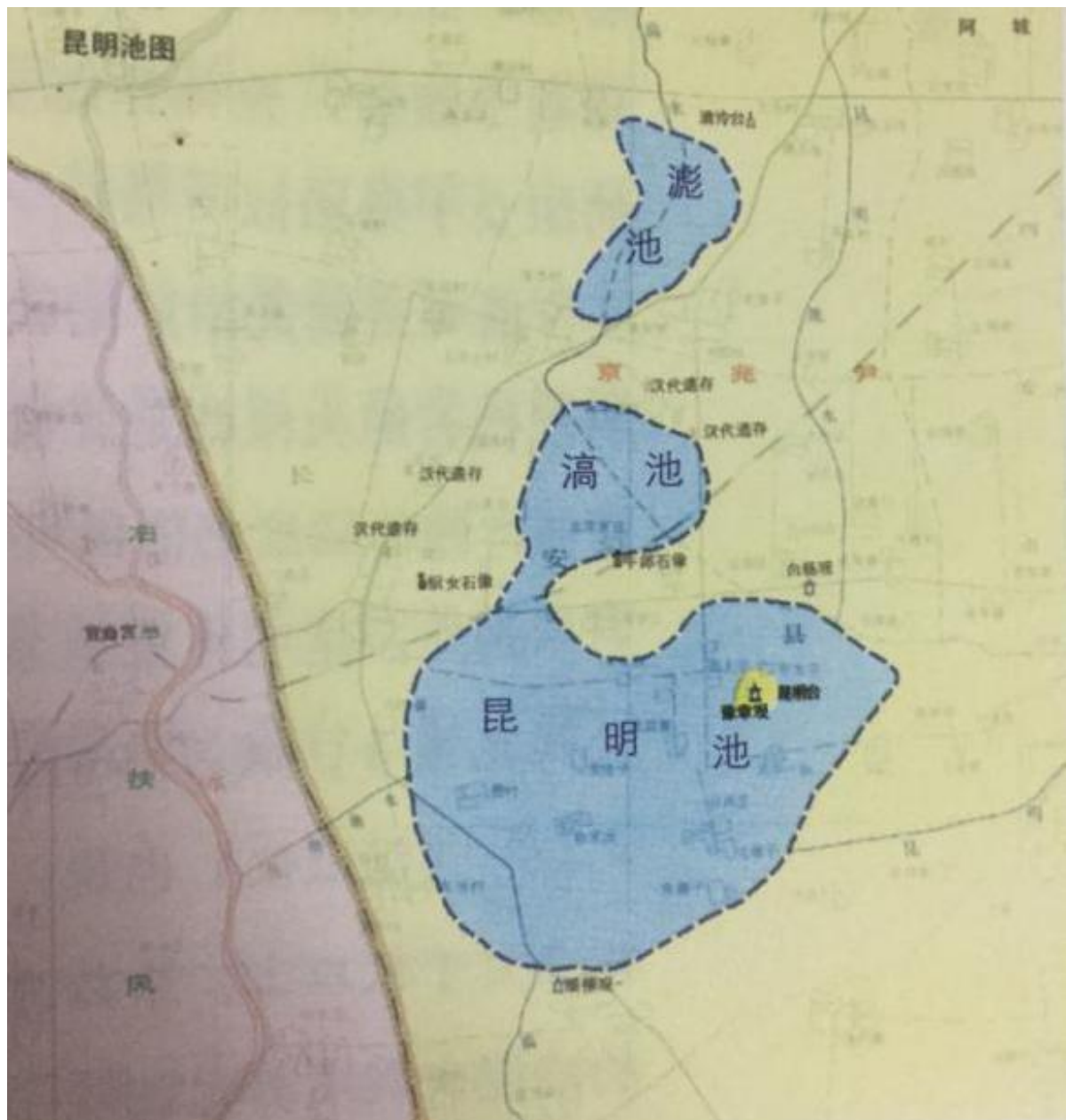


图 6 上林苑昆明池平面图

史念海『西安歷史地圖集』西安地圖出版社.1996 年.

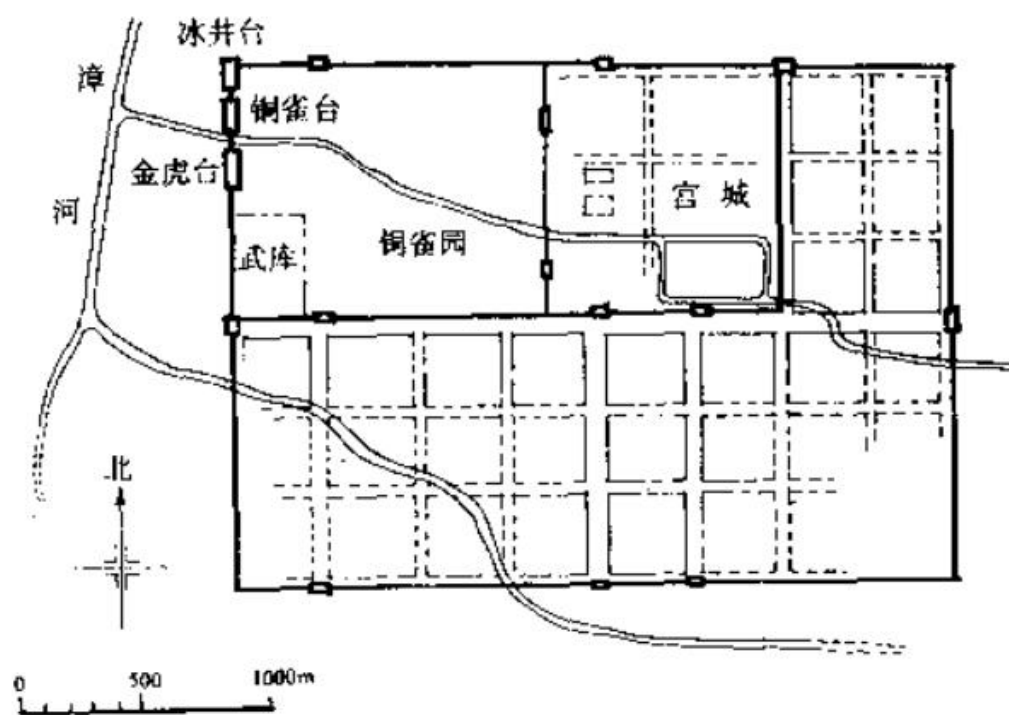


图7 曹魏时代鄴城平面图 周维权『中国古典园林史』清华大学出版社.1990年.p49

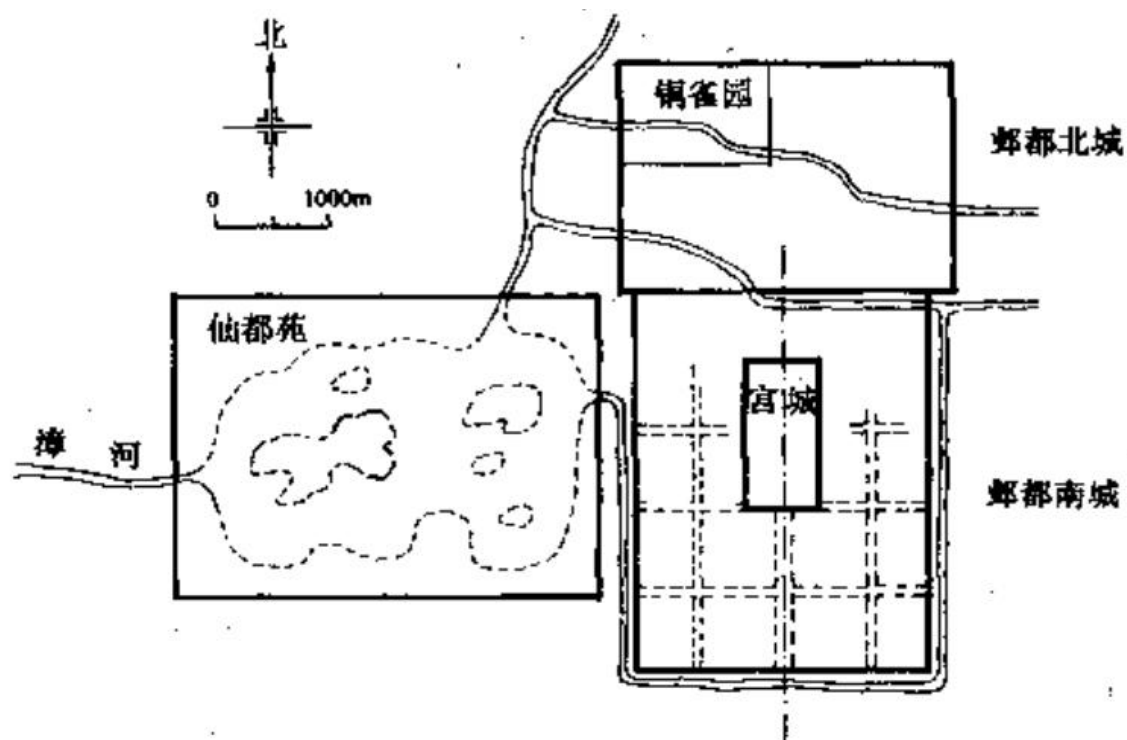


图8 北齐鄴城平面图 周维权『中国古典园林史』清华大学出版社.1990年.p50

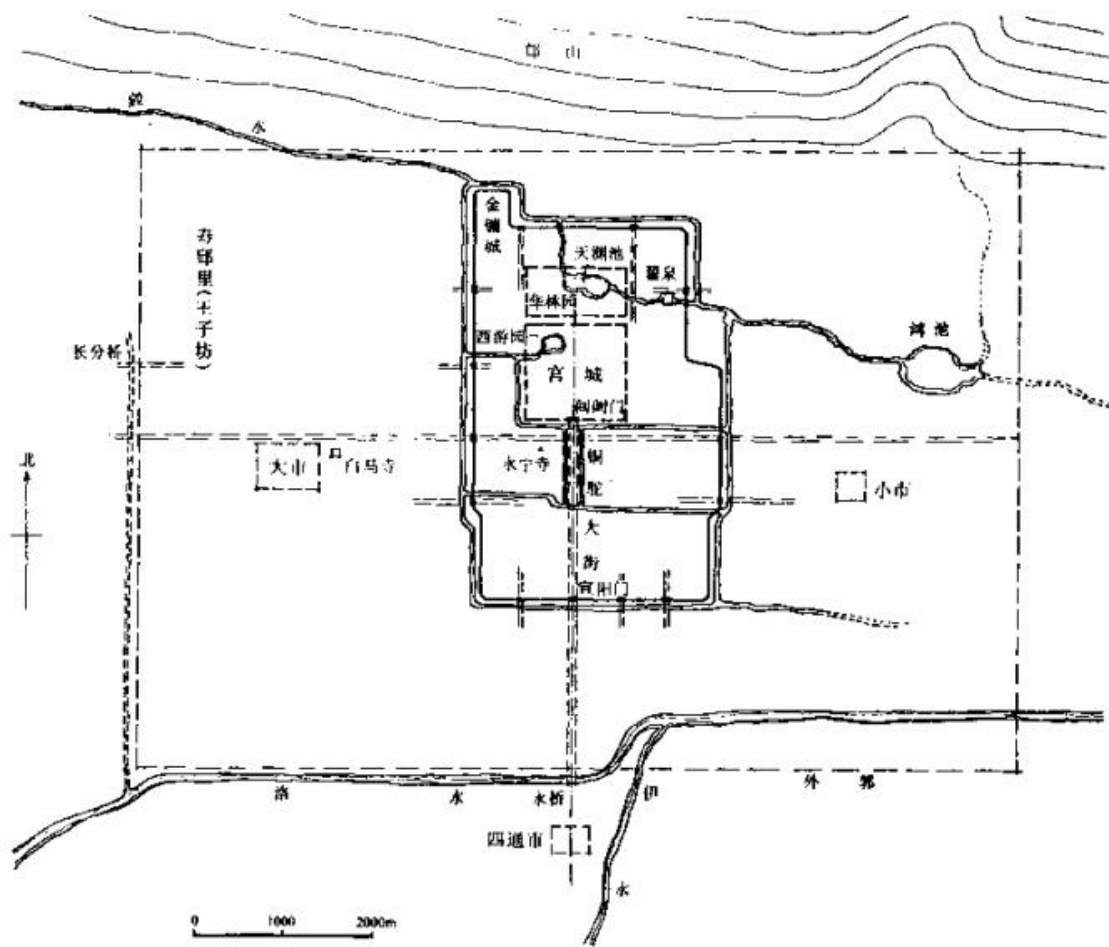


图 9 北魏洛陽平面图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p52

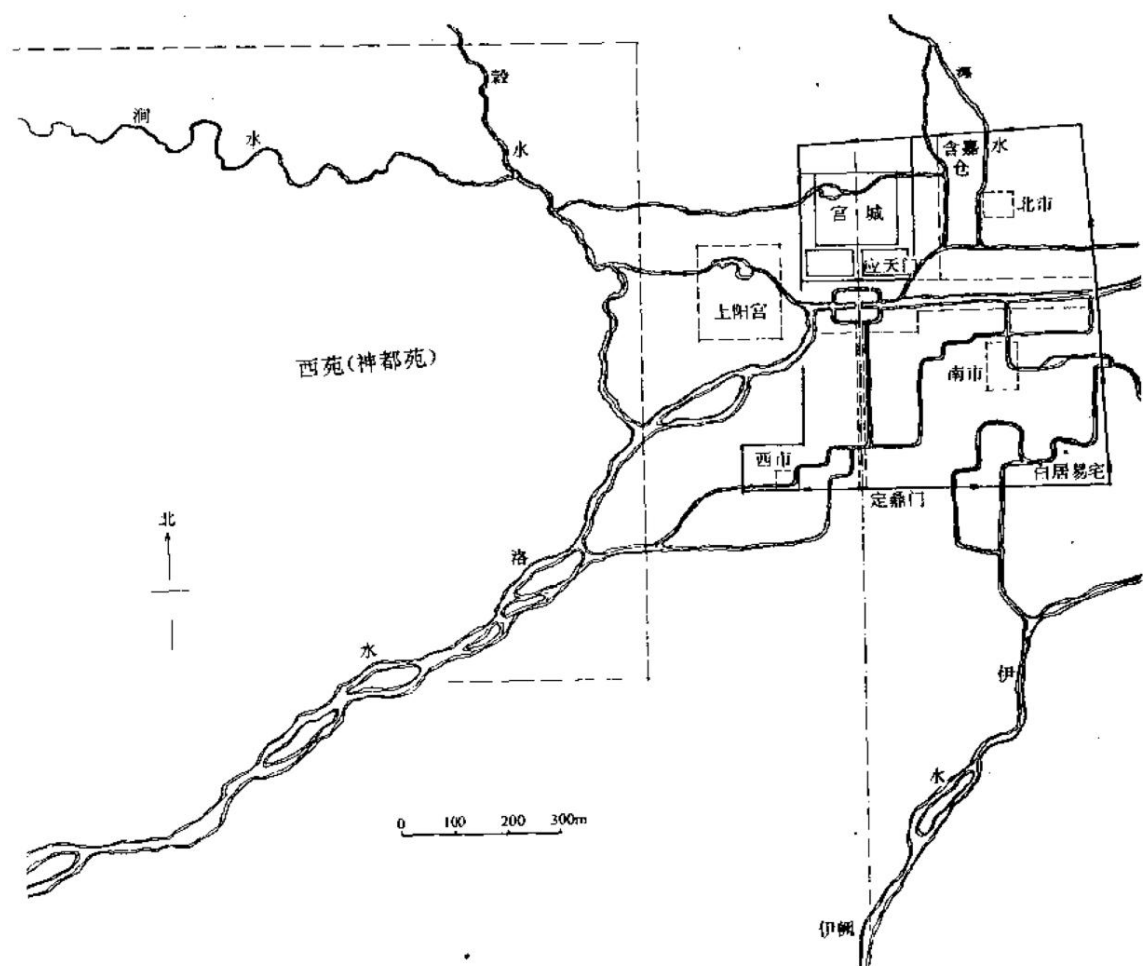


图 11 唐洛陽平面圖

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p65

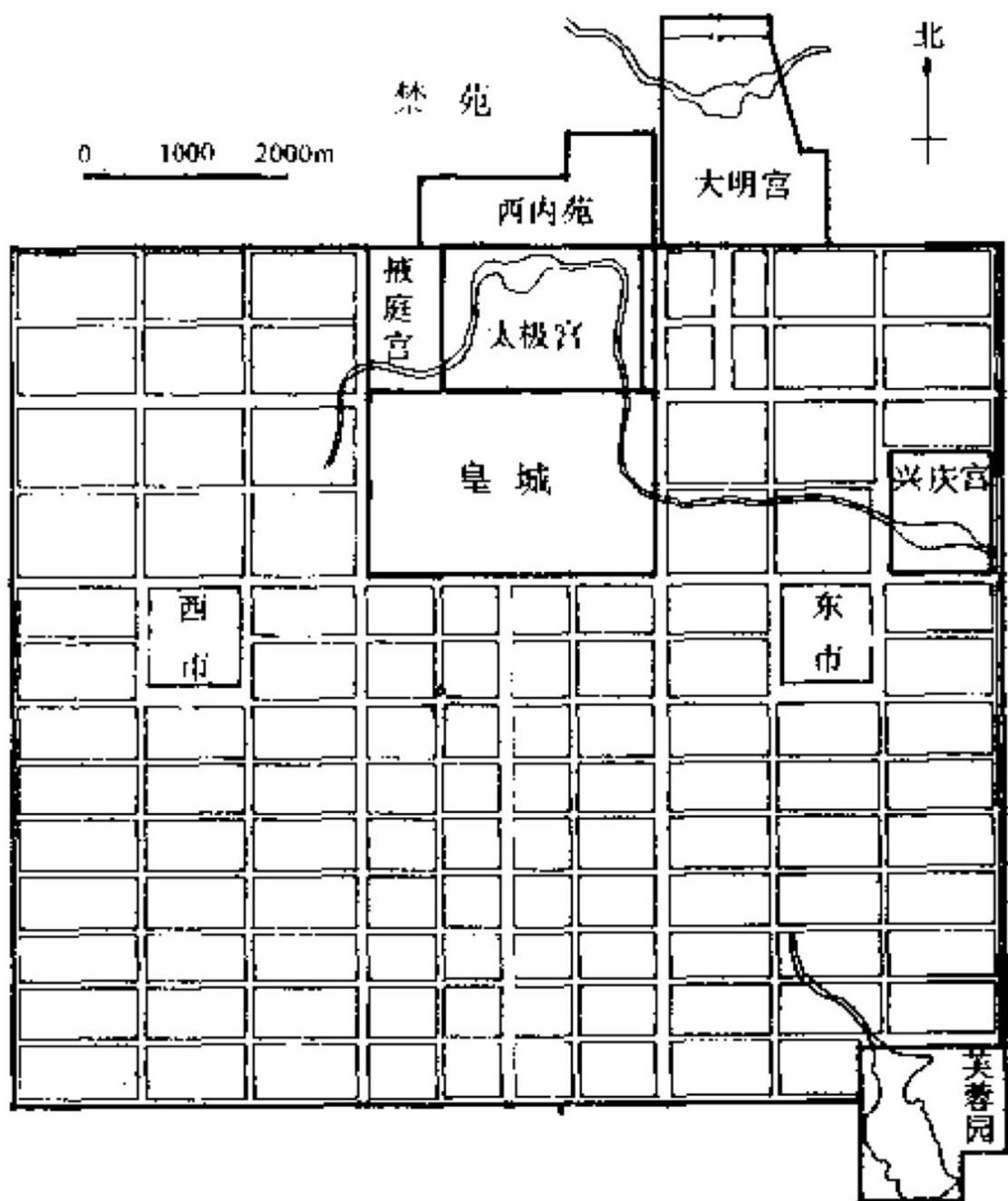


图 12 唐长安平面图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p63

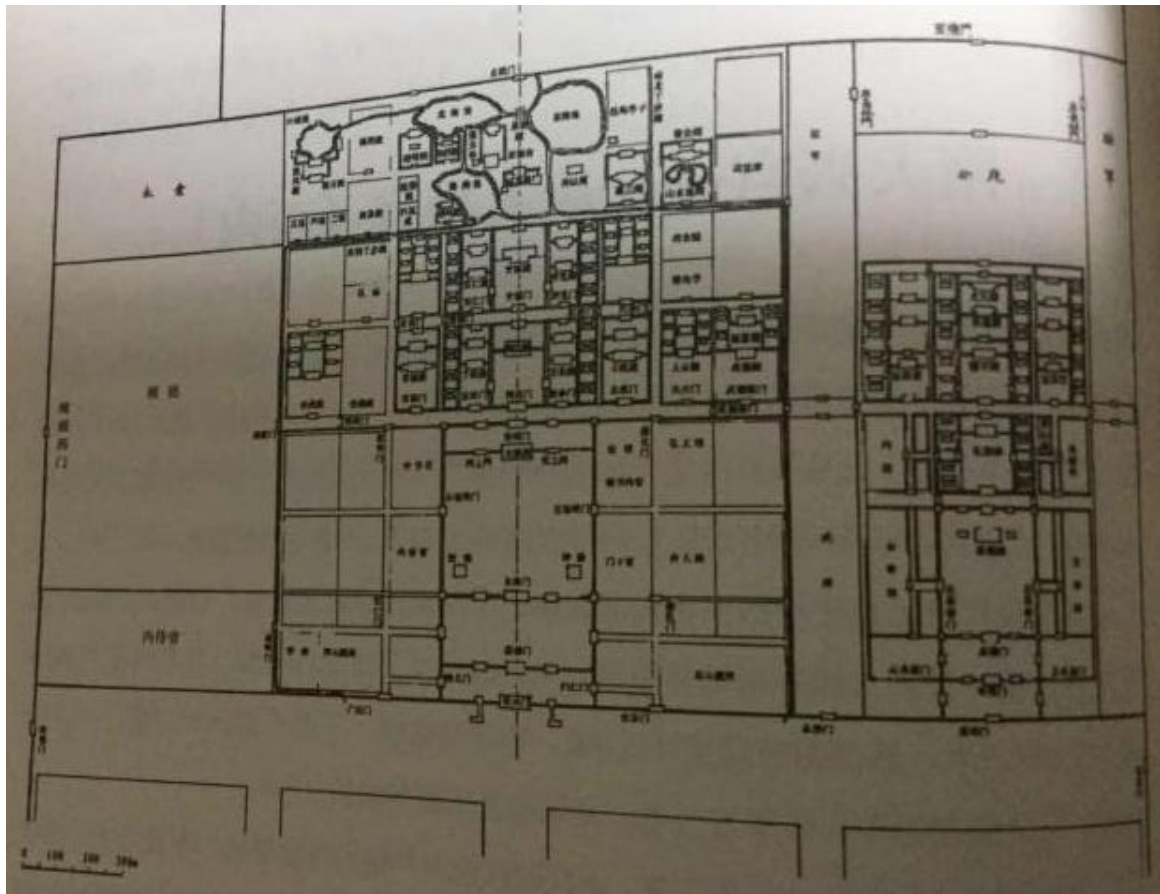


图 13 唐代太極宮平面圖

傅憲年『中国古代建築史 第二卷』中国建築工業出版社. 2001 年

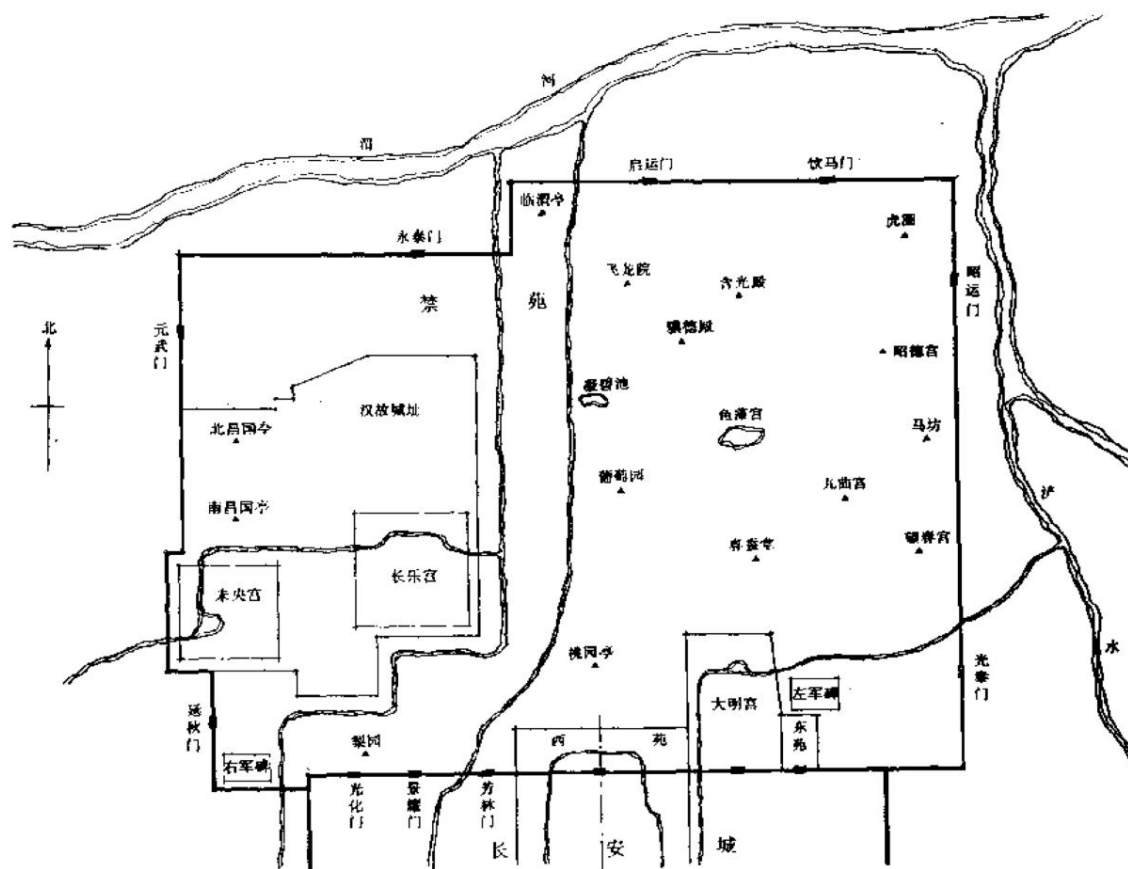


图 14 唐长安禁苑平面图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p67



図 16 太液池の發掘調査位置図

今井晃樹「唐長安城大明宮太液池の共同發掘調査」『奈良文化財研究所紀要』2003 年.

pp3-5

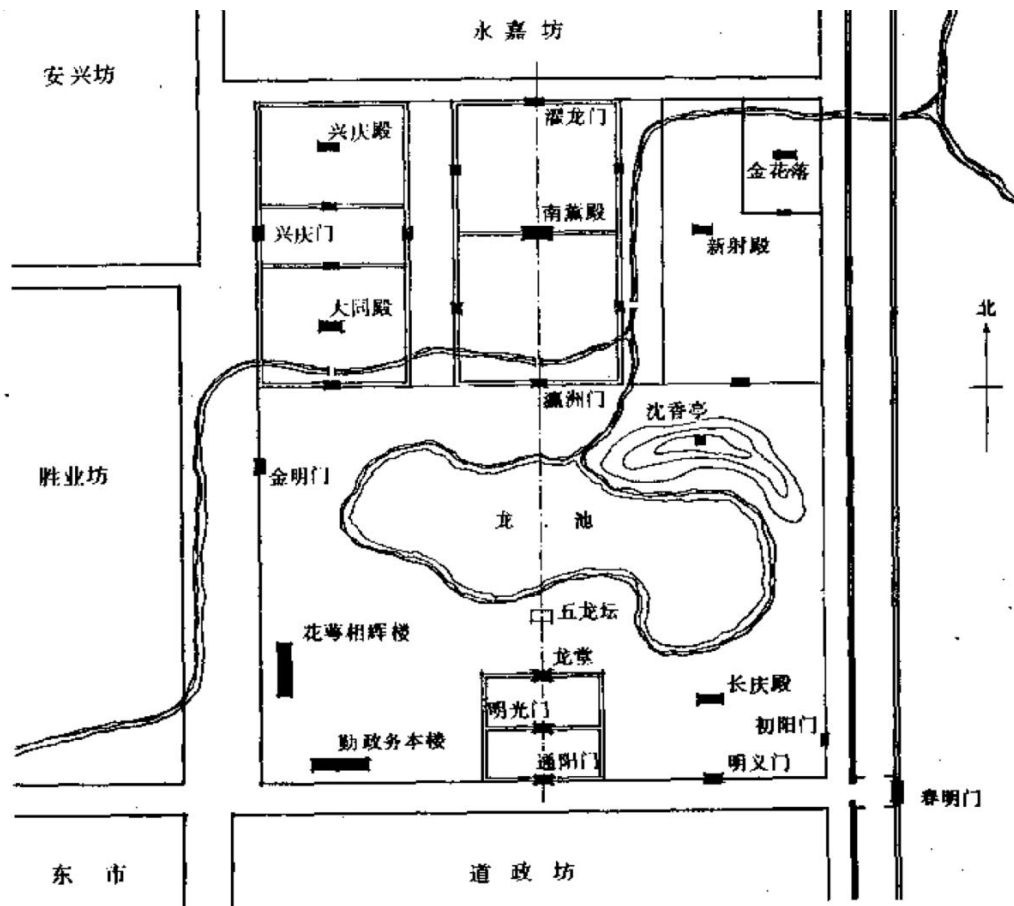


圖 17 唐長安興慶宮平面想像圖

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p70

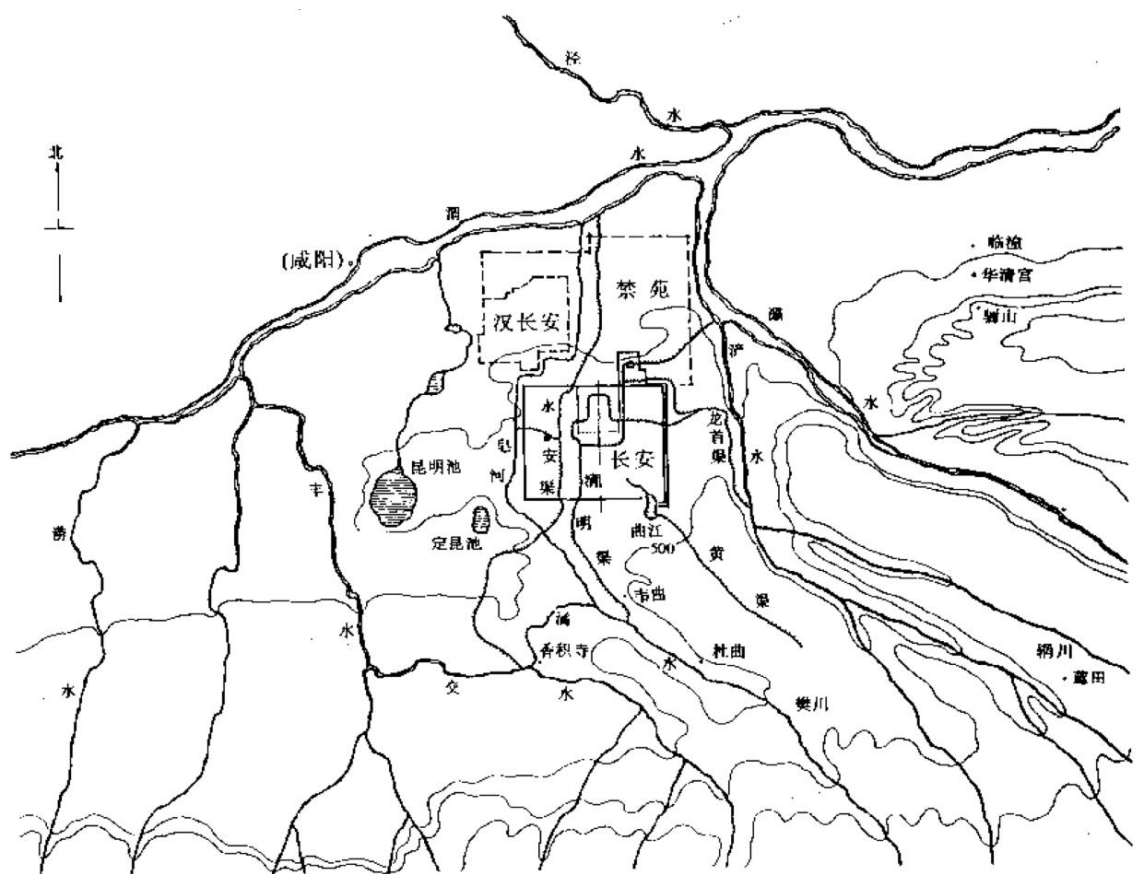


图 18 唐长安近郊平面图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p64

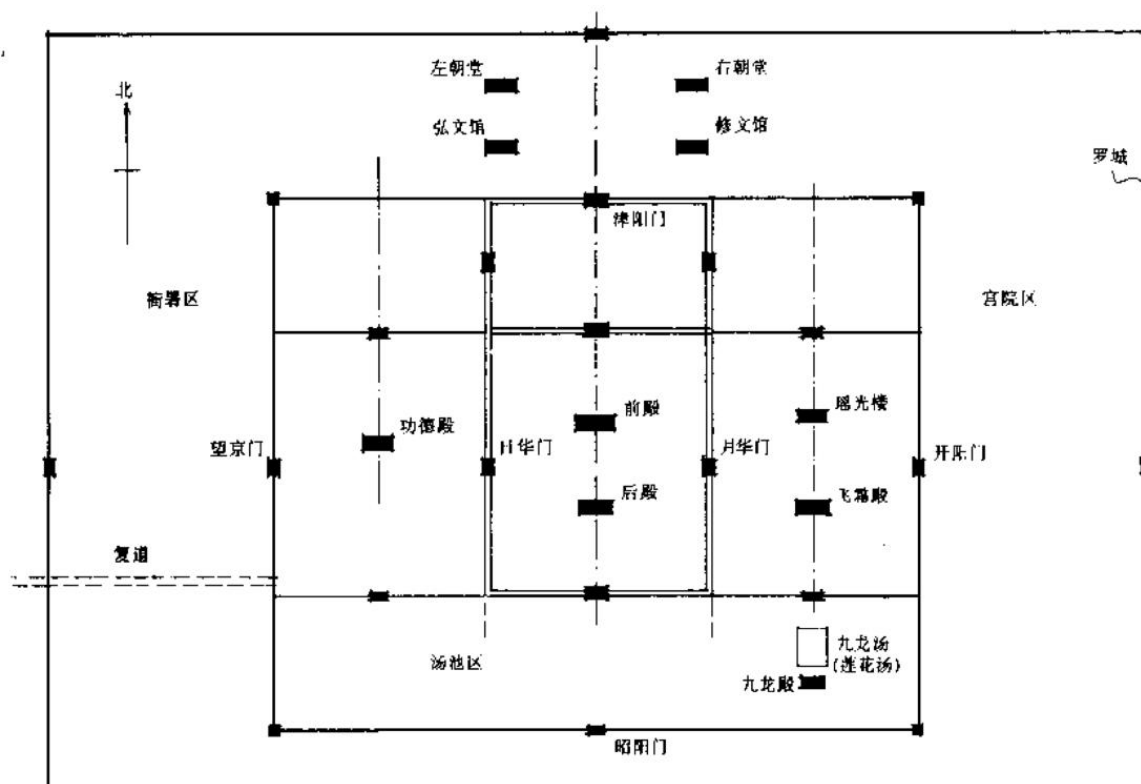


图 19 唐華清宮宮廷区平面想像图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p73

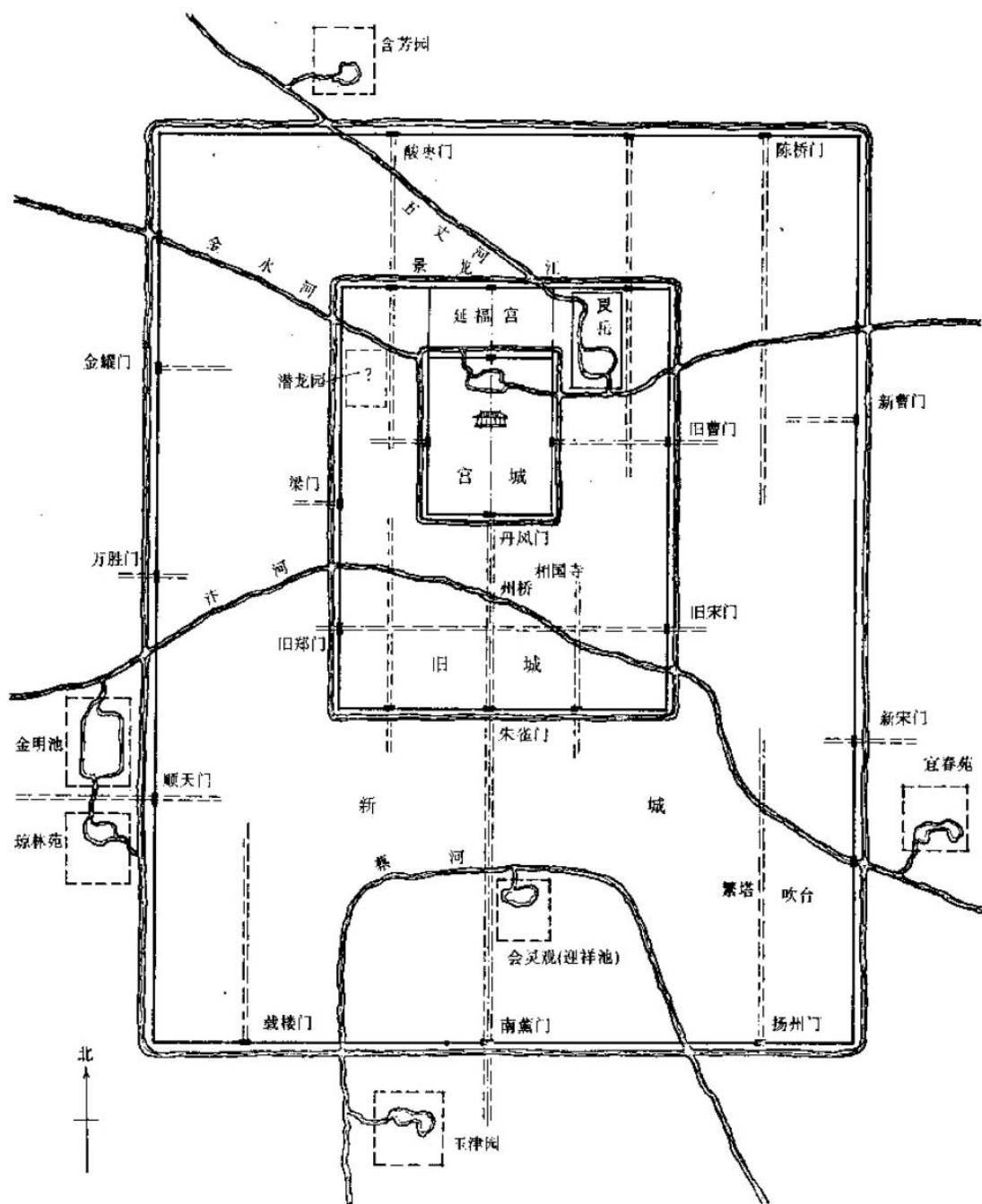


图 20 北宋東京平面图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p99

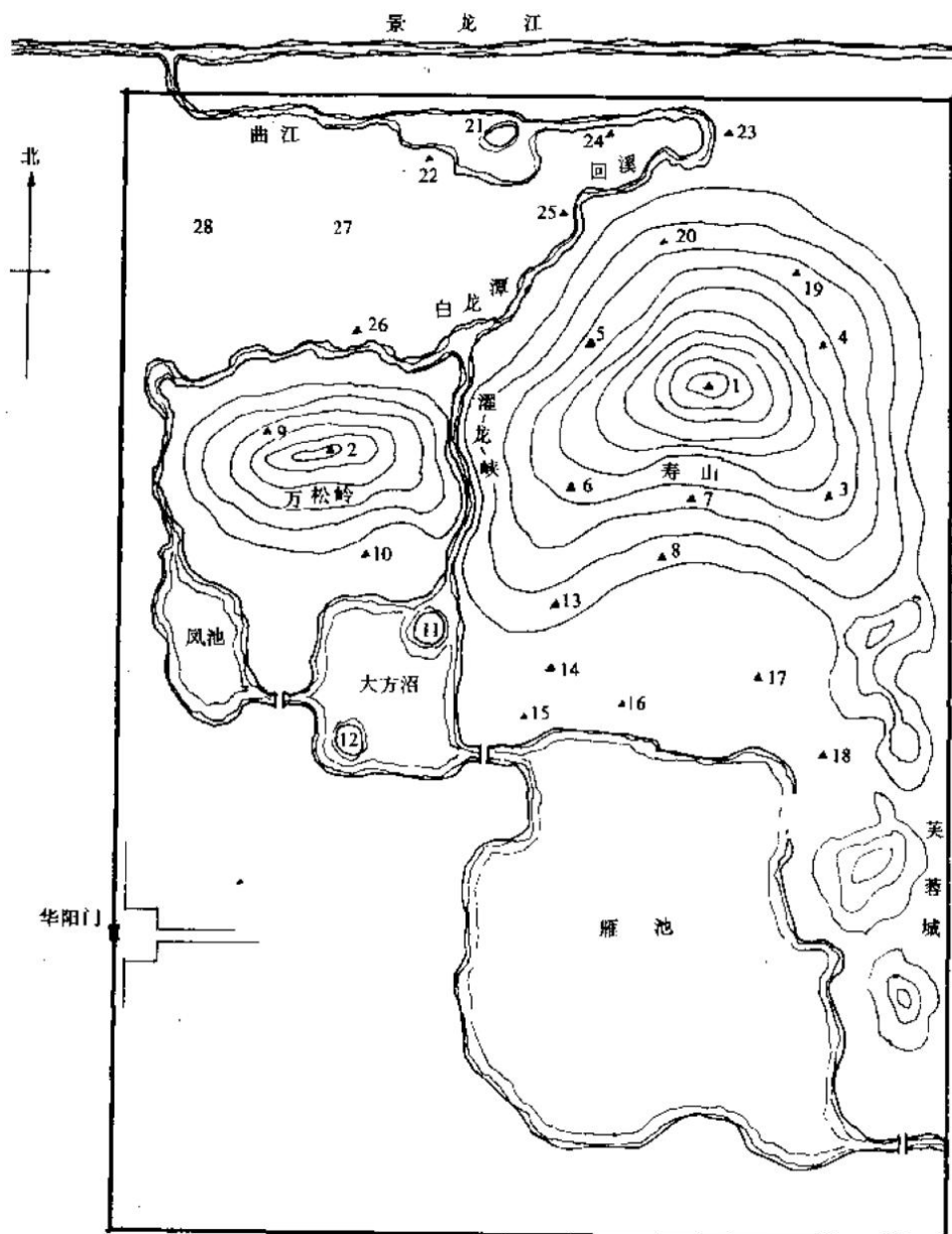


图 5 5 艮岳平面设想图

1-介亭 2-巢云亭 3-极目亭 4-蔚森亭 5-麓云亭 6-半山亭 7-降霄楼 8-龙吟堂 9-倚翠楼 10-巢凤堂 11-芦渚 12-梅渚
13-揽秀轩 14-倚绿华堂 15-承岚亭 16-崑云亭 17-书馆 18-八仙馆 19-凝观亭 20-圆山亭 21-蓬壶 22-老君洞 23-萧闲馆
24-漱玉轩 25-高阳酒肆 26-胜筠庵 27-药寮 28-西庄

图 21 艮岳平面想像图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年.p102

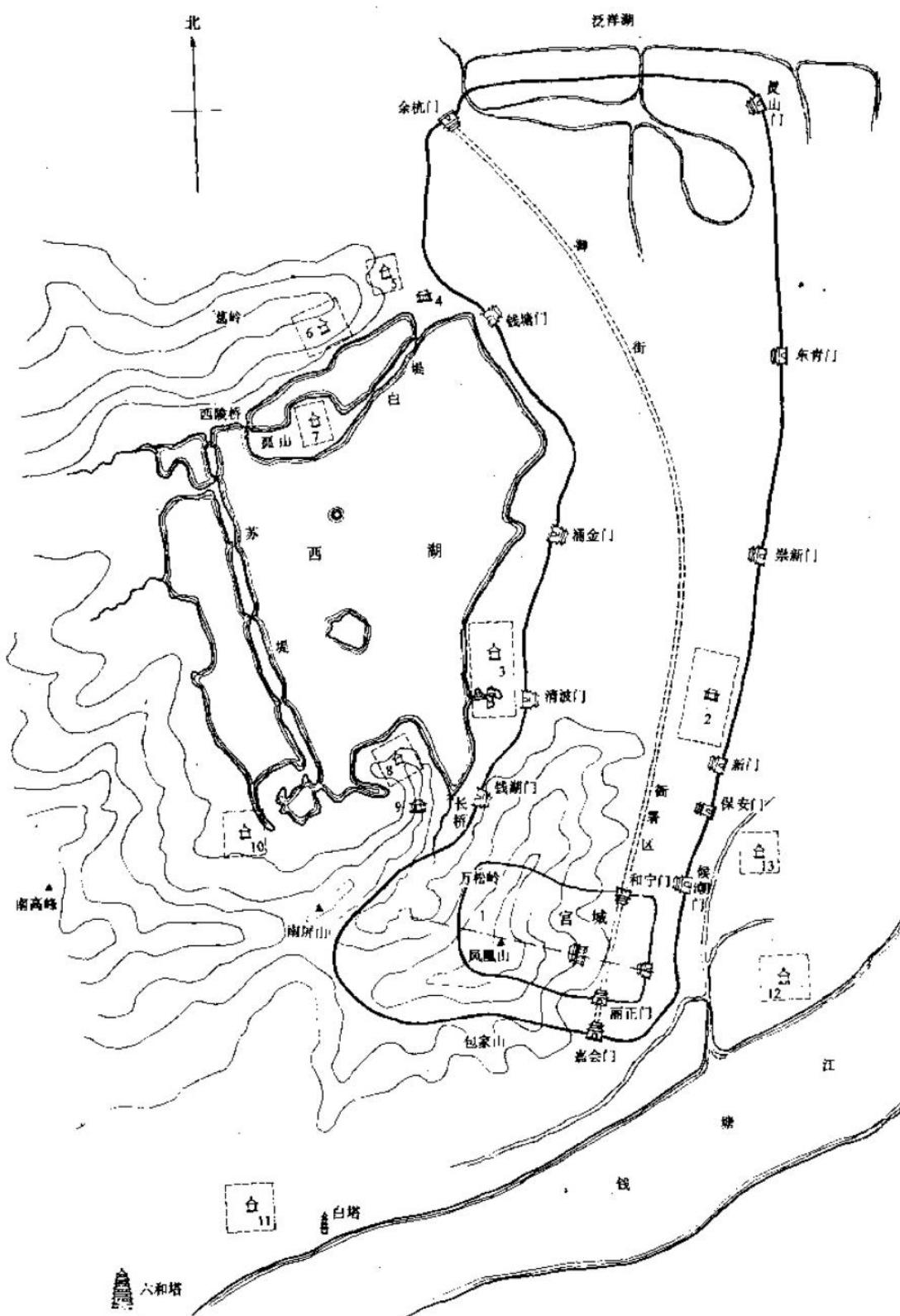


图 5 8 南宋临安主要宫苑分布图

- 1-大内御苑 2 德寿宫 3-聚景园 4 昭庆寺 5-玉蕊园 6-集芳园 7-延祥园
8-屏山园 9 净慈寺 10 庆乐园 11-玉津园 12-富景园 13-五柳园

图 22 南宋临安宫苑分部图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p108

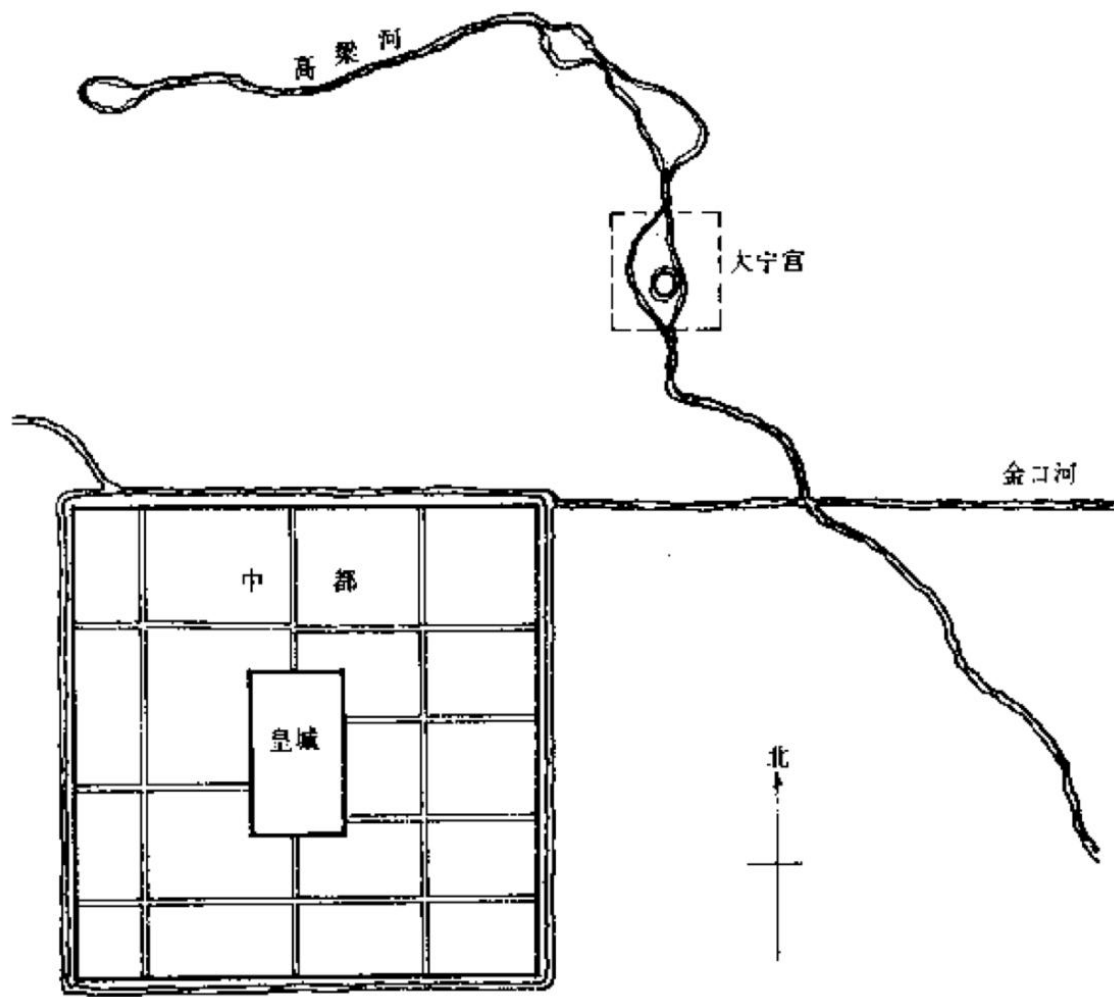


図 23 金中都と大寧宮の位置図

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年.p111

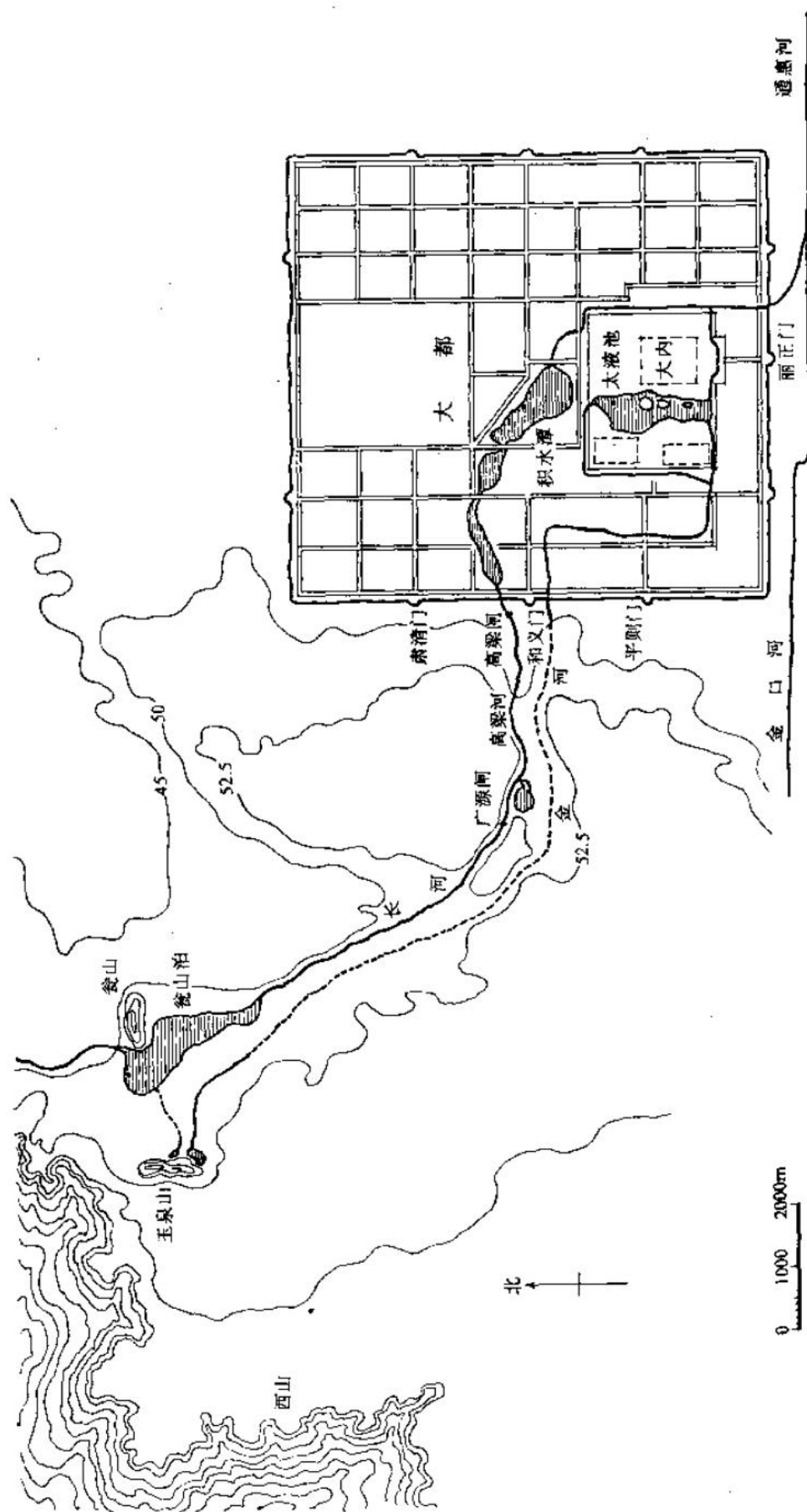


图 24 元代大都平面图 周维权『中国古典园林史』清华大学出版社.1990 年.p113

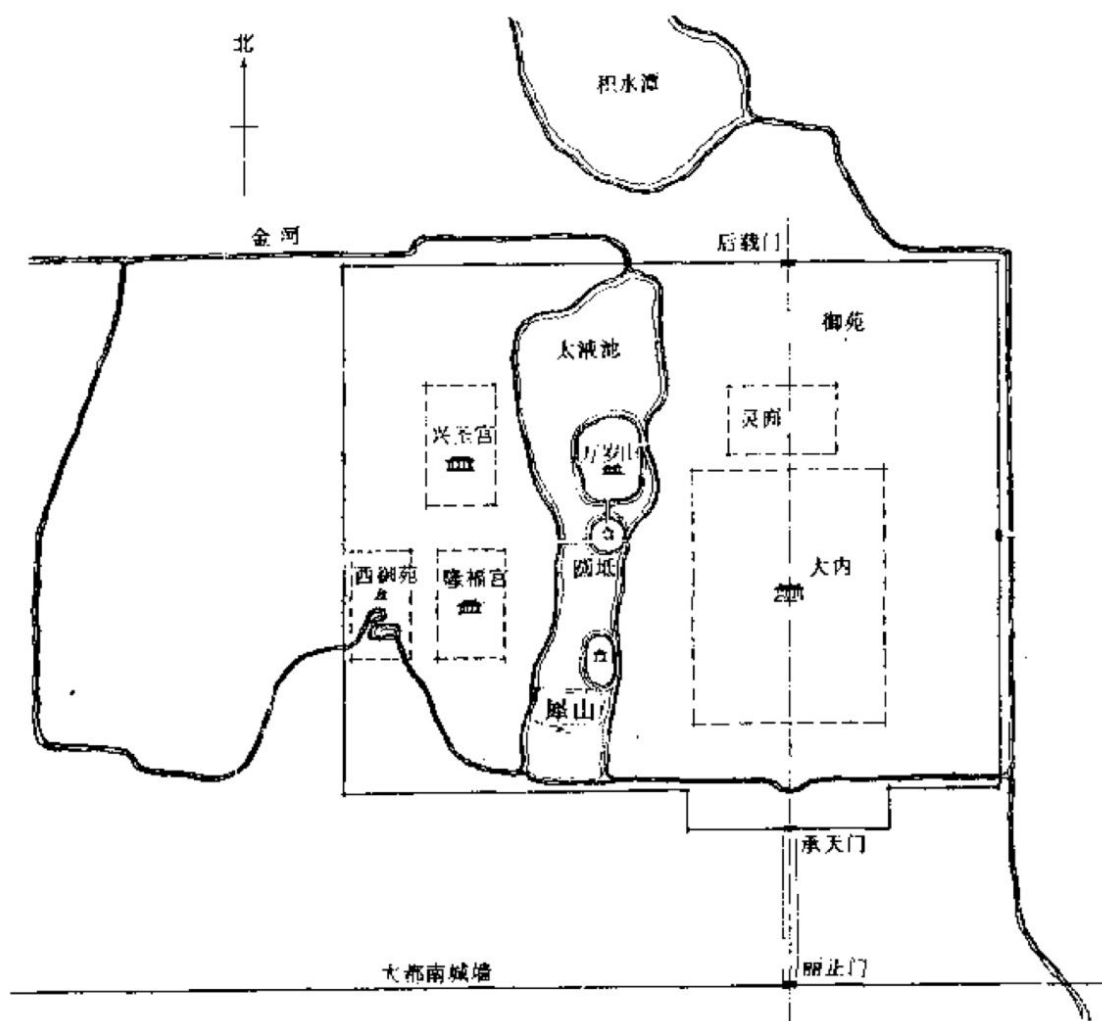


图 25 元大都太液池示意图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p114

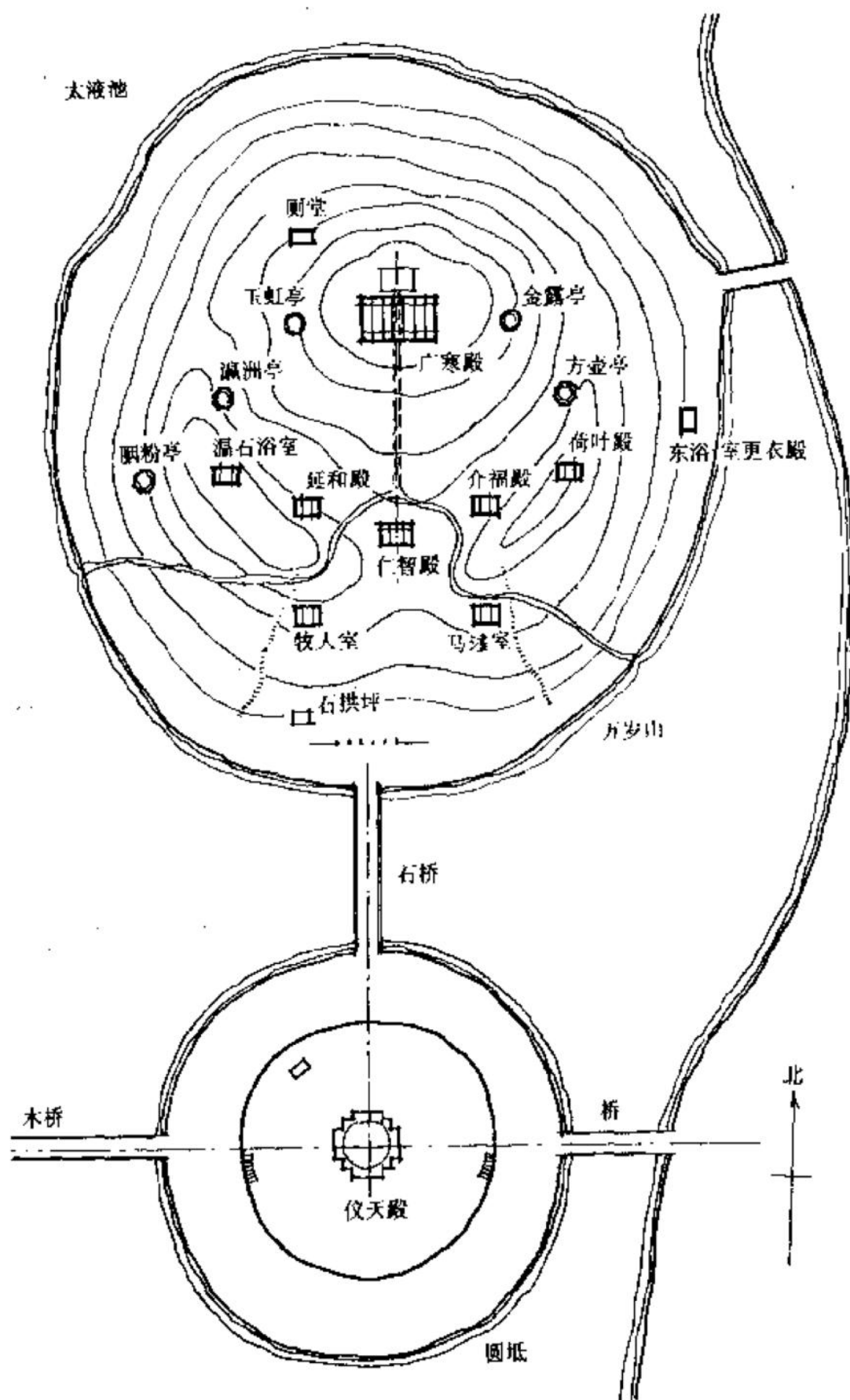


图 26 元代万歲山示意图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p115

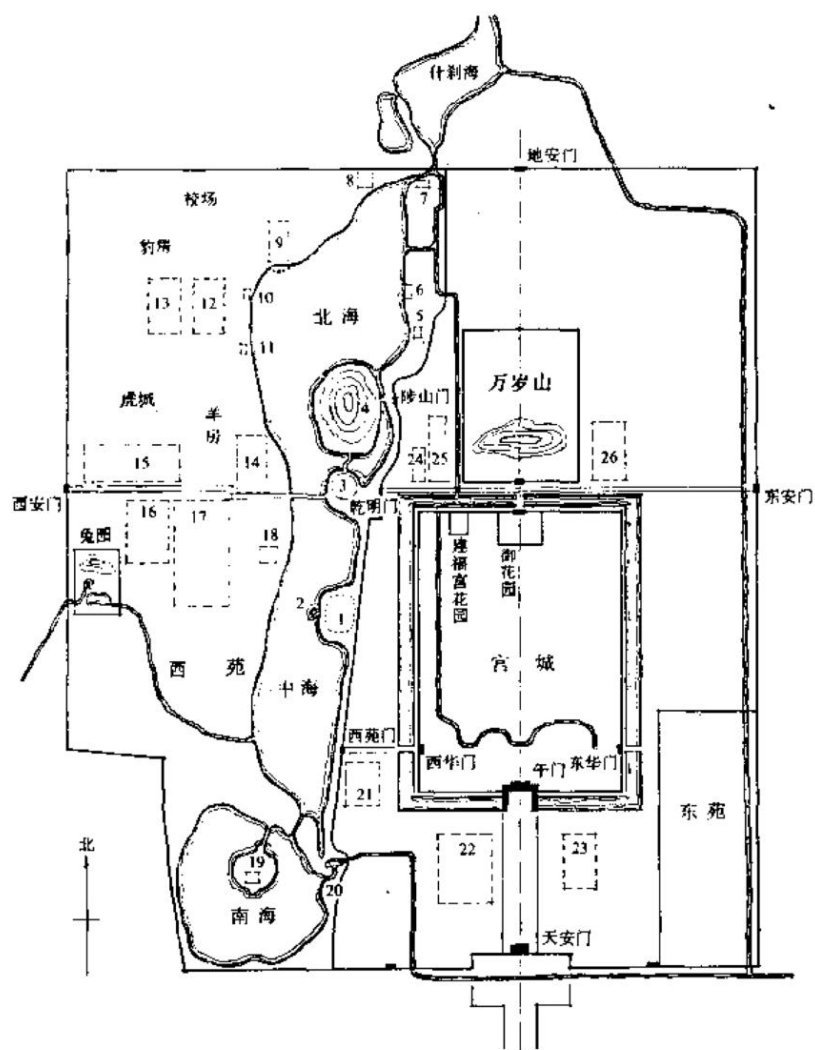


图 5-14 明北京皇城的西苑及其他大内御苑分布图

- 1-蕉园 2 水云榭 3 团城 4-万岁山 5 凝和殿 6 藏舟浦 7-西海神祠、涵玉阁 8 北台 9-太素殿 10-天鹅房 11 凝翠殿
 12 清醴殿 13 麟禧殿 14-玉熙宫 15 西十库、西酒房、西花房、果园厂 16-光明殿 17-万寿宫 18 平台(紫光阁)
 19-南台 20 乐成殿 21-灰池 22-杜稷坛 23 太庙 24-元明阁 25 大高玄殿 26-御马苑

图 27 明北京西苑と大内御苑の平面図

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p117

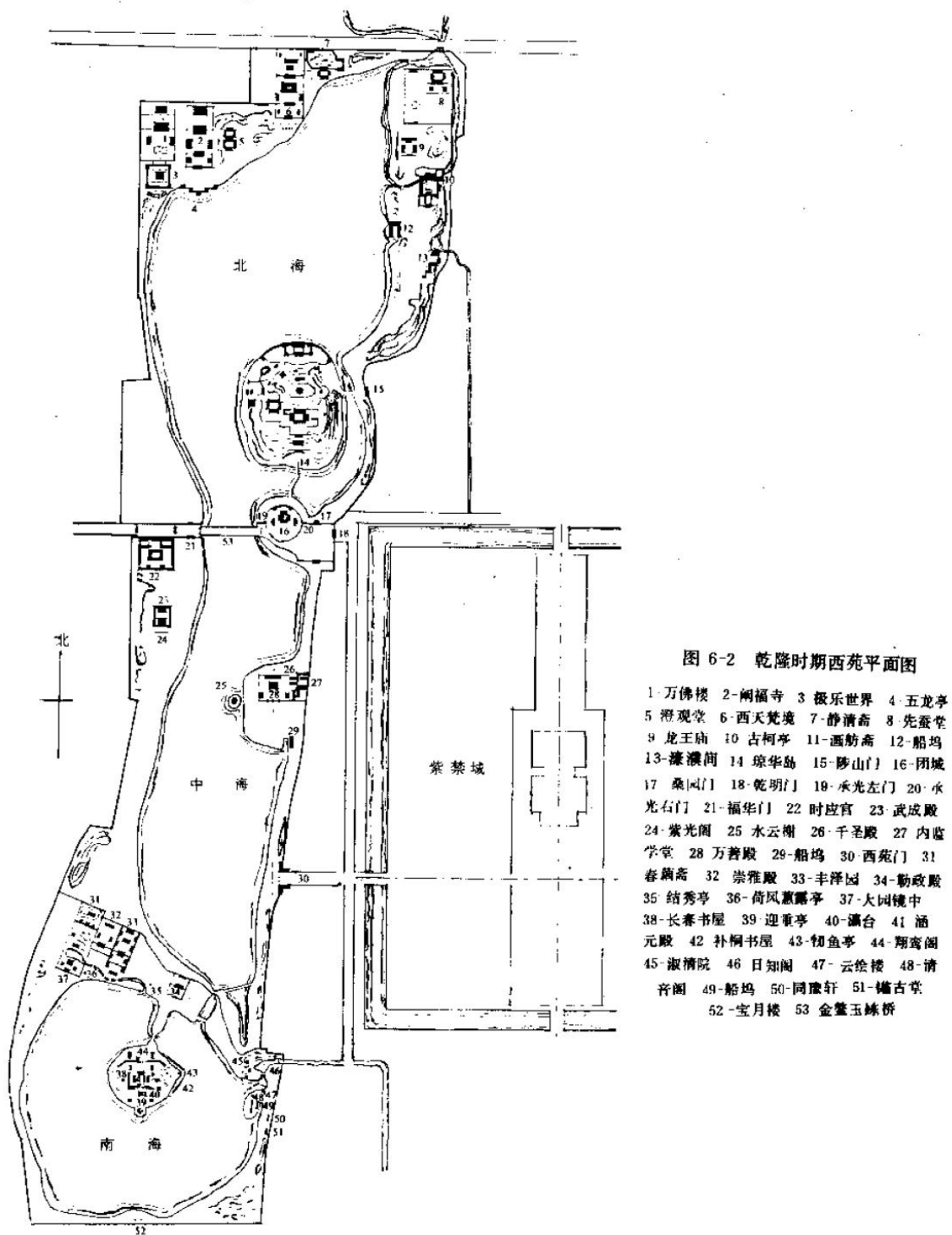


图 28 清代乾隆时期之北京西苑平面图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年.p192

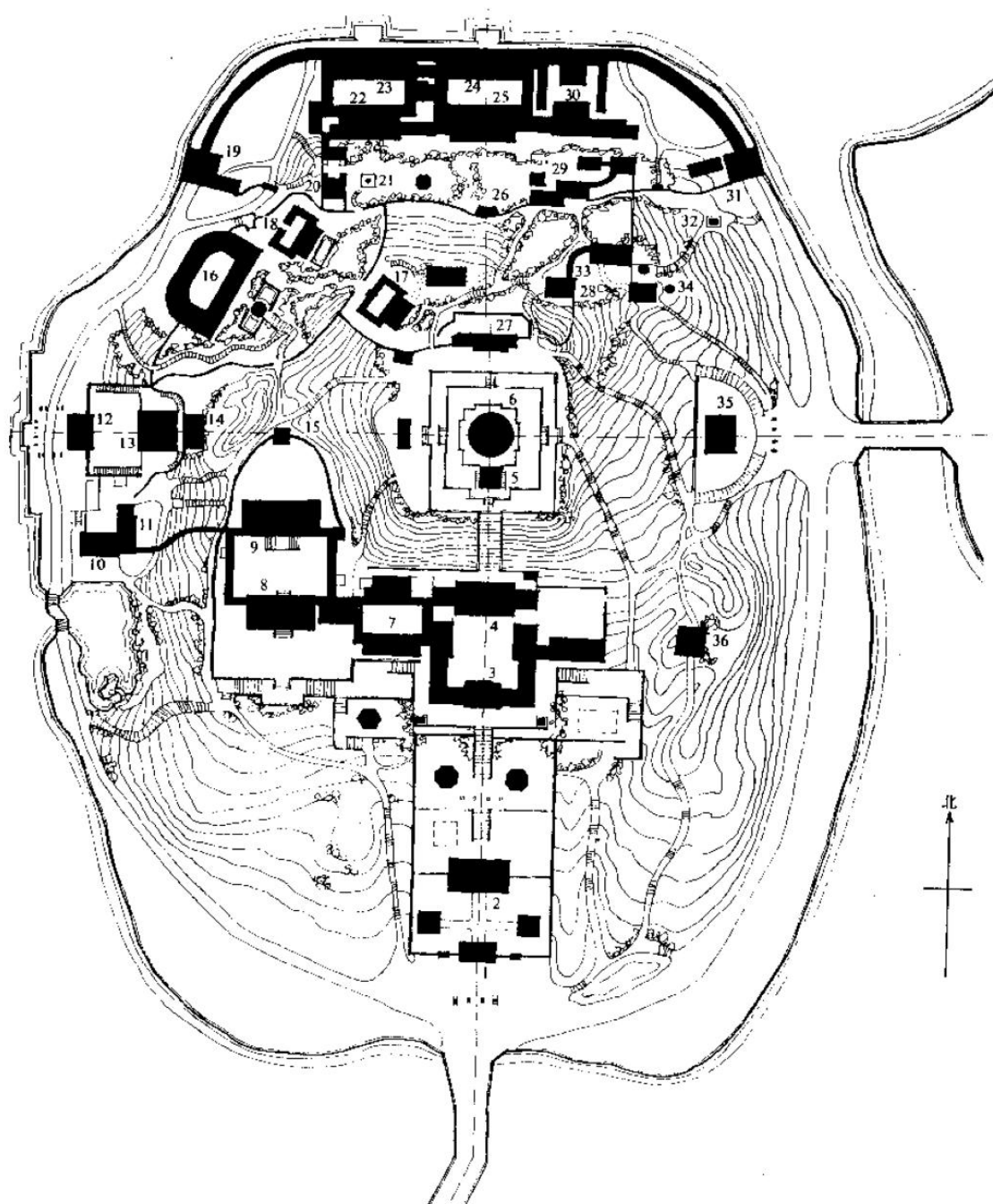


图 6-3 乾隆时琼华岛平面图

- 1 永安寺山门 2 法轮殿 3 正觉殿 4 普安殿 5 善因殿 6 白塔 7 静憩轩 8 悦心殿 9 庆育楼 10 蟠青室
 11 一房山 12 琳光殿 13 甘露殿 14 水精域 15 揖山亭 16 阅古楼 17 醴古堂 18 亩蓂室 19 分凉阁
 20 得胜楼 21 承露盘 22 道宁斋 23 远帆阁 24 碧照楼 25 漪澜堂 26 延南薰 27 揽翠轩 28 交翠亭
 29 环碧楼 30 晴栏花韵 31 倚晴楼 32 琼岛春阴碑 33 看画廊 34 见春亭 35 智珠殿 36 迎旭亭

图 29 清代乾隆时期の瓊華島平面図

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990年.p193

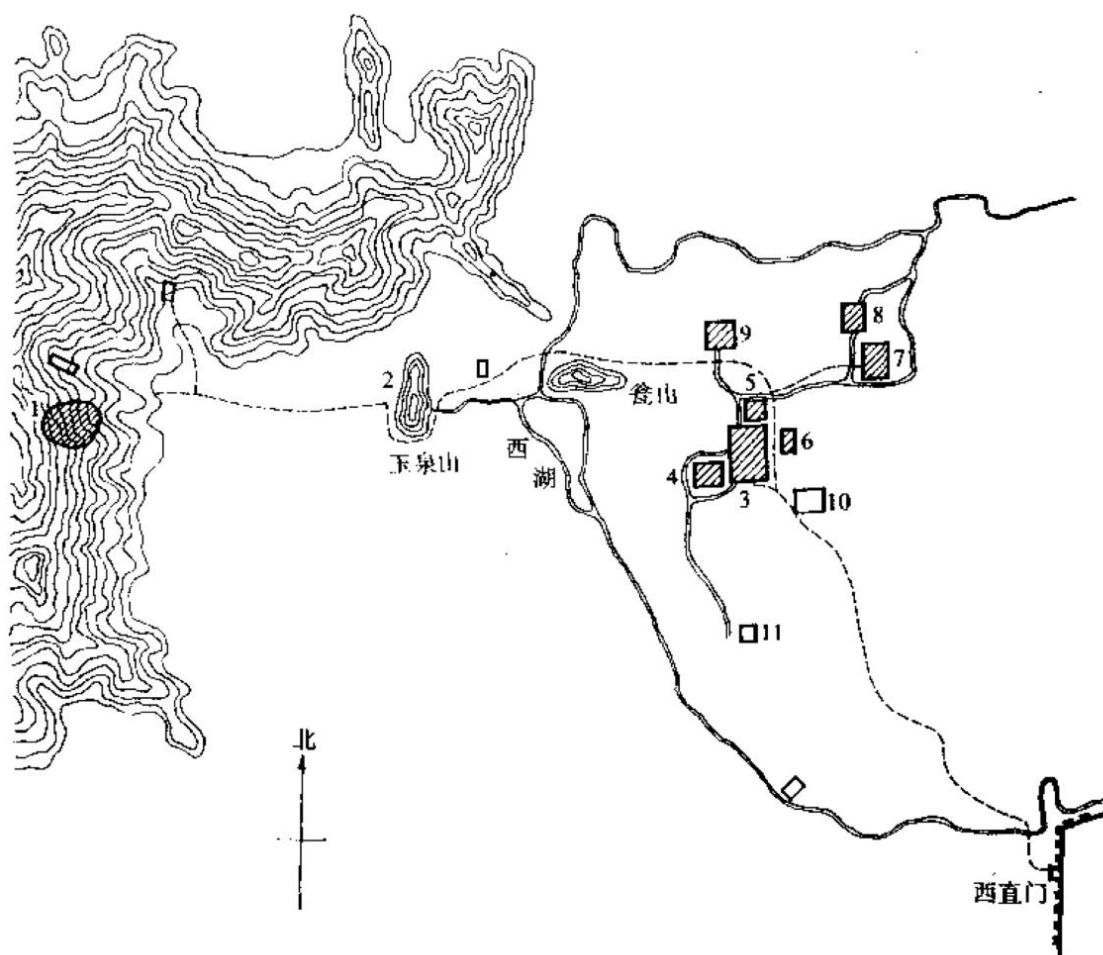


图 5 22 康熙时北京西北郊主要园林分布图

1 香山行宫 2 澄心园 3 畅春园 4 西花园 5 含芳园 6 集贤院 7 熙春园 8 自怡园 9 圆明园
10-海淀镇 11-万泉庄

図 30 康熙時期北京北西郊外の離宮御苑分部図

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p127

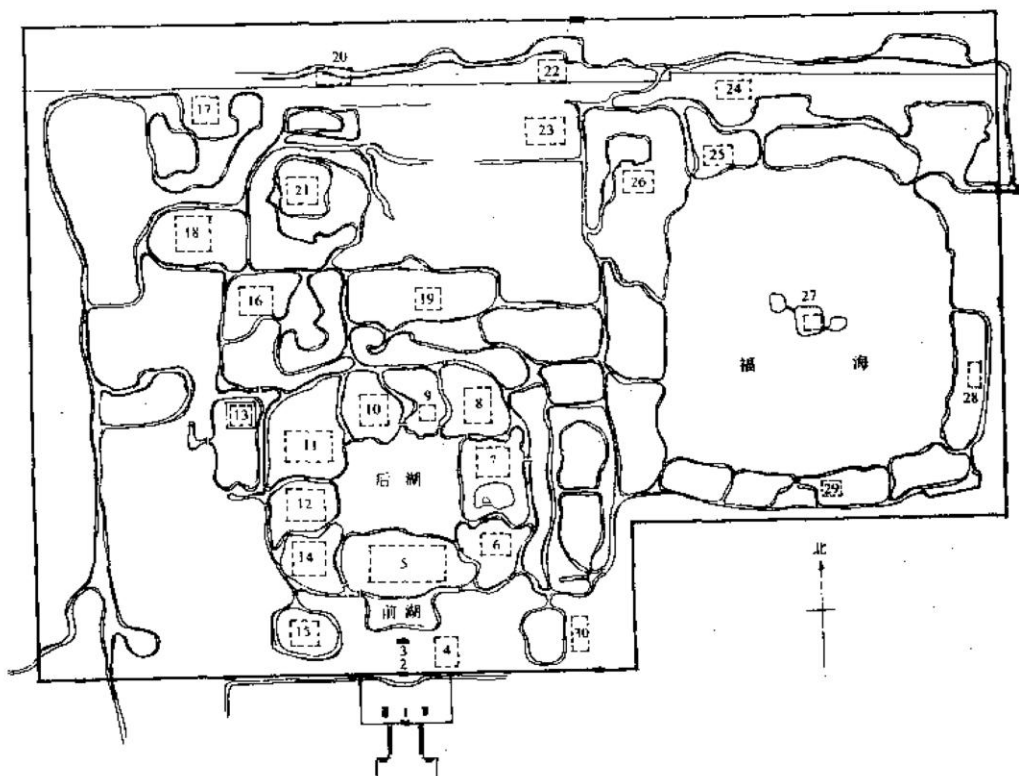


图 5 25 雍正时之圆明园平面示意图

- 1 大官门 2 出入贤良门 3 正大光明 4 勤政亲贤 5 九州清晏 6 饕月开云 7 天然图画 8 碧桐书院 9 慈云普护
10 上下天光 11 杏花春馆 12 坦坦荡荡 13 万方安和 14 茹古涵今 15 长春仙馆 16 武陵春色 17 汇芳书院 18 日天琳宇
19 澹泊宁静 20 映水兰香 21 濠溪乐处 22 鱼跃鸢飞 23 西峰秀色 24 四宜书屋 25 平湖秋月 25 廓然大公 27 蓬岛瑶台
28 接秀山房 29 夹镜鸣琴 30 洞天深处

图 31 清代雍正时期之圆明园平面图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p135

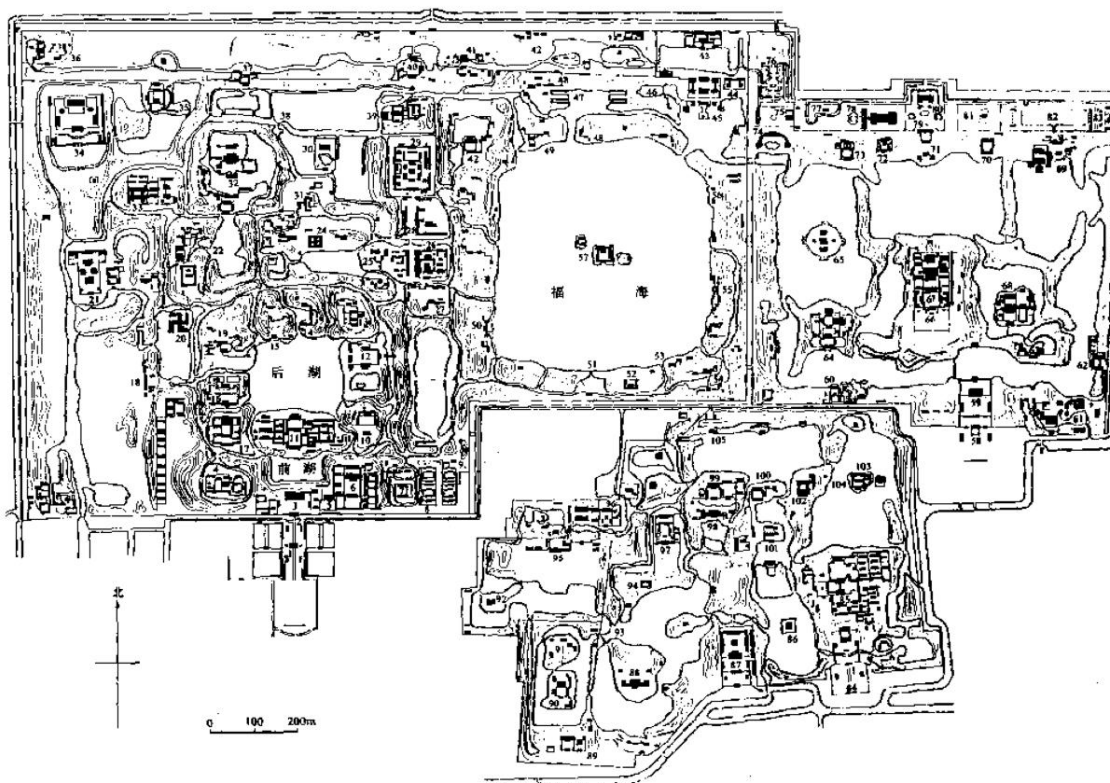


图 6 35 乾嘉时期圆明三园平面图

- 1 大宫门 2 出入贤良门 3 正大光明 4 长春仙馆 5 勤政亲贤 6 保和太和 7 前垂天殿 8 洞天深处 9 如意馆 10 镜月开云
 11 九州清宴 12 天然图画 13 碧桐书院 14 慈云普护 15 上下天光 16 坦坦荡荡 17 茹古涵今 18 山高水长 19 杏花春馆
 20 万方安和 21 月地云居 22 武陵春色 23 映水兰香 24 澹泊宁静 25 坐石临流 26 同乐园 27 曲院风荷 28 买卖街 29 含
 卫城 30 文源阁 31 水木明瑟 32 濠濮乐处 33 日天琳宇 34 鸿慈永祐 35 汇芳书院 36 紫碧山房 37 多稼如云 38 柳浪
 闻莺 39 西峰秀色 40 鱼跃鸢飞 41 北远山村 42 廓然大公 43 天宇空明 44 蕊珠宫 45 方壶胜境 46 三潭印月 47 大船坞
 48 双峰插云 49 平湖秋月 50 蓑身浴德 51 夹镜鸣琴 52 广育宫 53 南屏晚钟 54 别有洞天 55 接秀山房 56 涵虚朗鉴
 57 蓬岛瑶台 (以上为圆明园) 58 长春园大宫门 59 澹怀堂 60 茜园 61 如园 62 蓼园 63 映清斋 64 思永斋 65 海岳开襟
 66 含经堂 67 淳化轩 68 玉玲瓏馆 69 狮子林 70 转香帆 71 泽兰堂 72 宝相寺 73 法慧寺 74 谐奇趣 75 养雀笔 76 万
 花阵 77 方外观 78 海棠堂 79 观水法 80 远瀛观 81 线法山 82 万河 83 线法墙 (以上为长春园) 84 绮春园大宫门 85 敷
 春堂 86 鉴碧亭 87 正觉寺 88 澄心堂 89 河神庙 90 畅和堂 91 绿满轩 92 招凉榭 93 别有洞天 94 云锦馆 95 含晖楼
 96 延寿寺 97 四宜书屋 98 生冬室 99 泰泽斋 100 展诗应律 101 庄严法界 102 涵秋馆 103 凤麟洲 104 承露台 105 松
 风梦月 (以上为绮春园)

图 32 清代乾隆时期之圆明园平面图

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p220

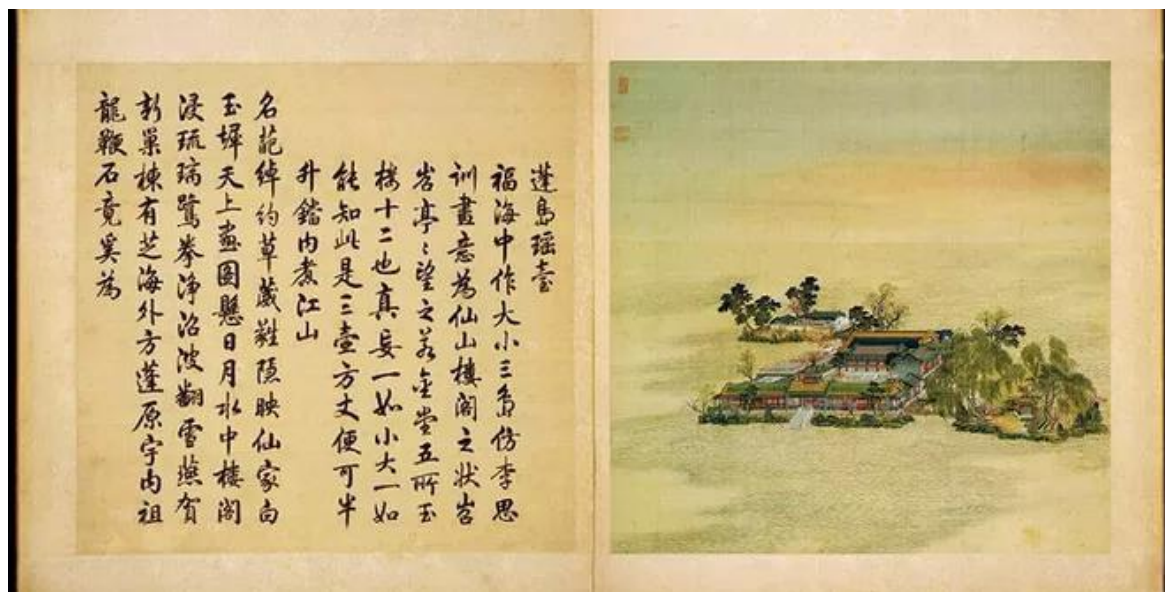


図 33 圓明園蓬島瑤臺

百度百科 圓明園

[http://img.hb.aicdn.com/77a80a43760af85da789903df397f4404964549f19e4f-](http://img.hb.aicdn.com/77a80a43760af85da789903df397f4404964549f19e4f-ysBF3o_fw658)

ysBF3o_fw658 (2018 年 8 月 26 日閲覧) より



図 34 圓明園蓬島瑤臺

百度百科 圓明園

http://img.hb.aicdn.com/e26cae490b8830e3e92c6361958f87acd6c007261ba49-oGUcsb_fw658

(2018 年 8 月 26 日閲覧) より



図 35 李思訓 山水樓閣

六九芸術網 <http://paimai.69ys.com/pre/detail/82269> (2018年8月26日閲覧) より



图 6-56 清漪园平面图

- 1-东宫门 2-勤政殿 3-玉澜堂 4-宜芸馆 5-乐寿堂 6-水木自亲 7-养云轩 8-无尽意轩 9-大报恩延寿寺 10-佛香阁 11-云松巢 12-山色湖光共一楼 13-听鹈馆 14-画中游 15-湖山真意 16-石丈亭 17-石舫 18-小西泠 19-藻古室 20-西所买卖街 21-贝阙 22-大船坞 23-西北门 24-绮望轩 25-藏春园 26-构虚轩 27-须弥灵境 28-后溪河买卖街 29-北宫门 30-花承阁 31-澹宁堂 32-县华阁 33-赤城霞起 34-惠山园 35-知春亭 36-文昌阁 37-铜牛 38-廓如亭 39-十七孔长桥 40-望蟾阁 41-鉴远堂 42-凤凰墩 43-景明楼 44-畅观堂 45-玉带桥 46-耕织图 47-蚕神庙 48-绣漪桥

图 36 清漪园平面图 周维权『中国古典园林史』清华大学出版社.1990年.p238



图 6 72 颐和园平面图

- 1-东宫门 2-仁寿殿 3-玉澜堂 4-宜芸馆 5-德和园 6-乐寿堂 7-水木自亲 8-养云轩 9-无尽意轩 10-写秋轩 11-排云殿
 12-介寿堂 13-清华轩 14-佛香阁 15-云松巢 16-山色湖光共一楼 17-听鹈馆 18-画中游 19-湖山真意 20-石丈亭 21-石舫
 22-小西泠 23-延清赏 24-贝阙 25-大船坞 26-西北门 27-须弥灵境 28-北宫门 29-花承阁 30-景福阁 31-益寿堂 32-谐趣园
 33-赤城霞起 34-东八所 35-知春亭 36-文昌阁 37-新宫门 38-铜牛 39-廓如亭 40-十七孔长桥 41-涵虚堂 42-鉴远堂
 43-凤凰墩 44-绣漪桥 45-畅观堂 46-玉带桥 47-西宫门

图 37 颐和园平面图 周维权『中国古典园林史』清华大学出版社.1990 年.p248

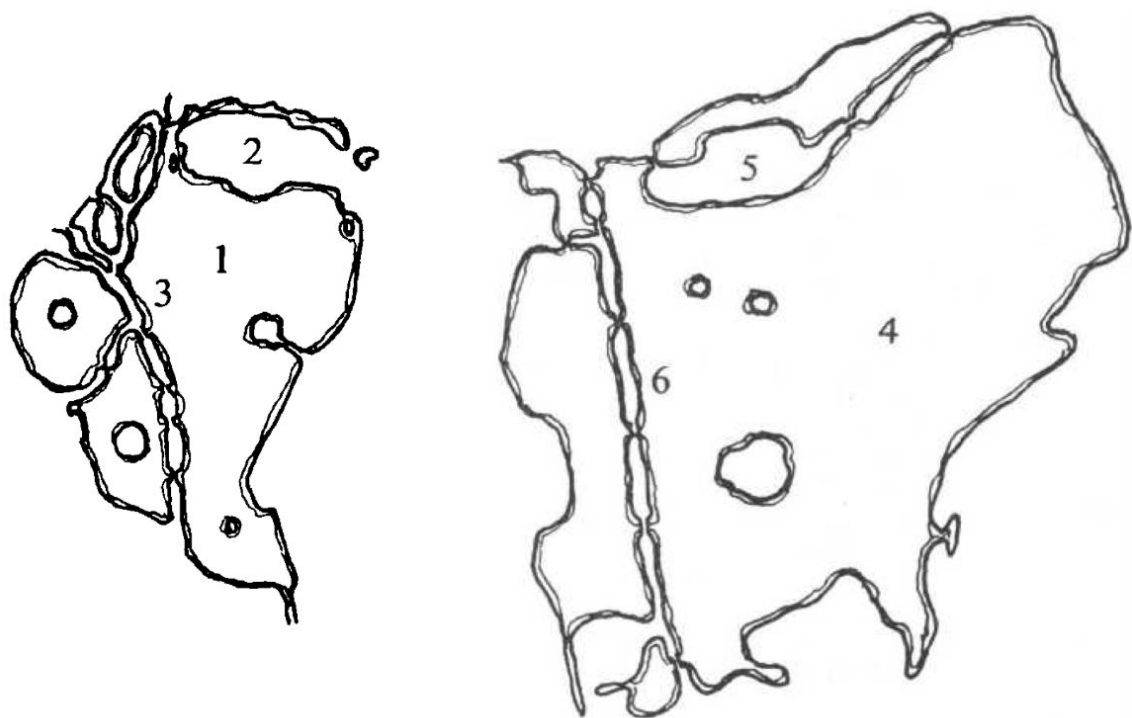


图 6-57 清漪园与杭州西湖之比较

1-昆明湖 2 万寿山 3-西堤 4-西湖 5-孤山 6-苏堤

図 38 清漪園と杭州西湖の比較

周維權『中国古典園林史』清華大学出版社.1990 年.p239

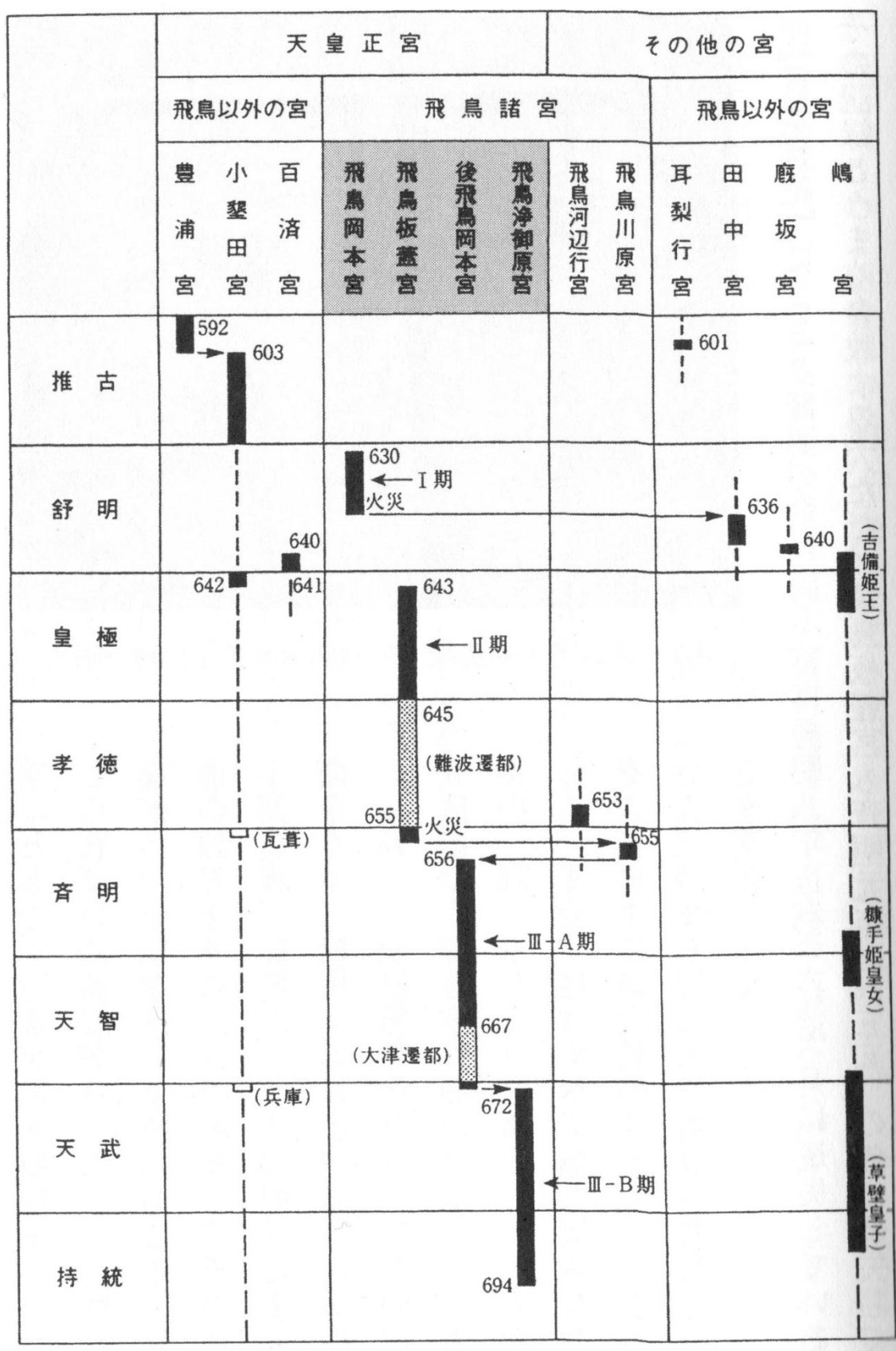


図 39 飛鳥諸宮変遷図

林部均『飛鳥の宮と藤原京』吉川弘文館.2008年.pp35



図 40 奈良時代前半の平城宮

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題点-」『日本庭園学会誌』(16). 2007 年. pp3-10

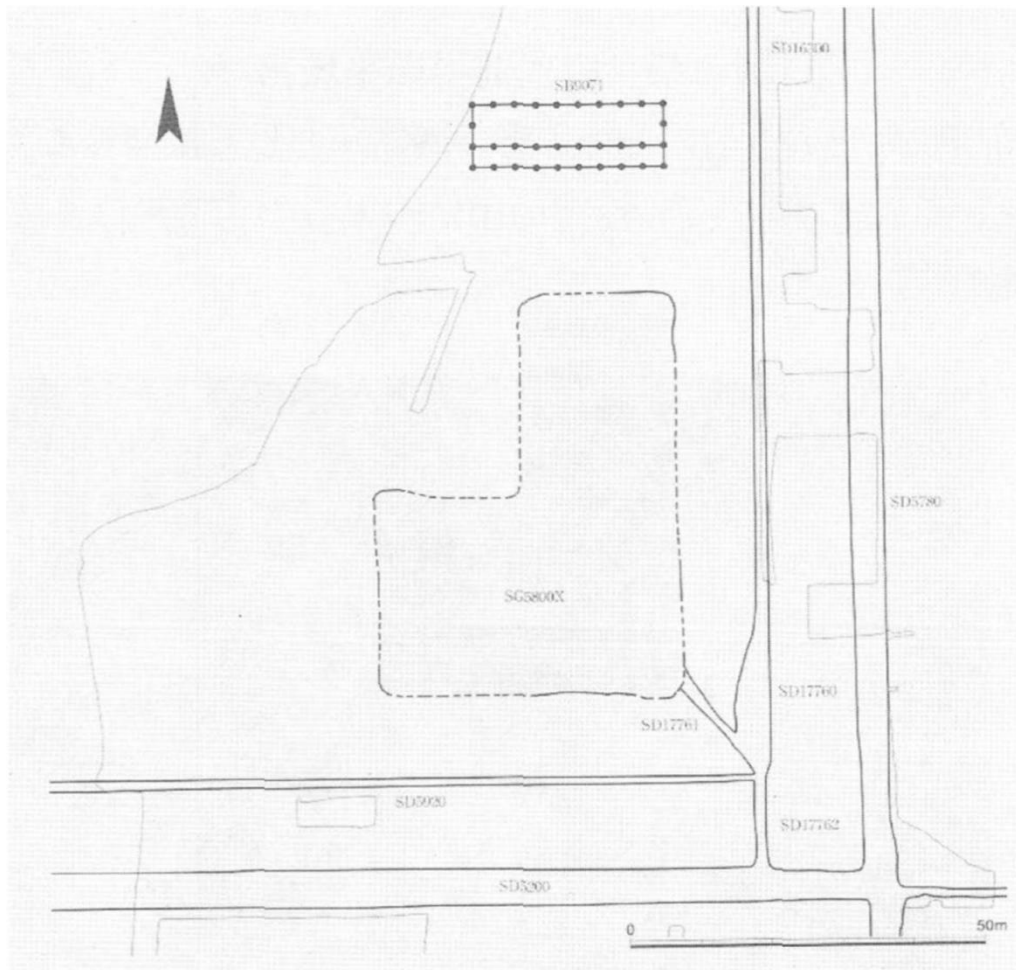


図 41 第一期の園池平面図

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題点-」『日本庭園学会誌』(16).2007年.pp3-10

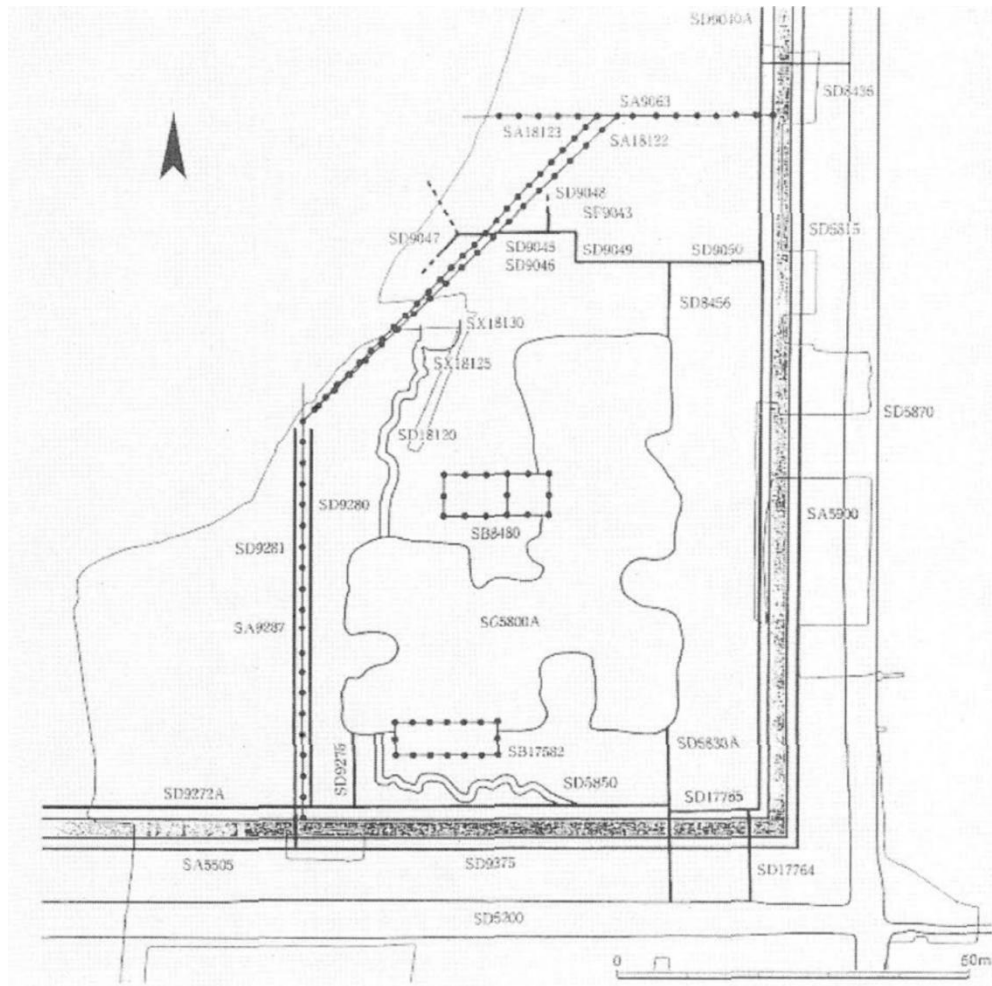


図 42 第二期園池の平面図

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題点-」『日本庭園学会誌』(16).2007年.pp3-10

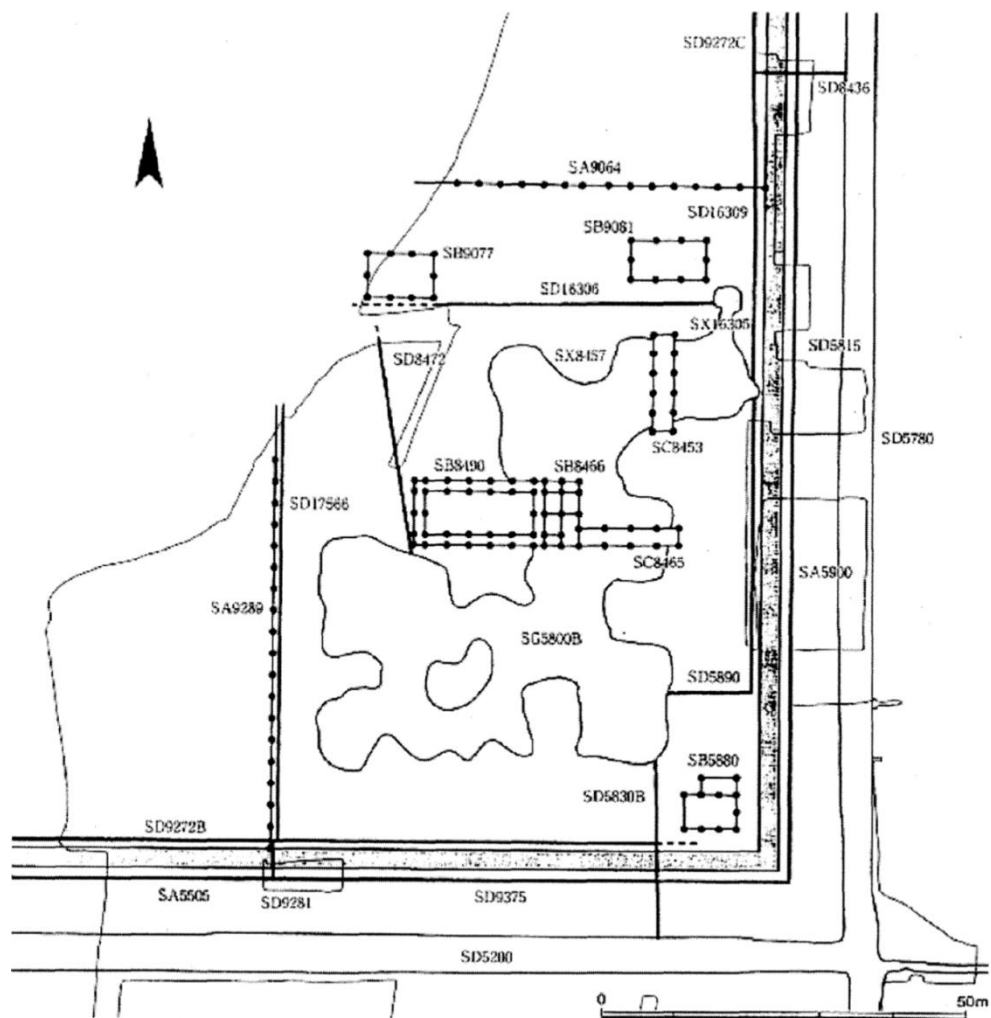


図 43 第三期園池の平面図

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題点-」『日本庭園学会誌』(16).2007年.pp3-10

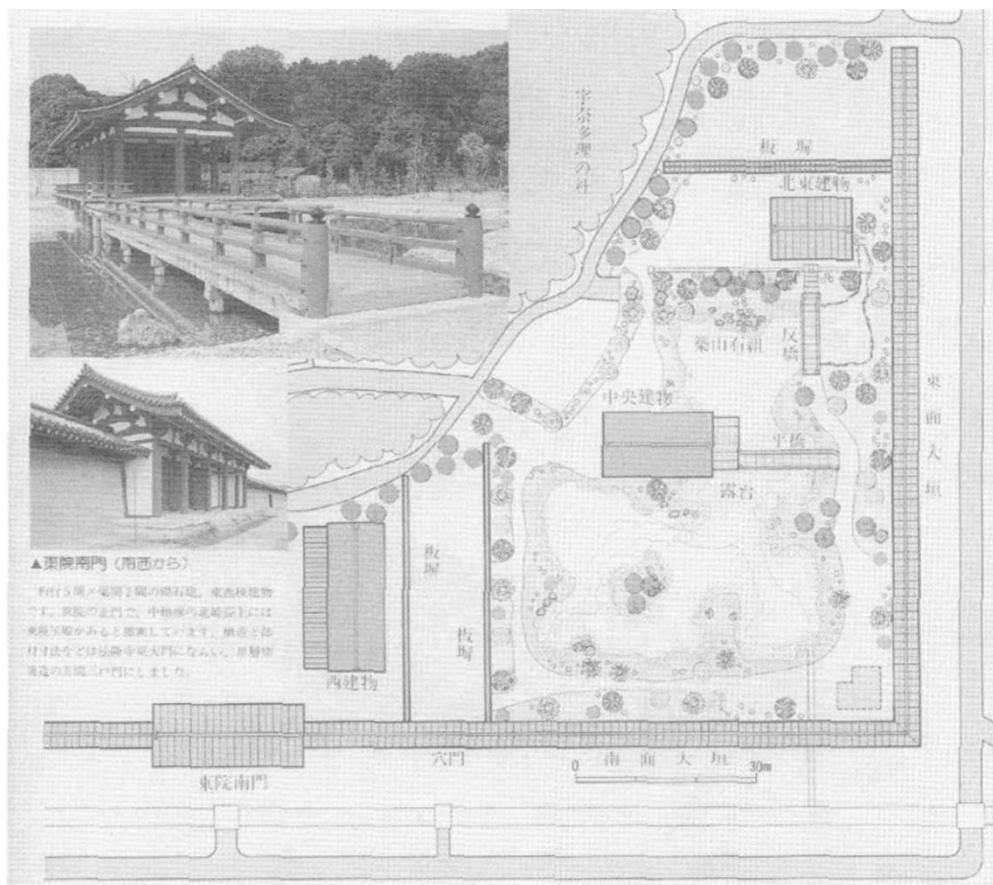


図 44 東院庭園復元整備平面図

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題」

点-」『日本庭園学会誌』(16).2007年.pp3-10

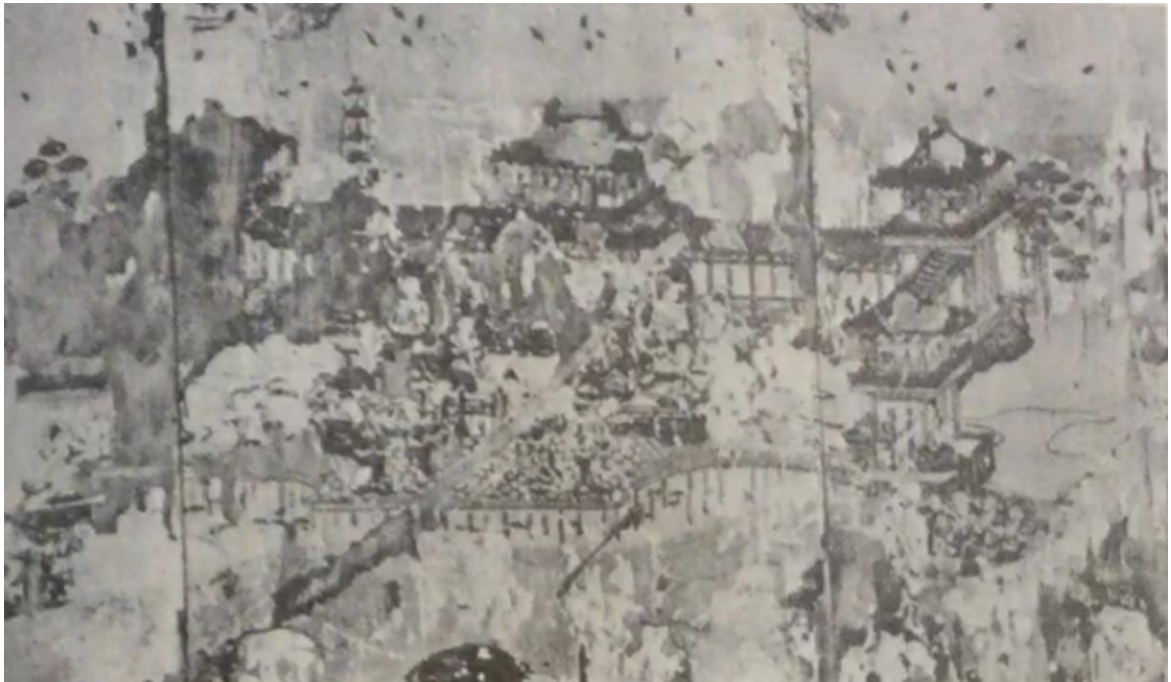


図 45 平等院鳳凰堂本尊後壁浄土変相中にみえる宝楼閣

太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館. 1987 年. p33

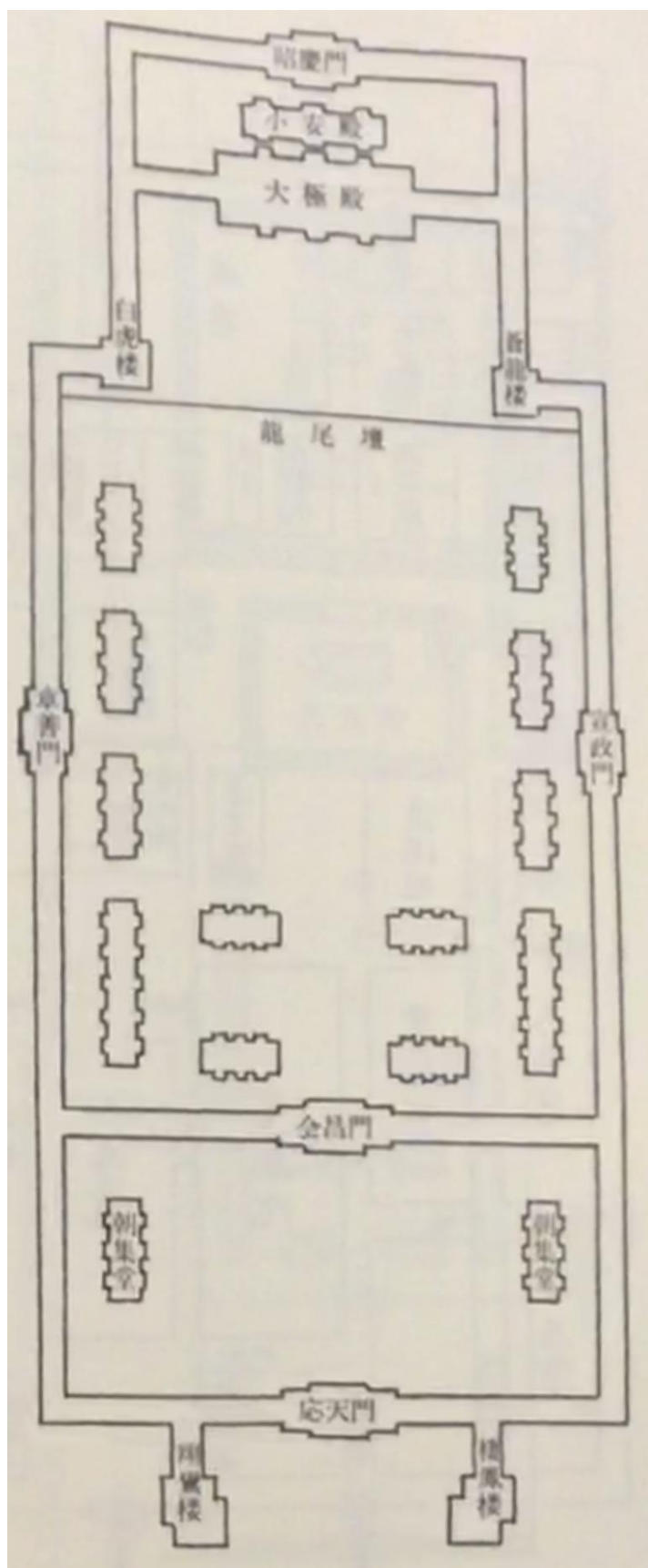


図 46 平安京朝堂院図

太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館. 1987 年. p11

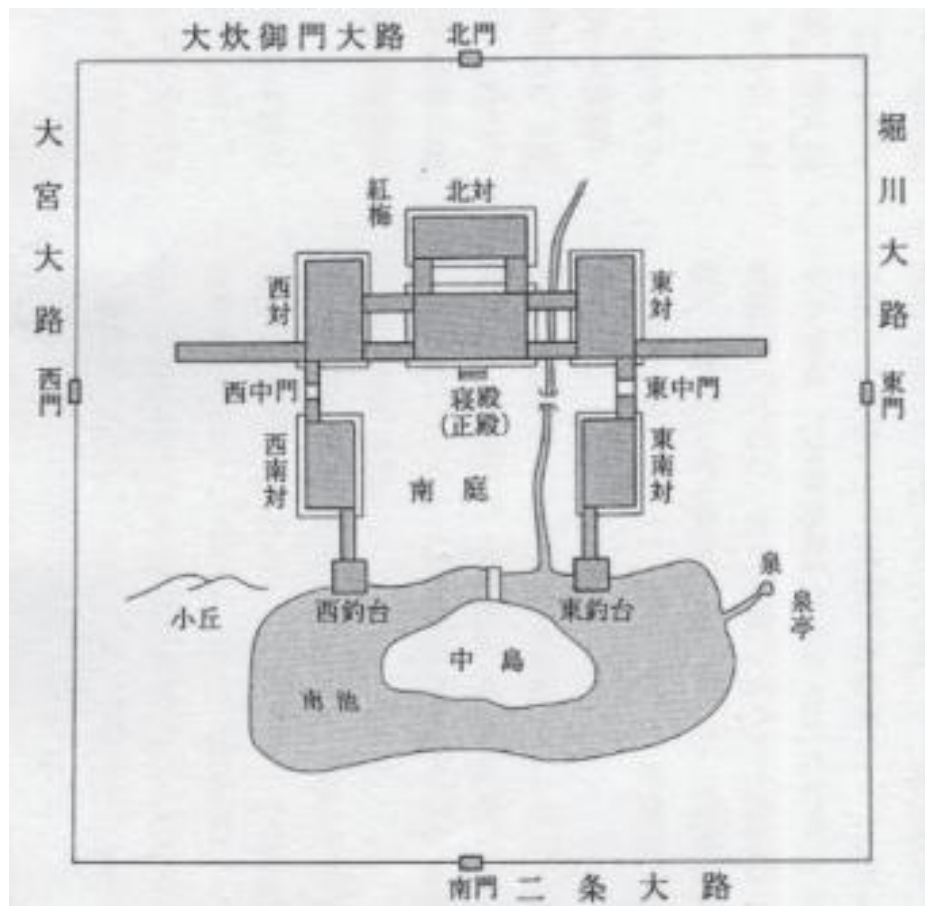


図 49 冷然院第 3 期復原図

太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館. 1987 年.

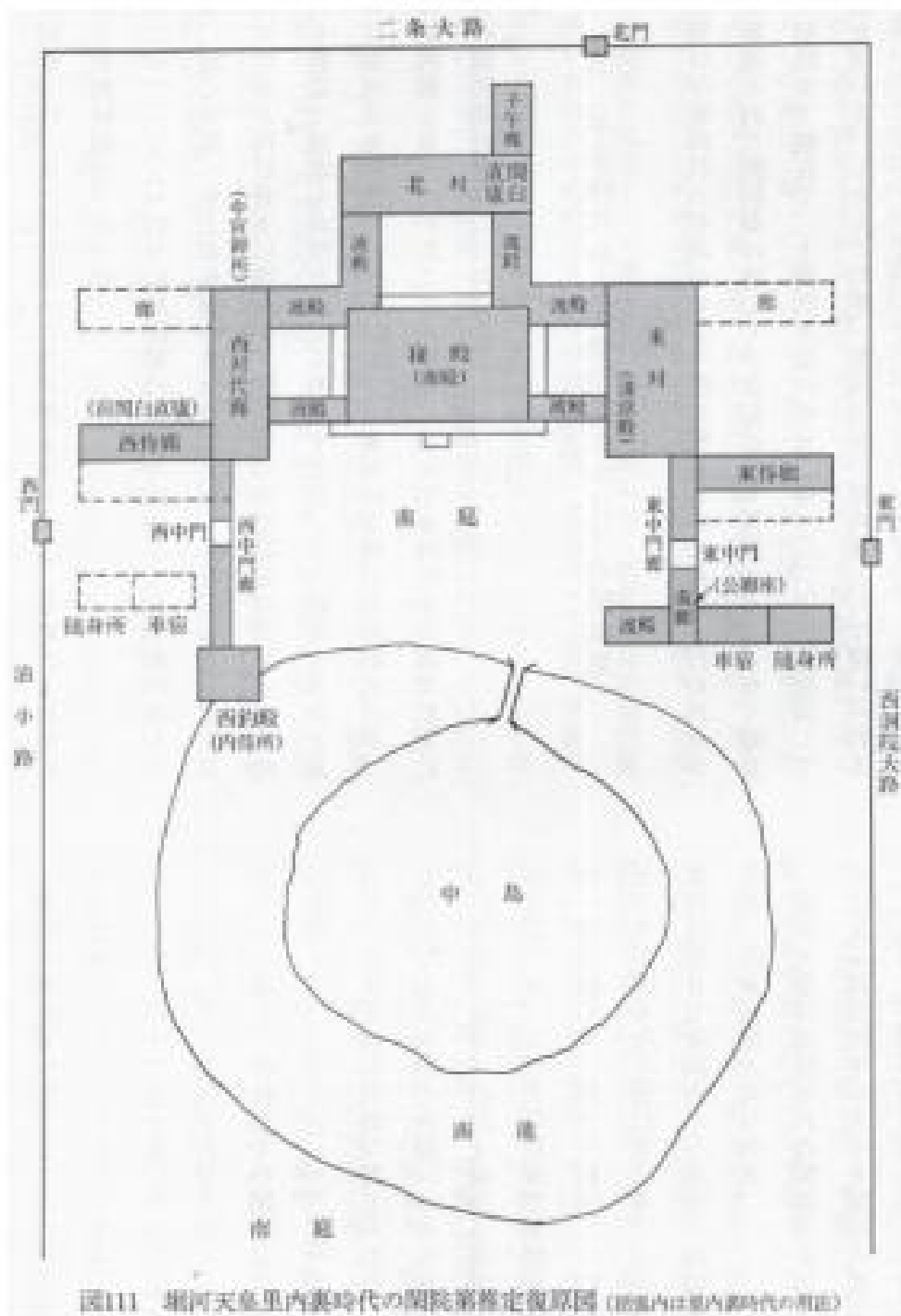


図 50 堀河天皇里内裏時代の閑院第推定復原図

太田静六『寝殿造の研究』吉川弘文館. 1987 年.

写真



写真 1 と 2 今北京北海公園における元万寿山の小玉殿の黒玉酒甕



写真 3 と 4 如意

百度百科 如意

<https://baike.baidu.com/item/如意/254746> (2018 年 8 月 23 日閲覧) より



写真 5 酒船石

奈良文化財研究所『あすかの石造物』2000



写真 6 亀形石槽の案内文



写真 7 亀形石槽

奈良文化財研究所『あすかの石造物』2000



写真 8 亀形石槽



写真 9 須弥山石

奈良文化財研究所『あすかの石造物』2000



写真 10 中山靖王墓出土の博山炉

ウィキ（Wiki）博山炉

https://zh.wikipedia.org/wiki/博山炉#/media/File:Boshan_Burner_Inlaid_with_Gold.jpg (2019

年 04 月 05 日閲覧) より



写真 11 百濟金銅大香炉

ウィキ（Wiki）百濟金銅大香炉

https://zh.wikipedia.org/wiki/百濟金銅大香炉#/media/File:백제_금동대향로.jpg

(2019 年 04 月 05 日閲覧) より



写真 12 凤鸟衔环铜熏炉

百度百科 凤鸟衔环铜熏炉

<https://baike.baidu.com/pic/凤鸟衔环铜熏炉>

/5696270/0/4075890a5157653b95ca6b1a?fr=lemma&ct=single#aid=0&pic=4075890a5157653b95ca6b1a (2019 年 04 月 05 日閲覧) より

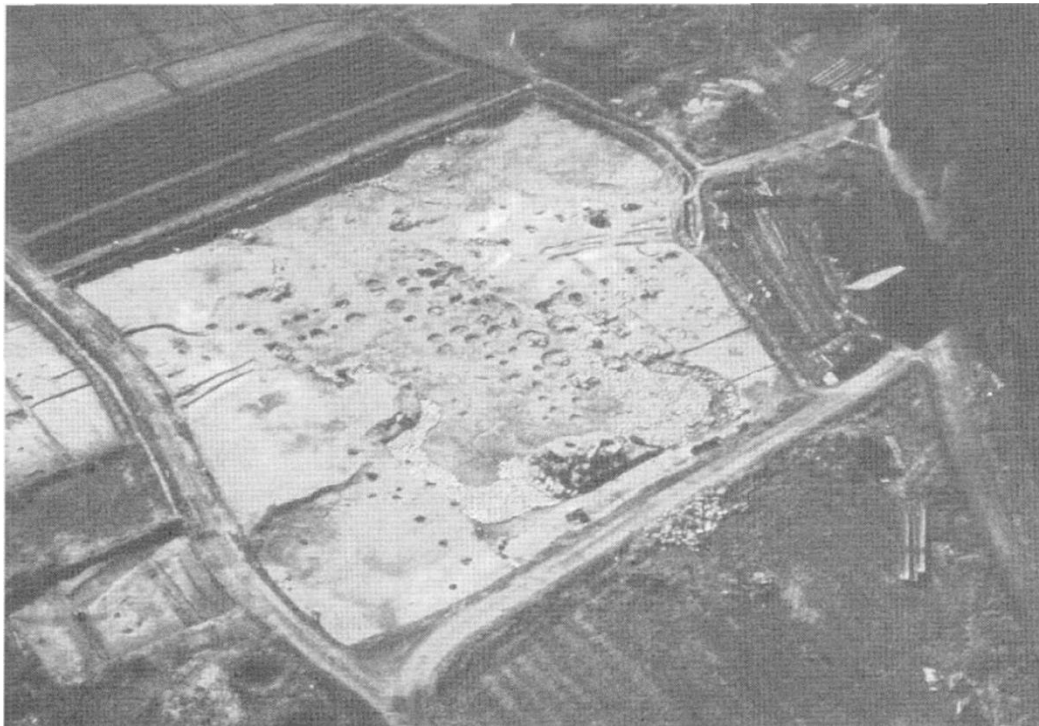


写真 13 第二期園池の航空写真

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題点-」『日本庭園学会誌』(16).2007 年.pp3-10



写真 14 第二期の池底と護岸の石敷きの様子

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題点-」『日本庭園学会誌』(16).2007 年.pp3-10



写真 15 第二期西南隅の蛇行溝

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題

点-」『日本庭園学会誌』(16).2007 年.pp3-10



写真 16 第三期園池南西部の州浜の状況

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題点-」『日本庭園学会誌』(16).2007 年.pp3-10



写真 17 第三期北側築山の石組

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題点-」『日本庭園学会誌』(16).2007 年.pp3-10



写真 18 第三期北側築山の石組

田中哲雄『日本の美術・発掘された庭園』至文堂.2002 年.p44



写真 19 復元された東院庭園

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題点-」『日本庭園学会誌』(16).2007 年.pp3-10

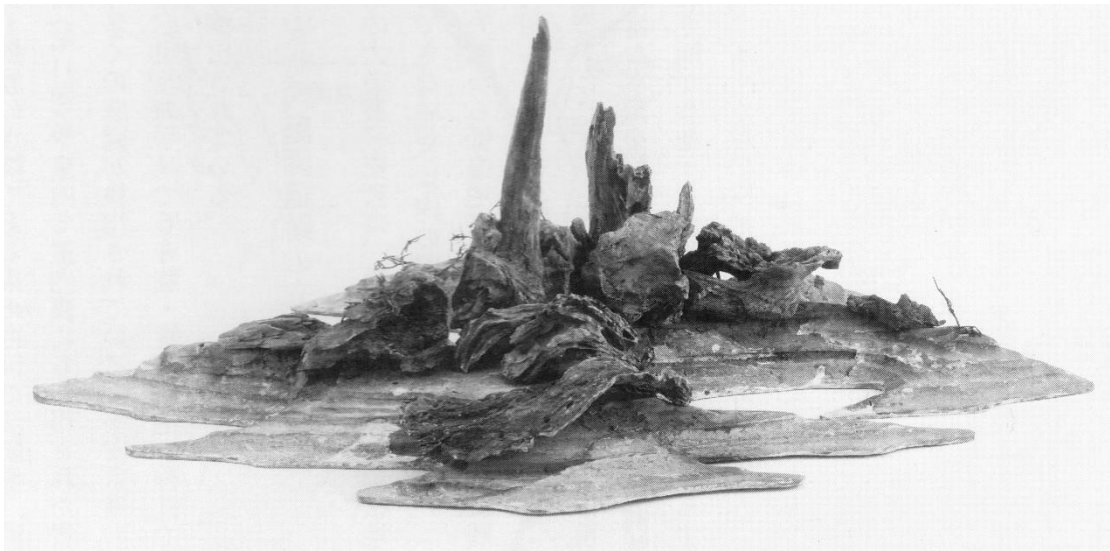


写真 20 仮山（正倉院宝物）

田中哲雄『日本の美術・発掘された庭園』至文堂.2002 年.p45



写真 21 復元整備後の築山立石組

高瀬要一「平城宮東院庭園及び宮跡庭園の発掘調査と整備について-整備後の現状と問題点-」『日本庭園学会誌』(16).2007 年.pp3-10